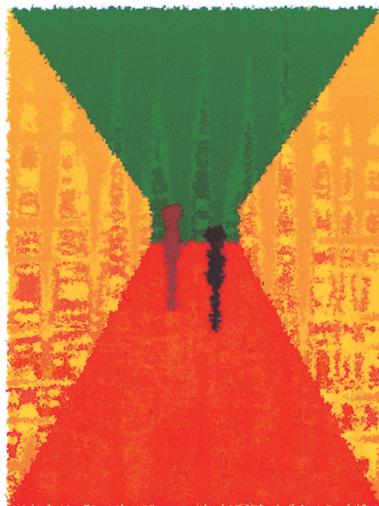


改訂新版

実践的研究の すすめ方

創意工夫を生かした教育を求めて

群馬県教育研究所連盟 編著



東洋館出版社

——改訂新版——

実践的研究の すすめ方

創意工夫を生かした教育を求めて

群馬県教育研究所連盟 編著

東洋館出版社

刊行のことば

「実践的研究のすすめ方－新しい教育の創造－」は、平成6年11月に刊行して以来、教育実践の充実と教育研究の推進の手引書として、県内はもちろんのこと、広く全国の読者の方々に活用され、今日に至りました。

新世紀を迎えた今、我が国の教育は大きな変革を迫られています。これから各学校においては、学習指導要領の改訂とともに、児童生徒に【生きる力】をはぐくむ教育を目指し、創意工夫を生かした特色ある学校づくりや教育実践が求められています。

そこで私たちは、教育研究の手引書としての基本をしっかりと踏まえるとともに、これからの中学校教育の諸課題に適切にこたえられ、しかも教育実践の充実と教育研究の推進に少しでも役立つものとなるよう、今回、本書を改訂することといたしました。

今、学校や教師一人一人に課せられた責任は以前にも増して重く、それを果たすためには、学校や教師が、不断の努力と精進によって自己を磨き、職能成長を図っていくことが最も大切なことです。21世紀に生き、その社会を支え、国際社会に貢献できる子供を育成するために、学校を基盤とした自主的、創造的な研究を推進することの必要性は、何人も異存のないところでありましょう。

学校における教育研究は、一人一人の子供の実態を踏まえた日々の教育実践上の課題から出発しているために、研究すべき課題は極めて多種多様であります。それゆえに、課題を明確にし、実践的に研究を進めることができると考えます。

実践的研究で取り扱う課題は、その一つ一つが様々な要因によって複雑化しており、研究意欲はあっても、効率のよい研究推進に結び付きにくいところもあることは確かであります。

そこで、読みやすく、分かりやすく、使いやすいものとなるよう、今回の

改訂に当たっては4章構成とし、実践例を豊富に取り上げることにいたしました。各章の特色は次の通りです。

第1章 学校における実践的研究

学校における実践的研究について、仮説を立て検証する場合と、事実に関するデータを収集し、分析・解釈する場合の二つの基本的な考え方を示しました。

第2章 実践的研究の具体的な進め方

授業研究を学校における実践的な研究の中核としてとらえるとともに、教材開発研究、事例研究、調査研究についてもその価値を確認し、ページ数を増やして各研究方法の進め方について、実践例を豊富に盛り込みながら解説しました。

第3章 実践的研究を支える技法等

研究を構想するための技法を具体的に解説するとともに、コンピュータを活用したデータ収集・処理等も取り上げました。

第4章 実践的研究の具体的展開

実践例は、今日的な教育課題に基づくものを紹介しました。特に、実践内容や研究方法としてのよさが分かるよう端的な前文を添えました。

また、「総合的な学習の時間」については、今後、学校における実践的研究を進める際の手がかりとなる視点や方法等について示しました。

最後になりましたが、本書の刊行に当たって終始ご指導いただきました先輩各位及び関係機関の皆様と、ご協力をいただきました関係学校の先生方に對し深甚なる感謝をささげますとともに、出版に当たって温かいご配慮を賜りました東洋館出版社の各位に対し厚くお礼を申し上げます。

平成13年2月

群馬県教育研究所連盟委員長 池田 真澄

目次

刊行のことば 1

第1章 学校における実践的研究

第1節 教育実践と教育研究	11
1 教育研究の必要性	11
2 教育研究とは	12
3 教育研究の方法	12
4 教育研究を推し進めるもの	12
(1) 深い愛情と豊かな構想力と確かな技術 (2) 共同研究におけるチームワーク	
第2節 実践的研究のとらえ方	15
I 実践的研究とは	15
II 実践的研究の必要条件	16
1 多様性を踏まえた洞察と価値の吟味	16
2 「一般性・法則性」と「個別性」の追究	17
3 倫理観と普遍的な愛に根ざして	17
III 実践的研究の構想	17
第3節 実践的研究の過程	20
I 研究課題をどう設定するか	20
1 研究課題設定の意義	20
2 研究課題設定の手順	20
(1) 問題を発見する	(2) 問題を焦点化する
(3) 研究課題を設定する	
II 研究推進計画を立てる	24
1 研究推進計画の意義	24

2	研究推進計画立案の手順	24	
(1)	基本的な手順	(2) 複数年に及ぶ場合の研究推進計画立案の留意点	
III	研究方法の特性	26	
1	仮説を立て検証する場合	26	
2	事実に関するデータを収集し、分析・解釈する場合	29	
IV	具体的に研究を進める	30	
1	仮説を立て検証する場合	31	
(1)	研究の内容と方法の構想	(2) 研究主題の設定	
(3)	研究目標の設定	(4) 研究仮説（見通し）の設定	
(5)	検証計画の立案	(6) 検証のための実践	
(7)	研究結果の処理と考察		
2	事実に関するデータを収集し、分析・解釈する場合	41	
(1)	問題の選定	(2) 研究目的の確認と研究主題の設定	
(3)	データの収集とその留意点	(4) データの整理	
(5)	データの分析・解釈	(6) 結果のまとめ	
V	研究の過程に応じた資料収集と研究技法の選定	44	
1	調査・資料収集	44	
(1)	調査・資料収集の意義	(2) 調査・資料収集の視点	
(3)	調査・資料収集上の留意点		
2	研究技法の選定	45	
VI	成果と課題をまとめ、実践にどう生かしていくか	46	
1	研究のまとめ	46	
(1)	研究のまとめの意義	(2) 研究のまとめの視点	
2	研究の評価	46	
(1)	研究過程における評価の観点	(2) 研究過程における評価の記録	
3	研究の発展	48	
(1)	研究成果を実践に生かし、成果や課題の深化・拡充を図る		
(2)	研究成果を実践に生かすための留意点	(3) 研究成果を実践に生かす方法	

4 研究の累積と発展課題	49
(1) 研究の累積の必要性	(2) 発展課題の把握
5 論文の作成	50
(1) 論文作成の重要性	(2) 論文の備えるべき条件
(3) 論文の構想と叙述上の留意点	

第2章 実践的研究の具体的な進め方

第1節 授業研究	55
I 授業研究の意義	55
II 授業研究の手順	55
1 研究の内容と方法の構想	56
(1) 各教科等の目指す子供の設定	(2) 手だての構想
(3) 研究主題の設定	(4) 研究目標の設定
(5) 研究仮説の設定	
2 検証計画の立案	62
(1) 検証の観点の明確化	(2) 検証の場面・方法の明確化
(3) 処理と解釈の方法の明確化	
3 授業設計	66
(1) 授業設計の意義	(2) 子供理解
(3) 単元の目標分析と評価規準の設定	(4) 単元の指導計画の作成
(5) 本時案の作成	
4 授業実施と授業記録	82
(1) 授業記録の意義	(2) 授業記録の方法
5 授業評価と研究結果の処理	84
(1) 授業評価の意義	(2) 授業評価から授業改善へ
(3) 授業評価の技法	(4) 研究結果の処理
(5) 研究結果の考察方法	
6 研究のまとめ	90

第2節 教材開発研究	91
I 教材開発の意義と視点	91
1 教材開発の意義	91
2 教材開発の視点	92
II 教材の特性と教材開発研究上の留意点	92
1 直接経験を促す教材	92
2 道具による経験を促す教材	93
3 シンボル操作による経験を促す教材	94
III 教材開発研究の手順	96
1 研究の内容と方法の構想	96
(1) 研究主題の設定	(2) 研究目標の設定
(3) 教材開発の構想	(4) 研究仮説の設定
2 検証計画の立案	100
3 教材開発の推進	101
4 授業実践（教材の有効性の検証）	101
5 検証結果の処理と考察	101
6 開発した教材の改良	102
7 研究のまとめ	102
第3節 事例研究	103
I 事例研究の意義	103
II 教育における事例研究	103
III 事例研究の進め方	104
1 問題の設定	104
(1) 問題の発見と対象の選定	(2) 問題の把握
2 資料の収集	105
(1) 資料の種類	(2) 資料の収集方法
3 問題の理解	107

(1) 資料の解釈	(2) 問題の理解	
4 指導方針の決定		110
5 指導の実践		111
6 研究のまとめ		112
(1) 研究の成果	(2) 今後の課題	
IV 事例研究会の開催		113
V 事例研究レポートのまとめ方		113
第4節 調査研究		116
I 調査研究の意義		116
II 調査研究の手順		117
1 研究目標の設定		117
2 研究仮説の設定		118
3 調査内容・対象・方法の決定		118
4 調査問題の作成		119
5 処理方針の決定		119
6 プリテストの実施		119
7 調査の実施		120
8 調査結果の処理		120
9 研究のまとめ		120
10 研究の活用		120
III 統計的調査と事例的調査の方法		120
1 統計的調査の方法		121
(1) 調査対象範囲の決定	(2) 調査方法（技法）の決定	
(3) 標本抽出の設計	(4) 調査用紙の作成	
(5) データの整理（集計）	(6) 分析	
2 事例的調査の方法		133
(1) 対象事例の選定	(2) 調査の技法（データ収集方法）	

(3) データ処理と解釈

第3章 実践的研究を支える技法等

第1節 文献とコンピュータの活用	137
I 文献の活用.....	137
1 文献活用の意義.....	137
2 活用したい文献の種類.....	138
(1) 基本的な用語や概念、研究の進め方について	
(2) 研究主題、研究内容・方法などについて	
3 文献の探索.....	138
(1) 文献探索の方法	
(2) 図書館等の利用	
II メディアとしてのコンピュータの活用.....	140
1 教育情報の収集.....	140
2 データの集計・処理.....	141
3 研究成果等の表現・発信.....	141
(1) プрезентーション機能	
(2) 発信	
4 コンピュータ活用上の留意点.....	142
(1) 著作権の保護	
(2) プライバシーの保護	
5 教育研究におけるコンピュータ活用の過信.....	143
第2節 研究技法の活用	144
I 情報の収集と分析・検討の技法.....	144
1 ブレーンストーミング法.....	144
2 K J 法.....	145
II 教育・心理の検査技法.....	147
1 知能検査.....	147
2 学力検査.....	147
3 性格検査.....	147

III 教育統計法	148
1 教育統計法の導入場面と役割	148
2 教育統計を適用する際の留意点	148
3 集団の特徴を表現する方法	149
(1) 調査や検査結果の数量化の考え方と方法 (2) 統計図表の作成と留意点	
4 子供の変容等を的確に判断するための教育統計法	151
(1) 基礎的な統計値の求め方 (2) 様々な検定の方法	
IV S-P表の作成と活用	156
1 S-P表の作成	156
2 S-P表の分析と活用	157
(1) 全体的な把握 (2) 個別的な把握	
(3) S-P表の時系列的活用	

第4章 実践的研究の具体的展開

第1節 教科指導に関する研究	159
I 問題解決的な学習に関する指導	159
実践例1 (授業研究) 一小4社会	159
II 体験的な学習を取り入れた指導	166
実践例2 (授業研究) 一小4国語	166
実践例3 (授業研究) 一小5图画工作	172
実践例4 (教材開発研究) 一中1理科	180
III 個に応じた指導	188
実践例5 (授業研究) 一中3数学	188
実践例6 (教材開発研究) 一中1外国語	195
実践例7 (授業研究・事例研究) 一中2作業学習(特殊学級)	202
第2節 心の教育に関する研究	210
I 道徳	210

実践例8（授業研究）一小6道徳—	210
II 生徒指導	219
実践例9（事例研究）一小6生徒指導—	219
 第3節 生き方についての指導に関する研究	226
I 進路指導	226
実践例10（授業研究）一中1学級活動—	226
II 学年・学級づくり	231
実践例11（授業研究）一小3学級活動—	231
III 健康教育に関するもの	236
実践例12（授業研究）一中1特別活動—	236
 第4節 総合的な学習の時間を推進するための研究の在り方	244
I 「総合的な学習の時間」のねらい	244
1 特色ある教育課程の編成	244
(1) 教育課程における位置	(2) 「総合的な学習の時間」の特徴
2 特色ある教育活動の展開	246
II 「総合的な学習の時間」の研究の視点と方法	247
1 構想上の課題	248
(1) 自校のねらいに関する課題	(2) 教育課程に関する課題
2 実践上の課題	249
III 先進校の取組	250
1 資質や能力をどうとらえたか	250
2 子供にとって「切実な課題」となるようにするために	251
3 生き方を考えることができるよう	253
4 子供を伸ばす評価の工夫について	255
 あとがき	259
執筆者・改訂委員	260

第1章 学校における実践的研究

第1節 教育実践と教育研究

1 教育研究の必要性

教育実践の質を高めていく大きな推進力

学校は、子供のよりよい発達を促すために、組織的・計画的・継続的な教育を行う場である。したがって、学校の役割は、子供が時代を超えて変わらぬ価値あるもの、すなわち基礎・基本や、時代の変化に対応して生きる力を身に付けるための支援をすることである。

教師は、子供に育成したい資質や能力を、「子供の成長への願い」としてもち、日常の教育実践を向上させようと努力している。この教師のもつ「子供の成長への願い」を実現するためには、日々の教育実践を客観的に問い合わせ直す必要がある。

これらを踏まえ、教育研究は、日々の教育実践の中から課題を見いだし、その解決に向けて追究を行うことである。追究の結果は、まとまった知識や理論として蓄積される。研究によって導き出された知識や理論は、一人一人の教師の主体的な吟味・選択によって、教育実践に方向性を与えていく。このような研究の展開によって、教師は、実践を客観化し、向上させることができる。

教師が教育研究に取り組むことは、「子供の成長への願い」を実現するために、教育実践の質を高めていく大きな推進力になるのである。

また、教育研究は、それが、単に個々の教師と当該学校の変革を図るだけでなく、現実の子供と教師の諸条件に適した様々な創意工夫を、ほかの多くの学校や教育関係者に提言することなどにより、教育全体に寄与するものに

もなる。教育の在り方が問われているこの時代に、教育実践に生きる教育研究の重要性や必要性はますます高まっている。

2 教育研究とは

課題を明らかにし
方策を導き出す

学校において行われる教育研究とは、教育実践の質を高めていくためのものである。そして、子供の成長への願いを実現するために、どのような課題があるか明らかにし、課題を解決していくための方策を導き出していくことである。

3 教育研究の方法

学校における教育研究は、一般的には、次のような方法がある。

- 授業研究：授業の改善・充実を図るために、指導の内容や方法を導き出すもの
- 教材開発研究：授業の改善・充実を図るために、教育実践に役立つ教材の開発を行うもの
- 事例研究：教育の内容や方法の改善・充実のために、事実から問題の原因や要因など、解決・改善の手がかりを明らかにするもの
- 調査研究：教育の内容や方法の改善・充実のために、教育の事実や実態を分析し、提言を行うもの
- 理論的研究：自己の教育理論を裏付けるために、文献を基にまとめるものの
- 実験的研究：教育の内容や方法の改善・充実のために、要因の比較実験によって、その有効性を確かめるもの

4 教育研究を推し進めるもの

(1) 深い愛情と豊かな構想力と確かな技術

教育研究を推進するには、教師の子供に対する深い愛情と、研究に対する豊かな構想力と確かな技術が必要である。

まず、子供に対して深い愛情をもつことである。教育は人間形成という価値創造、しかも未来からの要請にこたえながら、現実を踏まえ、価値追究を

目指して展開される。何のために何を研究し追究するのかといった、価値を銳く吟味し、研究の中でエネルギーとして爆発させていくのである。たとえ、それがどのような小さな研究であってもよい。そこに、教育の本質である人間形成を豊かに実らせていくための英知や価値を込めていくのである。子供を見つめ、社会や時代の動向や課題を把握し、過去と未来の接点に立って深く思索し、子供に対する教師の深い愛情を結晶させて、研究に生命と魂を与えていくのである。

次に、豊かな構想力である。これは、研究課題を解決するために、どのような計画を立て実施していったらよいか考え、組み立てることである。研究の対象を絞り、研究の目的や内容を限定し、研究の方法を吟味し、研究が密度の濃い展開になるように、研究の構想を創意工夫し、十分に練っていくことが大切である。

最後は、確かな技術である。研究の構想を実現するために、検証や結論の導き出し方を十分に検討し、様々な研究技法を適切に活用し、データ解釈の手順や方法の筋道を立てて進めていくことが大切である。

(2) 共同研究におけるチームワーク

特性を生かして、
主体的に研究に参
画する

学校における教育研究は、教師集団の多様な人間関係の中で教育実践を進めながら共同して行うものも多い。その中で、教師集団の研究への意欲の高まりは、学校をみずみずしくよみがえらせていく。研究はそうしたエネルギーをもっている。そのように研究を推進するため、また、研究推進上の障害を克服していくための要として、チームワークが大切である。

研究は、もともと自主性や創造性を原点とする。そこで大切なことは、一人一人の教師が自己を確立し、主体性をもって研究に積極的に参画していくことである。子供の成長・発達をみんなで支援していくという自覚と、研究を通して教育にかかわる課題を解決していくという使命感をもち、共通基盤をもって研究を進めるとき、チームワークが生まれる。

研究推進に当たっては、教師一人一人が特性を生かして、主体的に研究に

参画し、責任をもって役割を果たしていくことが肝要である。そのために、教師同士が互いの特性を認め合い、自信をもって取り組むことが大切である。

また、こうした取組は、リーダーの資質によるところが大きい。リーダーは、絶えずメンバーが研究への意欲を燃やし、創造性を発揮できるよう、一人一人の研究意欲への動機付けに心がけることが大切である。リーダーの綿密な企画力や適切で時宜を得た決断力、豊かな人間性などによって創造的な研究集団となっていくのである。このような教師群によって研究が進められることにより、豊かで充実した学校が創造されていく。

それとともに、常に配慮していきたいことは、研究の成果を実践に役立つようにフィードバックしていくことと、学校の研究的雰囲気の醸成に向けて、最適な条件整備を心がけていくようにすることである。

このように、教師一人一人が特性を生かして、チームワークをもって研究を推進することが大切である。

本書では、学校において個人研究に取り組む場合を中心に述べ、必要に応じて共同研究に取り組む場合を取り上げて述べる。

第2節 実践的研究のとらえ方

I 実践的研究とは

教育課題の解決と
教師の資質や実践
力の向上を目指す

学校において行われる実践的研究は、教育課題の解決を目的に、教育実践にかかわる問題を取り上げ、教育の内容や方法についてどのように工夫するか考えていくことである。そして、得られた理論や方法を基に、実践をさらに高めていく。これは、子供の成長への願いを基に、その実現に向け教師としての資質や実践力を高めていくための取組ともいえる。このような過程において、新しい気付きや深まりを生かしながら研究を進めていくのである。

これらのことから、学校における実践的研究の特質が、次のように浮き彫りになってくる。

- 子供の変容や成長にかかわる研究である
- 実践と理論を結び付けた研究である
- 教育実践の質を高め、その方向付けを行う研究である
- 研究の深まりとともに新しいことに気付き、修正を加えながら進めると
いうように可変性、柔軟性のある研究である

この特質と前述した六つの研究方法との関連は、表1のようになる。

表1 学校における教育研究の方法と実践的研究の特質の比較

特質 研究方法	子供の変容や成 長にかかわる	実践と理論を 結び付けた	教育実践の質を高め、 その方向付けを行う	可変性、柔軟 性がある
授業研究	○	○	○	○
教材開発研究	○	○	○	○
事例研究	○	○	○	○
調査研究	○	○	○	○
理論的研究	○	—	○	—
実験的研究	○	○	○	—

本書では、この四つの特質からとらえて、前述した六つの研究方法のうち、授業研究、教材開発研究、事例研究、調査研究を実践的研究ととらえる。

第2章では、この四つの研究方法を具体的に取り上げ、その過程や方法を示していく。(表2参照)

表2 本書で取り上げる実践的研究の研究方法

研究方法	特 質
授業研究	学習指導の内容や方法について実践を通して研究し、より客観的（論理的）に課題を解決していく
教材開発研究	教材開発の有効性を実践を通して研究し、教材の在り方を客観的に明らかにする
事例研究	特定な事実について資料を収集することにより、問題の原因や解決・改善の手がかりを明らかにする
調査研究	事象等の傾向・要因を明らかするために調査を行い、結果を分析し、考察することにより、教育方法等の改善の視点を提言する

II 実践的研究の必要条件

1 多様性を踏まえた洞察と価値の吟味

きめこまやかな洞察と教師の価値判断

教育は、様々な要因が複雑に絡まっているため、自然科学のようにはっきりした因果関係や法則性が成り立っているとは言い難い。例えば、学力を規定している要因に視点を当てた場合、意欲、能力、性格、学習や生活環境など、様々なものが絡み合っている。

このように、教育の背景にある要因の多様性を踏まえ、複雑な現象に注意し、きめこまやかな洞察を加えながら研究を進める必要がある。

また、例えば、学力について、その内容のとらえ方が教師の「教育観」「学力観」「教材観」「子供観」によって異なるように、実践的研究においても、教師の価値判断が大切となる。このように考えるとき、研究が子供の成長に真に役立つものか、今日的な教育課題にこたえるものになっているかと

といった価値の吟味を十分に行うことが大切である。

2 「一般性・法則性」と「個別性」の追究

科学的、論理的であるとともに、内面や個性的な特徴を洞察

教育研究にとって大切なことは、科学的、論理的に一般性・法則性を追究することである。しかし、実践的研究において、すべての子供を包括してとらえるようなことだけでは意味がない。言うまでもなく、一人一人の子供の発想やものの考え方には個性がある。子供の発達は、心理学で説明されているような枠組みを一般的にもっているにしても、一人一人の子供では、その違いが大きい。したがって、実践的研究においては、「一般性・法則性」と並んで「個別性」の追究を忘れてはならない。特に、個性を生かす教育の充実が求められている現在、子供の内面や個性的な特徴を洞察していくことが大切である。

3 倫理観と普遍的な愛に根ざして

人間形成の願いと期待の心

実践的研究は、子供の人格の尊重を基盤にして行うことが大切である。効率主義一辺倒の考え方から、画一的で結果だけを尊重し、子供に自信を失わせるような研究であってはならない。また、子供を実験的に扱うような研究態度は厳に慎み、一人一人の子供に対し、人間形成の願いと期待の心をもって、教育への厳しい倫理観と子供への普遍的な愛に根ざして研究を進めることが大切である。

III 実践的研究の構想

立ち止まり、先に進み、立ち返って考える

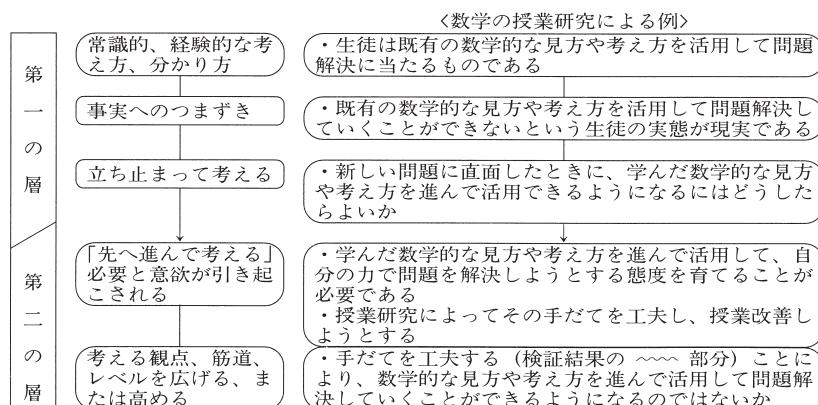
実践的研究はどのような過程をたどるのか。高久清吉は著書『教育実践の原理』の中で、「研究とは『考える』『わかる』の前進、または深まりの過程である」と述べている。高久はこの過程について、次のように論述している。

『第一の層は主客未分化の前反省的段階である。「ただ、なんとなく」という常識的、経験的な考え方、わかり方が大きくなるものをいい、「あたりまえのこと」と思いこんでいるものを改めて問題にしようとする問題意識や反省的思考が生まれない。このような日常的な考え方や分かり方がくずれるのは、事実につまずくときである。これまで、「はっきりしている」、「あたりまえのこと」とばかり思いこんでいたものが、実は案外にそうでないと気づいたとき、人は「立ち止まって考える」。ここから本当の研究が始まる。

第二の層は、主客分化の反省的段階である。つまずいて立ち止まることから、今までわかりきっているとひとり合点していた事がやらや問題について、さらに「先へ進んで考える」必要と意欲が引き起こされる。ここでいう「先へ進んで」の意味は、常習的な考え方の型やわだちの壁を破って、考える観点、筋道、レベルを広げる、または高めるということである。これによって、自我は「離れて」対象を見ることとなる。つまり、事がやらや問題の正しさについて、客観的（論理的）な吟味を加えることとなる。

第三の層は主客が実践的なレベルで再び結びつく反省段階である。ここでは、先へ進んで考えることから、改めて自分自身へと「たち返って考える」ことになる。前段階での客観的な吟味の結果が、結局は「自分は……すべきである（……しなければならない）」という形で、研究者自身の実践上の選択と決定を方向づけ、さらに行挙を動機づける意識の力となって内化される。前段階で分化した主客は、主体のはたらきとなって再びより高い次元で統一される。』

高久の研究における三つの層を授業研究に当てはめてみると図1のように示すことができる。（p.188実践例5参照）



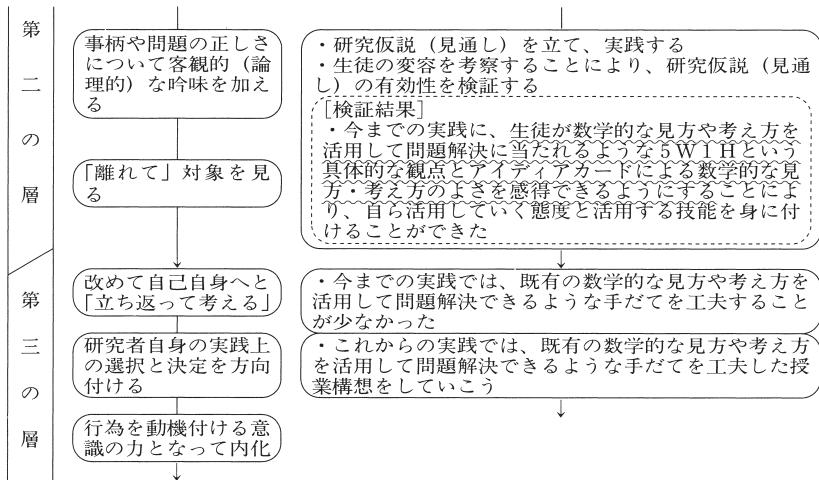


図1 授業研究における思考の過程

この考えを手がかりに、実際に実践的研究を進めていく過程を構想し、まとめたものが図2である。

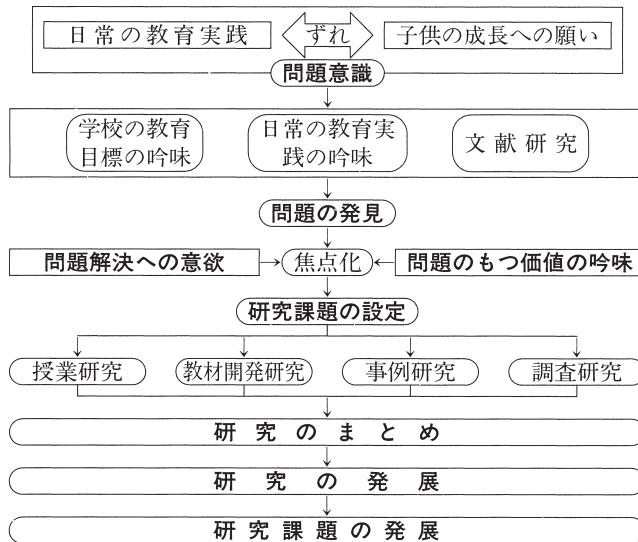


図2 実践的研究の構想

第3節 実践的研究の過程

I 研究課題をどう設定するか

1 研究課題設定の意義

**実践上の問題を見
いだし焦点化する** 研究課題の設定は、日常の教育実践の実態や子供の成長への願いから実践上の問題を見いだし焦点化して課題の解決を目指した具体的な取組を行うために意義あるものである。

- 共同研究を行う場合に研究課題を設定することは、前述したことのほかに、次のような意義がある。
- ・学校が解決しなければならない課題を取り上げることにより、成果を教育課程の改善、学校経営や学習環境の整備等に生かすことができる
 - ・望ましい授業の在り方や指導方法の工夫などについて共通理解することができ、自校における指導の在り方を明確にすることができる
 - ・共通な視点で子供を見ることにより、様々なとらえ方ができ、子供理解が多面的になる
 - ・課題の解決に向けて、全教師が共通理解の下に教育実践を行うことにより、参画意識を高めるとともに、協働態勢を整えることができる

2 研究課題設定の手順

研究課題は、次のような手順で設定することができる。

(1) 問題を発見する

ア 問題意識をもつ

**子供の成長への願
いと教育実践との
ずれから**

日常の教育実践を行っている。

しかし、日常の教育実践にみられる子供の実態を振り返ってみると、教師のもつ子供の成長への願いと教育実践の間にずれのあることに気付き、問題

教師は、子供に対して、「自ら進んで学習に取り組もうとする意欲を育てたい」とか「確かな思考力、判断力を培いたい」など、子供の成長への願いをもって

を意識することとなる。このように意識された問題は、多種多様なものがある。

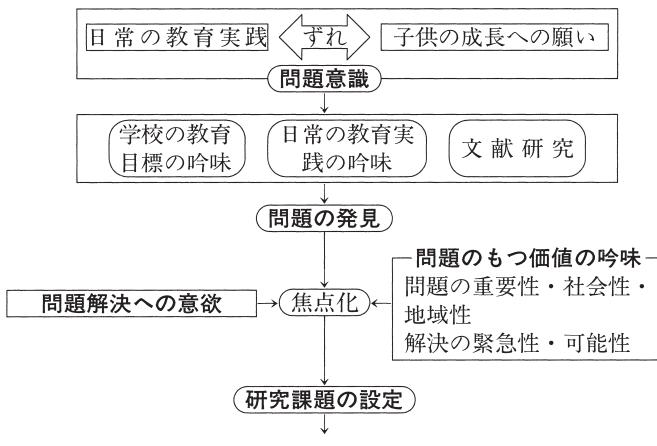


図3 研究課題設定の手順

イ 問題を発見する

日常の教育実践や
学校の教育目標な
どを吟味して

問題意識は、実態をより具体的にとらえようとした
り、子供の成長への願いをもっと明確にしたりしてみ
ようという気持ちを高めていく。

すると、それまで「あたりまえと思っていたこと」や「何となく行っていたこと」など、常識的、経験的な考え方、分かり方に疑問をもつことがある。この気持ちが問題を発見しようとする切実感へ向かわせるのである。

問題を発見するためには、子供の成長への願いを基に、日常の教育実践の実態をより具体的に把握することが大切である。そこで、日常の教育実践や学校の教育目標などの吟味の必要性が生まれる。

表3は日常の教育実践の吟味の例である。ここでは、問題意識の対象を日常の教育実践という観

点から吟味する例を挙
げた。それ以外に、文
献研究や調査によって、
実態を見直したり、子

表3 日常の教育実践の吟味（例）

方 法	主な考察の内容と技法等
○教材研究	○学習目標、教材の特質等の教科の理論など
○研究協議	○教育目標の理解、授業研究など
○教師間の 交流	○日常の教育論議

供の成長への願いが明確になったりして、問題を発見していく方法もある。

- 共同研究を行う場合には、全教師がそれぞれもっている子供の成長への願いを出し合って、共同して解決していく価値ある問題を発見していくことが大切である。そのために、KJ法、ブレーンストーミング法などの技法を用いて、次の①～③のようにして、価値ある問題を発見できるようにする。
- ① できるだけ広い視野にたって、たくさんの問題を書き出す
 - ② 書き出された問題を分類・整理したり、相互関係をとらえたりして問題を構造的に把握する
 - ③ 中核的な問題として価値あるものを選択する

(第3章参照)

(2) 問題を焦点化する

ア 問題のもつ価値の吟味

視点をもって価値
を吟味する

発見した問題は、次のような点から、その価値を吟味することが大切である。

- 問題の重要性はどうか
 - ・問題を解決することによって、子供がどのように変容するか
 - ・変容の内容と方向に、他の問題を取り上げるよりも大きな価値はあるか
 - ・各問題の相互関係をとらえたとき、その問題は中核的なものとして価値があるか
 - ・問題の解決が教師の指導力など、資質の向上にどのように寄与するか
- 問題の社会性・地域性はどうか
 - ・社会の要請にこたえるものであるか。また、地域の課題としてふさわしいものか
- 問題解決の緊急性はどうか
 - ・子供にとって、早急な解決を迫られているものか
- 問題解決の可能性はどうか
 - ・問題を解決することができる大きさであるか
 - ・研究にかけられる時間を考えたとき、解決することができるものか
- 共同研究を行う場合には、上記のほかに、教師全体の参画意識を高め、協働態勢を図っていくことを通して、共同して解決していく価値あるものを、次のような点から焦点化していく。
 - ・教師全員が研究にかかわっていける問題であるか
 - ・教師一人一人が、自分の課題としてとらえることのできるものか

イ 問題解決への意欲

子供の成長への願いを原動力に

発見した問題に教師自身が解決の意欲をもっていなければ、追究していく原動力が生まれない。子供の成長への願いが、発見した問題を解決したいという意欲につながったとき、それが教師にとって研究したい課題として意味をもってくるのである。

ウ 今日的な教育課題からの吟味

追究すべきことを明確に意識する

問題意識によって発見した問題は、どのような意味や課題を抱えているかという吟味を加えることにより、追究すべきことが一層明確に意識されていく。吟味は、日常の教育実践を客観的に検討したり、今日的な教育課題を視点に行ったりしていく。

今日的な教育課題は、小（中）学校学習指導要領（平成10年告示）の改訂の基本方針で示された、これからの中学生に育成すべき資質や能力と、それを育成するための学校の在り方を基にとらえることができる。図4は、基本方針を基に今日的な教育課題をとらえた例である。

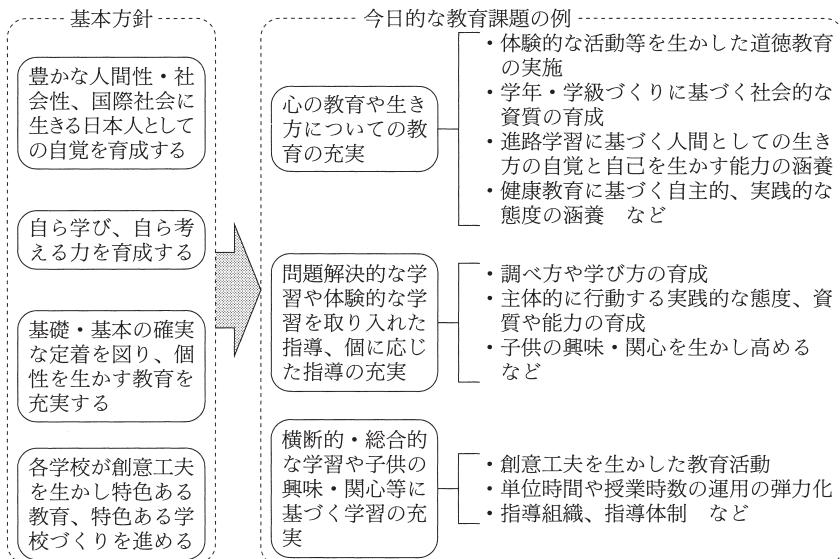


図4 基本方針と今日的な教育課題の例

エ 研究の分野・領域を確認する

どんな角度から研究に取り組むか

問題を吟味していくと、研究として取り上げようとすることが、教育課程や学年・学級経営などの教育全体の改善なのか、指導計画、授業づくり、教材開発など、学習の過程や方法などの改善なのか、子供へのかかわり方や支援などの改善なのかが見えてくる。このように、どのような角度から研究に取り組んでいったらよいかが見えてくることにより、実践的研究の方向が定められ、内容が焦点化され、研究課題がより明確になっていく。そして、これから追究しようとする課題が教育活動のどのような分野・領域に位置しているかを見通すことができるものである。

(3) 研究課題を設定する

価値や解決の意欲などから焦点化

発見した問題は、問題のもつ価値や教師自身の解決への意欲などから焦点化し、研究として取り上げる課題として設定することになる。

II 研究推進計画を立てる

1 研究推進計画の意義

研究の全体を見通すために

研究推進計画は、研究を「どの程度」「どのように」進めるかという計画を立てることである。したがって、研究を進めるに当たり全体を見通すために、意義あるものである。

2 研究推進計画立案の手順

研究推進計画は、基本的には以下のようない手順で立案することができる。

(1) 基本的な手順

ア 具体的な研究方法を選択する

研究課題にどのような研究方法で取り組むか、単一の方法で可能か、複数の方法が必要かを見通す。

イ 研究に必要な期間を確認する

研究課題を解決する期間がどのくらい必要か見通す。研究の目的によっては、あらかじめ研究期間が限られている場合もある。

ウ 作業の目標、内容、方法を確認する

研究過程の各段階の計画を立案する前に、次のような点を明らかにしておく。

- ・各段階の達成目標を明確にする
- ・各段階で取り組む研究の内容や方法とそれに伴う作業を洗い出す
- ・作業に要する日数を算定する

ア～ウは、複数年で行う場合も考えられる。

研究推進計画は、各段階の作業内容とその方向性が明確に示せるようにする。

表4 研究推進計画（例）

月	段階	流れ	作業の目標	作業内容	作業方法
4 ・ 5	課題の設定	※フローチャートで示す	・問題の発見 ・問題の焦点化 ・課題の設定	・子供の成長への願いの確認 ・教育上の諸問題について吟味し、実態を把握する	・文献研究 ・調査

（2）複数年に及ぶ場合の研究推進計画立案の留意点

研究が複数年に及ぶ場合には、子供を視点に成果や課題を1年ごとに明確にし、それを基に累積的に研究を深化・拡充・発展できるように計画することが大切である。

複数年に及ぶのは、次のような場合である。

ア 同じ課題を複数年にわたって追究する場合

1年の研究の結果、仮説を修正したり、問題点を修正したりしながら研究する場合と、そのまま研究を継続的に行う場合がある。

イ 同じ課題を年次ごとに領域・内容を分けて追究する場合

年次ごとに追究した領域・内容を全体として一つにまとめていく場合と、前年の研究成果を生かして、毎年研究の領域・内容を替えながら行う場合とがある。

ウ 複数の課題を年次ごとに発展的に追究する場合

いくつかの実践事例などを累積して、最後に改善した方策を提言していくような場合である。

- 共同で研究推進する場合に、研究推進計画を立案するときは、次の点に留意する。
 - (ア) 研究方法は、課題によって複数選択することがある。その際、班別で並行して研究推進したり、複数の研究方法を順序立てて取り組んだりする
 - (イ) 研究に必要な期間は、単年度で行うか、複数年度で行うか、共通理解して定める
 - (ウ) 研究組織を編制するに当たっては、以下のような点に留意する
 - 校務分掌の組織を生かし、学年、教科、生徒指導等、相互の有機的な関連を図ること
 - 研究主題によって、効率的な編制を考えること
 - 教師の特性、個性、能力を生かす組織であること
 - 研究の内容や学校規模を配慮し、研究推進委員会を位置付けるなど、全体と各部が協力し合える組織となるようにすること

III 研究方法の特性

研究方法の特性として、仮説を立て検証する場合と事実に関するデータを収集し、分析・解釈する場合が考えられる。

これを日常の教育実践を基に示すと図5のようである。

1 仮説を立て検証する場合

研究仮説を取り上げた内容や方法によって課題解決

実践上の課題をより客観的・論理的に解決していく方法として、仮説を立て検証する場合がある。仮説を立て検証する場合とは、研究課題をどのような内容に

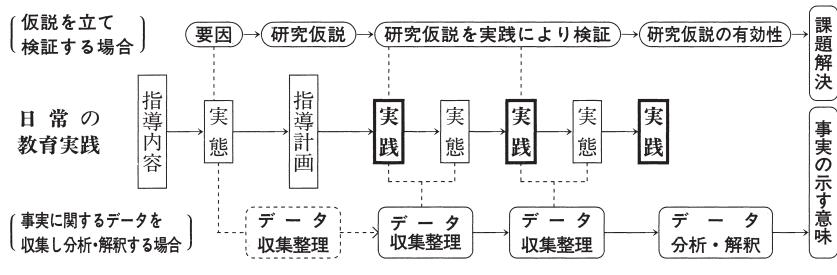


図 5 研究方法の特性

ついて、どのような方法で解決するのか、仮説をもって課題解決に当たるうとするものである。まず、実践上の課題を生み出している様々な要因のなかから、教育実践を改善するために、ある要因に着目する。次に、その着目した要因に基づき、課題解決するために研究仮説をもつ。そして、研究仮説として取り上げた内容や方法を具体化して実践する。実践により、その有効性を検証することを通して、実践上の課題解決に当たるのである。

仮説を立て検証する場合は、実践上の課題がある程度はっきりしており、その解決の手がかりとなる要因も予測できる。この要因は子供の成長を促進

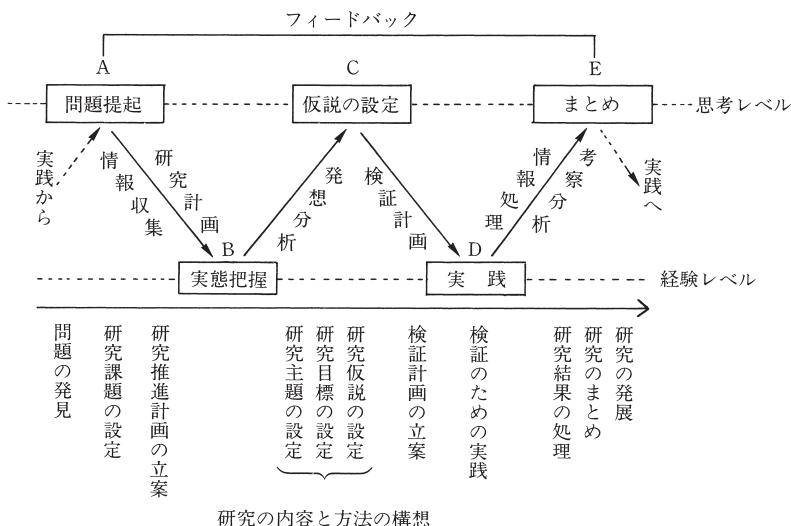


図 6 仮説を立て検証する研究における一般的な過程

するものや阻害するものが考えられる。そして、実践上の課題解決のために、着目した要因を、研究仮説として取り上げた内容や方法によって、よりよく機能させたり、取り除いたりしていくという考えに立っていくのである。
(p.31参照)

仮説を立て検証する場合は、川喜田二郎が著書『発想法』で述べている「W型問題解決モデル」を参考にすると、図6のように示すことができる。

仮説を立て検証する場合の過程は、「W型問題解決モデル」の思考レベルと経験レベルを往復する筋道としてとらえることができる。仮説を立て検証する場合は、授業研究や教材開発研究などがある。

川喜田二郎は、科学としての研究方法を「W型問題解決モデル」に示し、書齋科学、野外科学、実験科学の三つの型に分類している。

- 書齋科学：文献・資料を基にして、頭の中で問題提起を行い、推論過程を通して理論的裏付けを行い、結論を導き出す
- 野外科学：実際に現地調査や資料収集を行い、その結果を分析・考察して法則性を引き出す
- 実験科学：厳密な条件設定を基に実験を行い、仮説を検証する段階に重きを置く研究を進める場合、研究の内容や方法の違いは、研究の過程のどこに重点を置くかによって分けられる。図7の「W型問題解決モデル」のように、研究という仕事は、比重の違いはあっても思考レベルと経験レベルを往復しながら事実の奥にある本質を

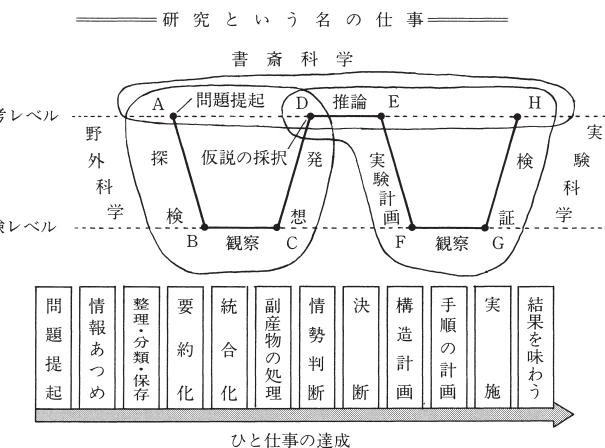


図7 W型問題解決モデル（『発想法』川喜田二郎）

追究し、新しい知識や理論を生み出していく問題解決の行為といえる。

そして、前述した学校における教育研究の方法は、仮説を発想していく段階に重点を置くもの、仮説を検証する段階に重点を置くもの、仮説—検証のすべてにわたって同じ比重を置いて行うものの三つに分けることができる。

さて、「W型問題解決モデル」のA～Hの各過程における研究内容をみると表5のようになる。

表5 W型問題解決モデルの研究過程と研究内容

研究過程	研究内容
A→C	問題に直面した場合、まず、先行例や文献と照合するとともに、問題を多角的に調べ、事実を正確にとらえるようにする
C→D	A→Cの内容を基にして、解決への見通しを設定する。これが仮説であり、仮説にどんなアイディアが盛り込まれるかによって、研究の質が左右される
D→H	仮説が本当に正しかったか否かを、適切な技法を用いることによって検証し、結論を構成していく

2 事実に関するデータを収集し、分析・解釈する場合

事実を読み取り、意味を見いだす 教育実践上の事実から、様々な要因やその関係、特徴などを明らかにする方法として、事実に関するデータを収集し、分析・解釈する場合とは、教育実践上の事実がどのような要因により生み出されているのか、あるいは、その事実の背景にどのような要因相互の関係があるのかなどを、事実に関するデータを丹念に読み取ることによって明らかにし、その意味を見いだそうとするものである。

まず、課題に成り得るものとして、取り上げる教育実践上の事実をじっくり観察する。そこで、複雑に絡まっている様々な要因のなかから、事実に関するデータを収集する。複数の要因からデータを得て、その関連や構造を分析・解釈していく。さらに、そこから見えてくる構造や特徴などから事実の示す意味を見いだすのである。

事実に関するデータを収集し、分析・解釈する場合は、個別的な事例研究や、学校課題などを明らかにするための調査研究などが考えられる。

特徴として、次のような点が挙げられる。

- 対象とする事実そのものを観察する
- データを収集し、分析する
- 研究者の解釈を重視する
- 得られる資料を総合して検討し、意味を見いだす

また、研究の過程として次のようなことが例示できる。

- (1)問題の選定
- (2)研究目的の確認と研究主題の設定
- (3)データの収集
- (4)データの整理
- (5)データの分析・解釈
- (6)結果のまとめ

IV 具体的に研究を進める

仮説を立て検証する場合と、事実に関するデータを収集し、分析・解釈する場合の研究の進め方について主な過程とその要点を示す。

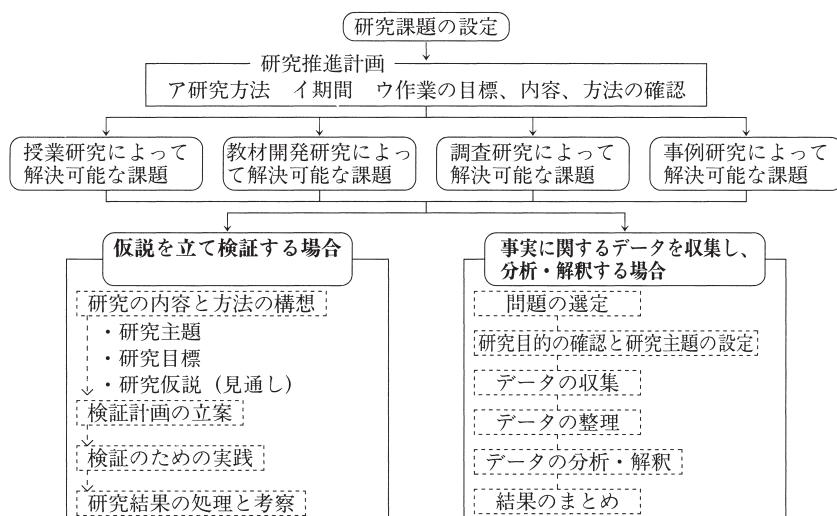


図 8 実践的研究の具体的な研究過程の例

1 仮説を立て検証する場合

(1) 研究の内容と方法の構想

ア 研究の内容と方法の構想の意義

研究の独自性、価値を確かなものにするために

研究の内容と方法の構想は、研究課題を解決するために、どのような視点からどのような方法で取り組んでいくかを明らかにすることである。

研究の内容と方法を構想するためには、促進要因・阻害要因、研究の方向性、研究の分野・領域、研究の方法を明らかにし、それによって研究目標、研究主題、研究仮説（見通し）をとらえていく。このような構想によって、研究の独自性、価値が確かなものになっていく。

イ 研究の内容と方法の構想の手順

（ア）促進要因・阻害要因を分析する

内容や方法を方向付ける手がかり

研究課題に取り組む際に、その背景にある促進要因や阻害要因をとらえておくことは重要である。その要因が課題解決の内容や方法を方向付けることがあるからである。

教育課程、授業改善などに関する研究では、子供の実態や家庭・地域の実態などから促進要因や阻害要因を分析する。子供の成長を促進する要因や阻害する要因は、文献研究や実践記録、観察記録などの考察や、研究課題の内容に見合った調査によって分析する。

——学習意欲を促進する要因、阻害する要因の主な例——

- 生理的要求…快・不快、睡眠
- 環境的要因…物的条件：温度、湿度、照明
人的条件：友人、教師、家族などとの人間関係
心的条件：興味・関心、意欲、価値付け
- 学習内容に関する要因…レディネス、学習課題、発問
- 学習方法に関する要因…賞罰、学習過程、教育メディア

(イ) 研究の方向性を吟味する

目指す資質や能力を焦点化し、具体化する

研究課題を解決していくためには何を目指していくべきよいか、研究課題がもっている特徴や内容を明確にしていくことが大切である。実践的研究を行う意義の一つは、子供の資質や能力の育成にある。どのような資質や能力の育成を目指すのかを焦点化し、具体化していくことにより、その研究の方向を明らかにしておくのである。

例えば、授業研究において「数学的な見方や考え方及びそれを育てる態度」の内容を表6のように分析し内容を具体化して、研究の方向を明らかにしていく。

表6 「数学的な見方や考え方及びそれを育てる態度」の内容の分析例

項目	包含内容	
数学的な見方や考え方	数学の方法に関するもの	帰納的な考え方、類推的な考え方、演繹的な考え方、統合的な考え方、発展的な考え方、抽象的な考え方、単純化の考え方、一般化の考え方、特殊化の考え方
	数学の内容に関するもの	単位の考え、表現の考え、操作の考え、アルゴリズムの考え、関数的な考え、式についての考え
数学的な見方や考え方を育てる態度	<input type="radio"/> 事象の中から数学的な問題を見付けようとする <input type="radio"/> 見通しを立てようとする <input type="radio"/> 思考を具体的な思考から、抽象的な思考に高めようとする <input type="radio"/> 自他の思考とその結果を評価し、洗練しようとする	

(『数学的な考え方の具体化』片桐重男より作成)

(ウ) どのような分野・領域で研究を進めるかを吟味する

研究課題に取り組むために焦点化、具体化する

研究課題を解決していくために、焦点化し、具体化することによって目指すものは、どのような分野・領域で実現できるのかを検討する。教育課程の改善が研究課題であれば、そのどこに着目するかを検討する。

この段階で研究として取り組む分野・領域を焦点化するために、調査を行うこともある。また、今日的な教育課題をとらえるために文献研究をしていくこともある。このような検討によって、学年・学級経営などの領域を研究課題として取り上げていくことができるのである。

教科等であれば、年間指導計画や教科の中の単元・題材レベルで分野・領

域が焦点化される。

(エ) 課題解決するための方法を吟味する

繰り返し吟味し、
焦点化する

方法の吟味は、研究課題を解決するために、目指すもの（ねらい）や、研究対象の分野・領域を踏まえながら行う。

ここに挙げた(ア)～(エ)は、関連し合って焦点化し、具体化していくものである。したがって、繰り返し吟味し、焦点化していくことが大切である。

図9は、授業研究を例に、その関連を示したものである。

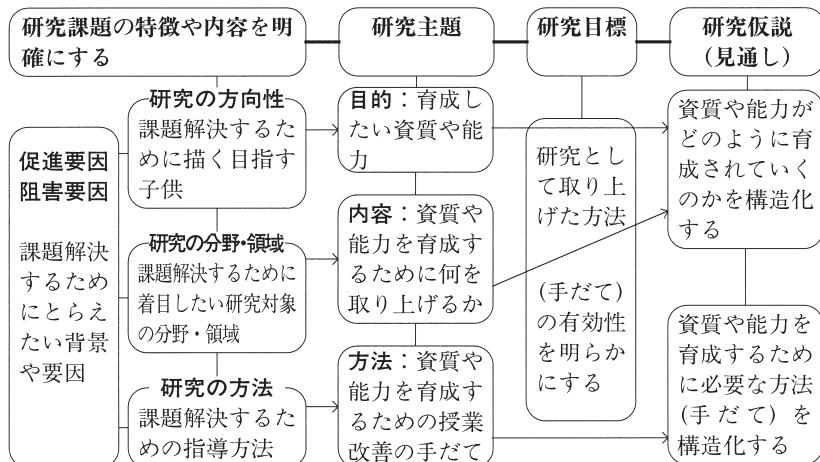


図9 授業研究において仮説を立て検証する場合の「内容と方法の関連」

(2) 研究主題の設定

ア 研究主題設定の意義

研究に方向性を与える

研究主題は、その研究がどのような教育を実現しようとしているかを示すものである。

つまり、どのような教育を構想し、実践しようとしているかという意味で、研究の顔としての重要性を秘めているとともに、研究に方向性を与え、研究の羅針盤としての役割をもっている。研究主題を基に、どのような研究の目標や仮説を設定したらよいかというイメージを描くことができる。その意味

で、研究主題には、研究の全体像を発想していく機能がある。

研究主題を設定することで、研究として取り上げる内容・方法を絞り込み、研究の方向性、研究対象の分野・領域、方法を明確にすることになるのである。

□ 共同研究を行う場合に研究主題を設定することは、前述したもののはかに次のような意義がある。

- ・全教師の共通理解の下、協力して主題についての研究を深めることができる
- ・学年の発達段階の把握、長期的な子供の変容、全校態勢による研究課題の追究などができる
- ・研究組織の編制、研究方法の構想が計画的にできる

イ 研究主題に必要な条件

目的、内容、方法
を示す

どこまでの内容を範囲とするのか、どのような方法、
方針で行うのか、緊急に解決すべきものは何か、研究
に使える時間、予算など研究を支える条件等を集約し、研究の目的、内容、
方法を示すものが研究主題となる。

- 研究に方向性を与えていくもの [目的]
- 内容構造が具体化され、焦点化されているもの [内容]
- どのような方法をとるか明らかにされているもの [方法]

ウ 研究主題の吟味

(ア) 吟味の必要性

構造をはっきりさ
せる

研究主題は、研究の課題が凝縮されているとともに、
その課題解決へ向けた発想のエネルギーとなることが
期待される。そこで、意義ある研究を行うためには、これから行おうとする
研究の構造を、はっきりさ
せておかなければならぬ。

そのためには、研究主題の
中にある重要語句（キーワ
ード）の意味をしっかりと
分析し、吟味してみる必要
がある。授業研究では、

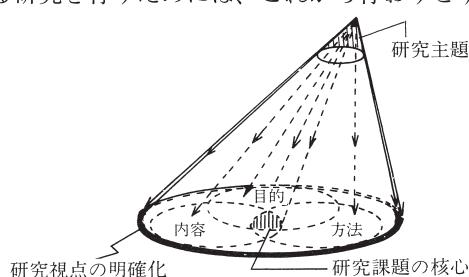


図10 研究主題の働き

「研究主題に込められている教育は、どのような内容をもつものか。子供を変えるためには、どのような授業を行ったらよいか。目指す授業に対して、どのような文献研究を行ったり、資料を集めたりしたらよいか。どのような実地調査を行ったらよいか。」など、具体的吟味を行うことである。言い換えると、研究主題は、研究の目的、内容、方法について、豊かな発想のエネルギーとして生きて働く力となる。

研究主題は次のようなことを吟味して設定する。

- 研究を通して求めたい実践の在り方を考え、研究課題がもっている特徴や内容を明確にする
- 子供の成長への願いを基に、育成したい資質や能力を明らかにする
- 子供の実態や地域の実態などから促進要因や阻害要因を分析する
- どのような方法で研究を進めていくのかを考え、基本的な構想を立てる

(イ) 研究主題の表記

研究主題は、研究の目的、内容、方法を集約して構集約して構成する成する。

- 用語の概念を明確に把握して表現する
- 明確で、具体的な内容を盛り込んで表現する
- 一般的に、主題文は、研究の目的や研究対象を論理的、構造的に把握した内容を主体に構成する。副題は研究の具体的手だての構想を主体に構成し、一読できるくらいの長さにまとめる

研究主題の表記例

- 研究の目的や研究対象を論理的、構造的に把握した内容を主題に、研究の具体的手だての構想を副題に構成したもの
「英語による主体的な表現活動を促す指導の工夫」
—プレゼンテーション支援教材の開発とその活用を通して—
- 研究対象が手だてそのものである場合で、指導の手だてを主題に、ねらいを副題として構成したもの
「問題解決的な学習の在り方」
—小学校理科において、自然の事物・現象を関係付けることできる児童の育成—
- 研究対象が複数ある場合で、中核的な対象を主題に、他の対象を副題に構成したもの（それぞれが同等な対象になっている場合には、いずれかを

- 主題に、他を副題に入れて、研究主題を分かりやすいものにする)
「思考力を育成するための学習課題の在り方に関する研究」
 一個に応じた指導方法に着目して—
- 数か年にわたり年次ごとに研究対象を換える場合で、年次ごとの対象を明示して副題として構成したもの
 「自分のよさを生かし、表現する喜びを味わう国語科指導の工夫」
 第1年次 子供のよさを発揮できる教材の開発を通して
 第2年次 子供のよさを生かす指導方法の改善を通して
 第3年次 子供のよさを生かす評価の工夫を通して
 - 総合研究主題を設定した場合で、焦点化した対象などを副題として取り入れ構成したもの
 総合研究主題「意欲的に取り組み、追究し続ける子供を目指して」
 —コース別学習を取り入れた理科の指導を通して—

(3) 研究目標の設定

ア 研究目標設定の意義

内容や方法、検証
計画を具体的に

研究目標は、この研究で何を明らかにし、何を追究しようとするのか示すものである。研究目標の設定は、研究の具体的な方向性や、研究の目的に迫る観点を示し、研究の内容や方法、検証計画をより具体的に設定することができる。

イ 研究目標の役割

研究目標は次のような役割がある。

- 研究の推進に方向を与える
 何を考察し、何を実施しなければならないのか吟味したり、推進している研究の方向を確認したりするための指針となる。
- 研究のゴールを示す
 研究の結果を考察する際に、最終的には研究目標が達成できたかどうかを検討・吟味して研究の評価を行う。
- 検証計画の内容を方向付ける
- 研究目標の明確さが研究内容の確かさを示唆する
 研究目標は、研究主題で示した育成したい資質や能力、内容、方法を基に、

研究で明らかにすることを明確にする。

ウ 研究目標設定上の留意点

研究目標を設定する際には、次の点に留意する。

- 研究対象の分野・領域を限定し、焦点化して研究目標を明確にすること
例えば国語科において、次のように研究対象の分野・領域を焦点化する。

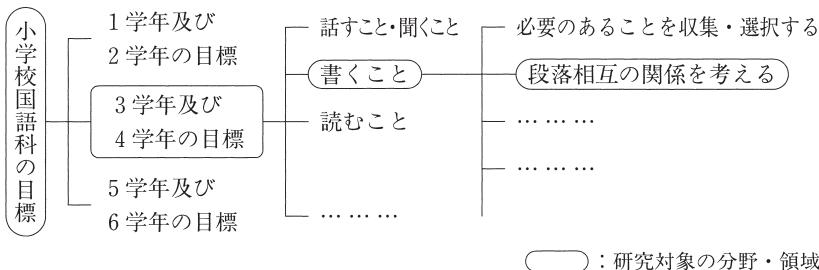


図11 国語科における研究対象の焦点化（例）

- 目的、内容、方法を盛り込むこと（表記の順序性はない）

これらを踏まえ、研究目標は、次のように表すことができる。

＜例1＞ △△△において（内容：研究対象の分野・領域）○○○○にするために（目的：目指す姿）□□□□することの（方法：投入条件）有効性を明らかにする。

小学校国語例：（p.166実践例2）

書くことの指導において、よりよく表現したい、確かに表現したいという意欲を高め、喜んで書く子を育てるために、書く事柄の順序を整理し、段落や段落の続き方を楽しみながら考えて書くための「まんがシート」を取り入れたことの有効性を明らかにする。

＜例2＞ △△△において（内容：研究対象の分野・領域）□□□□をすれば（方法：投入条件）、○○○○になること（目的：目指す姿）を実践を通して明らかにする。

图画工作例：（p.172実践例3）

鑑賞指導において、美術作品を仲間分けによって比較したり、気に入った美術作品の特徴をまねて自分なりに工夫した作品を製作したりすれば、見方や感じ方が深まり美術作品に親しむことができることを実践を通して明らか

にする。

(4) 研究仮説（見通し）の設定

ア 研究仮説（見通し）の意義

場・内容・投入条件・期待される結果を具体化するために

本書では、研究仮説は、研究の見通し、または、予測ととらえる。

研究で大切なのは、見通しをもって進めることである。研究の見通しをもつということは、その研究における手だてなどを具体的に設定するということである。研究仮説を立てることにより、研究の場・内容・投入条件・期待される結果などを具体化することができる。

イ 研究仮説（見通し）の役割

研究仮説は次のような役割がある。

- 研究の内容と方法及び特徴を明確にする
- 研究の構想を実践に向けて具体化し、その方向を明示する
- 検証計画の内容と方法を定めることによって、検証資料の内容構成、得られた資料の処理やその技法などに示唆を与える
- 研究仮説は、検証を通して研究を評価する重要な要素となる

ウ 研究仮説（見通し）設定上の留意点

研究仮説は、研究の出発だけでなく、研究の過程に即して研究推進の方向や資料収集の方向、研究のまとめを示唆する大切な働きをもつので、以下のこととに配慮して設定する必要がある。

- 綿密な実態分析に基づいて、今までの指導方法を見直す
- これまでの研究や実践による既知の事実や理論とずれがなく、合理的、論理的である
- できるだけ端的で分かりやすい用語で述べる
- 研究仮説は一般的に次のように表現される

「○○において、○○することによって、○○になるであろう」

A

B

C

Aは場・内容の限定、Bは投入条件（方法）、Cは期待される結果（目的）を示す。

(5) 検証計画の立案

ア 検証計画の意義

実践に先立って、見通しをもつために

検証は、子供がどのような方向にどのように変容したかを事実に基づいて確かめることである。それは、研究の方法が有効なものであったか判断することである。そのためには、確かな検証を可能とする資料の収集と検証方法の選定が必要である。それは、研究の実践に先立って、見通しをもった計画を立てることによって可能になる。

イ 検証計画立案の方法

（ア）研究の目的・内容・方法の確認

研究の目的・内容・方法は何か。例えば、教材開発研究においては、「使用する教材のどのような点を改善・充実するために教材開発を行うのか」「どのような内容が教材開発の中核になるものか」「その教材開発をどのような方法で行うか」などを確認し、その教材開発が目標の達成に有効に作用したかを検証できるよう計画を立てる。

（イ）検証計画立案の留意点

検証計画を立てるに当たっては、次の点に留意する。

a 検証の観点

何に着目し、何を検証するのか明確にする

b 検証の場面・方法の明確化

どこでどのような検証方法を用いて検証するのか実践計画に位置付ける

c 処理と解釈の方法

評価規準の構想、検定方式の選定、検証資料の整理の仕方など、検証の内容と方法は、研究の特徴と研究仮説の明確化によってある程度決まってくる。それらの内容や方法をさらに分析し、いろいろな視点から検証が行えるような工夫が必要である。

(6) 検証のための実践

ア 検証のための実践の意義

取り上げた方法の有効性を明らかにするために

検証のための実践は、研究として取り上げた方法が子供の変容にどのような効果をもたらしたか、その方法の有効性を明らかにすることである。取り上げた手立てを投入して授業実践したり、開発した教材を実際に活用して意図した効果が発揮できるかどうかを実践したりして検証する。

イ 検証のための実践を進めていく上の留意点

○ 教育本来の目的を優先する

例えば、授業研究において、研究仮説の検証を優先するあまり、目の前にいる子供の姿を軽視してしまったり、資料収集を強いたりするなどは、絶対にしてはならないことである。

○ 研究の投入条件は何かを明確に把握し、導入する

○ 資料収集は、目的・内容・方法などを具体化して行う

○ 資料収集は過不足なく行い、子供に過度な負担をかけないようにする

(7) 研究結果の処理と考察

ア 研究結果の処理と考察の目的

研究仮説の有効性を判断する

研究結果の処理は、研究仮説の適否を事実によって検証し、その有効性を判断する資料を得ることである。

また、研究の提言性を事実によって示すための根拠を得ることである。

研究結果の考察は、研究仮説の検証で得た資料により、その有効性を検討し判断することである。

イ 研究結果の処理と考察の留意点

処理と考察を進めるに当たっては、次の点を踏まえる。

- 仮説を検証することによって得られた事實を、質的・量的な面から示す
 - ・質的（個の変容の把握）な示し方は、観察記録などにより、個別的な事例をデータとして処理して行うものである。データは過程を把握でき、具体性、多義性があり事實をとらえやすいので、その事實を基に深く考察したり、総合的・多次元的に把握したりすることができる。
 - ・量的（科学的、客観的把握）な示し方は、その方法（手だて）によって変容がどれだけ得られたか量的に処理して行うものである。変容に関するデータを数量化し、統計的処理によって客観化して示す。
- どこまでが事實で、どこからが研究者の考え方や推測かを明確にする
- 仮説を肯定する事實だけでなく、肯定も否定もしない事實や否定する事實も取り上げて考察する

2 事實に関するデータを収集し、分析・解釈する場合

(1) 問題の選定

事實を読み取る手
がかりを得る

この研究は、目前の教育事象にどのような意味があるか、また、その要因はどのようなものか、とらえるために行うものである。その際に、自己のそれまでの経験や理論を基にしたり、社会の要請などから手がかりを得たりして、問題を選定し研究を始める。この問題の選定により、どのようなデータを収集したらよいかを見いだしていく。

- 問題を選定する際には、次の点に留意する。
- 教育事象の何に着目しようとしているのか、視点をもつ
 - 例えば、休み時間の子供の様子から、「子供の学校生活の在り方」を問題とする。
 - 問題は個別的なことであるか、集団的なことであるか、およその見通しをもつ
 - 例えば、「子供が気持ちよく朝のあいさつをすることができない」のは、個別的な問題なのか、学校全体の問題なのかによって、その後のデータの収集の仕方が異なってくる。

(2) 研究目的の確認と研究主題の設定

明らかにしたいことは何か

選定した問題は、事実や現象を基に何を明らかにしたいのか、研究目的を確認することが大切である。

研究の基盤になるものは、子供理解を深めたいという教師の願いである。そして、子供理解を深めることを直接の研究目的にしたり、子供理解を深めることによって明らかにしたいことは何か、例えば「教育課程を改善するために」「不登校という子供の事実を理解するために」を研究目的にしたりするのである。

研究主題は、研究目的を達成するため、何を対象にして、どのくらいの範囲とするのか、どのような方法・方針で、どのようにデータを収集していくか、などを整理したものである。

(3) データの収集とその留意点

事実を読み取り、データを得る

データは、選定した問題に関する資料として、すでにあるものを活用したり、新たに観察や面接などによる調査を実施したりして得る。

データの例として、子供の行動や周囲の環境に関するもの、子供や教職員、地域の意識などが挙げられる。

データの収集に際しては、以下の点に留意する。

○ 質的に把握する、量的に把握する

質的に把握するデータは、主に、個別的にものの見方・考え方などの変容からとらえたり、時間的な経過による変容からとらえたりして得ていくものである。

量的に把握するデータは、主に、集団から、ある内容についての資料を得ていくものである。収集したデータは、統計的処理によって対象範囲の傾向などをとらえることができる。

○ 個別的な情報の収集に当たっては、プライバシーや人権の保護を優先する

○ 研究者自身が対象と直接かかわりながらデータを収集する際には、研究

対象や結果に影響を与えないよう配慮する

(4) データの整理

データの示す意味を見いだすために
収集したデータの中には、内容の整理が必要なものや、統計処理の必要なものがある。データの整理においては、次のような点に留意する必要がある。

- 資料は、事実や現象を示しているものか、事実や現象から類推した結果を示したものなど、どのようなことを示しているのか明らかにして整理する
- 目的や必要に応じて、時間の経過に沿って整理したり、対象者の属する条件（年齢などの特質）などによって整理したりする
- 統計処理の必要なものは、適切な処理方法で整理する

（第2章第4節参照）

(5) データの分析・解釈

データが示す意味は何か

問題とする事実や現象にとって、データはどのような意味をもつのか、その示す意味は何かを分析・解釈する。その際に、すでに一般化されているとらえ方から見て、そのデータが示す意味を検討することが大切である。

データを分析・解釈する際には、以下の点に留意する。

- データが、問題の意味や要因をとらえる根拠となり得るものとなるために、データとして取り上げた理由を、理論的背景や事実から明確にしておく
- 複数のデータを取り上げ、相互の関連や構造を踏まえて分析・解釈する
- 研究者としての立場を明確にして、推定したり因果関係を構築したりするなどにより、個人的な見解で分析・解釈が偏らないようにする

(6) 結果のまとめ

見いだした意味をまとめる

選定した問題にかかる資料を収集し、分析・解釈したことにより、見いだした意味をまとめる。

その際には、次の点に留意する。

- 問題について、データを基に分かった事実やその要因・背景を示すよう
にする

- 事実や要因・背景を通して、問題について研究者が見いだした意味を示
すようする

データが同じでも、研究者が異なればそこから見いだす意味は異なってくる。それは、研究者の関心や理論的枠組みが異なっているからである。

ここに、事実に関するデータを収集し、分析・解釈する場合の特質がある。
研究者の関心や理論的枠組みによって問題に着目し、データを収集し、整理、分析・解釈するといった一連の取組から見えてきた意味は、その条件によつて見える事実やその意味を価値付けることになる。その際、その意味を第三者にも理解できるよう、まとめていくことが大切である。

V 研究の過程に応じた資料収集と研究技法の選定

1 調査・資料収集

(1) 調査・資料収集の意義

内容や特徴を把握
し、基盤とするため

調査や資料収集は、研究対象となる教育課題の内容
や特徴を把握したり、研究を支える理論や事実に基づ
く研究を実証したりするための基盤となる。

実践的研究においては、視点を明確にし、研究の過程に応じて効率的な資
料収集を行うことが大切である。

(2) 調査・資料収集の視点

調査や資料収集を行う際には、次の視点を明確にして行うことが重要であ
る。

- 何のために行うのか（調査目的の明確化）

（例）・教育課題の明確化　・研究課題の設定　・子供の成長の促進要因、阻
害要因の発見　・子供の変容の様子や研究仮説の有効性　など

- 何を調べるのか（調査すべき目標及び調査対象の明確化）
(例)・子供の学力、行動特性など　・学校の環境　・地域の環境　・研究の検証のための資料の収集、整理、分析、考察、解釈などの在り方　など
 - 何で調べるのか（用具及び内容の的確化）
(例)・調査の目的、目標に見合った観察の観点、調査項目、調査内容、調査問題などで構成　・研究仮説に基づく期待される結果がとらえられる内容などで構成
 - いつ、どこで調べるのか（時期及び場面の的確化）
(例)・日常の教育実践の中で収集、累積　・研究課題の設定に先立って収集　・研究の方法の構想と検証計画の作成の前　など
 - どのように調べるのか（用具と方法の的確化）
(例)・文献の収集とその研究　・先進校の研究資料の収集とその研究　・教育実践の反省や実践記録等の収集と整理、分析、考察、検査、調査など
 - だれが行うのか（調査主体及び記録者、資料作成者の明確化）
- (3) 調査・資料収集上の留意点
- 研究推進計画、研究目標、研究仮説及び検証計画を基に、内容、用具、方法などを精選すること
 - 必要に応じて立ち返ったり、考えを修正したりという姿勢をもつこと
 - 調査や資料を収集することが子供の学習の阻害要因にならないようにすること

2 研究技法の選定

- 研究技法を選定する際には、研究の展開に応じて、次のような点に留意する。
- 一つの事象をとらえる場合でも、いくつかの技法を相互に関連させながら活用し、いろいろな側面から事象をとらえること
 - 各段階で研究に本当に必要なものは何かということを考えて精選すること
技法を選定して使用することにより、何を知りたいのか、得た結果をどのよ

うに利用したいのかなどをしっかりと認識する。技法の違いにより研究の内容や方法に微妙な違いをもたらす場合がある。

- 研究の次の段階やその先の段階を見通して技法を選定するとともに、一つの技法で得られた結果が多様な場面で利用できるようにすること
- 研究の目的、内容、方法などに応じた技法を選定するとともに、教師の創意工夫を働きかせ、よりふさわしい技法を用いて実施すること
- 自分で調査表や問題などを作成する場合には、その内容や方法、あるいは評価基準などの妥当性や信頼性に配慮し、偏ったものにならないようにすること

(第3章参照)

VI 成果と課題をまとめ、実践にどう生かしていくか

1 研究のまとめ

(1) 研究のまとめの意義

成果と課題を明らかにし、研究の価値を確認するため

研究のまとめは、成果と課題を明らかにし、研究の価値を確認することである。一般化できたり、追跡研究ができたりすることが実践に生きる研究である。研究をまとめる際には、次のような視点が大切である。

(2) 研究のまとめの視点

- ア　どのような願いをもち、何を探ろうとしてきたか
- イ　研究目標の追究にどのような研究の方法を講じてきたか
- ウ　実践による検証やデータの処理によってどのようなことが分かったか
- エ　研究目標の何が追究できて、何が未解決の問題として残されたか
- オ　研究主題のもつ課題は追究できたか

2 研究の評価

(1) 研究過程における評価の観点

実践的研究は、らせん的な進行過程を経ながら進展し、深まっていく。つ

表7 研究過程における評価の観点（仮説を立て検証する研究の例）

過程	評価単位	評価の観点
課題把握	課題のとらえ方	<input type="radio"/> 子供の実態から把握した切実なものか <input type="radio"/> 教師の実践のつまずきや反省の吟味はどうか <input type="radio"/> 学校の教育目標や学校課題に結び付いているか <input type="radio"/> 文献や理論が生かされているか
計画	研究の妥当性	<input type="radio"/> 研究推進計画は適切であるか（日程・作業・内容・手順等） <input type="radio"/> 研究組織は学校の実態や教師の特性を加味したものになっているか <input type="radio"/> 研究計画は柔軟なものになっているか <input type="radio"/> 研究成果を生かす計画が立ててあるか
主題	研究主題の設定と妥当性	<input type="radio"/> 課題を十分に分析し、焦点化・具体化した主題であるか <input type="radio"/> 実践上の必要性・緊急性を踏まえた主題であるか <input type="radio"/> 解決の意欲のもてる主題であるか <input type="radio"/> 研究期間や組織の実態などを考慮した主題であるか
目標	研究目標の設定と妥当性	<input type="radio"/> 明確で、具体性をもった目標になっているか <input type="radio"/> 学校課題を解決し、学校の教育目標を達成するのに関連深い目標になっているか <input type="radio"/> 実践に役立つ目標になっているか
内容・方法	研究の内容・方法の妥当性	<input type="radio"/> 研究の内容・方法の構想は適切であるか (研究者の基本的な考え方、研究の内容・方法等) <input type="radio"/> 子供の成長への願いや、研究で用いる用語に対する考えが絞り込んであるか
仮説	研究仮説の設定と妥当性	<input type="radio"/> 仮説は焦点化し、具体化してあるか <input type="radio"/> 文献や子供の実態を把握し、仮説設定の根拠付けがしてあるか <input type="radio"/> 仮説の構成要素を分析し、検証に耐えうるものであるか
検証計画	検証計画の設定と妥当性	<input type="radio"/> 何を検証するのか、検証目標の分析や観点が明確なものになっているか <input type="radio"/> 検証資料の収集場面や収集のための方法が具体化してあるか <input type="radio"/> 検証資料の処理やその解釈の方法が明確になっているか
実践	研究実践過程の妥当性	<input type="radio"/> 子供をいかすという配慮の下に進めたか <input type="radio"/> 研究の内容と方法を適切に組み合わせて進めたか <input type="radio"/> 研究経過を常に評価しながら目標に即して進めたか <input type="radio"/> 検証のための資料収集の方法や用具が整えられ、正確に記録してあるか
研究のまとめ	研究成果の妥当性	<input type="radio"/> 子供がどのような条件で、どのように変容したかを明確につかんだか <input type="radio"/> 仮説に見合った考察や、事実と推測とを区別した考察を行ったか <input type="radio"/> 解明された点や残された問題点が明らかになったか <input type="radio"/> 研究記録のまとめ方が適切であったか <input type="radio"/> 結果は、今後の教育実践にとって、どのような価値をもっているかが明らかにされたか
発展	研究成果活用の妥当性	<input type="radio"/> 研究成果の活用に向かって努力を行ったか <input type="radio"/> 研究成果の上に立って、研究を継続・発展するための方向付けを行ったか

まり、研究の計画・実施・成果のまとめという一連の過程における評価を重視し、目標や計画を確認しながら、研究を進めていくことが重要である。そのためには、研究の過程において、その推進状況を常に評価し、修正していく必要がある。(p.47表7参照)

(2) 研究過程における評価の記録

問題点を把握し、
今後に役立てる

研究過程における評価の方法には、自由記述法、評定尺度法など様々なものがある。表7の観点に基づき、これらの方法を用いて行った評価は、それを整理し記録しておくことが大切である(表8参照)。それは、整理の段階で、研究を推進していく上での問題点や今後の方向などが明確になるからである。

表8 研究過程における評価表(例)

評価の観点	評価尺度	問題点の把握	改善点
子供の実態から 把握した……	1 2 3 4 5		
教師の実践の…	1 2 3 4 5		

3 研究の発展

(1) 研究成果を実践に生かし、成果や課題の深化・拡充を図る

研究成果を実践に生かすことにより、その研究の意義が生まれる。図12は、研究成果を実践に生かす過程を示したものである。

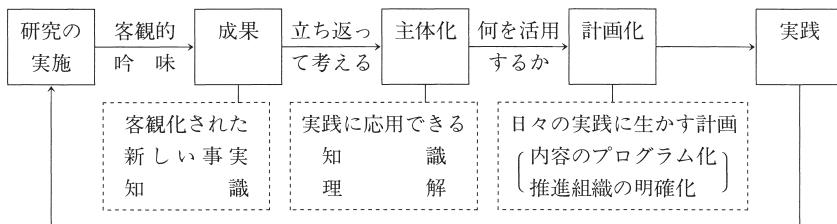


図12 研究成果を実践に生かす過程

(2) 研究成果を実践に生かすための留意点

研究成果を実践に生かすには、次の点に心がける必要がある。

- 教師一人一人が、研究成果を実践に生かすよう意識し、主体的に活動する
- 研究の過程においても、絶えず研究が教育実践に役立つかどうかを吟味しながら進める

(3) 研究成果を実践に生かす方法

研究成果を実践に生かすためには、研究で明らかになった事柄や有効であった点を、自校や自己の実践上の課題解決に結び付けて活用することが大切である。表

表9 研究成果を実践に生かす方法

観 点	生 か す 方 法
組織上の面から	<ul style="list-style-type: none"> ・実践で効果があったものについては、学年・教科などで相互に活用例を交換し合う
内容上の面から	<ul style="list-style-type: none"> ・自校や自己の実践を見直し、弱点や欠点の補充、強化策の示唆を得るために活用する ・教育活動を充実する目的・内容・方法などの示唆を得るために活用する
記録上の面から	<ul style="list-style-type: none"> ・研究の成果は、記録にまとめて、活用が図られるようにする ・個人研究の成果も記録にまとめて、活用が図られるようにする ・研究主任などを中心に「研究だより」「研究情報」を作成し、活用が図られるようにする ・研究記録や研究資料は図書室や職員室などに常備し、いつでも、だれでも利用できるようにする ・各種資料・授業研究会の記録などはセットにして保存し、活用が図られるようにする

9は、研究成果を実践に生かす方法を観点別にまとめたものである。

4 研究の累積と発展課題

(1) 研究の累積の必要性

絶えざる研究心と情熱に支えられた研究の積み上げ

実践的研究は、研究において明らかになった点や、実践に役立つ点を明確にする。しかし、一方では、追究しきれなかった点が残ったり、新たに課題が生じたりする。

したがって、教育実践上の課題がある限り、学校や教師は絶えざる研究心と情熱をもって研究を積み上げていくことが必要である。図13は、学校における教育研究の累積の手順を示した例である。

このように研究の過程において、常に評価を行い、軌道修正しながら研究を積み上げていくことが大切である。

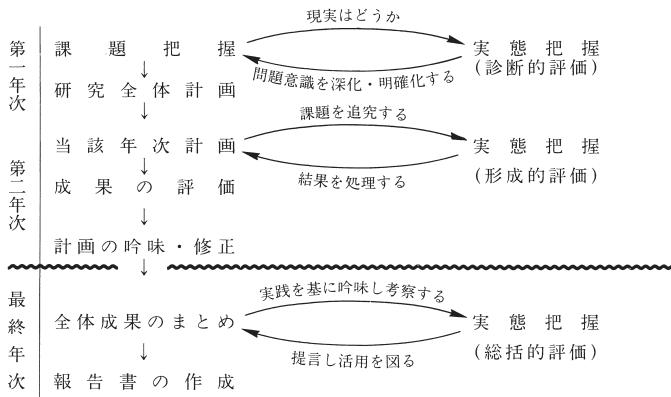


図13 学校における教育研究累積の手順（『現代教育評価論』梶田叡一より）

(2) 発展課題の把握

研究の結果、新たに生じた課題を的確に把握し、研究を積み上げていくためには、常に次の視点で課題をとらえることが大切である。

- 重要性：学校や子供のためにその解決が大きな価値あるものであるか
- 緊急性：学校や子供のためにすぐに解決しなければならないものか
- 課題性：学校の教育目標などとの関連で今日的課題をもつものか
- 社会性：社会がその解決を求めているものか
- 地域性：学校を取り巻く地域の課題として、特に取り上げる必要性のあるものか
- 可能性：研究にかけられる時間からみて、特に取り上げる可能性のあるものか

5 論文の作成

(1) 論文作成の重要性

論文は、研究の結果をまとめ、成果と課題を確認するとともに、対外的に意見や助言を仰ぐためのものである。研究者自身が論文をまとめることによって、研究のポイントを再確認し、研究をより確かなものにしていくことができる。また、論文を媒体にして、他者の批判や意見を聞くことによって、研究をより前進させることができる。

(2) 論文の備えるべき条件

論文は、右記のような条件を備えることで、提言力をもつ。そのために大切なことは、論旨を明確な論の展開の下、何のために、何をどのように解明したかがよく分かるように書き表すことである。それには、論文の構想・叙述を工夫することが必要である。

- | | | | |
|---------------------------|---------------------------|---------------------------|---------------------------|
| <input type="radio"/> 価値 | <input type="radio"/> 独創性 | <input type="radio"/> 一般性 | <input type="radio"/> 実証性 |
| <input type="radio"/> 実用性 | <input type="radio"/> 発展性 | <input type="radio"/> 論理性 | <input type="radio"/> 平易性 |

(3) 論文の構想と叙述上の留意点

ア 正確で分かりやすいこと

論文は、問題をどのようにとらえ、どのように追究し、どのような結果が認められたかという、研究の全体が「正確に分かりやすく」述べられていることが大切である。文章の巧拙よりも、筋道立てて正確に記述することを主眼にすることが大切である。

論文は、研究の内容、方法、強調点の置き方、読み手への配慮など様々な条件を考慮して書かれる。形式だけが整ったものは説得力がなく、それを無視したものは理解しにくい。研究の中身に応じた形式と表現で「読んだ人が分かる」ように工夫する必要がある。

イ 構想を練ること

構想に当たっては、次の手順を踏む。

- (ア) 研究の意図を明確に自覚し、「何を言おうとするか」「それをどのように提示するか」について吟味し、論文で表す内容の範囲をおさえる。
(イ) 範囲を決めたら、諸々の素材を踏まえ、中心点をどこにおくかを確認し、それと関連付けて組立てを考え、構想メモを作る。

実践的研究の場合、諸種のデータやそれらから得られた新たな認識が集積される。それらを、適切な箇所に配置することによって論文の説得力が高まる。そのため、どの材料をどのように内付けして叙述すると生きた論文になるか検討し、思い切った取捨選択と重点化を図ることが実証性を高めることになる。

表10 仮説を立て検証する研究における論文の形式（例）

組立て	記述内容と留意点
①研究主題	副題を含めて、研究内容が想定できるような簡潔な表現にする
②概要	どのような研究内容なのか、研究でねらおうとしていること、研究問題の範囲、研究の方法、研究の結果などについて概略を述べる
③研究主題設定の理由	子供の実態や教科の本質等を踏まえて、研究を取り上げた理由、主題のもつている価値等について明快に述べる この前に、学校の概要について項立てて述べる場合もある
④研究の目標	研究で明らかにしたいこと、追究すべきことについて述べる
⑤研究の仮説 (研究の見通し)	検証などによって明らかにしようとする見通し（基本的な考え方や手だて等）について述べる
⑥研究の計画と方法	研究の計画や方法について表などを使って簡潔に示す
⑦研究の内容	研究の内容と実施の様子（検証のプロセスの内容等）について具体的に述べる
⑧結果と考察	事実—考察という観点で述べる。取組によって得られた資料をこのように分析した結果、このような事実が分かったというようく研究で取り上げた内容やその取組によって生じた事実について考察する
⑨研究のまとめ	研究で解明された点を明確に述べる これまでの研究結果との相違点や新しい事実を明確にする 研究で残された課題について、研究の内容や方法などから明確に述べる
⑩資料・文献	研究に引用した資料・文献を挙げる。引用文献と参考文献を区別して記述する

ウ 明快な叙述

論文は、論旨、論拠が明確で、表現が平易であるとよい。いつも、構想モデルを手がかりにし、文法上、論理の通った文を用いてまとめていく。明快な叙述の条件として留意したい点は次のとおりである。

(ア) 段落の充実

一段落に一つの小主題があるようにすれば、段落の内容が明確になり、全体の構造もしっかりとする。段落内では、叙述の中心を初めと終わりに置くなど読みやすさを工夫する。具体例だけでは論は深まらないし、抽象的な論の展開だけでは内容がつかめない。具体化と抽象化を適宜工夫しながら論を進めていく。

- ・論の中核を構成している各部分について、適宜に詳しく検討、論証することも説得力を強める。
- ・段落構成は、絶えず研究主題に立ち返れるよう工夫する。

(イ) 読みやすさのために

- ・文や段落の長さは短くまとめる。
- ・主語・述語など文の関係、語句の係り受けに乱れがないようにするとともに、指示語、接続語の適切な用い方に留意する。
- ・読み手の理解を助けるために、図表、さし絵、写真、数式などを工夫して用いる。
- ・用語は、平易で一般的なものを用いる。専門用語も読み手に配慮して使用を抑制し、必要な場合は明快な概念規定の下に用いることが望ましい。

(ウ) 推敲^{こう}

主題が筋道よく展開されたか、文法、文字、仮名遣いの誤りや誤解されそうな表現はないか、などについて重ねて推敲することが大切である。また、自分に都合のよい事例だけを挙げて逆の例を省いたり、他の人の論を借りてきて自分の考えとして論を進めたりするようなことがあってはならない。

参考文献

『発想法』	川喜田二郎	中央公論社 (1967)
『学校のための教育研究法』	藤原藤祐	ぎょうせい (1989)
『スクールリーダーのための学校改善ストラテジー』		
『新訂校内研究のすすめ方』	中留武昭 福岡県教育研究所連盟編	東洋館出版社 (1991) 第一法規 (1991)

『教育実践の原理』	高久清吉	協同出版 (1970)
『教育実践学』	高久清吉	教育出版 (1990)
『自己の研修に生かす校内研修』	新谷敏夫編	教育開発研究 (1976)
『現場のための教育研究法』	小野寺明男	新光閣書 (1967)
『教育学入門（上）』	村井実	講談社 (1976)
『校内研究事典』	奥田真丈監修	ぎょうせい (1984)
『わかる授業の心理学』	北尾倫彦・速水敏彦	有斐閣 (1986)
『個性を育む』	日俣周二・牧田章編著	東洋館出版社 (1992)
『個性の発達と心理学』	高野清純編	教育出版 (1989)
『教育評価（第2版）』	梶田叡一	有斐閣 (1992)
『教育研究のすすめ方・論文のまとめ方』		
『個を生かす教育の実践』	福岡県教育研究所連盟編	第一法規 (1981)
『子どもは創る（上・下）』	全国教育研究所連盟編	ぎょうせい (1992)
『教育研究法』	全国教育研究所連盟編	ぎょうせい (1989)
『質的研究法による授業研究』	宗像誠也	新評論社 (1954)
『〈社会〉を読み解く技法』	平山満義編	北大路書房 (1997)
『数学的な考え方の具体化』	北澤毅・古賀正義編著	福村出版 (1997)
	片桐重男	明治図書出版 (1988)

第2章 実践的研究の具体的な進め方

第1節 授業研究

I 授業研究の意義

教師の指導力の向上を図る

子供一人一人が、自ら学ぶ喜びを味わい、楽しく主体的に活動できる授業の実現に向け、教師は、日々学習指導の改善・充実に努力することが大切である。

授業研究の意義として、次のようなことが挙げられる。

一つは、授業改善の方策を導き出し、学年・学級経営、教科経営の改善・充実を図ることである。

もう一つは、教師が子供一人一人の成長への願いをもって、自分自身の授業や他の教師の授業を対象に研究することにより、授業改善を図り、授業設計・実施・評価についての力量を身に付けていくことである。

このように授業研究は、教師の進める研究において、重要な役割をもっている。

II 授業研究の手順

本書では、仮説を立て検証する場合の研究方法を基本に述べる。授業研究は、図1の手順を踏んで進められる。

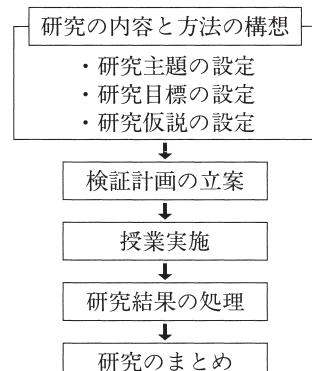


図1 授業研究の手順

1 研究の内容と方法の構想

研究の特徴を生み出す

研究の内容と方法の構想とは、子供の実態と各教科等の目標に基づいて、目指す子供を設定し、その実現のために、目指す子供像、育てる場、手立てなどを考えることである。その際、子供の立場に立って考えることが大切である。この構想を十分に練っていくことにより、研究者の子供の成長への願いが明確になり、研究の特徴が生まれてくる。

図2は、研究の内容と方法の構想の手順を示したものである。

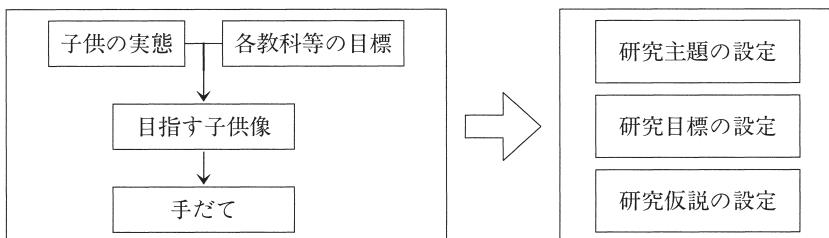


図2 研究の内容と方法の構想の手順

(1) 各教科等の目指す子供の設定

子供の成長への願いの明確化

最初に構想しなくてはならないものは、各教科等で、どのような資質や能力を育成するのかという、目指す子供である。一般的には各教科等で研究を進める場合、目指す子供は図3のように、子供の実態と研究対象の分野・領域の目標から設定するのである。



図3 目指す子供像の設定

次に、研究者として目指す子供をどのようにとらえているか明確にするために、目指す子供像を描く。目指す子供像とは、研究対象の分野・領域の目標に基づき育成できる資質や能力を分析し、その資質や能力を身に付けた子供はどのような子供であるか、研究者の考えを具体化したものである。

のことについて、小学校社会科3・4年：研究主題「地域社会の一員としての自覚を促す社会科指導の工夫—出会いの活動を取り入れて—」(p.159 実践例1)での目指す子供「地域社会の一員としての自覚をもつ子供」を例にして述べる。

地域学習を中心とした小学校3・4年の社会科学習において、子供たちの地域に対する思いや願い、地域学習を進めていく上での子供のよさなどの実態をアンケート法や観察法等でとらえた。すると「もっと住みよい町にしたい」「自然を大事にしたい」「地域をきれいにしたい」などの思いや願いをもっていることや、見学などの体験的な学習で、進んで疑問に感じたことを解決していくこうとする態度が身に付いていることが分かった。地域学習を中心とした小学校3・4年の社会科学習において、学習指導要領では、「地域社会の一員としての自覚をもつようとする」が目標(1)に挙げられている。このことから、子供たちの地域に対する思いや願い、学習を進める上での実態と目標とを踏まえて目指す子供を設定した。

次に、「地域社会の一員としての自覚をもつ子供」について、研究者としてのとらえ方を具体的にする必要がある。そこで「地域社会の一員としての自覚をもつ子供」とは、『自分たちが住んでいる地域社会の構成員として、よりよい地域社会を目指して地域の人々と共に生きていくこうとする子供』であるととらえ、問題解決的な学習を通して、段階を踏んで育成していくことができると考えた。その段階とは、図4のように、「地域の人々と心のつながりをもつことができる子供」「人の生き方に地域社会とのつながりを感じることができる子供」「自分がどんな努力や工夫をすれば地域社会の課題を克服し、よりよい地域社会が実現できるのか考え、生活の改善点を見いだすことができる子供」「自分たちが考えた生活上の改善が、よりよい地域社会づくりにつながることに確信をもって、地域社会へ参画しようとすることができる子供」である。

このような考え方基に、目指す子供を「地域社会の一員としての自覚をもつ子供」として設定したのである。

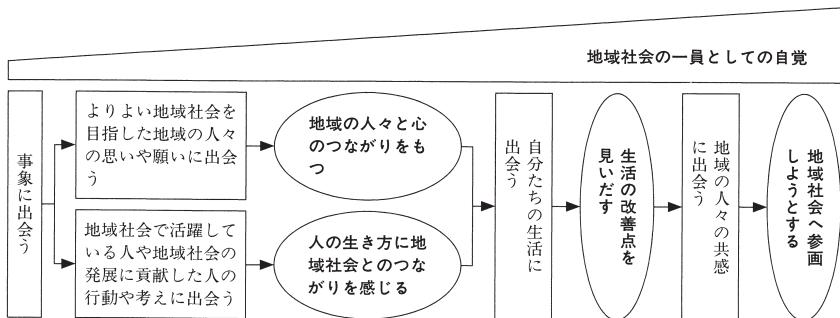


図4 研究の基本構想図

(2) 手だての構想

手だての構想は、学習指導の改善に関する授業研究の中核になるものであり、研究の特徴を表すものもある。よって、研究の手だての構想においては次のようなことが大切である。

ア 目指す子供にかかわる実態把握

様々な方法での実態把握

研究を進める上で、実態把握は、欠かすことのできないことである。なぜならば、授業研究は、実態把握でとらえた子供の姿を、手だての投入によって目指す子供に育成できるであろうという仮説をもって進めるからである。

この実態把握は、各教科等の分野・領域で育成したい資質や能力からとらえていきたい。

実態把握を行うに当たっては、これまでに目指す子供にかかわる資質や能力がどのように身に付いているかの視点が大切である。方法として、教師の観察が中心に行われることが多く見られるが、アンケート法、テスト法や面接法などを組み合わせる必要がある。

例えば、目指す子供の「態度面」から実態把握を行う場合、「指示待ちが多く、自分から取り組めない」「おしゃべりが多く、集中して取り組めない」となど現象のみで判断することが多く見られる。「なぜ、指示がなくては動けないのか」、「なぜ、集中できないのか」などの要因をアンケート法や面接法などからとらえないと、有効な手だてが講じられない。

イ 実態把握に基づく指導方法の具体化

子供の実態から指導の在り方をとらえ直す

教師の間で「うちの学級は積極的に発表する子供が少なくて困る」「しっかり前を向いて私の話を聞いてくれない子供が多くて困る」などの話を耳にすることがある。とかく、子供に原因があると思いがちだが、この事実を教師の指導の在り方から、とらえ直してみることこそが必要である。

例えば、「積極的に発表しないのは、教師の発問構成が悪く、理解できていないのかもしれない」とか、「子供が自分で考えて答えを出そうとしている」とか

たのに、じっくり考える時間や場を用意していなかったのではないか」などと振り返ってみるのである。

このように、目指す子供に対する実態把握と実態把握に基づく指導の在り方をとらえ直すことにより手だてを構想するのである。

構想した手だてについて、前述した小学校社会科3・4年の実践例の手だてに当たる出会いの活動を例として示す。

この研究では、子供の興味・関心を持続できるようにするために、問題解決的な学習を取り入れて、直接地域の諸事象や地域の人々と繰り返しかかわる出会いの活動が有効であると考えた。

この出会いの活動を通して、地域の人々の思いや願い、努力や工夫などを自ら具体的にとらえることができ、地域の人々の生き方を学ぶことができる。さらに、実際に見学したり、直接話を聞いたりすることで、地域や地域の人を身近に感じ、自分も地域の人々とともに地域社会をつくり上げていける存在であることを自覚することができる。図5は、構想した手だてを示したものである。(p.162参照)

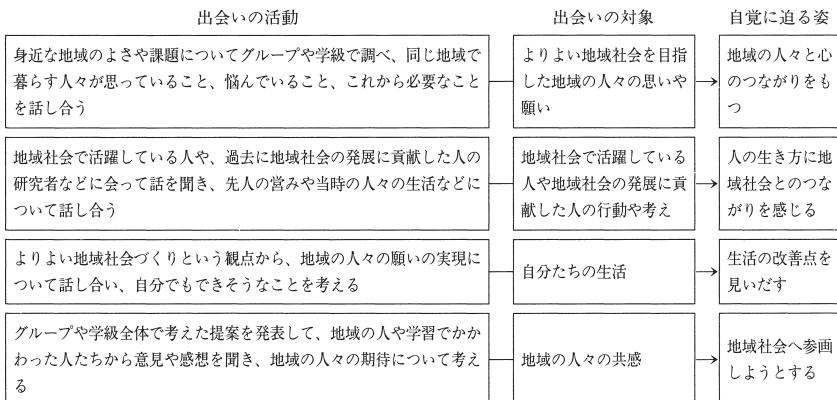


図5 構想した手だて

(3) 研究主題の設定

資質や能力と手だての明確化

研究主題を設定することは、研究者が、目指す子供の実現に向けて各教科等で育成しようとする資質や能力を、どのような手だてで身に付けていくか明確に示すことである。

前述した小学校社会科3・4年の実践例では、研究主題を、次のように表現している。

————研究主題————
地域社会の一員としての自覚を促す社会科指導の工夫
—出会いの活動を取り入れて—

- 目的 地域社会の一員としての自覚をもつことができる子供の育成
- 内容 社会科の指導方法の工夫
- 方法 出会いの活動

(4) 研究目標の設定

目指す子供に迫る
観点を示す

研究目標は、研究対象において、育成したい資質や能力が身に付くように、手だての有効性を検証することを明示したものである。言い換えると、研究の具体的な方向性や目的（目指す子供）に迫る観点を示すものである。したがって、研究目標を設定することにより、目指す子供の実現に向けた、手だてや検証計画がより具体的なものになる。

研究目標の具体例を前述した、小学校社会科3・4年の実践例で示すと次のようである。

————研究目標————
地域社会の一員としての自覚をもつ子供を育成するために、身近な社会的事象を対象にした指導において、問題解決的な学習の過程に出会いの活動を取り入れたことの有効性を明らかにする。

① 目指す子供 ② 対象の分野・領域 ③ 手だて

(5) 研究仮説の設定

手だての投入場面
や内容の具体化

研究仮説の設定とは、各教科等で目指す子供の実現に向け、手だての投入場面や内容などを具体化し、見通しをもつことである。

研究仮説を設定することには、次のような意義がある。

- 手だてをどのような場面で、どのように投入することにより、どのような子供の変容を期待するのか具体化することで、研究の特徴を明確にすることができる
- 手だての構想により、授業実践を具体化する方向が明らかにでき、検証のための授業実践の構想が確かなものとなる
- 手だての構想により、検証計画の立案において、検証の観点、場面・方法を明確にすることができます

また、設定する際には、次のことに留意する必要がある。

- 身に付けさせたい資質や能力を構造化し、投入する手だての組立てを考える
- どのような内容を、どの場に、どのように投入すると、どのような変容が期待できるのかを具体化し、分かりやすく表現する

一般的には、次のように表現される。

「〇〇において、〇〇することによって、〇〇になるであろう。」

(場の限定) (手だて) (変容への願い・目指す子供像)

次に示すのは、小学校国語科（p.166実践例2）の研究主題と研究仮説である。

研究主題

喜んで書く子を育てる書くことの指導

—取材、構想過程に「まんがシート」を取り入れて—

研究仮説

- 1 取材の過程で、印象に残った場面を「まんがシート」に書き留める活動を取り入れれば、材料を集める楽しさを感じながら伝えたいことの中心を焦点化することができるであろう。
- 2 構想の過程で、書き留めた「まんがシート」の順序を入れ替えて文を組み立てる活動を取り入れれば、場面を組み立てて構成するおもしろさを感じながら段落と段落の続き方を工夫した文章構成を考えられるであろう。

2 検証計画の立案

場面・観点・方法を
計画

検証は、研究仮説が有効であるかどうかを判断するために行うものである。授業研究においては、授業実践を通して検証が行われる。したがって、検証は、授業実践において、計画的・効果的に行われるよう研究で明らかにしたい事柄を、どのような場面において、どのような観点から、どのような方法で検証するのかを計画的に行う必要がある。

検証計画を立案するに当たっては、次のような手順を踏むことが大切である。

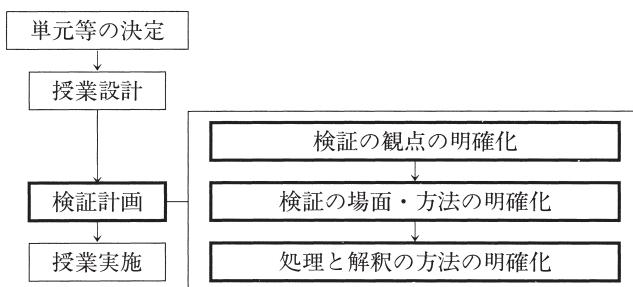


図 6 検証計画の立案の手順

(1) 検証の観点の明確化

検証の観点の明確化とは、研究仮説で明らかにしたい事柄を、授業実践の単元等のレベルに具体化した授業仮説（p.78参照）にすることである。

授業研究における検証は、手だてによって得られた子供の変容をとらえることである。子供の変容をとらえる観点は、関心・意欲・態度、思考・判断、技能・表現、知識・理解などの資質や能力である。

(2) 検証の場面・方法の明確化

検証の場面・方法の明確化とは、研究仮説が、授業実践のどの過程のどのような場面に位置付くのか具体化し、どのような方法を用いて検証するかということを明らかにすることである。このことによって、検証計画をより明確にし、見通しをもって研究を進めていくことができる。

次に、それぞれの観点ごとに、検証の視点と方法について述べる。

ア 関心・意欲・態度の検証の視点と方法

(ア) 検証の視点

研究主題は「学ぶ意欲を高める学習指導の在り方に関する研究」といった意欲や態度に視点を当てたものが多い。しかし、それらの研究結果の処理においては、学ぶ意欲が高まったかどうかを確かめていないものがある。それは、学ぶ意欲が高まったときの子供の姿を十分に具体化していないことに起因していることが多い。

すなわち、このような情意面の変容を検証する場合、学ぶ意欲や主体的な態度などが身に付いた状況を子供の具体的な姿として想定し、質問項目やチェック項目を設定して、調査や観察が行われなければならないことを示している。

(イ) 検証の方法

関心・意欲・態度をとらえる方法としては、評定尺度法なども加味した質問紙調査法や、チェックリストを用いた観察法などを採用する場合が多い。

次に、このような検証を行う場合、留意すべき主な点を挙げる。

- 学習活動の流れに沿って、関心・意欲・態度の現れをとらえる
- 学習の導入では対象へのかかわり、展開では意欲的な追究活動、終末では自己発見につながる態度というように、学習の過程に即して評価の観点を明確にしておく
- 発言や挙手の回数のように数量的な面だけでなく、一人一人の質的な面の変化を読み取るようにする。そのためには、自己評価を取り入れ、その子供なりのよさをとらえる
- 一時的な変化ではなく、長期にわたって観察し、過去の学習状況との比較や恒常的な現れに着目してとらえる

関心・意欲・態度を考察する場合には、調査の選択項目ごとにその選択人數を集計して、表やグラフに表し、その変容の状況をとらえてみる必要もある。抽出児の変容を知るためにには、抽出児それぞれのプロフィールなどを作

成して考えることも必要である。

イ 思考力・判断力の検証の視点と方法

(ア) 検証の視点

思考力・判断力については、学習の過程に沿うという視点が必要である。

次に、科学的思考を学習過程に沿ってとらえた場合の要素を例に挙げる。

○問題を見いだす能力 ○比較・関係付ける能力

○規則性・仕組みをとらえる能力

さらに、それらの要素に即して具体化すると次のような項目が例として挙げられる。

○問題意識 ○予想 ○比較 ○推論 ○推理 ○仮説・モデル

○規則性の発見

思考力・判断力が培われる姿は、一人一人に違いがある。

また、思考力・判断力については、目標として規定されている方向への向上が見られるかどうかを評価するのであるから、当然、一人一人に視点を当て、子供のそれぞれがいかなる判断の下で問題を追究したり、思考活動を行ったりしたかを具体的にとらえ、検証しなければならない。

思考力・判断力を検証するに当たっては、日ごろから上で述べたような要素・項目の観点から、子供をよく観察し、言動の考察やノートの分析などを通して、総合的に検証していくことが大切である。

(イ) 検証の方法

思考力・判断力を検証する場合の代表的な方法として、観察法、作品法、論文体テスト、問題解決テスト等が挙げられる。日常生活の中で、子供たちがどのような問題を発掘し、追究しているか、どのような問題に気付き、自主的に追究活動に取り組んでいるか、問題事項を様々な角度から考えているか、他の人の考え方や見方を取り入れ、自分の考え方を見直し修正しているなどを的確にとらえておくことにより、それぞれの方法が効果的なものになっていく。

また、自己評価を取り入れるなど、一人一人の子供の内面にまで目を向け

て十分な検証をしていきたい。

ウ 技能・表現の検証の視点と方法

(ア) 検証の視点

技能・表現は、思考・判断したことを基に、表現したり行動したりする手段及びその技能ととらえることができる。具体的には、話す・聞く・書く・読む技能、計算技能、図表・資料等を読み取る技能、実験・観察技能、歌唱・演奏技能、描図技能、道具使用技能、運動技能などがある。

技能・表現を検証する視点は、多種多様なものがあり、各教科の特性にも直接かかわってくるので、一概に視点の当て方を論じることはできない。技能・表現の内容によって、個別に視点を設定することが必要である。

(イ) 検証の方法

目標に即して、観察の要点あるいは評価の観点及び評価の規準を明確にもち、各教科の特性や内容を踏まえた具体的な基準を設けて検証する。作業場面や実験・観察場面、作品の成果、発表場面、レポート作成場面など、それぞれの場で一人一人の状態をとらえる方法がある。子供主体ということを考えると、自己評価や相互評価を活用することが大切である。

エ 知識・理解の検証の視点と方法

(ア) 検証の視点

知識・理解の関係は、図7のようになっている。すなわち知識は理解と記憶の融合体である。しかし、知識の中には、記憶面の強いもの（読み字、書き順、 $a \times b$ を ab と書くなど）と、理解面の強いもの（学習事項の意味、意義、相関関係など）がある。また、理解には、広さと深さがあり、記憶にも広さと確かさなどが考えられる。

学力には知識・能力・態度という側面がある。新たな課題の解決を目指して考えたり、判断したりすることに

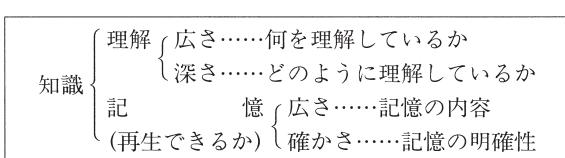


図7 知識・理解・記憶の関係

役立つように、内容などについて一人一人がどのように理解しているかが大切なことがある。画一的な知識の量をとらえるようあってはならない。

(1) 検証の方法

検証の方法は、客観テストのほかに、観察法が主なものとして挙げられる。ほかには、問答法、レポート法などがある。ここでは、知識・理解の結果のみをとらえるのではなく、理解の仕方や方法、深さなどもとらえることが大切である。

(3) 処理と解釈の方法の明確化

処理と解釈の方法の明確化とは、観察や録画と逐語記録等で得られた資料を、表にまとめたりして処理を行うなど検証の観点から分析し考察する方法を明らかにすることである。

小学校社会科4年：単元「多々良の大地をひらく」の授業実践における検証計画の例を示す。

表1 検証計画（例）

研究仮説	検証の観点	検証の方法	処理と解釈
よりよい地域社会を目指した地域の人々の思いや願いに出会う活動を行えば、地域の人々は自分と共通する生活上の思いや願いをもっていることに気付き、心のつながりをもつだろう。	多々良沼や松林一帯のよさや課題について調べ、その地域のよりよい活用を目指した地域の人々の思いや願いに出会う活動を行ったことは、地域の人々と心のつながりをもつのに有効であったか。	学習活動の観察 ノートやワークシートの内容分析	手だての投入時における抽出児の観察記録と抽出児の学習ノートを基に分析する。

3 授業設計

(1) 授業設計の意義

子供の側に立った
授業の展開

授業設計とは、子供の実態に基づいて、単元の目標・評価規準を設定し、設定された目標を子供が達成できるように、学習過程・教材・活動・評価方法などを選択し、順序付ける

とともに、授業展開の状況を試行・修正しながら指導案として作成することである。さらに、作成した指導案を基に教材・教具などの授業の諸準備を行うことである。

このように授業設計を考えることにより、設計・実施・評価のサイクルとして授業をとらえることができ、より科学的な実践を行うことができる。そして、教師の授業設計力を高めていくとともに、子供の変容を踏まえながら授業実践を行うことで、子供の側に立った授業を展開することができるようになる。

学習指導では、一つの単元において、関心・意欲・態度、思考・判断、技能・表現、知識・理解等の資質や能力の育成を目指すので、授業設計を行う場合、単元レベルの授業設計を基本とすることが大切である。

次に、教科における単元レベルの授業設計を基に、授業設計の流れや具体的な方法、その留意点について述べる。

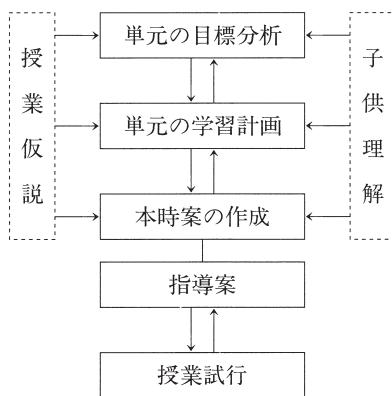


図 8 授業設計の流れ

(2) 子供理解

子供のよさや可能性を感じ取る姿勢

授業設計を考えるには、常に子供理解を基盤とすることが大切である。なぜなら、学習の主体は子供であり、学習指導は、子供一人一人を深く理解し、学習活動を支援することにあるからである。

子供理解のためには、まず子供一人一人に対する愛情ある共感的な期待を込めて、そのよさや可能性などを感じ取るようにすることを基本に踏まえることが必要である。また、子供の思考や判断、表現などを、その子のよさとしてとらえる姿勢をもつことが大切である。

また、子供理解を深めるためには、各教科においては、四つの「観点別学習状況」の「評価の観点」から設定された「評価規準」に照らして、その目標や内容の実現状況を把握することが必要である。さらに、子供一人一人の興味・関心、意欲、好み、考え方、様々な能力、理解の仕方などについて、例えば、学習過程に視点を当てるなどして子供の実態を把握する必要がある。

次に、学習の流れに沿ってよさをとらえる場合の観点を例示する。

① 自ら課題を見付け、取り組もうとするよさ

自分なりの思いや願い、疑問をもって課題を見付け、課題解決に向けて自主的、主体的に取り組もうとする意欲や態度

② 課題解決に向けてのよさ

自ら目標をもち、課題解決に向けて、何を、どのように、何のためにやりたいのかという思いや願い

③ 課題解決に生きて働くよさ

課題解決に生きて働くその子なりの思考のパターンや判断の基準、表現力、知識や技能など

④ 身に付けた力を進んで生かそうとするよさ

新たな課題を解決する中で進んで生かしていこうとする意欲や態度

以上のようなよさを、日常の実践を通して次の方法でとらえることができる。

ア 授業前

(ア) 他の授業時間における様子（観察）

(イ) 休み時間等における様子（観察）

(ウ) 家庭等での様子（アンケートなど）

(エ) 興味・関心、既存の知識や経験（アンケートなど）

イ 授業中

- (ア) 取組の様子（観察）
- (イ) 発言やつぶやき（観察）
- (ウ) ノートや作品等（観察）

ウ 授業後

- (ア) ノートや作品等の分析
- (イ) 自己評価・他者評価（アンケートなど）
- (ウ) 質問等

(3) 単元の目標分析と評価規準の設定

ア 単元の目標分析の意義

目標相互の構造の明確化

単元の目標分析とは、学校の教育目標や学年目標、教科目標を踏まえ、子供の経験、地域社会や家庭の実態などを考慮した上で、資質や能力としての目標を、単元レベルにおいて精選し構造化することである。

単元の目標分析を行うことにより、単元における基礎目標、中核目標、発展目標、前提目標と、その目標相互の構造を明確にすることができます（p.71 参照）。さらに、単元で育成したい資質や能力についての評価規準をはっきりさせることができるので、どのような活動を学習過程のどこに位置付けるかなど、育成したい能力等を形成過程として目標に位置付けることができる。

イ 単元の目標分析の観点

四つの観点から基礎・基本を分析

単元の目標分析を行う場合、その単元において獲得されるべき基礎・基本の洗い出しが必要である。これまでの教育においては、基礎・基本として、知識や技能を中心とらえる傾向が見られたが、これからの教育は、生きる力として育成する資質や能力を基礎・基本としてとらえることが肝要である。

このように基礎・基本をとらえたとき、「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」などの資質や能力がその中核になるといえる。そこで、基礎・基本を次のような四つの観点から分析する必要がある。

○ 関心・意欲・態度

その単元で育成しようとする関心・意欲・態度に関する目標で、学習することへの関心をもち、親しみをもって進んで学ぼうとしたり、日常生活に生かそうとしたりするなど、その方向に向かっての高まりや深まりが期待される向上目標や体験目標などが主なものである。

○ 思考・判断

その単元での課題や問題発見、比較、関連、結果の考察、処理など問題解決過程における子供の思考操作などで、筋道を立てて考えたり、分析的、総合的に判断して課題を解決したりすることに関する向上目標や体験目標である。

○ 技能・表現

考え、判断したことを基にして、その単元で学習する操作や手続き等の身に付けるべき表現、行動などの技能としての目標で、目的に応じて発揮したり習熟したりすべき達成目標である。

○ 知識・理解

その単元での基礎的概念に関する目標で、相互の関係、規則性、性質など

表2 目標分析表（例）(p.188実践例5参照)

学習事項	関心・意欲・態度	数学的な考え方	表現・処理	知識・理解
事象の中から x と y の関数が $y=ax^2$ で表されるものを見つけだす。	事象の中から伴つて変わる二つの数量を見つけだそうとしている。	関数 $y=ax^2$ を他の関数と区別することができる。	事象の中から伴つて変わる二つの数量を見つけだすことができる。	関数 $y=ax^2$ は二次関数の特別な場合であることが分かる。
関数 $y=ax^2$ のグラフをかき、その特徴を調べる。	関数 $y=ax^2$ のグラフをかき、その特徴を調べようとしている。	一次関数との比較で、関数 $y=ax^2$ のグラフの特徴をとらえることができる。	x と y の対応表を基に、関数 $y=ax^2$ のグラフをかくことができる。	関数 $y=ax^2$ のグラフの特徴を理解している。
関数 $y=ax^2$ の値の変化のようすを調べる。	関数 $y=ax^2$ の値の変化のようすをグラフを通して調べようとしている。	一次関数の場合と比べて、変化のようすをとらえることができる。	グラフから変化のようすを読み取ることができる。	一次関数の場合と比べて関数 $y=ax^2$ の値の変化のようすを理解している。

について理解し、考えたり、判断したりするなどの基となる知識として身に付けるべき達成目標である。

目標分析は、まず目標の洗い出しから始まる。目標分析の一つの例として、四つの観点を横軸に、学習事項を縦軸にとって、二次元マトリックスをつくり、マトリックスの中に、単元で考えられる目標を書き入れていく方法をとることがある。これは、その単元の目標全体に目配りをし、大切な目標を落とさず押さえるという意味で目標分析の最も基礎的な作業といえる。

表2は、中学校数学科3年：単元「関数」における目標分析表の例である。

ウ 単元の目標の精選と構造化

単元の中核目標の決定 洗い出された目標群全体の中で、何が前提目標であ

り、何が基礎目標、中核目標、発展目標であるか見分け、目標相互の関係を構造化することが必要である。ここでは、特に単元の重要な目標として考えられる中核目標を決定することが大切である。その手順について『教育方法の基礎（小学校版）』（文部省）に書かれている方法を基に述べる。

- ① その単元で最終的に実現されなければならない「中核目標」を目標群全体の中から選ぶ
- ② 中核目標を支える「基礎目標」を、最終的な学習の中に実現した際における相互関係を想定して構造化してみる。中核目標と必然的に関係のある目標のみに絞ることが極めて大切である
- ③ 既習学習の中で、中核目標に向かって学習を進めていく上で不可欠であり、土台となるものを、「前提目標」として位置付ける
- ④ この単元で必ずしも達成しなければならない目標ではないが、できれば何とかそこまで深化・発展させたいというものがあれば「発展目標」として設定する

以上のような方法で設定してきた単元の目標の文末表現は、「……ことを理解させる」などの「……させる」という文末表現から、「……できるようにする」「……関心をもつようになる」などの「……ようにする」の表現

や「……できる」などの文末表現にすることが望ましい。それは、子供が主体的に単元の目標の実現を図るために教師が支援するという意図や、目標実現の状況を大事にするという意図を表す考え方からである。

図9は、p.70の中学校数学科：単元「関数」で洗い出された目標を、精選し構造化した目標構造図の例である。

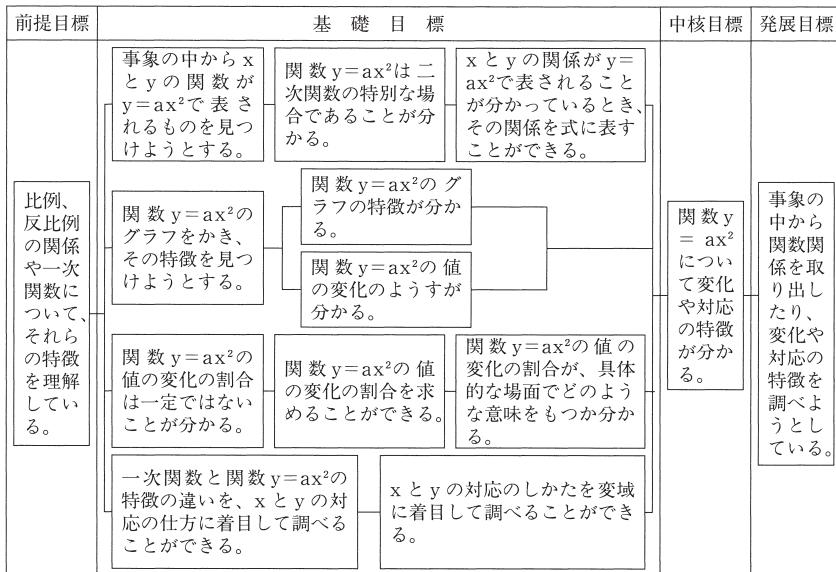


図9 目標構造図

エ 評価規準の設定

目標に即し観点ごとに設定する

学習指導に当たっては、単元の目標に即し、「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」などの観点ごとに単元の評価規準を設定することが必要である。

中学校数学科3年：単元「関数」の目標と評価規準の例を示す。

目標

関数 $y=ax^2$ の変化や対応の特徴を理解し、関数についての理解を深めることができる。

評価規準

- 具体的な事象の中から $y = ax^2$ で表される関数関係を見いだし、それらの間の関係を表、グラフ、式に表して、一次関数と比べながらその特徴を調べようとしている。
(関心・意欲・態度)
- 一次関数と比べながら、関数 $y = ax^2$ の特徴を表、グラフ、式、変化の割合からとらえることができる。
(数学的な考え方)
- $y = ax^2$ で表される関数関係を表、グラフ、式に表したり、変化の割合を求めたりすることができる。
(表現・処理)
- 関数 $y = ax^2$ の特徴や変化の割合の意味を理解している。
(知識・理解)

さらに、授業展開に際して、学習活動を支援するためには、指導計画に評価項目や評価方法を評価計画として設定し位置付けることが必要である。

○ 「評価場面」「評価項目」の設定

設定された単元の評価規準を、指導展開のどこで評価するのか、それにふさわしい「評価場面」を設定する。また、「評価項目」は、指導内容に即し、設定した「評価場面」で、どのような行動特徴を取り上げるかを明確にし、設定する

○ 評価方法の設定

子供一人一人の伸びようとしているよさや可能性を把握するために、教師の観察、子供の発言、ノート、作品の分析や子供の自己評価など多様な方法を工夫し、評価方法を設定する

(4) 単元の指導計画の作成

教師による指導の アウトライン

単元の指導計画は、目指す資質や能力を育成していくために、どのような教材を用いてどのような課題を、どのような活動を通して追究、解決していくのかという教師による指導のアウトラインである。

指導計画の作成に当たっては、次の点に留意することが大切である。

- 研究の内容や方法の中で示された基本的構想を踏まえて、学習過程、主な学習活動、評価計画などを視点に作成する
- 指導目標、指導内容、子供の実態を基に、具体的な指導方法を考える

教材をどうするのか、どのような活動をどのように取り入れるのか、指導形態の工夫、個別指導の在り方、時間数の配分などを明らかにすることが必要である

- 子供の興味・関心などを積極的に生かすことや、子供たちの学習活動に応じた弾力的な展開ができるようにすることが大切である。そのためには、指導計画に、評価項目や評価方法などの評価計画を取り入れておくことが必要である

表3は、小学校社会科4年：単元「多々良の大地をひらく」の指導計画の例である。

表3 単元「多々良の大地をひらく」の指導計画

過程	主な学習活動とねらい	形態	時間	学習への支援	評価項目	
事象に触れる	<ul style="list-style-type: none"> ○自分にとって多々良沼や松林はどんな所か話し合い、自分たちに必要な憩いの場所であることに気付く。 ○50年前の多々良沼と松林の様子をお年寄りから聞き、豊かな自然が残り生活する上で大切な場であったことに気付く。 	全	2	<ul style="list-style-type: none"> ・多々良沼や松林の写真などを提示し、多々良沼や松林のよさがイメージできるようにする。 ・自分たちとお年寄りの多々良沼や松林の使い方を比較し、多々良沼や松林の役割の変化に気付けるようにする。 	多々良沼や松林は地域の人々にとって大切な場所であり、その一帯に残る開発の足跡に気付いている。	↑ 見通し a ↓
多々良沼や松林は今私たちの暮らしにどのように役立っているのだろうか						
	<ul style="list-style-type: none"> ○多々良沼や松林一帯を観察し、人々の開発による土地の様子の変化に気付く。 			<ul style="list-style-type: none"> ・人々の開発の跡が見られるところに観察の重点を置き、例えば「これは何に使っているのか」というような言葉を投げかけ、その場所の役割に目が向くようにする。 		
	<ul style="list-style-type: none"> ○観察をして気付いたことや疑問に思ったことなどについて発表し合い、多々良沼や松林一 	全		<ul style="list-style-type: none"> ・付箋紙と白地図を用意し、どこでどんな事実があるのかを把握できるようにする。 ・疑問が見つからないときは、発表内容をもとに、理由や 	発表内容から疑問を見いだし、調べたいことが見つかっている。	

課題をもつ	帯の様子を知るとともに、調べたいことを考える。	全	2	時期を問い合わせ、開発の事実に目が向くようにする。	
	○前時に考えた「調べたいこと」について話し合い、多々良沼や松林一帯の開発の理由やその時の様子、その場所の役割や仕組みを調べようとする意欲をもつとともに、各自が学習課題をもつ。			<ul style="list-style-type: none"> 一つの予想に対して違う考え方を引き出したり明治時代の多々良沼周辺の地図を提示したりして、疑問点をその場所と人々の生活と結び付けて絞り込んでいくようする。 	前時の疑問を深め、これから調べることを明確にもつてている。
多々良沼や松林一帯の様子を調べてみよう					
事実を知る	○自分やグループの学習課題について、聞き取りや観察・資料などから調べることができる。	課 グ	4	<ul style="list-style-type: none"> 調べ方の手引きを準備し、聞き取りや観察の仕方などの調べ方が身に付くようにする。 調べるための資料が乏しいため、グループごとに適切な調べ方や問い合わせ先を紹介する。 	自分の課題やグループの課題について、観察・聞き取り・資料の読み取りなどをして調べている。
	○自分やグループの学習課題について調べた結果を話し合い、多々良沼や松林一帯は人々によって開発され、暮らしに役立ってきたことや、今も開発が続いていることを知る。	全		<ul style="list-style-type: none"> 必要に応じて補助資料などを提示しながら、教師が補足説明をする。 事象が結び付くように、同じ時代の事象に着目するよう助言し、多々良沼や松林一帯の概要をとらえることができるようする。 	多々良沼や松林一帯の土地の様子の変化をとらえている。
	○当時の人々が多々良沼や松林一帯をどのように活用していたのか話し合い、昔から多々良沼と松林が人々の暮らしを支えていたことに気付くと	全		<ul style="list-style-type: none"> 前時の課題を時代ごとに取り上げ、多くの考え方を引き出しながら予想を絞り込み、さらに追究しようという意欲を高めていくようする。 新たな課題をどのように調べればよいか問い合わせ、地域に詳しい方に話を聞くと 	多々良沼や松林が当時の人々の暮らしに必要な場所であることに気付き、詳しく調べようとしている。

事実の意味がわかる	ともに、さらに調べようとする意欲をもつ。		よいことに目が向くようになる。		
	○大谷休泊に詳しい郷土史家や多々良沼土地改良区の関係者の話を聞き、それぞれの時代に、先人が、いろいろな努力や工夫を積み重ねて自分たちの住む地域を開発し、暮らしを豊かにしてきたことがわかる。	全 4	<ul style="list-style-type: none"> ・大谷休泊については、その人柄や地域社会に対する考え方などを中心に話していただき、地域社会の発展に尽くした生き方を感じ取れるようになる。 ・多々良沼土地改良区の活動については、当時の人々の願いをどう実現したのかを中心に話していただき、よりよい地域社会づくりにかけた熱意を感じ取れるようになる。 ・大谷休泊ゆかりの場所や多々良沼の干拓の様子の写真などを準備しておき、必要に応じて提示する。 	<p>それぞれの時代における多々良沼や松林の使い方がわかるとともに、地域の人々の願いの実現へ向けた先人の努力や工夫をとらえ、先人の生き方に共感している。</p>	↑ 見通し b ↓
新たな課題をもつ	○多々良沼や松林一帯の現在の開発についての発表を聞き、現在の開発が心に潤いを与えるものに変化していくことを知るとともに、多々良沼や松林に対する地域の人々の願いを調べる計画を立てる。	全 個	<ul style="list-style-type: none"> ・多々良沼や松林などの役割の変化に気付くことができるよう、昔と現在の開発の目的や人々の暮らしを対比して考えるよう助言する。 ・聞き取りについての調べ方の手引きやワークシートを準備し、抵抗なく聞き取りをしながら調べ方が身に付くようになる。 	<p>多々良沼や松林の役割が人々の生活にゆとりをもたらすものに変化していることがわかり、これから得多々良沼や松林に対する人々の願いを調べようとしている。</p>	↑
	地域の人々の願いを聞いてみよう				↑ 見通し a ↓
	○地域の人々のよりよい多々良沼や松林への思いや願いを調べ、だれもが快適な生活環境を望んでいるが、便利さを求めるすぎた自分たちの暮らし	個 全 1	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちの思いや願いと比較するよう投げかけ、自分たちとの共通点に目が向くようになる。 ・食料生産が課題だった時代と今の問題を対比して考えるよう助言する。 ・問題の一例を取り上げ、問 	<p>人々の願いは生活と結び付いた切実なものであり、地域の人々も自分たちも同じようによりよい地域社会を</p>	

	が一因でごみ処理や水質汚染などの問題も抱えていることがわかる。		題をつくりだしているのは自分たちの生活であること目が向くようになる。	願っていることがわかつている。	
みんなの願いを実現するにはどうすればよいのだろう わたしたちにできることはないだろうか					↑ ↓
課題の解決を考える	○地域の人々の願いを取り入れた多々良沼や松林の活用について考え、自分でもよりよい地域社会づくりに貢献できることに気付く。	全 1	・地域の過去の学習を振り返ったり「昔の人ならどうするか」という投げかけをしたりして、自分たちが地域社会づくりの担い手であることに気付くことができるようになる。 ・「自分たちでできることがあるか」問いかけて、自分自身の生活を振り返るよう助言し、自分の生活に改善すべき点が多いことに気付くことができるようになる。	自分でできることがわかり、実践しようとする気持ちをもっている。	↑ ↓ 見通しC
地域の人々に自分たちの考えを伝えよう					↑
課題解決の考え方を深める	○地域の人々や自分たちの願いを実現するために、多々良沼や松林一帯を具体的にどのようにすればよいか話し合い、グループでパンフレットをつくる。	全 課 グ 4	・パンフレット作成の手引きを準備し、作り方について説明する。 ・どのような場所にしたいか発表し合い、それをもとに、考え方の近い友達とグループをつくるようになる。 ・多々良沼周辺の白地図を準備しておく。 ・一人一人の発想を大切にしていくよう助言し、グループの考えに特徴ができるようになる。 ・パンフレットを冊子にまとめ、学習でお世話になった方々や保護者などに配布し、後日、意見や感想をいただけるように依頼する。	よりよい地域社会づくりを自分なりに考え、パンフレットにまとめている。	↑ ↓ 見通しD
	○パンフレットに対する返事を読んで、自分たちもよりよい地域社会づくりに参加しているこ	課 グ 全	・返事の中から自分たちの考えに対する励ましや賛成、アドバイスなどを整理し、地域の人々の期待を感じることができるようにする。	自分たちにもよりよい地域社会づくりが期待されていることがわかる	

	とを感じ、自分たちの考えに自信をもつ。		・行政の立場から市役所公園緑地課の方に、地域住民の代表として地域づくりに積極的に取り組み、これまでの学習でお世話になった方においていただき、意見を聞くことができるようになる。	り、進んで地域社会づくりにかかわろうとする。	
--	---------------------	--	---	------------------------	--

注：形態における全は全体 課グは課題別グループ 個は個人

(5) 本時案の作成

ア 本時の目標の設定

本時の目標は、単元の目標や指導計画を基本にして設定されるものである。しかし、本時での興味・関心や既習事項にかかる子供の実態等を十分配慮して決定することが必要である。

本時の目標は、達成目標の形として表現することが比較的多いが、向上目標、体験目標についても挙げることが必要である。その際、態度や価値観、思考力などの目標は、子供が主体的に学習している姿を想定し、設定する。

目標の表し方の例を挙げると、次のようになる。

○ 達成目標としての表し方

「～という活動を通して、～することができる。」

○ 向上目標・体験目標としての表し方

「～ようとする。」

「～課題意識を高めることができる。」

イ 授業仮説の設定

検証のための授業実践では、仮説の検証が目的である。そのためには、研究仮説を踏まえ、授業実践において研究としての手立てをさらに具体化する必要がある。また、その研究仮説に即して投入した手立てにより、どのように子供が変容したかをとらえる必要がある。この授業実践における具体化された研究仮説を授業仮説と呼んでいる。

授業仮説は、一般的に次のことに留意して設定することが必要である。

- 単元や一単位時間の学習過程のどこに位置付くのか
- 場、活動や支援などとして手がてが、具体化しているか
- 子供の反応、変容などが予想できるまで具体化されているか

次に示すのは、小学校社会科3・4年：研究主題「地域社会の一員としての自覚を促す社会科指導の工夫—出会いの活動を取り入れて—」の「事実の意味がわかる」過程の研究仮説bを、検証に当たる授業実践：単元「多々良の大地をひらく」(p.74~78指導計画参照)で設定した授業仮説の例である。

研究仮説

- b 地域社会で活躍している人や過去に地域社会の発展に貢献した人の行動や考えに出会う活動を行えば、その人々の努力や工夫に気付き、生き方に地域社会とのつながりを感じるだろう。

授業仮説

事実の意味がわかる過程で、郷土史家や多々良沼土地改良区の関係者の話を聞き、多々良沼や松林一帯の開発や活用にかかわった人々の行動や考えに出会う活動を行えば、人の生き方に地域社会とのつながりを感じるだろう。

ウ 本時の学習の展開

本時の学習の展開は、教科の特質や単元の構想を踏まえ、学習過程を、指導内容、学習活動、子供の反応、支援や指導上の留意点、時間、評価の観点などの項を設けて作成する。

また、授業研究を進める上では、仮説の検証内容や検証方法などを位置付けることが必要である。その場合、学習活動や評価の観点の項などに位置付けることが一般的である。

次ページ表4は、子供の学習活動を主体とした展開の書式例である。

表4 本時の展開の書式（例）

学習過程	学習活動	支援	時間	評価の観点
○学習過程の位置付けを書く。	○学習活動を子供の立場で記述する。 ○研究の手だてに関するところは、線で囲むなどして研究の特徴を明確にしたり、別に設けたりすることもある。	○子供の主体的な学習活動が目標の実現に向かうよう、支援することを記述する。 ○研究の手だてにかかる部分も記述する。 ○支援の表し方は、「…して～できるようにする」「…により（興味）をもてるようにする」などとする。	10分	○ねらいに即して評価の観点ごとに評価項目や評価方法などを記述する。 ○授業仮説の検証方法についても明確に位置付ける。

エ 学習指導案の作成

（ア）学習指導案作成の意義

学習指導案は、指導する学級の子供が目標を達成できるようにするために、教材や、活動場所、学習形態などをどのように組み合わせ、どのような活動をどのような順序で行うか、また、教師はどのような指導・支援を行うかなどの設計書である。

（イ）学習指導案の形式

学習指導案の形式は、学校の課題や授業改善の方向など重点の置き方により異なってくるが、それぞれの学校で創意工夫することが大切である。次に示すのはその一例である。

○○科学習指導案	指導者 ○○○○
	○年○組 教室
I 単元名	
II 単元の考察	<p>単元の考察として、記述すべき視点は次に示すが、研究の内容を単元でどのように具体化したかが分かるように記述することが大切である。一般的には、次のような項目である。</p> <p>○子供の実態</p>

本単元に関する子供の実態を、関心・意欲・態度、思考・判断、技能・表現、知識・理解の面から考察する。子供のよさをどのように伸ばすかの考察や、研究の視点とした子供の実態を明確にすることが大切である。

○教材観

本単元を学習するまでに、子供が身に付けてきた資質や能力などの実態から、子供のよさを伸ばすために本単元で構想した教材や活動の価値、それを通して培うことのできる資質や能力について明らかにする。

○系統観

本単元までに学習してきた指導内容とのかかわりについての考察と、今後どのような学習をしていくかについて述べる。

○指導観（指導方針）

子供の実態や教材の系統などを踏まえ、目標を達成するための指導や支援のための手立てを記述する。また、研究の手立てとして考えた指導方法の工夫等についても述べる。

III 目標と評価規準

p.69～73に示してある「目標分析と評価規準の設定」を参照

IV 指導計画

p.73～78に示してある「単元の指導計画の作成」を参照

V 授業仮説

p.78～79に示してある「授業仮説の設定」を参照

指導案の位置付けとしては、研究の内容により本時の学習の展開に位置付ける場合と、単元の指導計画に位置付ける場合などがある。

VI 本時の学習

本時のねらい、準備、展開など記述する。

(ウ) 学習指導案の改善

学習指導案ができあがった段階で、その学習指導案で子供のよさを生かした授業が展開できるかどうか検討してみる必要がある。それは、教師側の論理のみでつくられがちな学習指導案を、子供の側に立ったものにしていこうとするものである。その方法の一つとして、机上授業がある。

机上授業は、発問構成・授業構成などの吟味のために、教師役が教授活動（発問、指示、指名など）を行い、子供役の教師が子供の行動を想像しながら行動や発言を行うことである。

このような机上授業を通して、学習指導案を修正・改善することが可能と

なる。

4 授業実施と授業記録

(1) 授業記録の意義

ありのままの事実を記録する 授業は、子供たちが目標を達成していこうとする場であり、授業研究を進める上では、研究を検証するための場となる。したがって、授業記録は、研究を検証するための授業がどのように展開され、子供の発言や活動、教師の実際の指導があったかなど、ありのままの事実を記録することに意義がある。

そして、授業仮説の検証に必要な事項を落とさないよう、できるだけ客観的に記録する必要がある。

(2) 授業記録の方法

授業記録の方法にはいくつかあるが、逐語記録、抽出した子供（抽出児）の行動の記録、ビデオやテープレコーダによる記録について述べる。

ア 逐語記録

これは、授業者の発問やそれに対する子供の応答内容や状況を、授業の展開のプロセスに沿って記録していくものである。

表5は、展開時の記録様式を「時間」「教師の発言・動作（板書資料）」「子供の発言（行動・反応等）」「気付いたこと」の四つの項目に分けて記録

表5 逐語記録（例）

時間	教師の発言・動作 (板書資料)	子供の発言 (行動・反応等)	気付いたこと
-	1 みんなの希望した挑戦したいコースを作つてみました。 (四つのコース図を黒板に提示する)	(歓声がわき起こる) (早く挑戦したい様子を見せる)	動機付けを図る上で、提示するコースの吟味が大事である。
-5分	2 どのコースに挑戦したいか。また、その理由も教えてください。	C ₁ 坂道のコースは、転がると勢いがつき、おもしろそうだから挑戦したい。	

した例である。教師と子供のかかわりが読み取れるように、行動・反応等を（ ）で表したり、発言に番号を付けたりしておくとよい。このほかに、抽出児を取り出したものなど、記録のポイントをどこに置くかによって、様式を工夫する。

記録をとる位置としては、教師の活動と子供の活動がよく観察でき聞き取ることができる場所を選ぶことが大切である。後で述べるビデオやテープレコーダによる記録は、逐語記録を作成する際の、補助手段として利用できる。

イ 抽出児の行動の記録

抽出児の学習のプロセスにおける変容の姿を基に仮説の可否を問うことは、授業研究を行う上で有効な方法の一つである。抽出児の行動の記録をとる際には、目指す資質や能力の育成が期待できる子供や、集団全体の傾向を象徴する子供を選ぶこと、その変容の過程を比較することができるよう子供を複数選ぶことも大切である。観察者は、抽出児の言動を記録する。言動で読み取れないものは、簡単な質問により変容をとらえる方法もある。表6は、抽出児の行動の様子を記録した例である。学習活動と全体の反応、抽出児の反応を比較しながら授業記録をとることが大切である。

表6 抽出児に視点を当てた記録（例）

過程	学習活動	全体の反応	N児の反応
課題を把握する	○紹介された技をVTRで見て、自分が挑戦してみたい技を試して決める。	○あの技、かっこいいな。 ○あの技はしっかりとできるようになると、きれいだわ。 ○（VTRを食い入るように見ている）	○「開脚前転ができるようになりたいな。」 ○「頑張れば、できるかな？」 ○（意欲的な態度を示す）

ウ ビデオやテープレコーダによる記録

ビデオは、文字では表現することができない身振りや雰囲気、授業で見落としていた子供の表情など、子供や教師の言動を動的・連続的に、ありのままに記録でき、再生することができる。また、授業中の教師の指示・発問・

動作などの記録を客観的に見ることができるので、自らの授業スタイルを見直すことができるなどのよさがある。

テープレコーダは発問や発言、また、そのニュアンスなど逐語記録では書き表せなかったことを記録でき、再生できるので記録の補完的な役割を果たせるものである。

5 授業評価と研究結果の処理

(1) 授業評価の意義

手だての有効性を
確かめる

授業は、明確な目標をもった計画的な営みである。しかも、授業を構成している要素は、極めて多く、かつ、複雑である。その授業を改善・充実していくためには、子供に変容をどのように促し、どのような資質や能力を育てることができたのかを的確にとらえ、評価する必要がある。

授業仮説を設定して行う授業の評価は、授業記録で収集した資料を基に、投入した手だてにより、目指す資質や能力が身に付いたかどうかとらえ、授業仮説の有効性を確かめるために行うのである。

授業評価にかかわる資料の収集・分析は、計画的・組織的に行うことが大切である。それは、研究主題や研究仮説を多面的な視点から評価する必要があるからである。

計画を立てる際には、どのような方法で資料を収集したらよいか、収集した資料を生かすためにどのような方法で分析したらよいか検討する。そして、研究主題や研究仮説にあった授業分析が徐々に焦点化できるようにするために、吟味の

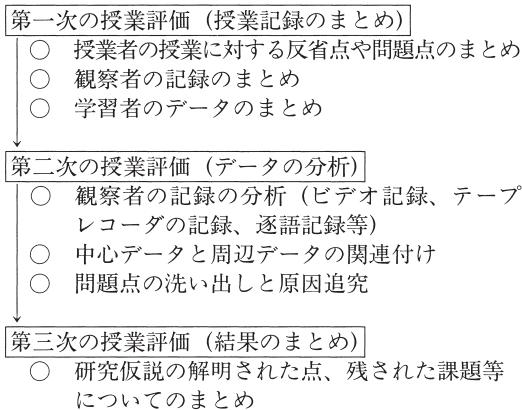


図10 授業評価の手順（例）

時間を十分に確保した計画を立てることが大切である。

(2) 授業評価から授業改善へ

多様な視点からの
総合的な評価

授業評価は、授業をよりよいものへ改善していくための一つのステップにはかならない。したがって、授業評価した結果を基に、授業設計や実施段階へフィードバックし、実際に授業の在り方に何らかの改善の手が加えられて初めて、本来の意味をもつものになるのである。

授業評価を授業改善につなげていく場合、次の二つが考えられる。一つは、単元レベルの一連の授業に対して、直接的な形成的評価として機能させる場合である。もう一つは、授業者の個人的傾向を明らかにして、その授業者の指導・学習計画や授業過程の基本的な在り方を改善しようとする場合である。学校において共同で行う授業研究では、後者の立場を目的にした授業評価を進めることが一般的である。

このように授業評価を進める際に、その前提として、多様な授業評価の技法のそれぞれがもつ特徴を把握し、だれが、どのような技法を用いて評価するかという評価の枠組みをもつことが大切である。多様な視点から、評価者を換えて評価し、その結果を重ね合わせて判断することが重視されるわけである。表7は、授業評価の主な機能と主な評価技法を示したものである。

表7 授業評価の主な機能と主な評価技法

評価技法 斜線	評価技法 自由記述法	評定尺度法	S D法	録音・ビデオによる鏡映的利用	観察チェックリスト法	コミュニケーション分析法〔録音・ビデオ〕
授業評価の機能 斜線	授業者 学習者	授業者 学習者	授業者 学習者	授業者 —	—	—
当該単元の授業改善	授業者 学習者	授業者 学習者	授業者 学習者	授業者 観察者	観察者 (授業者・観察者)	
当該単元を超えた授業改善〔その授業者の授業一般を改善するために〕	授業者 学習者 観察者	授業者 学習者 観察者	授業者 学習者 観察者	授業者 観察者		

(『教育評価(第2版)』梶田叡一より)

表中の当該単元の授業改善は、単元レベルの一連の授業に対して、直接的な形成的評価として機能する場合であり、当該単元を超えた授業改善は、その

授業者の指導・学習計画や授業過程の基本的な在り方を改善しようとする場合である。この表からも、様々な技法を総合的に用いることの必要性が理解できる。特に、授業評価に当たっては、観察者だけでなく、授業者自身、学習者自身も含めて総合的に行うことにより、より確かな評価を行うことが大切であることが分かる。

(3) 授業評価の技法

子供の変容をとらえる様々な技法

授業評価は、子供の変容を通して目標が達成できたか判断することである。したがって、授業仮説の内容や目標に即した子供の変容がとらえられる評価の技法を選ぶことが必要である。

評価技法のうち、授業評価に活用できるいくつかの方法について紹介する。

ア 自由記述法

自由記述法は、授業を見て気付いたことをカードに自由に記述し、それを整理して授業の問題点を見付けていく方法である。

この技法は、まず、参観者がカードに感じたことを自由に書き込んでいく。その際、気を付けることは、各カードに授業の分節の番号を入れ、記述する内容は、必ず1枚1項目だけにしておくことである。一分節の中で、カードは何枚でも記入可能であり、記入する視点も授業者の行動面、学習者の活動面、準備された教材・教具の効果面、学級の学習環境面など、どのようなことであってもかまわない。記入したカードを、授業研究会等の前に提出し、それを一覧表のような形に整理して提示する。その表を見ながら授業の問題点を見付け、それを改善していくためにどのようにしたらよいか話し合うようにする。

イ 評定尺度法

評価項目を、前もって作っておき、尺度を与えて設定するもので、観察者が授業者や学習者に対して行うときに用いる。定量的な処理がしやすく、短時間で結果が出せるという利点がある。このほかに、授業者の自己評価や、授業者と観察者が共同で授業評価するときにも活用できる。

	よ い	や や よ い	ふ つ う	や や わ る い	わ る い
<授業者について>					
1 課題の内容は適切であるか	5 	4 	3 	2 	1
2 発問の内容は適切であるか	5 	4 	3 	2 	1
3 発問の時期は適切であるか	5 	4 	3 	2 	1
4 板書の内容は適切であるか	5 	4 	3 	2 	1
5 板書は整理されているか	5 	4 	3 	2 	1
6 説明の内容は適切であるか	5 	4 	3 	2 	1
<学習者について>					
1 説明や意見を聞いているか	5 	4 	3 	2 	1
2 課題に積極的に取り組んでいるか	5 	4 	3 	2 	1
<授業全体として>					
1 指導過程は適切であるか	5 	4 	3 	2 	1
2 理解は深まってきているか	5 	4 	3 	2 	1

ウ SD法

SD法は、概念の情緒的意味をとらえるための測定法で、意味差判別法といわれる。概念のイメージを両極性の形容詞に対する連想の強さで評定させ、因子分析するのである。

教育ではこれを、イメージの測定法として活用することがある。梶田叡一の『教育評価（第2版）』によれば、授業評価において、授業者自身が授業の自己評価のために、SD法を用いて授業イメージ調査を行い、客観的な性格をもつ資料を得るとある。

非 常 に な り や う	や う	ふ つ う	や う	か な り	非 常 に な り や う
樂しい					樂しくない
仲がよい					仲が悪い
明るい					くらい
自分から進んでする					自分から進んでしない
おちついた					そわそわした
まとまっている					まとまっていない
規則やきまりを守る					規則やきまりを守らない
協力的					非協力的
けじめのある					だらしない

図12 SD法質問紙「私のクラス」
(「沼田市教育研究所研究紀要第36集」より)

例えば、学級の雰囲気について子供がもつイメージを図12のようなSD法質問紙を用いて測定する。この場合、各選択肢を左から+3、+2、+1、……、-3と得点化し、データ処理する。学級全体の平均をその学級のプロフィールとして表し、分析する。学級の雰囲気について子供がもつイメージは、その得られた曲線から把握できる。また、ただ単に平均だけに着目することなく、その分散の度合いから学級の雰囲気の変化を予測することもできる。

このように、SD法を用いたイメージの測定結果から、学習者が全体としてどのようなイメージを得たのかを見取り、授業者の描くイメージと比べて自己評価するのである。

(4) 研究結果の処理

研究結果の処理は、授業記録から研究の手だての投入時における学習活動の事実を取り出し整理することである。この処理を基に、研究の手だての有効性を判断する段階へと進んでいくため、大切な役割をもっている。

自ら学ぶ意欲や自ら考え、判断し、表現するなどの資質や能力の育成を目指す授業研究において、子供の成長をとらえるには、その資質や能力の育成状況に視点を当てて変容を探ることが大切である。そこで「どのような子供」が、「どのような手だて」で、「どのように変容」したかを、「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」などの観点からとらえることになる。その場合、それぞれの観点を独立しているものとしてとらえるのではなく、それぞれの相互関連を図ってとらえる必要がある。

(5) 研究結果の考察方法

子供の変容を質的・
量的に考察する

授業実践を検証の場として行う授業研究の場合は、

授業仮説の検証を基に、研究結果を考察する。授業仮説には、すでに述べたように、子供の成長への願い、対象の分野・領域、具体的な手だてが盛り込まれているので、それらに照らしながら、子供が望ましい姿に変容したかどうかを把握したあと、把握した事実が手だてのどのような働きによってもたらされたのかを考察する。

抽出児の変容の事実を基に、手だての有効性を考察するという質的なもの

ばかりでなく、研究の手立てによって、学級の子供全体がどのくらい変容したかという量的な考察も行うよう心掛けたい。

次に示すのは、研究主題：「健康な生活を送ろうとする意欲を育てる保健指導—歯肉に関する教材を取り入れた歯周疾患の指導を通して—」(p.236実践例12参照)において、子供の変容を抽出児と学級全体から研究結果の考察としてまとめた例である。

学級全体（35名）の事前調査においては、歯周疾患という言葉を知っているかどうかの項目では、「知っている」と答えたものは1名のみであった。歯肉状態の把握の項目では4月の検診結果と一致したものは9名（資料1）であり、残り26名は歯肉が健康であるのか歯周疾患であるのか把握できなかった。

これらのことから歯周疾患について関心が薄いことや自分の歯肉の状態について理解していないことが分かる。保健委員の報告から歯周疾患の多い事実を基に口腔内写真を提示したことにより「上の歯肉が腫れている」「色はピンクだけれど腫れている」「出血はない」「よかったです大丈夫だった」という生徒の反応があった。ワークシートに書かれた内容も、「……のところが腫れている」「歯磨きの時、血が出る」と自分の歯肉の腫れ・色・出血の視点から記入することができた。これらのことから腫れの部位・歯肉の色・出血の有無について押さえながら観察していることが分かる。

事後アンケートからも口腔内写真提示後（資料2）は、全員、「自分の口腔内写真から自分の歯肉の状態が分かった。」と答えた。……

資料1 歯肉の状態の理解（活動前）

資料2 歯肉の状態の理解（活動後）

6 研究のまとめ

一般的に、研究のまとめは、次のような手順で行うことが多い。

- ① 目指す子供の育成のために、どのような指導方法の改善をしてきたかを振り返る
- ② 検証のための授業実践でとらえられた事実と授業評価、研究結果の処理によって分かったことを整理する
- ③ 子供の変容に照らして、何が追究できて、何が未解決の問題として残されたかという、研究の成果と課題を明らかにする (p.159実践例1参照)

参考文献

『授業技術講座 基礎技術』	東 洋・中島章夫	ぎょうせい (1988)
『教育方法の基礎 (小学校版)』		文部省 (1991)
『小学校校内研修進め方事典』	西村文男編	教育出版 (1990)
『中学校研究授業の進め方・見方』	男沢 一	文教書院 (1991)
『新しい授業づくり形成的評価』	梶田叡一	東京書籍 (1990)
『教育評価 (第2版)』	梶田叡一	有斐閣 (1992)
『総論 評価と評価規準』	熱海則夫、高岡浩二他	国土社 (1992)
『観点別学習状況の評価基準表』	北尾倫彦編	図書文化 (1993)
『教師の意思決定と授業研究』	吉崎静夫	ぎょうせい (1991)
『子どもと教育授業研究入門』	稻垣忠彦、佐藤学	岩波書店 (1996)

第2節 教材開発研究

I 教材開発の意義と視点

1 教材開発の意義

心を豊かにしていく学習活動を作り立たせるため

学校においては、教育目標の達成を目指し授業の改善・充実を図るため、常に教材研究を行い、より適切な教材を吟味して精選することが必要である。

このとき、次の①～③のような場合には、教材開発が必要になる。①子供の学力のより発展的な充足を期待する場合、②学習内容を理解するための補強が必要な場合、③身近な地域の自然、社会などについて学習する場合などである。こうした場合、学習のねらいを達成するためには、子供や地域の実態を踏まえ十分に吟味された教材が必要となる。ここに、教材開発の意義がある。

ところで、教材とは、子供が、人間、自然、社会、文化などのよさにかかりながら、自分のよさや可能性を生かし、それを高め、心を豊かにしていく学習活動を作り立てるものである。言い換えれば、各教科の単元等の目標を実現するための学習活動を作り立てるためのもの、すなわち、子供一人一人が学習の対象として意識し、進んでかかり、そこから自分の課題や実現したいことを見付け、自ら学んでいくための、教育的にみて価値のある素材であるといえる。このように教材というものを学習する子供の立場に立って幅広く柔軟にとらえることによって、子供の学習活動がより豊かになり、教材開発の意義も一層深くなる。

したがって、実践的研究としての教材開発研究は、開発したい教材を授業のねらいや子供の実態、活用の観点等から吟味し（教材解釈）、教師の創意を働かせて自作または従来のものを改良し（教材の制作）、開発した教材の有効性を授業実践を通して検証し、その結果を考察すること（評価）である。

2 教材開発の視点

このような考え方方に立って、教材開発を進めるためには、次のような視点が重要である。

視点 1

子供が主体的な学習活動を展開できるようにするために、一人一人が思いを寄せてそのよさに積極的にかかわり、自ら考え判断し表現できるようにすることが大切であり、問題解決的な学習活動や体験的な学習活動ができる教材を開発する。

視点 2

子供が自ら基礎・基本を身に付けることができるようるために、一人一人の学習活動を成り立たせるとともに、その関心・意欲、思考などが広がるようにすることが大切であり、複数の教材を用意するなど、子供の多様な実態に応じた教材、すなわち、個に応じられる教材を開発する。

視点 3

学校教育と地域社会における生活との関連を図り、子供の問題意識や思考などが深まり広がるように、子供の生活を基盤にした学習活動を重視することが大切であり、地域の人間、自然、社会、文化などの素材を生かした教材を開発する。

II 教材の特性と教材開発研究上の留意点

子供は、学校において様々な事物・現象と直接あるいは間接的に出会い、様々な道具や記号（シンボル）を通して学習を進める。ここでは、『教育方法の基礎（中学校版）』（文部省）にならい、教材を次のような3種に大別して、それらの特性と教材開発研究における留意点について述べる。

1 直接経験を促す教材

「生きた」知識を
獲得するため

直接経験を促す教材は、子供が現実の世界で実際にかかわり、文化や社会、自然環境に直接働きかけ、吟

味し、探索して、そこから「生きた」知識を獲得することを目指す教材である。知識の真実性は、直接経験を通して実感されるものであり、未知なる世界に対する自主的な探求心を育てるためには、身近な生活に密着した知識やそれを利用している文化に、子供が自ら、直接「触れる」ことが不可欠である。

直接経験を促す教材の例

- コメを作るとか、ミソを作るというような、いわゆる栽培学習で利用される教材
- 動物や植物、あるいは土などに触れたり、公共施設を見学したりするなどができる教材
- 社会や文化の実践活動に参加し、現実の社会の人々と直接交流をもつような機会を作りだすことができる教材

(留意点)

- ・直接経験を促す教材として用いる素材は、学校向け、教室向け、子供向けなどと作り替えたものではなく、子供が自然、文化、社会の中でかかわっている、正に「本物」の事物・現象であることが大切である。

2 道具による経験を促す教材

直接見えないものを道具で見る

道具による経験を促す教材は、自分自身の身体機能を拡大・延長する道具を使い、直接触れることのできないものをその道具で触れ、直接操作できないものをその道具で操作し、直接見えないものを道具で見ることによって知識を獲得することを目指す教材である。このとき、道具の操作者は子供であるため、何のどこをどのように見る（触れる）かは、子供が自己決定できるようにすることが大切である。したがって、子供が道具を使いこなせるようになるための学習が必要である。ここでの教材は、道具による観察や操作の対象となる社会や自然の実在物（経験教材）と、その観察や操作の道具そのもの（道具的教材）の組合せとして構成されている。

——道具による経験を促す教材の例——

- 望遠鏡で「星の運動」を観察する場合は、「星の運動」が経験教材であり、望遠鏡がその道具的教材となる。

(留意点)

- ・道具の原理や仕組みがある程度分かるようになると大切である。
- ・道具を通して探索する対象は、あくまで自然、文化、社会の中に存在する「実物」とする。

3 シンボル操作による経験を促す教材

シンボルとメディアとの組合せ

シンボル操作による経験を促す教材は、文字、特定の意味が社会的・文化的に規定されている記号、モデル、図、映像などのシンボルとこれを表現し伝達する手段としての物理的媒体（メディア）との組合せによる教材である。この教材を活用するためには、道具の操作をする場合と同様に、子供がシンボルを使いこなせるようになるための学習が必要である。

——シンボル操作による経験を促す教材の例——

- シミュレーション教材

シミュレーションは、コンピュータのグラフィック機能を有効に使い、動的に視覚的に理解しやすい画像を画面に提示するため、概念形成を助け、法則やモデルの理解を図るために有効である。

（『コンピュータの学校教育利用』芦葉浪久より）

例えば、物体の運動を対象とする教材では、従来は、「実験」で観察する以外には、その「動き方」を詳細に分析したり変化させたり、見る側の視点を移動させることなど、全く不可能であった。ところが、コンピュータを利用すれば、実験をしなくともそれらの「動き」に対し、特定の側面だけを抽出して変化させたり、時間軸を自由に変えて表示（瞬間的な動きをゆっくりと再現することや、数日間、あるいは数年の変化をも瞬時の変化として再現することなど）させたりすることができる。

- 教材のパッケージ化

これからは、一つのテーマを様々な観点から追究できるようにするために、様々なメディアを組み合わせて活用する、いわば教材をパッケージ化する方

向に進むようになるであろう。パッケージ化された教材は、課題解決のために必要なソフトウェア、ビデオ、ゲーム、ワークシートや資料などを一つにまとめ、子供はそれらを自由に使い、相互に関連付けながら様々な学習経験をもって、学習目標を達成できるようにしたものである。

(留意点)

- ・シンボルの規則や使用技能の習熟に追われて、シンボルを使用する本来の目的が達成されないということがないようにする。
- ・シンボルの使用が現実世界から遊離して架空の疑似世界を構成し、子供をその世界の中に閉じ込めてしまわないよう、他者とのかかわりや文化的な活動との関連を明らかにしていくようにする。

ここでは、教材を以上のような3種に大別してその特性を述べたが、実際の教材の中ではこれらの要素は互いに分かち難く結び付いている。すなわち、「道具による経験」は「直接経験」を含んでいるし、「シンボル操作による経験」は、「道具による経験」も「直接経験」も含んでいる。そこで、学習内容と子供の発達段階を考慮し、いずれかの要素を強調してその特性を生かした教材を開発することが重要になる。

教材開発研究に取り組むために

○ 日ごろの意識と積極的な態度

研究には本来何らかの意味での新しさが必要であるが、教材開発研究では特にその要素が強い。そして新しいものを生み出すには、「子供の関心・意欲を高め、主体的な学習を作り立てるため」という目的意識をしっかりとつことが必要である。その気持ちが強ければ教材開発の要求水準も高くなり、よりよいものに発展することができるからである。この意識を支える具体的な態度には次のようなものが挙げられる。

- ・日ごろから問題意識をもち続け、子供のつまずきや理解しにくい学習内容などから教材開発の課題をとらえる
- ・研究報告書や教育専門誌などから積極的に新しい情報を収集する
- ・教材開発に役立ちそうな手法、道具、材料などに常に関心をもつ
- ・子供や教師の反応を素直に受け止め、絶えず工夫や改良に努める

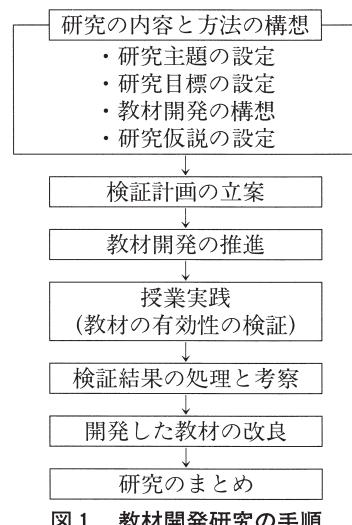
○ 先進的な教材の開発

新しく教材として活用される素材は、地域の自然、文化など従来からあるも

のを新しい視点からとらえ直して構成したもの、あるいは、技術の進歩や社会の変化に伴い新しく身の回りに登場てくるものが多い。特に後者のような場合、例えば、コンピュータを利用した教材がそうであるように、いずれ学校教育で広く利用されるようになると考えられるものについては、先進的に研究を進めることも必要である。

III 教材開発研究の手順

一般に開発研究は、研究成果の実用化や普及を目指しており、研究課題の明確化に始まり、構想・計画、研究・開発、試行・改良というような手順を経て、開発したものを実用化し、さらに広く普及するまでを一連の過程とするものである。教材開発研究の場合も同様である。まず、今日的な教育課題や自らの課題の中から教材開発を通してその解決を図ろうとするものを見だし、子供や地域の実態を踏まえて十分に吟味・検討する。それとともに、その課題に関する研究の現状を文献調査などにより把握して、研究課題をより明確にする。その上で、一般的には図1のような流れに沿って進められる。



1 研究の内容と方法の構想

(1) 研究主題の設定

教材の価値の吟味

課題の解決を目指して、これから進めようとする研究の目的、内容、方法を吟味して研究主題を設定する。ここでは、取り上げる単元等において、開発しようとする教材の価値を吟味

することが大切である。また、研究主題の表現は、簡潔明瞭になるようになる。

次に、中学校外国語の研究主題の例を示す。(p.195実践例 6 参照)

研究主題の例

英語による主体的な表現活動を促す指導の工夫
—プレゼンテーション支援教材の開発とその活用を通して—

本研究主題は、生徒の英語による主体的な表現活動を促すために、生徒一人一人がコンピュータによる文字、音声、画像等のマルチメディア機能を使って表現活動をするためのプレゼンテーション支援教材の開発を目指して設定されたものである。

なお、研究主題の表記は、上記に示したほかに「～を～する～の研究とその教材化」や「～を活用した～教材の開発」などが一般的である。

(2) 研究目標の設定

研究目標は、取り上げる単元等において、何のために、どのような教材を開発し、その教材の有効性を検証するのかということを明示したものである。前述した中学校外国語の研究の例では、次のように研究目標を設定した。

研究目標の例

生徒一人一人の主体的な表現活動を促すために、マルチメディア機能を用いたプレゼンテーション支援教材を開発し、授業実践を通して、その教材の有効性を検証する。

(3) 教材開発の構想

どのような教材を開発するか

取り上げる単元等において、教育的価値を内包する素材を発掘し、どのように教材化できるか吟味する。

それとともに、どのような教材を開発するのかを明らかにする。

前述の例では、次に示すような教材を開発した。

開発した教材の概要

1 紹介プログラム 1、2 (マイノート 1、プレゼンノート)

導入用として作成したマイノート 1 (個人用) と、プレゼンノート (グループ用) には、それぞれ五つのプレゼンテーション紹介プログラムがあり、ともにスタート及びカード 1 ~ 5までの 6 画面から構成されている。

スタート画面でスライド実行ボタンを押すと、カード1から5へと自動的に画像が替わり、それぞれの画像に合わせたセリフの音声が聞こえてくる。また、スタート画面上で、すべてのカードの描画、音声の記録・再生、文字入力及び編集ができるようにボタンを配置してあるので、生徒はそれらを使ってモデル音声を聞いたり、自分でセリフを考えて録音したり、文字入力をしたりすることで簡単にプレゼンテーションを行うことができる。

図 2 マイノート 1

図 3 プrezenzノート

2 作成プログラム（マイノート 2）

作成プログラムは、プレゼンテーション作成支援教材の基本的な画面レイアウトと作成・編集及び実行機能を組み込んだ基本フォーマットである。これを

使って、前述のマイノート 1（図 2）やプレゼンノート（図 3）を作成した。また、この作成プログラムは、生徒がプレゼンテーション資料を自作する際の教材プログラムにもなっている（マイノート 2）。

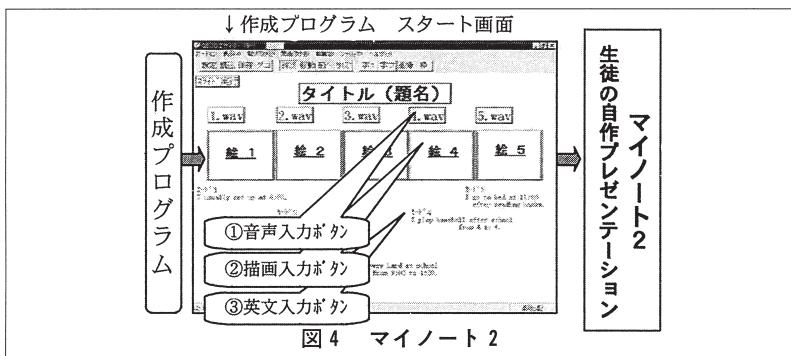


図 4 マイノート 2

3 補助教材（データベース HELEN）

データベース HELEN は、単語や基本文の意味とその使い方を文字、音声、画像等の資料でまとめたカード型データベースである。五十音順によるカードの検索や編集・追加の機能により単なる調べ学習だけではなく、新たにデータを追加したり、発音・発話練習をしたりすることができる。また、生徒の文章、スピーチ、絵、写真等をコピー・貼り付けをすることでデータを増やすこともできる。生徒が自分で主体的に調べ、学習できるようになっており、生徒自身の手によるデータベース作りも可能である。

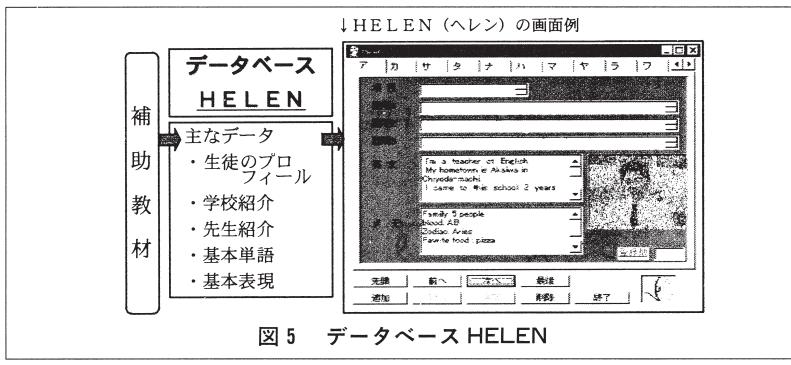


図 5 データベース HELEN

(4) 研究仮説の設定

開発した教材を、取り上げた単元等において、このように用いれば、このような効果が得られるだろうという教材の有効性についての研究仮説を設定

する。

前述の例では、次のような研究仮説を設定した。

—— 研究仮説の例 ——

プレゼンテーション支援教材を開発し、英語による表現活動の指導で、次のような見通しをもって活用すれば、生徒は主体的な表現活動に取り組むようになるであろう。

- 1 紹介プログラム2（プレゼンノート）を活用して、グループで選択した課題についてのプレゼンテーションカードを作成すれば、生徒一人一人が英語による表現活動への興味・関心をもち、意欲が増すであろう。
- 2 作成プログラム（マイノート2）と補助教材（HELEN）を文字、音声、画像入力に活用して、生徒一人一人がプレゼンテーションカードを作成すれば、言いたいことや伝えたいことが見つかり、それらを分かりやすく工夫し、発表しようとするであろう。

2 検証計画の立案

検証の観点、検証の方法等の具体化

開発した教材の有効性を確認するために、検証の観点、検証の方法、処理と解釈の方法を具体化していく。

中学校理科「観察から惑星の公転軌道を求める学習指導の工夫」(p.180実践例4参照)では、開発した教材を活用することにより、生徒が惑星の空間的な位置関係や公転の様子に気付き、太陽系の広がりや奥行きについて推察することに有効であるかを授業実践を通して明らかにするために、表1のような検証計画を立案した。

表1 検証計画（例）

検証の観点	検証の方法	処理・解釈
<ul style="list-style-type: none">○ 惑星の空間的な位置関係や公転の様子に気付くことができる。○ 太陽系の広がりや奥行きについて推察することができる。	<ul style="list-style-type: none">・事前のアンケート・事後のアンケート・ワークシート・授業中の発言	<ul style="list-style-type: none">○ 事前・事後のアンケート結果を数量的にとらえ、分析していく。○ どの程度有効だったかをアンケートやワークシート等により判断する。

3 教材開発の推進

常に子供の学習場面を想定する

教材開発の目標を具体化し、活用したい素材についての研究や道具等の製作、それらの教材化について、一連の推進計画（内容、方法、手順、日程など）を立案し、研究を進める。このとき、常に子供の学習場面を想定し、どのように用いればどのように役立つかを吟味する必要がある。

4 授業実践（教材の有効性の検証）

授業実践を通して、開発した教材の有効性を検証する。言い換えれば、子供の変容がその教材に基づいて促されたかどうかを実証的に検証することである。なお、因果関係が得られないものについては、短時間に、あるいは短絡的に結論を急がず、継続的に研究を続けることが大切である。

5 検証結果の処理と考察

子供の変容の事実を基に、開発した教材の有効性を判断し、考察する。

実践例4 中学校理科の例では、次のように教材の有効性を判断した。

検証結果の処理と考察の例

- 自分で観察したことを基に作図することで、それぞれの惑星までの距離の違いや、惑星が間隔をあけて太陽のまわりを公転していることを容易に理解することができた。
 - 観察や作図などの学習を通して、惑星の見かけの形の違いは、惑星に太陽の光が当たる向きが違うということ、それは地球から惑星までの距離が違うことを意味していることに気付くことができた。
 - 多くの生徒はコンピュータの操作は初めてであったが、マウスとテンキーだけの簡単な操作によって正確に距離を求めることができた。
 - 作図を通して金星は内惑星、火星は外惑星ということに気付くことができた。
 - ほぼ全員の生徒が火星と金星までの距離の違いやそれぞれの公転軌道を求め、太陽系の広がりや奥行きを見いだすことができた。
- 以上のような生徒の変容の事実から、本教材は、生徒が惑星の空間的な位置関係や公転の様子に気付き、太陽系の広がりや奥行きについて推察するために

有効であると判断した。

6 開発した教材の改良

実践によって明らかになった課題に基づき、開発した教材をよりよいものにするために改良を加えることがある。

7 研究のまとめ

開発した教材の有効性だけでなく、その限界についても客観的に評価し、従来に比べて改善された点及び残された課題を明確にし、今後の研究の方向性を展望することが大切である。

また、研究報告書にまとめるときには、教材開発の方法及び活用の方法に十分なページを割り当てる必要がある。なぜならば、具体的な記述がなければ第三者による確認や検証が難しく、活用や発展も望めないからである。

参考文献

『教育方法の基礎（小学校版）』	文部省	(1991)
『教育方法の基礎（中学校版）』	文部省	(1991)
『教材開発の理論と実際』		
福岡教育大学教育実践研究指導センター授業研究会編		溪水社 (1991)
『身近な素材をどう教材化するか』	岩内弘昌	東洋館出版社 (1988)
『コンピュータの学校教育利用』	芦葉浪久	東京書籍 (1986)

第3節 事例研究

I 事例研究の意義

事実のもつ構造等
を明らかにする

事例研究は、ある一つの事実について様々な資料を収集・分析し、それを構成している因子や相互の関係などを把握することによって、事実や事象のもつ構造や特性及び一般性、普遍性を明らかにしようとするものである。医学、心理学、教育など、多くの領域で用いられている。

II 教育における事例研究

問題の原因や解決・
改善の手がかりを
明らかにする

教育における事例研究は、教育の内容・方法の改善・充実のために、ある特定の又は典型的な事実や事象について、多角的な観点から綿密な計画の下に必要な資料を収集・整理・記録することにより、問題の原因や解決・改善の手がかりを明らかにする個別的、具体的、実践的な研究方法である。この方法には次のような特徴がみられる。

- 学校における日常の教育活動を通して研究が進められる
- 事例は日常の教育実践における具体的な事実（事象）である
- 発達的理解と継続的・計画的実践に支えられている
- 教師と子供との教育的人間関係が基盤となる
- 教育理念に基づく教育的見地・教育的配慮をもって事例を扱う

教育における事例研究は、教育内容に関するもの、教育方法に関するもの、生徒指導に関するものなどに分けることができる。なかでも多く用いられるのは、生徒指導に関する事例研究である。そこで、ここでは主に生徒指導に関する事例研究を取り上げる。

III 事例研究の進め方

行動の背後に目を向ける

生徒指導に関する事例研究は子供の態度・行動の改善を図るために、その子供の態度・行動の背後にある心の理解や環境にまで目を向けて進められる。その手順を例示すると図1のようになる。この流れに従って、事例研究の手順を述べる。

なお、事例研究を進める際には、資料の収集、問題の理解、指導方針、指導内容などが一貫性をもってつながるように研究を行うことが大切である。

1 問題の設定

(1) 問題の発見と対象の選定

日常の教育活動における観察から、子供の態度・行動の問題点を見つけたり、心理検査の結果から気になる特徴が分かったりすることがある。これらの問題を手がかりとして、事例研究の対象を選定する。

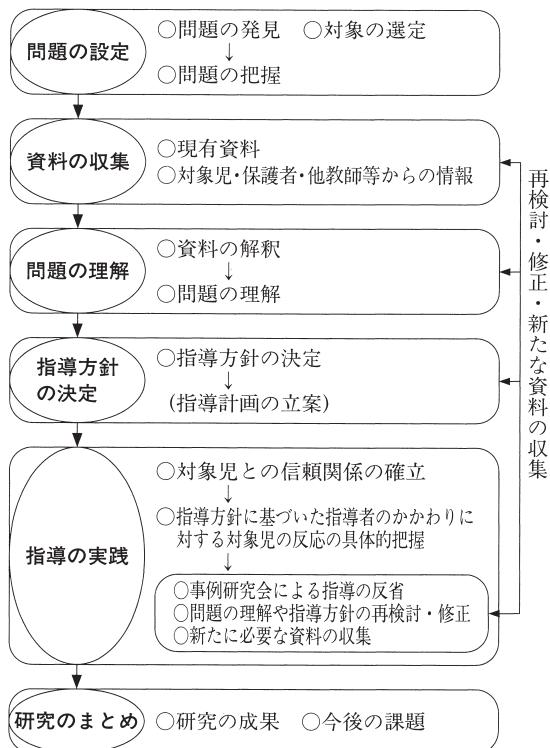


図1 事例研究の手順

対象を選定する場合は、対象と研究者との関係、問題の難易度、対象を取り巻く環境や人間関係などに十分配慮しなければならない。研究者が対象児や家庭に直接指導を行うことができない場合などは、指導者の校内における

指導上の立場（学級担任、生徒指導担当者、教育相談担当者など）を明らかにして、校内で連携を図りながら進める必要がある。問題の内容や程度、地域や家庭環境などから判断して学校での指導が難しい場合は、関係機関（教育センター、児童相談所、医療機関など）と連携を図りながら進める必要がある。

（2）問題の把握

取り上げた問題が、対象児にとって解決しなければならない問題であることを確認し、その問題となる具体的な事実を研究者（以下、指導者という）の解釈を入れないで、正確に客観的にとらえることが大切である。

問題によって把握すべき内容は異なるが、例えば、不登校傾向の場合、「欠席が多く、家にいるときは閉じこもりがちである。」という事実を以下のような観点から客観的にとらえていくのである。

①欠席のきっかけ ②欠席の始まる前のころと始まってからの対象児の様子の変化 ③休みはじめから現在までの経過と対象児の様子 ④現在の出席状況等（継続欠席か断続欠席か、曜日によって欠席に特徴があるか、遅刻・早退・欠課の有無など） ⑤現在の様子（身体症状の訴え、昼夜逆転の有無、家庭内暴力の有無、一日の生活、友達と遊べるか、教師に会えるかなど）

2 資料の収集

問題を把握した後、対象児を理解するために必要な資料を、様々な方法で収集する。収集した資料のうち、プライバシーに関するものは、保管や扱いなどに細心の注意が必要である。

（1）資料の種類

対象児を理解するための資料は様々なものがある。『生徒指導の手引（改訂版）』（文部省）では、生徒理解のための基本的な資料として次ページ表1のようなものが挙げられている。

これらを参考にしながら資料を多面的に収集し、そこから対象児の問題の理解に必要と思われるものを選んでいく。

表1 生徒理解のための基本的な資料(『生徒指導の手引(改訂版)』文部省より)

1 一般的な資料
生徒の氏名、住所、その他の資料
2 生育歴についての資料
ア 乳児期における病気 イ 乳児期及び幼児期におけるしつけなど
3 家庭環境についての資料
ア 家庭の社会的、経済的状況 イ 家族の生活態度—いわゆる円満な家庭かどうかなど ウ 家族の教育的な関心 エ 両親の関係—和合的かどうかなど オ 本人に対する親の態度—理解的、合理的、民主的、あるいは溺愛的、過保護的、強制的、強圧的、拒否的など カ 家族間での本人の地位—独りっ子、長子、末子など、あるいは無視されている、偏愛されているなど キ 両親のしつけの態度—厳格、不公平、感情的など ク 兄弟姉妹間の関係 ケ 同居人、祖父母などと本人との関係 コ 家族に対する本人の態度など
4 情緒的な問題についての資料
ア 過敏性 イ 爆発性 ウ 気分の変易性 エ 精神的な打撃を受けた経験の有無やその内容 オ 不安、反抗などの経験の有無など
5 習癖についての資料
ア 食事についての特異な傾向 イ 睡眠の習慣や特異傾向 ウ 性についての特異な習癖など エ 神経症的な習癖、しかめつら、顔面けいれん、つめをかむことなど オ 排便、排尿についての習慣や便秘、消化不良の有無など カ 言語の異常や早口、無口など キ 攻撃的、反社会的な行動の記録など
6 友人関係についての資料
ア 友人関係の推移や現状 イ 交友関係についての本人の特徴—わがまま、いじわる、独占的、付和雷同的など ウ 問題グループとの関係など
7 身体の健康状況などについての資料
ア 病歴—病弱かどうかなど イ 身長、体重、栄養などの推移と特徴 ウ 精神身体的な問題の有無—消化不良、頭痛、アレルギー、ぜんそくなど エ 女子の生理の状況など
8 学校生活についての資料
ア 教育歴—幼稚園（保育所を含む）や小学校から現在に至るまで イ 学業成績—教科の好き嫌い、得手不得手、学校や家庭での学習の習慣など ウ 出席状況—不規則な欠席、長期欠席、する休みなど エ 学校に対する態度—本人、両親、兄弟姉妹などの学校や教師に対する態度など オ 学校生活への適応—教師や友人との関係、集団内の役割、退学・停学・訓告などの記録など
9 検査や調査の結果についての資料
ア 知能について イ 学力について ウ 知能と学力との関係について エ 性格、適性などについて オ 悩みや問題行動などについて カ 興味、趣味などについて キ 将来の希望及び進路など
10 現在当面している困難点について
ア 身体的な困難 イ 家族関係 ウ 学校生活—学業上の問題、学校における人間関係（教師との関係を含む）など エ 学校内外の交友関係 オ 進路の問題など

(2) 資料の収集方法

ア 現有資料の活用

学校には子供の理解に役立つ多くの資料が保存されているので、これらの資料を積極的に活用する必要がある。具体的には次のような資料がある。

指導要録、健康診断票、観察記録、面接記録、各種作品（絵、日記等の文章）、調査や検査の結果等

イ 対象児からの情報収集

観察、調査、検査、面接などにより対象児から直接得られる資料は、対象児の考え方や思いなど、心の内面をとらえることができるので、対象児の立場に立った理解をするために重要である。

また、対象児の興味・関心、得意なこと等に関する資料は、信頼関係を築くための重要な糸口や具体的な指導への手がかりになることが多い。

調査や検査等を実施する場合には、対象児が安心して取り組めるように、場所や時間、信頼関係に気を配る必要がある。調査や検査の質問文は、対象児を傷つけるものにならないように、十分吟味することが大切である。実施する際、保護者への連絡・承認、結果の報告等についても配慮する。

ウ 保護者からの情報収集

保護者から、子供や家庭での様子や生育歴、保護者の教育に関する考え方などの資料を収集する。日ごろから信頼関係を築いておくことが大切である。

なお、保護者から情報を得る場合は、保護者との信頼関係を最優先し、保護者と一緒に子供の成長を図っていこうという姿勢で臨むことが大切である。生育歴等をことこまかに聞くという態度は避ける。

エ 関係する教師等からの情報収集

対象児の学級の授業に出ている教師、過去及び現在の学級担任、部活動顧問、生徒指導担当者、養護教諭など、対象児に関係する者から情報を収集する。そうすることにより、指導者の偏見や先入観による理解を避けることができる。

3 問題の理解

(1) 資料の解釈

客観的・科学的に
集められた資料が対象児の問題とどのように関連しているかについて、資料を解釈する。

資料は客観的・科学的に解釈できるよう、一般化された原則（例えば心理学の理論や技法・発達理論・他の事例研究等）などを適用しながら解釈した

り、各資料で解釈された内容を相互に関連させてみたりすることが必要である。もし資料の間に矛盾した内容があるときは、その意味を考察し、さらに新しい資料を収集し、解釈を深めていく。

資料には、
客観性・信頼

性の高いものがあるが、主観的なものや信頼性の低いものも多いので、解釈するときには注意が必要である。

図2は、「不登校児童への指導・援助」(p.219実践例9)を基に、〈生育歴〉と〈学校での様子・諸検査〉の資料についてどのように解釈を行っているか、例示したものである。

(2) 問題の理解

三つの観点からの
総合的理解

問題の原因を考える場合、問題の原因は単純ではなく、様々な要因が複雑に絡まっていることが多い。したがって、短絡的に原因と結果を結び付けることなく、様々な角度から検討する必要がある。問題の理解をする際には、収集した個々の資料から解釈したことと相互に関連させながら、「客観的理解」、「共感的理解」、「指導者の

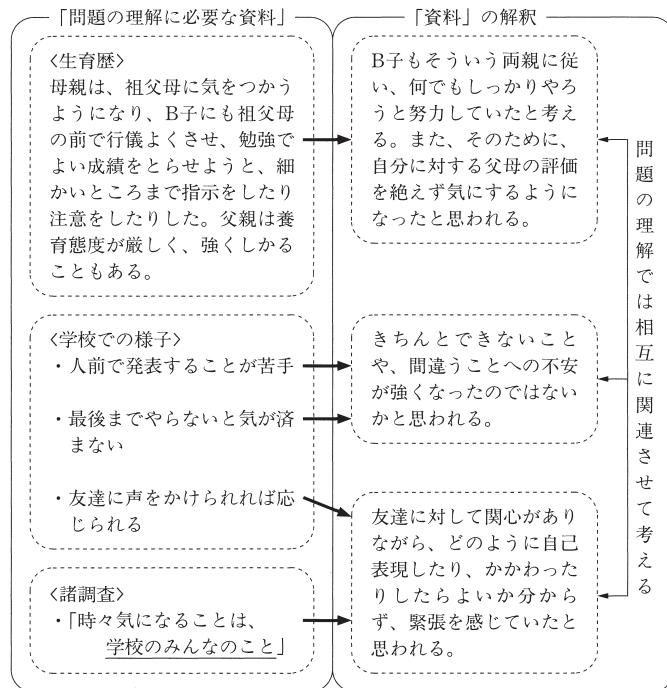


図2 資料の解釈（例）

自己理解」の三つの視点を踏まえて総合的に理解を進めていく。

例えば、様々な資料の解釈を通して、何が問題を継続させているのか、問題がどのような時や場所でだれと居るときに起こっているのか、対象児に身に付けさせたい能力や技能は何か、それはどのような一般的な原則等からいえるのか（客観的理解）、そのときの対象児の置かれた状況や表情、語ったことなどから、そうせざるを得ない気持ちを指導者が推測したり理解したり（共感的理解）、それを見たり指導している時の指導者は、どのような方法で指導を行っているか、また、どのような気持ちや感情をもっているか（指導者の自己理解）、のように理解を深めていく。

ア 客観的理解

資料や一般化された原則に基づく

資料に基づかない理解は決めつけや独断に陥りやすいので、客観的に問題を理解するためには、集めた資料を基に理解を進めていくことが重要である。また、対象児の理解や問題をとらえるためには、一般化された原則等から得られる基礎的な知識も必要である。そこから得られたものを、そのまま対象児に当てはめることはできないが、対象児の性格や体質、学校や家庭の環境などと照らし合わせることにより、客観的に問題の原因や要因を理解することができる。

指導をする中で新しい資料が得られれば、理解をさらに深めたりそれまでの理解について修正したりすることができる。

イ 共感的理解

対象児の立場に立つ

問題の理解は、対象児と指導者との温かい人間関係を基盤として進められることが大切である。そこで、収集したそれぞれの資料から、対象児の悩みや苦しみ、問題となる行動を起こさざるを得ない気持ちなどについて対象児の立場に立って、共感的に理解していかなければならない。共感的理解によって、指導者に受け入れられ、理解されたという安心感が対象児に生まれ、対象児の状況や心に即した適切な指導が可能となる。

ウ 指導者の自己理解

価値観等を知る

問題を理解する上で、指導者自身の価値観や人間観、教育観等が影響することは避けられない。そこで、指導

者の自己理解が大切である。これによって、問題の理解の幅が広がり、より客観的に理解を進めることになる。

4 指導方針の決定

対象児と環境の両面から

問題の理解によって、問題解決のためにどこに視点を当てて指導を行ったらよいかある程度目安がついた段階で、具体的にどのような指導を行うのか、方針を決定する。

校内での指導者の立場や指導技術などを基に、問題解決のために何がどの程度できるのか、他の教師の協力をどのように得たらよいのかなどを考慮して、指導方針を立てる。また、過去の指導内容とその成果を十分に検討して、指導方針を考えることも重要である。

指導には、対象児を直接指導する場合と、環境を調整する場合とがある。前者は、対象児の問題の改善を目指して、面接、学校生活（授業や休み時間等）での言葉掛け、学習指導、生活指導、家庭訪問などを通して行う。後者は、家庭や学級などへの働きかけである。

家庭環境に問題の原因があると考えられる場合には、家族への働きかけが必要である。その場合には、指導者が保護者に対して共感的にかかわりながら保護者の養育や問題に対する考え方を聞き取り、保護者の立場や考えに即しながら、改善についての話し合いや援助を行うことが大切である。

学級環境に問題の原因があると考えられる場合には、学級の子供が互いに協力し合い、理解し合えるように指導者が働きかけをすることが大切である。問題によっては、校内の連携の下に指導を進める必要がある。

また、指導方針に沿った指導・援助をどのような手順で行うかについて、大まかな計画を立てることもある。ただし、対象児の状態は絶えず変化しており、計画を立てても、そのまま実施するのは難しいことが多い。また、計画にとらわれるあまり、計画に当てはめた無理な指導に陥りやすいので、計画に必要以上にとらわれない姿勢が大切である。

実践例 9 での「問題の理解」と「指導方針」との関係は、図 3 の通りであ

る。(p.221～222参照)

5 指導の実践

指導方針に基づいて、対象児や保護者、学級の児童生徒に対して、どのような状況（時間や場所など）で、どのような言葉掛けやかかわりをしたのか、それに対してどのように反応をしたのかを具体的に把握しながら指導を進める。

また、指導の経過の中で、事例

研究会などの話合いの場を設け、他の教師から情報を得るとともに、指導に対して絶えず反省を重ね、必要に応じて新たに資料を収集したり、問題の理解や指導方針の修正や変更を行ったりすることが必要である。

指導では、次の点に留意しながら記録をすることが大切である。

- その時、その場での指導と、それに対する対象児の反応や変容を具体的にとらえたり振り返ったりできるよう、具体的に記録する
- 家庭と協力した指導や保護者への援助などは、いつ、だれが、どのような方法（家庭訪問、面接、電話等）で、どのような目的や内容で行ったか

〈対象児へのかかわり〉

「問題の理解」

周りからの評価が気になり、間違うことやできないことに対する不安が強まっていたと考える。さらに、友達に关心があるにもかかわらず、自己表現をすることが苦手であることや、かかわり方が分からずにいることから緊張が高まったと考える。



「指導方針」

- 自分のことは自分で考えて決定し、行動する機会を多く設け、自分の考えで行動できることへの自信をもてるようにする。
- 友達がB子の家を訪問するようにし、B子が友達とのかかわりを体験することを通して、友達とのかかわり方や自己表現の方法を学んだり、緊張を和らげたりできるようにする。

〈家庭へのかかわり〉

「問題の理解」

母親の期待にこたえようとする気持ちや、母親の干渉、父親の厳しさから、完全欲求や固執性が強まったと考える。



「指導方針」

母親に対しては、母親の不安を受け止め、B子へのかかわり方や父親への対応について、母親自身の気付きや考えを支持し、B子を見守ることができるよう援助する。

図3 「問題の理解」と「指導方針」の関係

を具体的に記録する

- 学級全体への指導は、いつ、どのような時間帯に、どのような指導を行ったか、そのときの児童生徒の様子を、対象児との関係が分かるように具体的に記録する。また、アンケートで意識調査をするなど、学級の児童生徒や対象児の心の変化をとらえ、それを記録していくことも必要である
- 記録する場合には、対象児や保護者に不安や誤解を与えないように目前で記録することは控える

6 研究のまとめ

(1) 研究の成果

問題の理解、指導方針、指導の実践などの評価を行う。評価を通して研究の成果が明確となる。評価の観点は次の通りである。

ア 対象児に変容が見られたか

対象児の態度や行動、意識などが、事例研究の事前、途中、事後でどのように変わっていったかについて検討する。方法としては、観察、調査、検査、情報収集（保護者・教師・同級生から）などがある。問題が改善されたことだけに目を向けるのではなく、対象児の日常生活における小さな変化や内面の変化もつかむことが大切である。

イ 対象児の変容の要因は何であったか

対象児への指導や保護者への援助が、対象児の変容にどのように関連していったかなどについて、時間の流れに沿いながら考察する。変容がほとんど見られなかった場合、問題の理解や指導方針、指導経過でのかかわり方が対象児に適していたかどうかについて考察する。

以上のことを通して、今後の指導で生かせることや改善点について、明確にすることができる。

(2) 今後の課題

事例研究の成果を、今後の子供への援助・指導や生徒指導体制、学校経営などの中でどのように生かしていったらよいか、残された課題は何か、今後

取り組んでいく必要のあることは何か、などについて十分考察し、今後の課題を明確にする。

IV 事例研究会の開催

事例研究会は、対象児への指導をより適切に進めていくために、指導中の事例、または終了した事例の報告（事例研究レポートが準備できるとよい）を中心に、その事例の指導方針や具体的なかかわり方と対象児の変容について、関係職員、あるいは全職員で検討するものである。

この事例研究会の事例の検討を通して次のようなことが期待できる。

- 教師が、自分自身の見方、考え方、接し方の特徴を知ることができる
- 一つの問題に対する多様な解釈、指導の在り方を知ることにより、柔軟な思考や対処ができるようになる
- 対象児を多角的にとらえることで、対象児一人一人のよさや可能性を見いだし、伸ばしながら、問題解決への手がかりをつかむことができる

以上のことを通して、それぞれの教師がどのような傾向の子供の指導に適しているかが分かり、連携による効果的な指導ができる。

事例研究会が行われる場としては主に生徒指導会議（研修会）や職員会議等が考えられる。事例研究会が定期的に実施できれば、さらに効果的である。

なお、提示された事例研究レポートの管理を厳重にしたり、事例研究会後は事例研究レポートを回収したりするなど、対象児のプライバシーが厳重に守られるように配慮しなければならない。また、事例を提供した指導者が批判されたり責められたりすることのないよう、十分配慮しなければならない。

V 事例研究レポートのまとめ方

最後に事例研究レポートのまとめ方を述べる。

対象児に対して行った指導が、ある程度進んだ時点や終了した時点で、事例研究レポートをまとめる。まとめることは、今までの指導を整理し、見つめ直すことができるだけでなく、今後の指導に生かせる具体的な例として、他の教師にとって役立つものである。事例研究をまとめるときの一例を表2に示す。

表2 事例研究レポートのまとめ方の具体例

1 主題
○問題が何であるか、一目で分かるようにする
○手法や対象等を副主題として書いてもよい
2 対象
○匿名にする ○学年、性別を書く（例 小学校○年男子 A男）
3 問題の概要
○問題の概要を客観的・具体的に、事実に即して書く
4 問題の理解に必要な資料
○観察や面接、検査、指導要録、健康診断など、多方面から収集した資料の中から、理解や指導に直接関係する資料を書く
5 問題の理解
○資料を総合的に検討して、問題の原因・要因などを理解する (どうして問題が発生したか。問題を持続させているものは何か)
○「問題の理解に必要な資料」に基づいて理解する
6 指導方針
○「問題の理解」に基づいて指導方針を立てる
○どのような方法で指導を進めるのかを具体的に書く
○必要に応じて、指導計画の項目を立てて書く
7 指導経過
○「指導方針」に基づいて指導を実践し、その内容を記述する
○記述の基本原則 ①具体性（抽象的な記述を避け、事実を具体的に書く） ②継起性（時間の経過に従って記述する） ③相互性（指導者と対象児とのやりとりと内容について具体的に記述する）
8 まとめと今後の課題
○対象児の問題行動の変容を「問題の理解」「指導方針」「指導経過」と関連付けてまとめる（対象児は変容したか、どの指導がどのように対象児の変容に影響を与えたか、問題の理解や指導方針、実践は適切であったかなど）
○研究の成果で一般化できること、今後の指導に生かせることを書く
○残された課題を記述する
9 参考文献

参考文献

- | | | |
|-------------------------------|------------|---------------|
| 『事例 発達臨床心理学事典』 | 高野清純監修 | 福村出版 (1994) |
| 『学校カウンセリング』 | 真二田 昭編著 | 金子書房 (1990) |
| 『臨床心理学大系 第14巻 教育と心理臨床』 安香 宏他編 | | 金子書房 (1990) |
| 『心理診断と心理治療』 | 山松質文・小花和昭介 | 福村出版 (1980) |
| 『続学校教育相談』 | 小泉英二 | 学事出版 (1978) |
| 『小・中学校生徒指導ハンドブック』 生徒指導実務研修会編 | | 第一法規出版 (1994) |
| 『生徒指導の手引 (改訂版)』 | 文部省 | 大蔵省印刷局 (1988) |

第4節 調査研究

I 調査研究の意義

教育研究における調査研究は、教育の内容や方法等を改善するために、教育の実態や動態、そこにおける諸要因の因果関係、影響や効果などを、科学的、実証的に分析し適切な提言をすることを目的として行われるものである。

辻 功の著書『教育調査法』によれば、教育調査は、問題発見的調査と仮説検証的調査に大別される。

次の図は、辻 功が川喜田二郎の「W型問題解決モデル」を基にして、二つの調査の関連を示したものである。

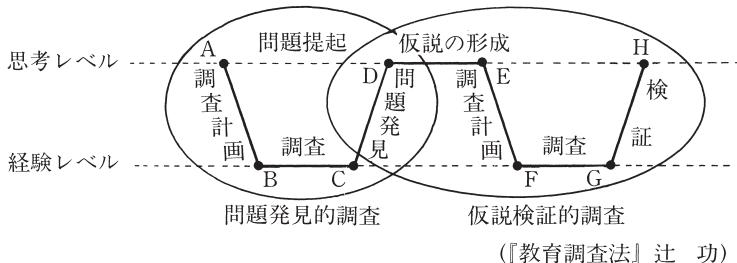


図1 問題発見的調査と仮説検証的調査との関連

表1 問題発見的調査と仮説検証的調査

問題発見的調査	先行研究がなかったり、仮説や推測を立てることが困難な場合、教育の実態や動態を明らかにしようとする調査	調査方法としては、事例的調査と統計的調査がある
仮説検証的調査	対象の変容や、課題の背景や要因などを追究しようとする調査	

問題発見的調査と仮説検証的調査は、それぞれ固有の役割と意義をもつて いる。

「問題発見的調査」と「仮説検証的調査」が連結して行われるとき、実証性のある調査ということができる。

II 調査研究の手順

1 研究目標の設定

調査で明らかにしたい内容の明確化

調査対象の分野・領域を定め、教育の実態や変容、背景や要因など、調査を通して何を明らかにしたいかを検討し、調査の目的を明確にして、調査の内容・方法を吟味する。

具体的には、次のような検討や吟味を行う。

① 教育問題の吟味

直面している様々な教育問題の中から、調べてみなくてはならないという問題を取り出し課題とする。

② 教育問題の構成要素とその関係の予想

先行研究などの事前調査や文献調査を通して、教育問題を構成する諸要素を見いだし、それらの要素の間の関係を予想する。

③ 構成要素の関係をとらえる方法（技法）の吟味

構成要素とその関係を、数量的あるいは質的にとらえられるか検討し、調査方法についての見通しをもつ。

以下に示すのは、「選択教科における開設教科と指導内容・方法、評価にかかる研究」を主題とした目標の例である。

中学校の選択教科における開設教科と、その指導内容・方法、評価についてアンケート調査することにより、選択教科の現状と課題を明らかにして、選択履修幅の拡大と内容の充実が図れるようにするための資料とする。

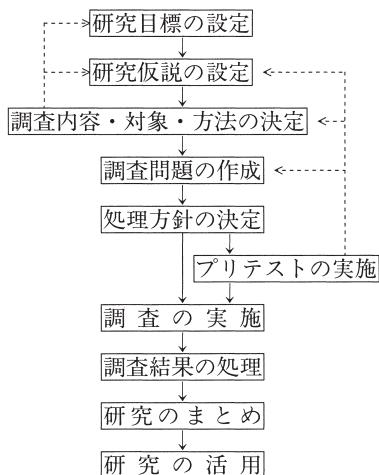


図2 調査研究の手順

2 研究仮説の設定

調査対象の背景や要因の推察

研究仮説は、「ある教育事象はどのような要素から構成され、また、どのような要因がどのように影響を与えていているか」などの予想を検証していくための調査の方向を定めていくものである。

例えば、「Aという事実が変化することにより、Bは○○になるだろう」、「Aという事実は、Bが○○のように作用しているのではないか」など、AとBとの間の相互的ないし一方指向的な関係を設定し、その要素や要因を数量的あるいは質的な変数の関係から予想していくのである。このような予想を立てるためには、文献による先行研究や、これまでの教育実践を基に、自己洞察を加えることが大切である。

なお、教育の実態や問題の事実を発見しようとする問題発見的調査においては、仮説を設定しない場合がある。ただし、調査対象について、先行研究や教育実践を基にした知識があれば、ある程度の仮説や推測は立てられるはずであるので、調査の目的や方向を明確に示すためにも仮説を設定するようにしたい。

3 調査内容・対象・方法の決定

調査内容の構造化と信頼性の得られる方法の吟味

研究仮説を検証するためには、どのような調査内容や調査対象、調査方法にしたらよいかを検討する。

調査内容は、仮説に基づき、何を明らかにしたいのか具体化、構造化する。そして、調査事項を決定する。

調査事項は、全体的な関連図式（全体構造図）として描き、調査の意義と位置付けを明確にしておく。

また、目標を達成するために、だれに対してどの程度の範囲で調査をしたらよいかを吟味し、調査期間を踏まえてどの程度のデータを集めたらよいかを決定する（調査対象、期間・日程、収集量の決定）。

そして、調査方法については、調査内容・対象に基づき、調査の信頼性、妥当性、客観性や効率性の条件を満たす、観察法、面接法、質問紙法等の方法（技法）を選定し、調査時期、調査回数を決定する。

なお、教育の事実を明らかにするために、1回の調査では十分な結果が得

られない場合がある。また、調査内容によって調査を数回実施する必要が生じる。

調査を具体化する際には、次のような視点をもつことも大切である。

- 対照的な集団（学校、地域）を比較し、どのような要因が目標の達成の促進条件、阻害条件になっているかを明確にする（比較調査）。
- 調査対象集団（学校、地域）が、どのような条件の下で、どのような動機によっていつから活動を開始し、今日までに至ったかその過程を追究する（過程追跡調査）。

4 調査問題の作成

調査項目の選定と形式の工夫 調査問題の作成とは、調査技法に基づき、調査事項を精選し、配列していくことである。

その際、次のことに留意して行う。

- ① 調査対象と方法に配慮した問題数や用語の吟味を行う。
- ② 調査問題の各項目が何を求めているか、各項目の間にどのような関連があるなどを十分吟味し、目標に基づいて中核となる項目と背景や関連する項目とを精選する。
- ③ 対象者が回答しやすいことや、処理方法を考慮し、質問・回答形式を吟味して調査問題を作成する。

5 処理方針の決定

調査実施前に見通しをもつ 調査結果の処理は、研究目標と研究仮説によって方向が示される。調査問題の作成と同時に、どのように処理するか、処理方法を選定し、結果の表示の仕方（図表等）及び考察の視点を決める。

6 プリテストの実施

調査内容・方法の問題点の発見 プリテストは、調査問題が調査の意図に合う回答が得られるかどうか、調査項目やその配列、調査方法などの問題点を発見することを目的に、少人数を抽出して行うものである。

7 調査の実施

対象者が負担にならないようにする 正確な調査結果（データ）を得るため、調査対象へ調査目的、期間、回答方法を明確に伝え、対象者の負担にならないように実施する。また、目的や内容によって調査を数回に分けて実施することも考える。

8 調査結果の処理

処理方針に基づくデータ処理・分析 データの有効性を吟味し、処理方針に基づきデータの処理・分析を行う。

データの処理では、有効なデータを集計し、その結果を関連付けてねらいが明らかになるよう図表等に表していく（調査結果の表示の工夫）。分析では、既存の諸研究や資料、過去の調査結果などを活用し、結果を読み取っていく。

9 研究のまとめ

明らかになった事実と課題の提示 研究のまとめでは、分析したデータを基に事実や要因等を整理し構造化して、規則性や原則を導き出す。

その際には、「調査によって何が分かったか」の調査者自身の判断が必要である。そして、判断の結果によって新たな研究方法や内容を提言する。

10 研究の活用

指導と実践的研究に生かす 学校における調査研究は、結果を研究報告書に載せるだけでなく、指導や引き続いて行う実践的研究に生かすようにすることが大切である。

そのためには、調査研究の結果やその意味することについての理解を深めるとともに、今後の指導の改善点を確認する必要がある。

III 統計的調査と事例的調査の方法

調査方法は、統計的方法と事例的方法の二つに大別される。

統計的調査は、対象となる教育事象を数量的に把握し統計処理によって事実や要因等を明らかにする方法であり、大規模（広範囲）な対象を、大量かつ多面的に把握する方法である。

事例的調査

は、ある特定の個人（集団、事象など）を個別事例的に取り上げ、それを多様な角度から観察・分析すること

表 2 統計的調査と事例的調査の長短

	統 計 的 調 査	事 例 的 調 査
長 所	1.結果の客觀性が保証されやすい 2.全体的傾向が把握できる 3.普遍化、一般化がしやすい	1.比較的少数の対象を取り上げるので相互の関連、微妙なニュアンスも明らかにできる 2.時間的な変化も追求できる 3.研究対象の特性も公分母的な形で解消されることなく、生かされる
短 所	1.調査費用がかかる 2.結果が表面的・平板的である 3.結果が得られるまでに長い時間を要する	1.結果の普遍性、一般化の保証が得られない。常に主觀的解釈ではないかとか部分的な調査ではないかという批判を受けやすい 2.全体的傾向がわかりづらい

（『教育調査法』辻 功）

で、その特徴をつかみ、関係する要素や要因をとらえようとする方法である。

統計的調査と事例的調査とを比較すると、前者が大量のデータを多面的に分析し、後者が少数のデータを深く分析して事実や要因等を見いだそうとしたり、前者が数量的な分析、後者が非統計的な記述を主眼として問題を分析するなど、対照的な関係にある（表2）。調査研究は、このいずれかの方法で行うことが多いが、この両者の特性を生かし、互いに補完し合うことによって調査の精度が高まるといえる。

1 統計的調査の方法

調査目的と仮説が設定され、データ収集の方法として統計的な方法が選択された場合、調査は、図3で示す手順で進められる。

このうち、「調査対象範囲の決定」から「調査日程、人員等の決定」までの内容は、図2（p.117）の調査研究の手順の「調査内容・対象・方法の決定」に当たるものである。

以下、図3のア～カについて要点を述べる。

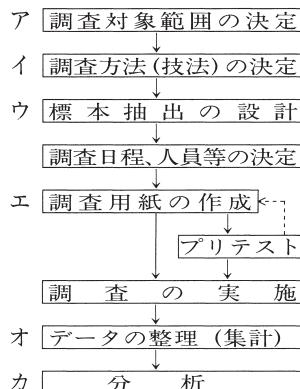


図3 統計的調査の手順

(1) 調査対象範囲の決定

全数調査と標本調査

調査対象範囲の決定は、研究目標や仮説検証のためにはどのような対象を取り上げることが適切か、また、どの程度の範囲を対象に調査することによって把握可能かの2点から検討する。検討の結果、すべて（母集団）を調べる必要が生じる場合と、母集団から一部を抜き出して調査する場合がある。

前者が全数調査（悉皆調査）、後者が標本調査（サンプル調査）である。

調査対象範囲のとり方としては、調査の目的に適合する最大の範囲をとる最大限法、典型的な対象範囲をとる典型法、対比的な複数の範囲をとる比較法がある。

例えば、「○○小学校5年生の児童」という調査対象は、○○小学校5年生の実態をとらえる上では最大限法の全数調査であり、○○市の5年生の実態をとらえる上では典型法の標本調査となる。このように、調査対象は範囲のとり方の違いで対象選定の理由が異なることに留意する必要がある。

(2) 調査方法（技法）の決定

自記式と他記式質問紙調査

調査対象からデータを収集する方法としては観察法、投影技法、質問紙法がある。

以下、典型的な技法である質問紙法による調査について述べる。

表3 質問紙調査の種類と特徴

自記式質問紙調査	留置調査	被調査者に文書で質問し、文書で回答を求める ・被調査者に配布・依頼してまわり、一定の日時後に回収する ・被調査者がゆっくり時間をかけて回答できるが、本人が回答したという保証がない
	集合調査	・被調査者に一堂に集まってもらい、質問紙に記入する ・回収率は高いが、被調査者同士が意識したり、時間を気にして回答を急いでしまう
	郵送調査	・被調査者に郵送し、一定期間に返送してもらう ・広域な調査にふさわしいが、回収率が低い
他記式質問紙調査	面接調査	被調査者に口頭で質問し、口頭で回答を求める ・調査者が被調査者に対面し、口頭質問で回答を聴取・記入する ・細かなことも追加・補足説明でき、誤答を少なくできるが、調査者による質問の意図にズレが生じる場合がある
	電話調査	・被調査者に電話で接触し、回答を得る ・広範囲にわたる調査に適し、本人からの回答が得られるが、回答時間に制約があり、質問量も限られる

（『教育調査法』松原治郎による）

質問紙法は、調査者が、事前に用意した質問を、被調査者に口頭又は文書で質問し、回答を収集する方法で、自記式（直接記入式）質問紙調査と他記式（間接記入式）質問紙調査に大別される（表3）。

調査方法の選択に当たっては、調査目的との適合、対象者又は集団との関係、回答内容の信頼性や制約性、回収状況、調査期限や経費等を総合的に判断して行う。

(3) 標本抽出の設計

全体を推定するサンプリング

標本抽出の設計は、標本調査（サンプル調査）の場合に行われる。

標本調査は、母集団の中から一部をサンプルとして抜き出して調べ、これで全体を推定しなければならない。このようにサンプルが全体を代表するように抽出する方法をサンプリング（標本抽出）という。したがって、サンプリングはサンプル調査に大きな影響を与えることになる。

サンプリングの手順は、次の通りである。

ア 母集団の決定

研究目標に基づき、どのような調査対象として母集団を選定したか、明確にしておかなければならない。

イ サンプル数の決定

標本調査は、母集団の一部の調査であるため、母集団全体の調査結果と必ずしも一致しない。したがって、母集団とサンプルとの差である標本（統計）誤差と、誤差の生じる危険率（サンプルの信頼度）がサンプル数を決める条件となる。

一般的に世論調査では、誤差は3%（=0.03）か5%、信頼度は95%か99%をとる。

サンプル数は、次の公式を用いて算出できる。

$$n = \frac{N}{\left(\frac{\varepsilon}{\lambda}\right)^2 - \frac{N-1}{0.5 \times (1-0.5)} + 1}$$

N : 母集団 ε : 標本誤差
信頼度95%の場合は $\lambda = 2$
99%の場合は $\lambda = 3$

例えば、ある町の小学校5年生500人を対象に、学習に関する調査を行う場合、誤差を3%、信頼度を95%とした時のサンプル数は、 $n=345$ となる。

実際の調査に当たっては、サンプル数によって調査結果にどの程度誤差が含まれるか考慮して分析を進める。

ウ サンプリング方法の決定

サンプリングの方法は、有意抽出法と無作為抽出法に大別することができる。

サンプリング方法で重要なことは、母集団を代表するサンプルをとることである。したがって、母集団の選定を慎重に行うとともに、研究目標に応じてサンプリング方法を選定する（表4参照）。

表4 サンプリングの方法

有意抽出法	調査者が何らかの意図をもってサンプルを選ぶ方法 ブリテストや、対象者に多大な協力を得ようとする場合に有効 典型法：全体を代表すると思われるサンプルを集中的に調査 機縁法：知り合いをサンプルとして調査
無作為抽出法	調査者の主觀を入れずにランダムにサンプルを抽出する方法 単純無作為抽出法：母集団リストの中から乱数表などを用いてランダムに選ぶ方法 系統（等間隔）抽出法：乱数表などでランダムに選んだ後、等間隔（例えば10の倍数）で選ぶ方法 多段抽出法：例えば県下の全学校から、何校かを抽出し、その学校から生徒を選ぶなど、抽出を複数行う方法 層化抽出法：特定の指標（性別、学年、年齢、地域、校種）などによって母集団を分け、この各層から抽出する方法

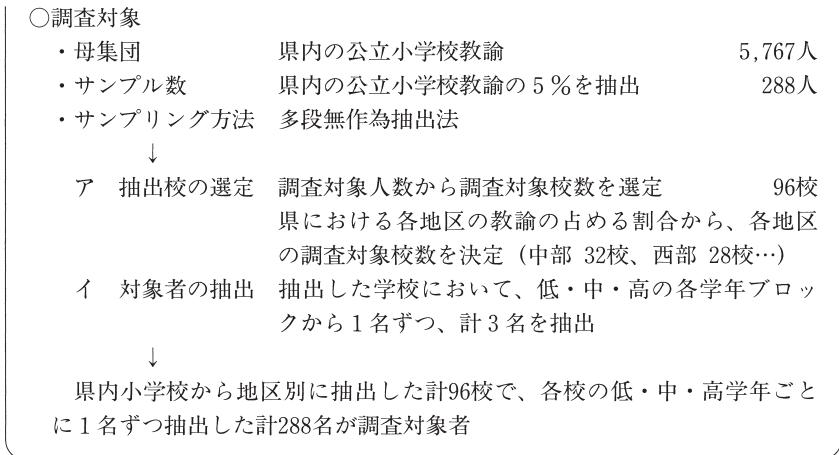
（『教育調査法』松原治郎による）

サンプリング方法は、母集団の構成が異質である場合に重要となり、比較的均質な母集団であれば、それほど問題とならない。実際の調査では、異質な母集団を均質な母集団としてサンプリングしてしまうことがある。調査においては、母集団の構成を吟味し、サンプリング方法を決定する必要がある。

特に、比較調査の場合には、比較対象数に留意するばかりでなく、学年、居住地などの対象者の属性を均質にしておく必要がある。

以下は、標本抽出の設計について、「小学校における指導方法の工夫・改善に関する調査」を例として示したものである。

○調査内容	小学校の低・中・高学年の、目指す授業、学習形態・活動、支援などの授業づくりに関する実態
○調査方法	郵送による質問紙調査



(4) 調査用紙の作成

調査用紙の作成は、プリテストの実施と前後して行う。その手順は、次のとおりである。

調査項目の選択→ワーディング（質問文、回答選択肢の検討・決定）→質問紙の構成とプリテスト→調査用紙の完成

ア 調査項目の選択

調査項目の構造化 調査項目は、基礎データとして必要な調査対象の属性、仮説検証に必要な生活事実や意識等を具体化してリストアップする。仮説検証に必要な項目が網羅され、しかも可能な限り調査項目を少なくするためには、項目間の関連性をとらえるための図式化を行い、項目を調査内容に基づき構造化する。

表5 調査項目の種類

基礎質問項目 (属性質問項目)	性、学年、年齢、校種、居住地など、被調査者の属性を確定する項目で、クロス集計や比較検討の目安となる
事実質問項目	事実、経過、経験等に関する客観的事実にかかる項目
意識(態度)質問項目	意見、態度、価値、感情等にかかる項目

（『教育調査法』松原治郎による）

調査項目は表5に示す3種類があり、調査目的に応じて焦点化する。

また、質問に回答しやすくするために、質問の流れが自然になるよう、導入質問や捨て質問などを組み入れる工夫も必要である。

イ ワーディング（質問文、回答選択肢の検討・決定）

同義に解釈できる
簡潔明瞭な文

ワーディングとは、調査用紙で用いる言葉遣いのことである。

調査用紙を構成する文書と用語は、回答結果に影響を与えるので、簡潔明瞭で、だれでも同じ意味に理解できるよう表記しなければならない。

ワーディングの主な留意点は、以下のとおりである。

(ア) 質問文のワーディング

質問の意図や内容を明確にする。また、教育に関する専門用語や、集団や地域によって意味が異なる言葉は避ける。

① 一つの質問に二つ以上の次元が含まれないこと

「～についてどう思いますか」では、賛否、内容など多様な回答になる。何のどのようなことについて質問しているのかを明確にする。また、選択回答形式の場合には、選択肢に留意する。

② 文章の意味内容が二つ以上の論点を含む質問にならないこと

例えば、「子供が学習に興味を示さないのは、子供の対象へのかかわりの少なさや教師の教材提示の仕方などに原因があると思いますか」は、子供と教師の両方の原因を聞いていることになるので、どちらか一方に限定した質問にする。

③ 回答として求める事柄の時点やレベルを正確に示すこと

例えば、「あなたは普段、どのくらい勉強しますか」では、普段が日曜日や祭日を含むかあいまいである。事実に関する項目は、平常の行動か特定日時の行動かのどちらを聞くのかはっきりさせる。「最近、いつも、将来、」などの語も要注意である。

また、「あなたがよく勉強する教科は何ですか」と「あなたはこの1週間でいちばん勉強した教科は何ですか」とでは、レベルが異なる。

④ 概念的ないし一般的なことを聞くのか、具体的ないし個別的・個人的に聞くのかを明確に示すこと

例えば、「あなたは、お子さんの担任に、もっと宿題を出してほしいと思いますか」と「あなたは、教師がもっと宿題を出すべきだと思いますか」は、個人的な事実と一般的な事実についての質問の違いがある。

⑤ 誘導的な表現は避けること

「あなたは～について賛成ですか」という質問では、回答の多くが「はい」

となりがちになるので、「賛成ですか、それとも反対ですか」と質問するなどして誘導質問を回避する。

(イ) 回答形式、選択肢等のワーディング

- 回答形式は、次の二つがある。

自由回答法（オープン・アンサー）：ありのままの意見が得られる
無回答や予期せぬ回答も多い

選択回答法（クローズド・アンサー）：結果を整理、分析しやすい

- 選択回答法の選択肢は、次のものがある。

2項選択法：「はい、いいえ」「ある、なし」など

評定尺度法：「よい、どちらともいえない、悪い」など

多項選択法：可能なケースを網羅し、重複や次元の異なる選択肢を設けない
回答は、単数回答、複数回答、品等法（順位づけ）がある

例えば、「あなたは、教育に关心がありますか」の質問に、「ある、どちらともいえない、ない」のような評定尺度法による選択肢を設けることがある。これは、質的な内容を量的にとらえようとするもので、選択肢によって被調査者が相互に比較できる「ものさし」を作る。これを、尺度化（尺度構成）という。

ウ 調査用紙の構成とプリテスト

自然に回答できる
ような質問の配列

調査用紙は、質問を一定の順序で配列し、全体としてまとまりを与える必要がある。

質問の配列に当たっては、被調査者に調査に対する信頼・安心感をもたせるよう、質問に自然な流れを作り出すことが大切である。

ここでの留意点は、以下の通りである。

- ・回答者が徐々に関心をもてるように配列する
- ・簡単に答えられるものから徐々に複雑な質問にする
- ・同じ形式の質問はなるべくまとめる
- ・デリケートな質問は、なるべく後の方にする
- ・前後の質問が回答に影響し合う場合は、質問を離して配列する

調査用紙案ができたら、本調査に先立って質問文等の問題点を把握するためのプリテストを行い、修正する。

プリテストでのチェックポイントは、以下のことである。

- ・質問文、選択肢に不備はないか
被調査者に誤解を与えたり、理解できないもの、回答拒否率（無回答や不

定答) の高いものや予期しない回答が出るものなどはないか

- ・特定の選択肢への回答が多すぎたり、逆に全く回答されないものはないか
- ・自由回答法による回答は質問意図に合ったものか
- 本調査に向けて、回答内容から選択肢を作ることもある
- ・調査実施上、他のトラブルはないか

エ 調査用紙の完成

**あいさつ文を加え
体裁を整える** 調査項目と回答形式は調査目的を達成するための根幹をなすものであるが、調査は被調査者の協力なくしては始まらない。したがって、被調査者に信頼と協力を得るため、調査の目的、主体を明記したあいさつ文を作成し体裁を整える。

調査用紙は、次のことを加えて完成させる。

- ・調査タイトル
- ・調査のお願い、あいさつ（調査の目的、主体、連絡先、秘密保持の確約等）
- ・記入上の注意（調査期間等を含む）
- ・おわりのお礼、結果処理の仕方と公表の有無 等

(5) データの整理（集計）

コンピュータを活用したデータ処理 データを統計的に分析するために集計する。集計は、カード等に転記して分類集計する手集計があるが、コンピュータで表計算ソフト等を用いると、度数分布、平均、クロス表などの基礎統計が簡単に作成できる。

集計の手順は、次の通りである。

① エディティング（集められたデータのチェック）

調査用紙の回収数、回収もれのチェック、記入ミス、記入もれ等を点検し、分析に使えるものと使えないものに分別する。調査用紙を識別できるようにサンプルナンバーをつける。（ナンバリング）

② コーディング（符号化）

データを類型（分類）し、コード（符号）化する。自由回答は、一通り目を通して分類し、コードを設定する。大まかな分類で集計すると途中細かな分類に変更しづらくなるので、あらかじめやや細かな分類にしておく。

③ インプット（入力）

④ 単純集計、データチェック

入力完了後データを打ち出し（リストティング）、点検する。そして、度数分布、

平均、標準偏差、最大値、最小値などの単純集計を行う。単純集計で、予想と大きく異なる結果がある場合は、入力、集計ミスがないか確かめる。

多くの統計が相対度数（%）で処理される。相対度数は全体に占める割合であるので、同じデータでも母数によって値が異なることに留意し処理する。また、「無回答」や「わからない」の回答数については、質問意図によって含めるか否かを決める。

⑤ 集計計画の策定（クロス集計等）

クロス集計等を行う際には、集計結果から何を得ようとしているのかを明確にする必要がある。この目的が明確となれば、どの質問項目をどのように集計したらよいかの集計計画が策定できる。

クロス集計では、質問項目とクロスさせるもの（基礎クロス）を決め、集計結果を分析する。さらに、目的に応じて、三重クロスや質問間クロスを行う。

（6）分析

データを全体としてとらえ一般化

統計的手法により得た結果は、集団全体の分布や差を問題として扱うのであり、個々の対象の差を問題にするのではない。したがって、分析結果を考察し、一般化するときに留意する必要がある。

例えば、「大学進学率の高いA高校の生徒の多くは、学校生活に満足している」という結果は、「大学進学率の高い高校の生徒は、学校生活の満足度が高い」とはいえないものである。

また、分析結果が、調査用紙作成の段階で予想したものと大幅に異なる場合は、調査自体や分析方法に誤りがなかったかを確かめる。誤りのないことが確かめられれば、新しい知見が得られたことになる。その際には、その背景や要因の分析を行うことが大切である。

以下は、統計的調査における調査内容、調査項目の設定と、その分析方法について、指定都市教育研究所連盟が「子ども達の目から見た教育的環境への認識」をテーマに行った調査のうち、「家族」についての意識調査を例に示す。

この調査は、全国12の都市に居住し、都市の学校で学ぶ子供たち（小学校4年、6年、中学校2年）を調査対象とし、子供たちを取り巻く「教育環境」を「人」「空間」「時間」「情報」の視点に分け、その視点から子供たちがどのような影響を受け、何を学び、どう自分の中に取り入れ、いかに自己形成しているのかをとらえようとしたものである。

このうち、「家族」についての意識調査では、次のような内容が吟味されている。

- ・「人」を、子供が成長していく中で最も直接的にかかわる環境として「子どもの成長・発達を促進させる環境」ととらえること
- ・子供に影響を与える「人」を、家族（特に親）、教師、友だちの3対象に絞り、その人の「かかわり」→「とらえ」→「深まり」のステップを通して、子供が身近な人から学ぶ意識の過程を探求すること
- ・家族（特に親）については、「かかわり」を「家族との接觸」、「とらえ」を「共感対象となる親の行動」、「深まり」を「親から学ぶこと」としてとらえること

上記のような観点から、次のように調査項目が設定されている。

設問1 あなたが、家族でいちばん大切にしたいと思うことは何ですか。

- ①同じ話題についておしゃべりすること
- ②そろって食事をすること
- ③「ありがとう」や「おはよう」が言い合えること
- ④家の仕事を分担し合うこと
- ⑤思ったことを自由に言い合えること
- ⑥特がない

設問2 あなたが、おうちの人の姿を見ていて、見習いたいと思うのはどんなところですか。

- ①一生懸命働いているところ
- ②家族を大切にしているところ
- ③家族を明るいふんいきにしているところ
- ④趣味やスポーツなどに打ち込んでいるところ
- ⑤地域・学校の活動に参加しているところ
- ⑥特がない

設問3 あなたが、おうちの人がしてくれることで、いちばん感謝していることは何ですか。

- ①困ったときに、相談にのってくれること
- ②いけないことをしたときにしかってくれること
- ③がんばったときに、ほめてくれること
- ④自分の考えを大切にしてくれること
- ⑤兄弟や友だちとくらべないこと
- ⑥特がない

設問4～9 略

設問10 あなたのことを、よくわかってくれていると思う人を順にあげると、次の中ではどれになりますか。

- ①1.家族—2.友だち—3.先生
- ②1.家族—2.先生—3.友だち
- ③1.先生—2.家族—3.友だち
- ④1.先生—2.友だち—3.家族
- ⑤1.友だち—2.家族—3.先生
- ⑥1.友だち—2.先生—3.家族
- ⑦よく分かってくれている人は、特にいない

「人」に関する10の調査項目は、家族（特に親）、教師、友だちの順にそれぞれ三つのステップで配列し、10番目にクロス集計の基礎資料として活用する「子どもにとってのよき理解者はだれか」を質問している。

この配列は、回答する子供たちに、「よき理解者としての家族、教師、友だち」の順位を意識せずに1～9の質間に答えさせたいこと、また、1～9の質問を回答することによって「よき理解者としての家族、教師、友だち」を考えていけるように配慮されている。

さらに、選択肢の最後は、「特にない」を設けている。これは、選択肢①～⑤を「かかわりを求める傾向」ととらえるのに対して、⑥の「かかわりを求めるしない傾向」と位置付け、分析の視点としている。

次に、単純集計とクロス集計の分析と考察について、上記の調査項目のうち、設問1を例に示す。

設問1の集計結果は、図4のように全体と学年別に帯グラフで表し、比較考察できるようにしている。

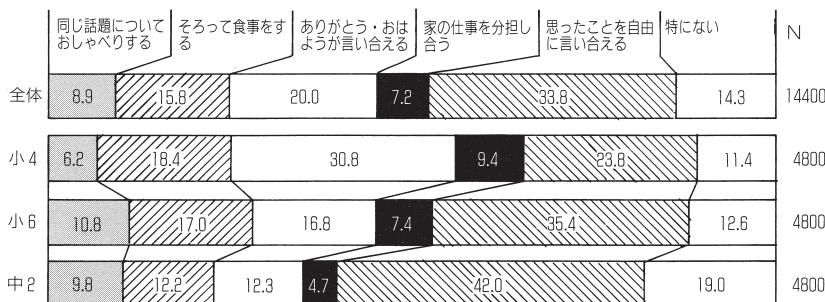


図4 「家族で一番大切にしたいこと」(設問1)
 (『子どもがとらえた教育環境』指定都市教育研究所連盟編)

分析は、学年による差が顕著に現れている「ありがとうやおはようが言い合える」「思ったことを自由に言い合える」と「特にない」の選択肢に着目して行って

いる。その結果、「小6・中2に比べ、小4段階は、一つの約束事を守ることによって、家族の一員としての所属感を得ようとしており、小6以降は、会話を通してのかかわりが「家族の絆を形成する上でより重要な要素となってくる」ととらえている。また、「特にない」が学年進行に伴い漸増していることを「家族離れ」の傾向としてとらえ、「家族にかかわろうとする意識が、思春期への到達結果として低下していく様子」と分析している。

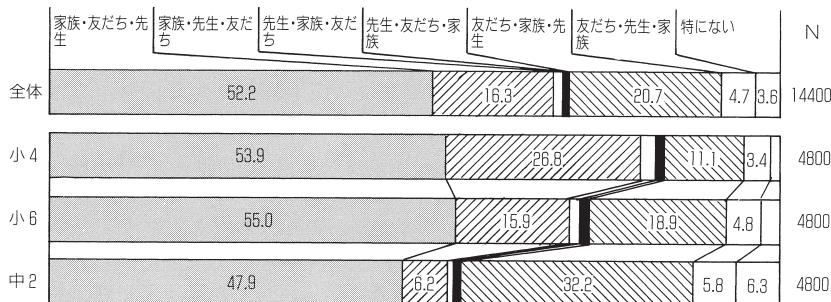


図5 「子どもにとっての『よき理解者』の順」(設問10)
(『子どもがとらえた教育環境』指定都市教育研究所連盟編)

設問10(図5)は、子供の「よき理解者」の対象として、家族、先生、友だちの順位付けの結果を示している。

その結果を、「小中学生の段階では、「よき理解者」として「家族」を第1順位にあげる子供が多いことがわかる。(略)学年が進むにつれて、「友だち」を第1順位に選択する子供の割合が増加していく。また、「理解してくれる人は特にいない」の増加も学年変化の特徴のひとつである。」と分析している。

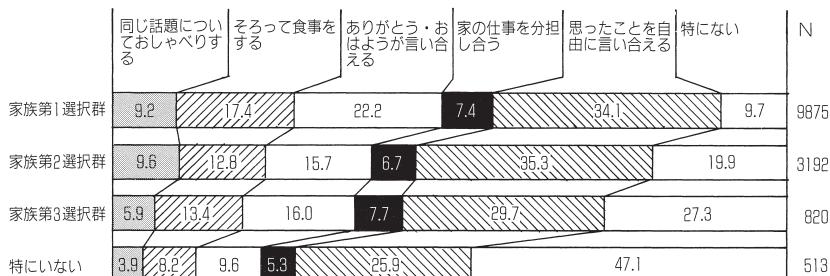


図6 設問1と設問10とのクロス集計
(『子どもがとらえた教育環境』指定都市教育研究所連盟編)

図6は、設問1と設問10とのクロス集計結果である。

設問10で、「よき理解者」として、家族を第1順位で選択した子供を「家族第1選択群」、第2順位を「家族第2選択群」、第3順位を「家族第3選択群」とグループ化して設問1とのクロス集計を行っている。

このクロス集計は、各群ごとの「家族で大切にしたいかかわり内容」の意識傾向を読み取ろうとしたもので、「家族を「よき理解者」に選択する順位が低くなるほど、家族で大切なことは「特ない」、すなわち家族にかかわりを求めようとしない傾向が増加する」ことが明確にとらえられる。また、「理解者がいない」と回答した子どもは、「かかわりを求めようとしない傾向が一層強まっている」ととらえている。

このように、クロス集計によって、単純集計では見えなかった事実をとらえることができるのである。ここにクロス集計を行う意味がある。

最後に、分析結果の考察は、調査研究の目的である「提言」に向かっていかなければならない。このことについて、設問1に関する考察を例に示しておく。

設問1に関する考察

子供の「家族から理解されている」という意識は、家族へのかかわりをより積極的なものにすると認められる。一方、「理解されている」という意識は、会話等のコミュニケーションなくしては生じない意識でもある。そう考えると、子供の家族へのかかわりの欲求は、家族共有時間の確保にその源を求めることができるるのである。

2 事例的調査の方法

事例的調査は、特定の個人又は集団を対象に質的側面の観察や分析を行い、調査対象のもつ個性や変化の過程及びその要素や要因、さらには現象の背後にある深層構造を追究する。

以下、事例的調査における対象事例の選定、事例的調査の技法（データ収集方法）、データ処理と解釈について要点を述べる。

(1) 対象事例の選定

典型的、代表的な
事例を選定

調査の目的にあった事例を選定していくことが大切である。つまり、対象事例が典型的、代表的なものであることが必要である。典型的、代表的な対象事例を選定するためには、選定基準を設定し、その基準を満たすものを選び出す。その方法は、平均的・一般的な事例から、または、特徴が際立つような特殊的な事例から基準に適

したものを選ぶ二つが考えられる。

実際に事例を選定していく際には、事例の類型化を行い、類型ごとに比較が可能な平均的・一般的な（または特殊的な）事例を選ぶ。例えば、県内の小学校を調査しようとする場合、対象となる学校について分析に必要ないいくつかの類型を設定し、類型ごとに小学校を選んでいく。このことは、事例の選定に当たっては、分析も視野に入れつつ、類型比較ができるようにすることが大切であることを示している。

(2) 調査の技法（データ収集方法）

自由面接法と参与観察法

データの主な収集の方法として、自由面接法と参与観察法がある。

ア 自由面接法

自由面接法は、聴き取りと呼ばれるもので、相手に応じ、また状況に応じて自由に質問していく方法である。

面接に当たっては、次のことに留意する必要がある。

- ・あらかじめ対象となる個人、または集団に関する情報を入手し、一定の知識を得ておく
- ・対象者との間に親和感、信頼感をもてるようとする
- ・自然な会話の流れの中で、必要なデータを得られるようとする
- ・調査者の客観的な立場を保持し、議論は避ける

なお、調査者が複数の場合には、聞き取りマニュアルを作成し、一貫したデータが得られるようにする必要がある。また、聞き取りマニュアルの作成は、データの信頼性、客觀性の保持にもなる。

イ 参与観察法

参与観察法は、調査者が調査対象の集団に入り、その一員として振る舞いながら、データを収集する方法である。

この方法は、対象者の思考や行動を観察でき、その集団の活動を通して事実をとらえることができる。

これまでも教師が授業での観察を行い、観察結果を分析する方法を行ってきたが、これからは、子供とのかかわりを重視して、調査者自身が集団の一

員として参加し、そこでの変容に注目していくなど、この参与観察法は広く教育活動に活用していくものと考える。

(3) データ処理と解釈

ア データ処理

信頼性、客觀性のあるデータの図表化

事例的調査で得られるデータは、質的なデータが多い。そこで、データ処理は、データを批判的に検討し、取捨選択する必要がある。つまり、収集したデータすべてを分析処理するのではなく、信頼性、客觀性の得られるものを選んで行う必要がある。また、不正確なデータについては、補充や確認のための調査が必要となる。

面接や観察記録の分析処理は、特に信頼性と客觀性の保持が重要となる。例えば、仮説検証的調査においては、設定した仮説に合わない事實を意図的に排除したり、見落としたりすることのないようにしなければならない。

したがって、データ分析の信頼性と客觀性を保持するために、調査者が問題意識を明確にもち仮説を柔軟に設定したり、複数の人がデータを分析したりすることなどが必要である。

データ分析で主観や恣意的な側面をできるだけ排除していくために、上記のようなことのほか、図表化や類型化が用いられる。

図表化には、因果関係図表、比較対照図表、展開過程図表、組織図等がある。図表化や類型化は、対象の相互関係や因果関係をとらえることができ、事例の全体的・構造的な把握に有効である。

イ データ解釈

データ解釈は、一つの結論を導くことだけを考えるのではなく、データ分析を通して複数の解釈を用意し、その中から妥当性、信頼性、客觀性のあるものを導き出し、場合によって複数の解釈をする。

妥当な解釈を得るためにには、(ア)ブレーンストーミング (イ)KJ法 (ウ)専門家や研究者からの助言 (エ)調査対象者へのフィードバック (オ)類似する調査との照合などの方法が考えられる。

参考文献

- | | | |
|----------------|--------------|---------------|
| 『教育調査法』 | 松原治郎 | 有斐閣 (1985) |
| 『教育調査法』 | 辻 功 | 誠文堂新光社 (1970) |
| 『学校のための教育研究法』 | 藤原藤祐 | ぎょうせい (1989) |
| 『子どもがとらえた教育環境』 | 指定都市教育研究所連盟編 | 東洋館出版社 (2000) |

第3章 実践的研究を支える技法等

第1節 文献とコンピュータの活用

I 文献の活用

1 文献活用の意義

文献による情報の収集

実践的研究において、文献を通して先行研究に触れることは、自分が進めようとする研究を正しく方向付ける上で、重要なことである。これまでに、どのような内容がどのような方法で研究されているか、そして、どのような問題が明らかにされ、どのような課題が残されているなどを知ることができ、研究主題や研究方法をより明確にすることができる。同時に独り善がりの研究になることを防ぎ、時間と労力の無駄を省くことにも役立つ。

また、研究を進めながらも研究報告書や教育専門誌などの新しい文献に目を通すことが大切である。それは、最新の資料を得て内容を充実させたり、時には研究計画や研究方法を見直したりするためである。以下に文献を読む際の留意点を述べる。

○ 基本的な文献を読む

文献ができるだけ広く読むのは望ましいことであるが、まず研究主題にかかわる基本的な文献を精読することが大切である。例えば、いくつかの文献に共通して取り上げられているものや基本図書・辞典類の参考文献に挙げられているものが基本的な文献である。

○ 重要な文献は原典に当たる

引用や抄録でも研究の概要はつかめるが、原文の論旨が正確に伝わらないことや、ときには誤解を生むこともあるので注意したい。

○ 視点をもって読む

文献を読むときは、その研究が科学性、正確性、実証性、客觀性、論理性のあるものであるか、また、独創性、積極性、建設的な内容をもっているかなどの視点が重要である。そして、文献に書かれていることを盲信せず、よく考えながら読む。

2 活用したい文献の種類

(1) 基本的な用語や概念、研究の進め方について

学習指導要領及び学習指導要領解説、文部科学省（文部省）刊行物、教育専門書、教育用語辞典、教育法令集など。研究を進める上では、研究方法についての専門書、調査や統計など必要な技法についての専門書など。

(2) 研究主題、研究内容・方法などについて

同一あるいは類似の研究主題の学校や教育センター・教育研究所の研究報告書、教育専門誌に発表された論文や解説、教育学会などの論文集や研究会資料など。

3 文献の探索

(1) 文献探索の方法

探索方法の使い分け 文献探索には、まず一つの文献を読むことにより別 の文献の存在を知り、それらから更に別の文献を知るという方法がある。この方法は、基本的な文献やその後の進展など研究の流れがつかみやすいという利点がある。これに対して、文献目録を用いて研究主題に関係のありそうなものをすべて調べようとする方法がある。見落としなく調べることができるが無駄も多く、目録ができていない部分についての限界がある。教育にかかわる専門書だけでなく、一般書から研究にかかわる情報を得るために、書誌の目録や書評を活用する方法がある。また、コンピュータを用いた文献探索も有効な手段である。

文献探索には手間と時間がかかるので、上で述べた方法を適切に使い分けて、必要かつ十分な文献探索を行うことが大切である。

(2) 図書館等の利用

文献の探索には図書館を利用するが最も効率的である。広く一般的な分野の書籍を所蔵する公共図書館はもとより、専門的な分野の書籍を所蔵する大学図書館や教育センター・教育研究所等の資料室も利用したい。多くの公立図書館は一般的な分野の書籍を所蔵するため、研究に直接かかわる書籍がないこともある。しかし、研究に関連する書籍から研究全体を包括的に確認したり、研究にかかわる手がかりを捜し出したりすることができる。図書館は、蔵書分野に特色をもたせており、それぞれの図書館の特色を調べてから利用すると効率よく文献を探すことができる。また、図書館ではレファレンスサービスを行っており、書籍にかかわる情報を検索したり、他の図書館との文献貸借を行っているところもある。

なお、文献をコピーしたり一部を引用したりする場合は、原著者の権利を侵さぬよう十分留意しなければならない。

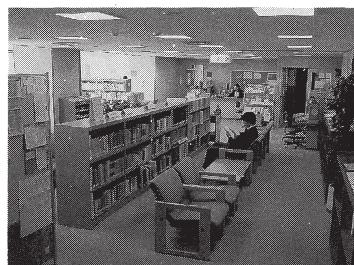
○ 国立国会図書館 (<http://www.ndl.go.jp/>)

国内で刊行された出版物はすべてここに収納されることになっている。

文献に関する情報の検索は、「電子図書館」の中にある「書誌情報の検索」で行える。検索項目は書名、著者名、出版社、件名、年代など細かく指定できるので、目的の文献を瞬時に探すことができる。

○ 群馬県総合教育センターの図書閲覧室

教育関係の資料の収集、作成、提供及び活用を目指して、教育関係図書を中心に教育研究紀要・教育関係研究報告書、教育関係雑誌等をそろえており、レファレンスサービスも充実している。



II メディアとしてのコンピュータの活用

1 教育情報の収集

教育研究を進めるに当たり、効率よく必要な情報を収集するためには、コンピュータを活用することが有効である。具体的には、データベースを活用する方法とインターネットを活用する方法がある。

データベースの活用

コンピュータの普及により、教育研究機関などにおいて教育情報データベースが整備され、さらに、通信機能を利用してすることで、研究に必要な情報を迅速かつ容易に検索できるようになった。

データベースを活用した情報検索には、CD-ROM等を用いる場合と、通信を用いる場合がある。前者は、大容量メディアを用いてコンピュータ上で百科辞典、専門分野の辞典、図鑑等の内容を検索する形態であり、音声や動画の情報も含まれる。後者は、通信により外部のデータベースサービス等を利用する形態である。調査収集したデータをデータベースソフトウェアで蓄積・整理し、個人用データベースとして構築することもできる。

個人用データベースを効率よく活用するためには、目的に即した情報を数多く蓄積・整理しておくことが重要である。

研究成果等のデータベース化

国立教育政策研究所では、我が国における教育情報の全国的な流通を図るために、各種教育情報データベースを構築し、全国の教育関係諸機関での利用に供している。このうち、「教育研究所・教育センター刊行論文データベース」は全国の教育研究所・教育センターの教育研究成果に関する情報を集録したデータベースである。国立教育政策研究所が把握している全国の国・公・私立教育研究所・センター等の教育機関の教育研究成果を1982年度以降、年度ごとに収集・整理し、データベース化している。

インターネットの活用

教育研究を進める上で、インターネットを活用して、教育情報を得ることが増加すると予想される。

インターネット上の情報をより効率的に選択する手段として、ディレクトリサービス（カテゴリー別リンク集）やサーチエンジンサービス（全文検索システム）などがある。

これらのサービスを活用して効率よく必要とする情報を検索するには、研究にかかる関連用語や先進的な研究校、研究機関を統轄する組織などについての基礎知識を整理しておくとよい。

2 データの集計・処理

コンピュータによるデータの集計・処理では、主に、日本語ワードプロセッサ、表計算、グラフ処理、図形処理等のソフトウェアを活用することができる。その際、研究目標や研究内容の構造によって分析の角度や方向が決まってくるので、多面的な処理方法を考えておくことが必要である。

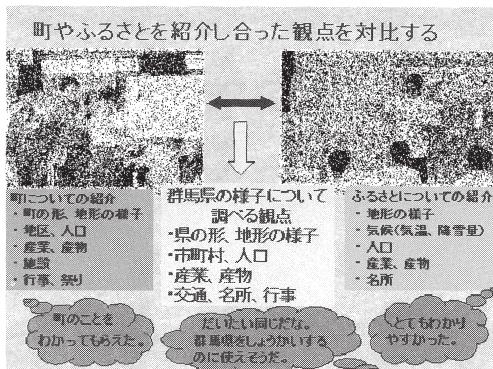
3 研究成果等の表現・発信

(1) プрезентーション機能

プレゼンテーションの方法には、OHP・OHC等があるが、コンピュータでプレゼンテーション機能を活用すると、視覚的に訴えながら短時間で効率よく情報を伝えることができる。それは、言葉で伝えにくい内容も動画等で伝えることができるからである。

特に、プレゼンテーションを支援するためのソフトウェアは各種の情報を取り込んだ上で、文字や図版等の表示の仕方に工夫を凝らしたり、画面切り替えの際に様々な画面効果を加えたりすることができるなど、研究成果を構成・編集する機能（プレゼン

資料1 研究発表にプレゼンテーション機能を用いた例



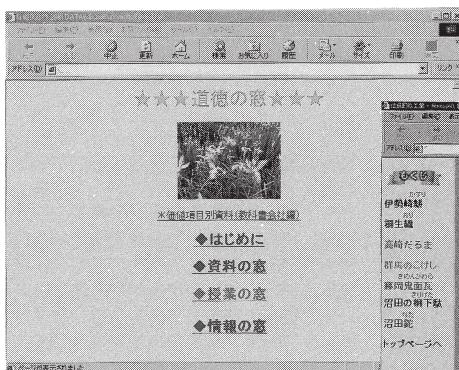
テーション作成機能)を備えている(資料1)。

(2) 発信

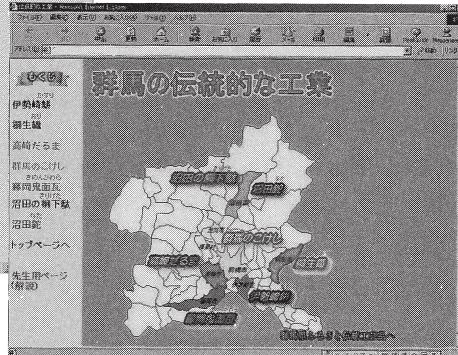
研究成果をコンピュータを用いて発信する一つの方法としてホームページが考えられる。ホームページは、いつでも、どこでも、だれでもアクセスできるので、情報を発信する手段として有効な媒体である(資料2・3)。

ホームページに研究成果をアップロードすることにより、不特定多数の人々に公表することが可能であり、電子メールにより、研究に対する意見を聴取することができる。また、そのことにより、自分自身の研究を広い視野から見直すことができ、研究の発展の糸口が見つかり、深化することができる。

資料2 道徳の窓に関する個人のホームページ



資料3 群馬県の伝統的な工業の研究に関する個人のホームページ



4 コンピュータ活用上の留意点

(1) 著作権の保護

各種ソフトウェアやインターネットで公開されている情報は、著作権などの知的所有権によって保護されている。したがって、このような各種の情報を教育研究に活用する際には、著作権及び著作権法についての理解が大切である。

(2) プライバシーの保護

情報化社会においては、個人が情報の被害者となるだけでなく、加害者となる恐れがある。そもそも、コンピュータを活用して教育研究を進めることは、我々に利便をもたらすものであるが、その取扱いに適正を欠けば、個人の権利を著しく侵害する可能性が大きいのである。そのため、情報が自分や他の人々、社会に及ぼす影響を十分に認識することが必要である。

そこで、教育研究をホームページ上で公開する際には、プライバシー保護のために、子供やそれにかかわる個人情報をデフォルメするなどして慎重に管理することが重要である。

5 教育研究におけるコンピュータ活用の過信

コンピュータやインターネットなどの情報手段は、インターネットを活用した情報検索、ワープロ・表計算・グラフ・データベースなどのコンピュータのツールソフトを活用した情報編集・加工などの様々な役割を果たしているが、コンピュータを活用する際には、以下のような点に留意する必要がある。

○ 情報収集において

インターネットや表計算ソフトを利用すると多方面の豊富な情報（データ）を検索・処理することができるが、コンピュータで検索できる情報、処理された情報がすべてではないことを認識しておく必要がある。

○ 集計・処理において

コンピュータで集計・処理されたデータは、一見、信ぴょう性があるよう見える。しかし、入力ミスのデータを基に集計・処理が行われたのでは、信頼性が損なわれる所以、入念に確認する必要がある。

○ 表現・発信において

研究成果をホームページにアップロードした際には、そのホームページを不特定多数の人が閲覧することを想定して、内容やその表現が適切であるかを十分吟味する必要がある。

第2節 研究技法の活用

I 情報の収集と分析・検討の技法

教育研究において、アイディアをつくり出し実現する過程は重要である。ここではアイディアを収集する技法である「ブレーンストーミング法」、アイディアを収集し、情報を分析・検討する技法として「KJ法」について、その概要を述べる。

1 ブレーンストーミング法

自由な発想でアイ
ディアを得る

ブレーンストーミング (brain storming) 法は、オズボーン (Osborn A.F.) により考案された集団思考によるアイディアを得る技法である。各人が自由なアイディアを出し合って進めていく方法で、様々な分野において活用されている。これは拡散的な思考を促す技法で、新しいアイディアを得るには、それまでの規範や習慣にこだわらずに、自由な発想をしなければならないという主張に基づいている。

研究においては、「問題の発見」や「研究の内容と方法の構想」等、既存の概念に縛られない新しい見方や考え方を必要とする場面で用いることができる。

一般的にはリーダーを含む集団で、次にあげる四つの原則を守って行うことが重要である。

- ほかの人の発言内容を批判しない
- 自由奔放に自分の考えを述べる
- アイディアの量を重視する
- 提示されたアイディアの改善や結合も心がける

参加人員は5～7名が望ましく、時間は30～40分が適切である。効果的に進めるために、また、本題から逸脱しないためにも、テーマは大きすぎず、

具体的であることが望ましい。また、自由に考えを出し合える雰囲気が大切で、そのためリーダーは、“聞き上手、乗せ上手”に徹することが大切である。この技法により教育研究に関するこれまでの既成概念の枠にとらわれないアイディアを生み出すことが可能である。ただし、この技法は、あくまでも、ある問題解決のためのアイディアを得る段階の技法であり、これで問題そのものが解決するわけではない。出されたアイディアの処理や取扱いは、次の段階での問題として残る。

2 KJ法

情報を持続的に組み立てる

ブレーンストーミング法によって出し合われたアイディアは、何らかの構造的なものに組み立てられなければならない。あるアイディアを構造の中に位置付けると、その価値は単独の場合とは異なる別の意味をもつことになる。構造的に組み立てる際に、思考過程の発展を支援する操作の手続きがKJ法である。

KJ法は、川喜田二郎によってつくり出された発想技法である。この技法は、野外科学の必要性から始まったもので、野外で観察した複雑で多様なデータを「データそれ自体に語らせつつ、いかにして、啓発的にまとめたらよいか」という課題が基となっている。

問題解決の過程は、課題をめぐる〔判断→決断→執行〕であるとし、それを詳しく示したのが図1の「W型の問題解決図式」である。思考レベルでの問題意識の発掘確認（A）、経験レベルでの課題をめぐる情報の収集とデータ化（A→B→C）、データそれ自体に語らせつつ、過去の経験を参考にして

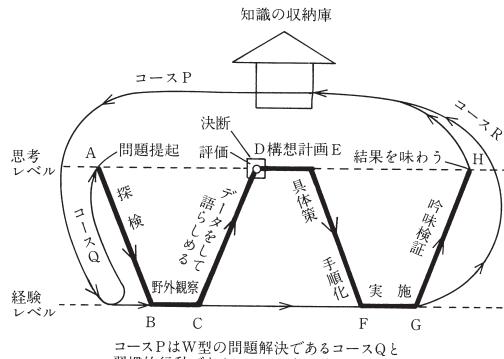
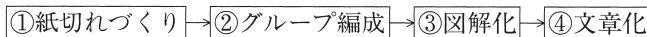


図1 W型の問題解決図式
（『創造と伝統』川喜田二郎）

真の問題点を抽出する現状把握（C→D）、これに自分の立場からの評価を加えた情勢判断（D）、A→B→C→Dの過程（野外科学）を通しての「判断」に基づき、「決断」する。D以後は「執行」でその過程は、〔方針の確定→構想（または目標）の確定→具体策→手順化→実施→吟味・検証→報告書作成〕である。得た結論は知識の収納庫に納められ、必要に応じて検索される。

KJ法には、ラベル作り→グループ編成を経て、図解化（KJ法A型）や文章化（KJ法B型）及び図解化を経て文章化（KJ法AB型）がある。ここでは、KJ法AB型を例に述べる。



① 紙切れづくり

これは課題に関して収集した情報から、その情報のエッセンスを1行程度に表した紙切れを作ることである。

② グループ編成

ここでは、広い場所に並べた紙切れを1枚1枚見て、何らかの親近感のある紙切れを集め、グループを作ることである。そして、各グループごとにグループとして集まる理由を1行見出しで書くことである。

③ 図解化

ここでは、グループ内で紙切れを意味の通るよう配列するとともに、グループ同士の関連を線や矢印で明らかにすることである。

④ 文章化

これは、図解された小さなグループ、または小さなグループが2～3集まつたグループ内にある、紙切れに書き込まれた事柄をつなげて文章化することである。

この方法は四つのステップから構成

され、収集した情報を構造的に組み立て、文章化することにより、課題に対する全体的な取組状況を確認したり、全体を考慮しながら個々の構成要素へ

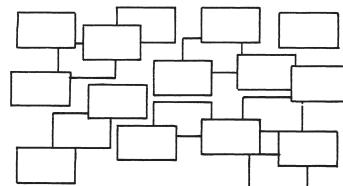


図2 紙切れづくり例

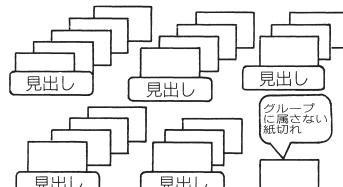


図3 グループ編成例

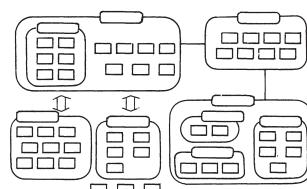


図4 図解化例

の価値付けを決めたり、これまでに欠けていた点を発見したりするなどに役立てることができる。

II 教育・心理の検査技法

学校で用いられる諸検査のうち、主なものとして知能検査、学力検査、性格検査について述べる。

1 知能検査

知能とは、抽象的な思考力、学習する能力、経験によって獲得する能力、新しい環境に適応する能力、人格の行動全体と関連する能力、いくつかの因子で構成されている能力といったように様々な考え方がある。知能検査はこれら的能力を測定するために行う検査である。したがって、知能についての考え方の違いが、検査の内容に影響を及ぼし、様々な検査が作成されていることを踏まえて、研究に用いなければならない。

2 学力検査

学力検査は、教科等に関する関心・意欲・態度や思考力、判断力、表現力及び知識・理解、技能について評価するものであり、教育課程の改善や学習指導に役立てるために使用する。学力検査は、教師作成テストと標準学力検査に大別できる。

3 性格検査

性格検査は、子供のもっている特徴、傾向について客観的な資料を得るものである。性格検査は、質問紙による検査、作業による検査、投影法による検査等があり、一人一人の子供を理解する場合、一つの検査すべてを理解することは難しいので、いくつかの検査を組み合わせて資料を得ることが大切である。

III 教育統計法

1 教育統計法の導入場面と役割

教育統計法は研究過程の次のような場面で導入され、その役割も次のようにになっている。

表1 研究過程における教育統計法

導 入 場 面	目 的 及 び 役 割
研究の内容と方法の構想段階	<ul style="list-style-type: none">○ 学習環境や子供の学力・意識などの実態を把握する○ 学習の成立を阻害している要因・問題点を摘出する○ 指導の手立てを構想する資料を提出する
検証計画の立案段階	<ul style="list-style-type: none">○ 教育統計法の知識が、計画の視点、内容、方法の考察に示唆を与える
研究結果の処理段階	<ul style="list-style-type: none">○ 資料の整理の方法に示唆を与える○ 学力、意識、行動などの実態やそれらの変容の状態を把握する○ 一部のデータから事象全体のもつ事実を推測する○ 事実に裏付けられた判断を可能にする

2 教育統計を適用する際の留意点

教育統計法の適用に当たっては、次の点に配慮することが必要である。

- 適用の目的、内容、対象などを明確にしておく
データの背景には、学力や意識などの標識、子供や教師などの集団がある。学力の実態を、あるいは、変容を調べるために適用しているのかということを明確に把握して、目的や内容に見合った統計法を適用する。
- 統計量のもつ性格を理解する
調査や測定によって得られた数量は真の値か、近似値か、統計処理して得られた値はどんな意味をもった値かを理解して結果の判断をする。
- 統計処理のそれぞれの技法には、特徴や限界がある。それを理解して適用する
- 統計の処理の原則は、集団の特徴を見やすく、分かりやすくすることであるこの原則を堅持して処理の方法なども工夫する。
- 統計的認識は、集団の特徴や集団間の特性を帰納的に把握することであるこのことを念頭において、処理や解釈、判断を行う。

3 集団の特徴を表現する方法

(1) 調査や検査結果の数量化の考え方と方法

統計で扱うデータには、次の2種類のものがある。

デタ
量的データ（テスト結果、技能のスピード、身長など）
質的データ〔意欲、関心、態度、理解の深さ、技能の確かさ、作品〕
の良否など

ア 量的データの数量化

一般的には測定値がそのまま用いられる。例えば採点基準を設定する場合には、次の点に留意する。

- 基本的には、「できた」「できない」にそれぞれ1点、0点を配点する
- 難問などには、感覚的に5点などとするのではなく、解決に必要な要因のそれぞれに1点を与え、解答状況に応じて0点、1点、2点などを与えるようにする

イ 質的データの数量化

質的データも、資料5のように採点基準の明確化や評定尺度的な評価基準によって量的データとして処理することもできる。

意識や態度などを質問紙で

調査した場合は、各選択肢の選択人数によって処理する。

(2) 統計図表の作成と留意点

ア 統計グラフの種類と特徴

データを数量的に整理して表すのに、表やグラフを用いると効果的である。数値データを表にまとめると見やすく、数値と数値を比較することも容易に

資料4 「比例」の理解の深さについての採点基準表

「比例」の理解の深さ	比例の関係にあるものを識別できる	……1点
	言葉や文章で表現できる	……1点
	式で表現できる	……1点
	グラフで表現できる	……1点
	具体例が挙げられる	……1点

資料5 「彫刻の評価」に関する採点基準

彫刻の評価 (表現)	テーマの設定	0 1 2点
	モチーフの構成	0 1 2点
	バックの工夫	0 1 2点
	彫刻刀の使い方	0 1 2点

なる。それは、表には文章では分かりにくいデータの構造や意味を整理して表す働き（機能）があるからである。また、数値が複雑になればなるほど、表だけでは読みきれない情報が出てくる。その点、グラフは全体の概要を視覚化でき、変化や特徴を読み取りやすいという利点があるので、目的にあつたグラフを用いることが大切である。

教育研究で用いられる主なグラフと特徴を表2に示す。

表2 主なグラフの特徴・目的

種類	特徴	目的				
		分布	相関	経過	内訳	比較
棒グラフ	○集団内の各要素（項目）の統計量の大きさの比較がしやすい ○各項目に二つ以上の統計量がある場合の比較がしやすい ○時系列的な統計量の大きさの比較がしやすい	○		○	△	◎
折れ線グラフ	○時系列的な変化の様子、変化の割合などが把握しやすい ○複数の集団などの変化や傾向を比べることができる			◎		○
円グラフ 帯グラフ	○ある事柄の構成比を表現しやすい ○内訳（構成比）の比較がしやすい ○時系列的に構成比の変化をとらえるには帯グラフがよい			○	◎	○
ヒストグラム	○連続変量として考えられるデータ（学力テストの得点、身長など）の度数分布の様子が把握しやすい	◎				
相関図	○2変量(x, y)の間にどのような関係があるのかを調べるのによい		◎			

イ 統計表の一般的形式と留意点

統計表の一般的形式と各部の名称は図5に示すとおりである。各部の内容等について次に述べる。

- ① 表題 表の内容を簡潔に表現する。
- ② 頭注 統計量の単位や集計の基礎（例10%抽出集計）を記入する。
- ③ 表側見出し 空

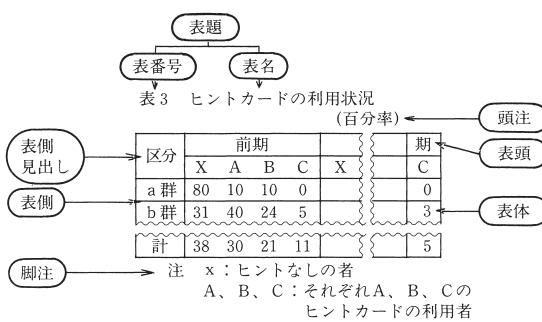


図5 統計表の一般的形式と各部の名称

欄にしないで「区分」と書くほうがよい。右図のように、表側、表頭の見出しを書くこともある。

- ④ **表側と表頭** 何を表側にし、何を表頭にするかは、表現の目的や内容によって異なる。表の見やすさ、比較のしやすさなどを考えて工夫する必要がある。調査項目が要約できないときは表側にもってくる。



- ⑤ **表体** 統計量を記入するところである。実数値、統計処理した数などで表現される。百分率で表すときは、実数の合計を頭注や表側に示すこと。少数は第1位程度で表し、合計は100になるようにする。その他、統計処理した場合には、その式を脚注に示す。

右の記号などを用いて、表体には空欄がないようにする。

- ⑥ **脚注** 表側や表頭の内容の説明や表の出所、あるいは、表体の数字の算出公式等、表を分かりやすくするための説明を記す。

資料6 表体に用いる記号

「—」該当する数字（対象）がない
「0.0」単位未満の値で0とはしない
「…」不詳。調査しなかったときなど

4 子供の変容等を的確に判断するための教育統計法

子供の変容等を的確に判断するための教育統計法について、基礎的な統計値の求め方と各種の検定の方法について述べる。

なお、各種の統計値や検定に伴う計算値をコンピュータの表計算ソフトを使って求めることができる。あらかじめ定義されている関数を使えば、複雑な計算式を覚えなくても、計算に必要な値を入力・指定することにより、計算結果を求めることができる。

(1) 基礎的な統計値の求め方

ア 平均値 集団の中心的傾向を示す値

① 公式1

データの集まりを $\{x_1, x_2, x_3, \dots, x_n\}$ とするとき、

表3 数学・理科の結果表

	A	B	C
番号	番号	数学	理科
1	1	50	47
2	2	47	49
3	3	43	44
4	4	58	43
5	5	55	40
6	6	48	71
7	7	91	88
8	8	71	50
9	9	64	64
10	20	64	54
21	21	47	53
22	22	57	80
23	23	73	52
24	24	69	73
25	25	60	77
26	26	41	53
27	27	30	39
28	28	71	64
29	29	59	85
30	30	79	77
31	31	64	75
32	32	85	68
33	33	51	34
34	34	75	74
35	平均値	58.3	59.2
36	標準偏差	13.7	15.1
37	相関係数	0.63	

$$\text{平均値 } (\bar{x}) = \frac{1}{N} \sum_{i=1}^n x_i = \frac{1}{N} (x_1 + x_2 + x_3 + \dots + x_n)$$

② 表計算ソフトを利用する際に使用する関数

例：AVERAGE（範囲）、@AVG（範囲）等

③ 表計算ソフトを利用した具体例

- ・数学、理科の得点を入力する。
- ・セル B37に AVERAGE (B2 : B35)、セル C37に AVERAGE (C2 : C35) を入力する。
- ・数学の平均値が58.3、理科の平均値が59.2と出力される。

イ 標準偏差 統計的な対象となる値が、その平均値からどれだけ広い範囲に分布しているかを計量したもの

① 公式 2

$$\begin{aligned}\text{標準偏差 } (Sx) &= \sqrt{\frac{1}{N} \sum_{i=1}^n (x_i - \bar{x})^2} \\ &= \sqrt{\frac{1}{N} \{ (x_1 - \bar{x})^2 + (x_2 - \bar{x})^2 + \dots + (x_n - \bar{x})^2 \}}\end{aligned}$$

② 表計算ソフトを利用する際に使用する関数

例：STDEVP（範囲）、@STD（範囲）等

③ 表計算ソフトを利用した具体例

- ・表 3 の資料により、セル B38に STDEVP (B2 : B35)、セル C38に STDEVP (C2 : C35) を入力する。
- ・数学の標準偏差が13.7、理科の標準偏差が15.1と出力される。

ウ 相関係数 二つの特性の関係を判断するときに使用する

① 公式 3

$$\text{相関係数 } (r) = \frac{1}{N} \sum_{i=1}^n \left(\frac{x_i - \bar{x}}{Sx} \right) \left(\frac{y_i - \bar{y}}{Sy} \right)$$

② 表計算ソフトを利用する際に使用する関数

例：CORREL（配列 1, 配列 2）、@CORREL（範囲 1, 範囲 2）等

③ 表計算ソフトを利用する場合の具体例

- ・表 3 の資料により、セル B39に CORREL(B2 : B35, C2 : C35) と入力する。

- ・数学と理科の相関係数が0.63と出力される。

表 3 の資料により、回帰直線の傾きを求めるには、SLOPE (B2 : B35, C2 : C35) と入力する。

④ 相関係数の見方

相関係数は、二つの変量の関連性の度合いを示したものである。

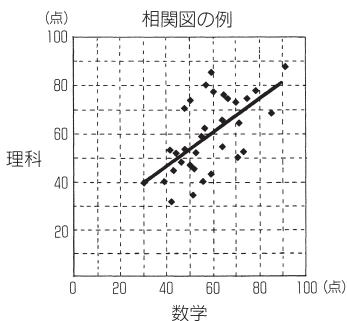
氏名	X	Y
A	x_1	y_1
B	x_2	y_2
C	x_3	y_3
⋮	⋮	⋮
Z	x_n	y_n
平均	\bar{x}	\bar{y}
S·D	S_x	S_y

相関の度合いについて、教育関係などではおよそ、右の表のように判断している。

$r > 0$ ということは、正の相関関係を示している。例えば、数学の得点が高いと理科の得点も高い傾向にあるということである。

表4 r の値と相関の度合い

r (複合同順)	相関の度合い
0.00~±0.20	ほとんど相関なし
±0.20~±0.40	低い相関がある
±0.40~±0.70	相関がかなりある
±0.70~±1.00	高い相関がある



$$r = 0.63 \text{ (1 \%有意, } n = 34\text{)}$$

$$Y = 0.69X + 18.97$$

左の図は二つの変量（数学と理科の得点）の関係について示すもので、二つの内容を示唆する。一つは相関の度合いであり、もう一つは、数学と理科の得点の関係式である。相関の度合いは $r = 0.63$ であり、相関がかなりあるといえる。理科の得点を数学との関係でみた場合、 $Y = 0.69x + 18.97$ という回帰直線で表現される。

(2) 様々な検定の方法

様々な検定方法には、それぞれの特徴があるため、検定したい事柄や検定に必要な条件等を十分考慮して、適切な検定方法で行うことが大切である。

ア 臨界比による検定

この検定は、全国的な測定値と学校での測定値との差があるかどうかや、標準検査や知能検査の結果が全国レベルより上か下かなどの判断をする場合に用いられる。

① 公式 4

$$CR = Z = \frac{|\bar{x} - \mu|}{\sigma / \sqrt{N}}$$

$\left. \begin{array}{l} df = \infty \text{ のときの} \\ t \text{ 分布表で判定} \end{array} \right\}$

μ : 母集団の平均
 σ : 母集団の標準偏差
 \bar{x} : 標本の平均
 N : 標本の数

② 活用例

- ある学年の標準学力検査の平均よりこの学校の同学年の生徒の平均は高いといえるか。

③ 具体例

N 小学校の A 学年男子 20 名の平均身長は、125.3cm であった。その前年度の全国統計によると A 学年の男子の平均身長は 126.5cm で、標準偏差 5.5 である。この小学校の A 学年は背が低いといえるか。

全国の前年度の統計を適用し、公式を用いると CR は以下のようになる。

$$CR = \frac{(125.3 - 126.5) \sqrt{20}}{5.5} = -0.976$$

これは表 5 の 5% 水準、 $df = \infty$ の 1.96 より絶対値が小さいから、 \bar{x} と μ の差は偶然誤差によるとしかいえない。よって結論は、この小学校の A 学年男子の平均身長は全国平均より小さいとはいえない。 $(p < 0.05)$

(『推計学による新教育統計法』岩原信九郎による)

イ t 検定

二つのグループの平均点に有意差があるかどうかを判断するときなどに適用される。この検定を行うことにより、二つの標本が平均値の等しい母集団から取り出されたものであるかどうかを確率的に予測することができる。

① 公式 5

(分散に差がないとき)

$$t = \frac{|\bar{x}_1 - \bar{x}_2|}{\sqrt{\frac{n_1 s_1^2 + n_2 s_2^2}{n_1 + n_2 - 2} \left(\frac{1}{n_1} + \frac{1}{n_2} \right)}}$$

$$df = n_1 + n_2 - 2$$

グループ	
A	B
平均	\bar{x}_1
S・D	s_1
人数	n_1

② 活用例

ある教科の昨年度の 2 学年の平均点と指導に昨年以上の工夫を試みた今年度の 2 学年の平均点とに有意差があるか。

③ 具体例

あるテストで A 組、B 組の結果は表 6 のようであった。A 組と B 組とで差があるといえるか。

$$t = \frac{|53.95 - 45.45|}{\sqrt{\frac{35(19.45)^2 + 17(17.15)^2}{35+17-2} \left(\frac{1}{35} + \frac{1}{17} \right)}}$$

$$= 1.51$$

表 6 A 組と B 組のテストの結果

クラス	平均点	標準偏差	人数
A	53.95	19.45	35
B	45.45	17.15	17

表 5 t 分布表

df \ p	0.1	0.05
1	6.314	12.706
2	2.920	4.303
3	2.353	3.182
4	2.132	2.776
5	2.015	2.571
6	1.943	2.447
7	1.895	2.365
8	1.860	2.306
9	1.883	2.262
10	1.812	2.228
11	1.796	2.201
12	1.782	2.179
13	1.771	2.160
14	1.761	2.145
15	1.753	2.131
16	1.746	2.120
17	1.740	2.110
18	1.734	2.101
19	1.729	2.093
20	1.725	2.086
21	1.721	2.080
22	1.717	2.074
23	1.714	2.069
24	1.711	2.064
25	1.708	2.060
26	1.706	2.056
27	1.703	2.052
28	1.701	2.048
29	1.699	2.045
30	1.697	2.042
40	1.684	2.021
60	1.671	2.000
120	1.658	1.980
∞	1.645	1.960

判定は、 $df = 35 + 17 - 2 = 50$ より、危険率 5 %で考えると、 $df = 50 \quad p \rightarrow 0.05$ で t 分布表をみると、 $n = 40$ と 60との間であるから、表 5 より 2.000 と 2.021との間の数より t 値が大きくなれば差があるとはいえない。ところが $t = 1.51$ より、A 組と B 組との差があるというのは、まだ危険が大きいことになる。 $(p < 0.05)$

従来、ともすると「平均点で 5 点以上離れているとき差があるとした」というような判断をすることが多かったが、この場合は、差が 8 点もあるのに A 組が B 組よりよいとするには、まだ注意が必要であることを示している。

ウ χ^2 (カイ 2 乗) 検定

意識調査などを行ったあと、次のようなことに感覚的な判断ではなく、確かな判断、科学的な判断を下したいというときに、 χ^2 (カイ 2 乗) 検定が用いられる。この検定を行うことにより、仮説が実験によって証明されたかどうかなどを判断することができる。

① 公式 6

右の表から

$$\chi^2 = N \left(\sum_{j=1}^n \sum_{i=1}^n \frac{f_{ij}^2}{T_i S_j} - 1 \right) \quad (df = n - 1 \text{ で判定})$$

右の表で、 A_1 、 A_2 は集団名、 a_i は選択肢の項目、 f_{ij} : A_i の集団で a_j の項目を選んだ数、 T_i 、 S_j は合計数、 $N = T_1 + T_2$ である。

公式 7

上の表で $f_{z1} = f_{z2} = \dots = f_{zn} = T_1 / n = f_e$ とする。

$$\chi^2 = \sum_{i=1}^n \frac{(f_{1i} - f_e)^2}{f_e} \quad \begin{cases} \text{集団 } A_1 \text{だけ調査して、 } A_1 \text{ として意識に特徴があるかを見るとき。} \\ \text{るかを見るとき。} \end{cases}$$

② 活用例

- ・子供と親、小学校教員と中学校教員というような、二つの集団で意識や考え方の傾向に違いがあるか。
- ・研究実践の前後や、1 学期と 3 学期などというように、目的をもった教育実践を含んだ時間の経過に従って、子供の意識の変容が見られたか。
- ・ある意識調査の結果から、このクラスの子供は賛成の意見が強いというように、その集団の意識に特徴が見られるか。

③ 具体例

ある学校で 480 名の生徒に、ある事柄について賛否を聞いたところ賛成 240 名、無関心 130 名、反対 110 名であった。

区分	a_1	a_2	a_3	…	a_n	計
A_1	f_{11}	f_{12}	f_{13}	…	f_{1n}	T_1
A_2	f_{21}	f_{22}	f_{23}	…	f_{2n}	T_2
計	S_1	S_2	S_3	…	S_n	N

表 7 χ^2 分布表

df	P	0.10	0.05
1	2.706	3.841	
2	4.605	5.991	
3	6.251	7.815	
4	7.779	9.488	
5	9.236	11.070	
6	10.645	12.592	
7	12.017	14.067	
8	13.362	15.507	
9	14.684	16.919	
10	15.987	18.307	
11	17.275	19.675	
12	18.549	21.026	
13	19.812	22.362	
14	21.064	23.685	
15	22.307	24.996	

この結果に一定の傾向が見られるか。

$f_e = 480/3 = 160$ で、公式から χ^2 の値を求める

$$\chi^2 = \frac{(240-160)^2}{160} + \frac{(130-160)^2}{160} + \frac{(110-160)^2}{160} = 61.25$$

$df = 2$ で危険率 5 % の χ^2 値は、表 7 の χ^2 分布表から 5.991 である。 $61.25 > 5.991$ より、事柄に対する生徒の考え方には、一定の傾向があると考えられる。 $(p < 0.05)$

IV S-P 表の作成と活用

1 S-P 表の作成

S-P 表は、佐藤隆博の考案による Student-Problem (生徒-問題) の関係を示す得点一覧表であり、テスト内容及び指導内容の特性、クラス集団の学習特性及び子供個々の学力の質的特性を図表的に解析して、指導の改善を図ろうとするものである。縦軸に子供名を、横軸に問題をそれぞれ正答率の高い順に並べ、横軸の交点に正答 = 1、誤答 = 0 を記入する。その結果、図 6 のように表の左上方向に 1 が集まり、右下方向に 0 が集まる傾向となる。この集まり方のパターンから様々な情報を得ることができる。

区分	高(易) ← 問題正答率 → 低(難)
高	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 0 1 1 1 1 得点 ↓ 低
↑ 子 供 (得 点) ↓ 0 0 0 0 1 0 0 0 0 0

図 6 S-P 表の特徴パターン

実際のデータ処理作業は、コンピュータにより行うのが一般的であるが、手作業でも作成することができる。作成の手順は①～⑦である。

- ① S-P 原表の作成
- ② 並べ替え
- ③ S 曲線の記入
- ④ P 曲線の記入
- ⑤ 平均正答率の算出
- ⑥ 差異係数の算出
- ⑦ 注意係数の算出

表8 S-P表の例

番号、名前\設問No.	5	2	4	1	6	7	3	8	正答数	注意係数
3 C	1	1	1	1	1	1	0	1	7	0.44
6 F	1	1	1	1	1	0	1	0	6	0.29
1 A	1	1	1	1	0	1	0	0	5	0.00
4 D	1	1	0	1	1	0	1	0	5	0.53
5 E	1	1	0	0	0	1	1	0	4	0.50
7 G	1	0	1	0	1	0	0	1	4	1.00
2 B	0	1	1	0	0	1	0	0	3	0.47
正 答 者 数	6	6	5	4	4	4	3	2		
正 答 率	0.86	0.86	0.71	0.57	0.57	0.57	0.43	0.29		
注 意 係 数	0.00	0.54	0.74	0.00	0.28	1.12	0.88	0.61		
	差異係数=0.881				平均正答率=0.607					

——はS曲線
……はP曲線

2 S-P表の分析と活用

S-P表を通じた全体的な把握や個別的な把握及び活用について以下に述べる。

(1) 全体的な把握

- 平均正答率：全体としての学習の理解、設問の難易度の程度をつかむことができる。一般的にドリル型は0.75、単元テスト型は0.65、総合テスト型は0.5とされる
- S、P両曲線の型：S-P曲線の型は、テストの種類ごとの分析が必要であり、代表的な型は次のようにある

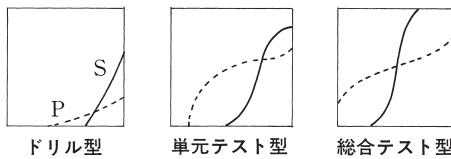


図7 S-P曲線の代表的な型

- 差異係数：差異係数の値は小さいほどよい。ドリル型や単元テスト型では、0.4程度、総合テスト型は0.5程度とされる。値が大きい場合には、学習内容の未定着、発問が不明確、設問の順序が不適切、学習とテストとの時間差が大きい、異なる能力を試したなどの問題点が推測される

(2) 個別的な把握

- 個々の子供の学習診断：個々の子供の通常の反応パターンにない亂れが発生

する度合いは注意係数に現れ、学習・学力の診断の指標となる

- 設問及び指導法の検討：設問や指導の方法についてS—P表から読みとることができる。例えば比較的の上位が誤答し、下位が正答している場合は、何か異質な要素を含んだ質問であると考えることができる

(3) S—P表の時系列的活用

指導の流れに沿った毎回のS—P表を時系列的に整理し、分析することにより、個々の子供の学習状況をとらえて指導を行うことができる。

表9 学習推移表（例）

番号・氏名	内 容 差 異 率 正 答 率 平 均 率 差 異 係 数	日付	5/2	5/10	5/20	5/30	6/10
		式 と 計 算 I	式 と 計 算 II	文 字 式 I	文 字 式 II	乘 法
1 □□□	0.65	0.55	0.62	0.60
2 □□□	0.47	0.56	0.43	0.52
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮

参考文献

- 『新・教育評価法総説』 橋本重治 金子書房 (1976)
『心理テスト法入門』 伊藤隆二他 日本国文化科学社 (1976)
『発想法』 川喜田二郎 中央公論社 (1967)
『統発想法』 川喜田二郎 中央公論社 (1970)
『創造と伝統』 川喜田二郎 祥伝社 (1993)
『問題解決法の知識』 高橋誠 日経文庫 (1984)
『新教育学大辞典 第3巻』 細谷俊夫・奥田真丈他編 第一法規 (1990)
『知的生産のための図解表現ハンドブック』 竹内元一 PHP研究所 (1998)
『心理・教育のための統計法』 山内光哉 サイエンス社 (1987)
『推計学による新教育統計法』 岩原信九郎 日本国文化科学社 (1967)
『S—P表の作成と解釈』 佐藤隆博 明治図書 (1975)

第4章 実践的研究の具体的展開

本章で取り上げた実践例は、今日的な教育課題に基づくものである。掲載に当たっては、各教科等や領域に偏りがないようにした。また、研究方法の特徴が読み取れる部分を中心とした内容にまとめた。そこで、研究方法と関連を図りながら読み進めることで、研究の手がかりとなるようにした。

「総合的な学習の時間」については、研究を進める際の手がかりとなる視点や方法等を述べた。

第1節 教科指導に関する研究

I 問題解決的な学習に関する指導

◆ 実践例1（授業研究）一小4社会一

本実践例は、問題解決的な学習の過程で、身近な地域社会で生活する様々な人々の思いや願い、行動や考えに児童が主体的に出会う活動を取り入れることにより、地域社会の一員としての自覚を促すようにしたものである。具体的には、よりよい地域社会を目指した地域の人々の思いや願いに出会うこと、地域社会で活躍している人や地域社会の発展に貢献した人の行動に出会うこと、自分たちの生活に出会うこと、地域の人々の共感に出会うことで、地域社会の一員としての自覚を促すよう指導を工夫した実践例である。

授業研究を進める際に大切なことは、育成したい資質や能力を目指す子供として構想することである。

本実践例は、「地域の人々の思いや願い、行動や考え方、自分たちの生活、地域の人々の共感」にそれぞれ出会うための活動を、子供の興味・関心に応じて複線化・弾力化し、地域社会へ参画しようとする児童を育てていこうと研究を進めた。また、児童の発達段階から考え方、自覚した姿としてとらえるのではなく、自覚に迫る姿としてとらえたことに意義がある。

地域社会の一員としての自覚を促す社会科指導の工夫

—出会いの活動を取り入れて—

I 主題設定の理由

地域社会は、子供たちにとって身近な学習の場であり、そこには豊富な体験や経験の場が用意されている。子供たちは、地域社会の多くの人々に、じかに触れながら感動や驚きなどを実感することができ、人間の生き方やその心、考え方などを学ぶことができる。このような体験や経験を通して、子供たちは、問題意識をもち、その解決を図る過程で関連する多くの社会的事象に出会う。

そして、社会的事象の共通点や相違点を比較してその特色をとらえたり、社会的事象相互を関連付けたりしながら、自分の生活、社会の成り立ちや仕組みを考えられるようになる。

また、観点を自分から別の立場の人々に移すなどして社会的事象を多面的にとらえることにより、社会的なものの見方や考え方を広げていくことができる。さらに、学習して得た成果を、学校はもとより、家庭や地域社会での日常生活に生かすことにより、社会的なものの見方や考え方は確かなものになり、子供たちの中に協調性や社会性が育っていく。

これからの中等教育の社会科の学習においては、問題解決的な学習を展開する中で、地域教材から学ぶという方向だけでなく、学習した成果を地域社会の発展に役立てていくように努め、地域社会と学校の双方向のつながりを強めていくことが必要である。そして、子供たち一人一人が、地域社会と自分の生活とのつながりをとらえ、地域社会を構成している一員であることを自覚できるようにすることが大切である。

そこで、問題解決的な学習の過程に、身近な地域社会で生活する様々な人々の思いや願い、行動や考えに児童が主体的に出会う活動を取り入れることで、地域社会の一員としての自覚を促すことができると考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

身近な地域の社会的事象を教材に、問題解決的な学習の過程に出会いの活動を取り入れることにより、地域社会の一員としての自覚を促すことに有効であることを実践を通して明らかにする。

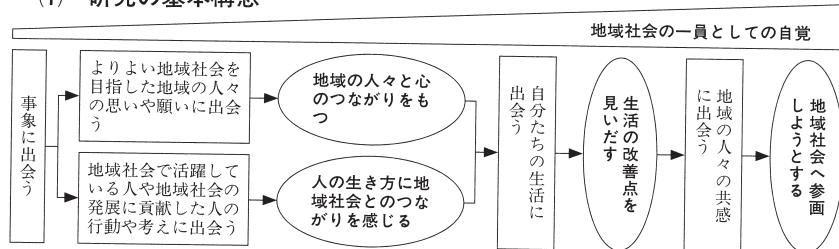
III 研究の見通し

- a よりよい地域社会を目指した地域の人々の思いや願いに出会う活動を行えば、地域の人々が自分と共に生活上の思いや願いをもっていることに気付き、心のつながりをもつだろう。
- b 地域社会で活躍している人や過去に地域社会の発展に貢献した人の行動や考えに出会う活動を行えば、その人々の努力や工夫に気付き、生き方に地域社会とのつながりを感じるだろう。
- c よりよい地域社会づくりという観点から、これまでの自分たちの生活に出会う活動を行えば、よりよい地域社会づくりは自分自身から始められることに気付き、自分の生活の改善点を見いだすだろう。
- d クラスの仲間で考えた地域社会への提案について、地域の人々の共感に出会う活動を行えば、自分も地域の人々と一緒に地域社会づくりに参加することができる存在であると感じ、地域社会に参画しようとする気持ちをもつだろう。

IV 研究の内容と方法

1 研究の内容

(1) 研究の基本構想



(2) 地域社会の一員としての自覚について

地域社会には、豊かな自然や人々がつくり上げてきた歴史や文化がある。地域で暮らす人々は、そこから多くの恩恵を受ける一方で、新しい地域社会づくりの担い手としての役割をもっている。そこで、本研究では、地域社会の一員としての自覚に迫る子供の姿として、表1に示す四つを考えた。

地域社会の一員としての自覚が高まった状態の子供は「自分たちのまちは自分たちがつくっていることが分かり、地域社会の構成員として、よりよい地域社会を目指して地域の人々と共に生きていこうとする子供」である。このような子供を育てるには、自ら地域社会の成り立ちや仕組みなどをとらえるとともに、地域社会の課題に気付き、

その解決を考えていく学習を展開することが必要である。そして、この学習を通して、同じ地域に暮らす人々と自分に共通する思いや願いを見いだすこと、地域社会で活躍している人や過去に地域社会の発展に貢献した人の努力や工夫と現在の生活とのつながりをとらえること、自分の生活を振り返ること、地域社会への参画を考えることが大切であると考える。

(3) 出会いの活動について

地域社会の一員としての自覚を促すには、学習活動の中で地域の諸事象や地域の人々と繰り返しかかわることが有効である。このことにより、子供たちは、地域の人々の思いや願い、努力や工夫などを具体的にとらえることができ、人の生き方に触れたり学んだりすることができる。また、地域や地域の人を身近に感じることができ、自分も地域の人々と共に地域社会をつくり上げていくことができる存在であることに気付くことができる。そこで、地

表1 自覚に迫る子供の姿

地域の人々と心のつながりをもつ 同じ地域で暮らす人々が思っている地域のよさや、よい地域社会を願って改善したいと考えている地域の課題が、自分の思いや願いと共通していることに気付いている。
人の生き方に地域社会とのつながりを感じる 地域社会で活躍している人や過去に地域社会の発展に貢献した人の努力や工夫が社会的事象としてとらえられ、人々の生活を豊かにしてきたことに気付いている。
生活の改善点を見いだす 日常生活の中で、自分がどんな努力や工夫をすれば地域社会の課題を克服し、よりよい地域社会が実現できるのか考えている。
地域社会へ参画しようとする 自分たちが考えた生活上の改善が、よりよい地域社会づくりにつながることに確信をもっている。

域社会の一員としての自覚を促す本研究では、図（p.59参照）のような出会いの活動を取り入れることとした。

2 研究の方法（p.66参照）

V 研究の展開

- 1 単元名 「多々良の大地をひらく」
- 2 単元の考察（略）
- 3 目標及び評価規準（略）
- 4 指導計画（18時間計画）（p.74参照）

VI 研究の結果と考察

1（略）

2 郷土史家や多々良沼土地改良区の人の話を聞き、先人の行動や考えに出会うことで、人の生き方に地域社会とのつながりを感じることができたか
児童は、郷土史家の飯塚さんと多々良沼土地改良区の福田さんから話を聞き、質疑を重ねた。その中で、松林や下休泊堀、多々良沼の干拓などについての学習課題を解決する

とともに、先人の営みに目を向けていった。そこで、開発に携わった先人の努力や工夫に触れた感想を取り上げ、「大谷休泊・村の衆・福田さんはなぜえらいのか」問いかけた。児童は活発に意見を交わし、先人の努力や工夫が人々の生活を豊かにしてきたことに気

資料1 Aの先人に対する考え方の深まり

飯塚さんの話	飯塚さんとの質疑	福田さんの話
当時は食料が少なく人々は貧しい暮らしをしていた。豊かな土地が必要とされた。	ここには豊かな土地がなく、川を掘って田を増やすと考えた。そのおかげで今では群馬の米所となった。	50年ほど前に自分たちで土手をつくって沼を干拓し、堀を大きく掘って多々良川をつくった。
田んぼに水をやり、田を増やすために大谷休泊が逆川や松林を考えた。		
福田さんたちは大谷休泊くらいえらい。昔もがんばったなあ。		
連んだのは村の衆だから同じくらいえらい	大谷休泊は朝から夜まで働いた→ ←大谷休泊は才能があった	大谷休泊は人々のために働いたからすごい。 ←休泊一人ではできない
大谷休泊はよく考え、人々の仕事にも協力した。村の人々は暮らしをよくするためにがんばった。福田さんたちは多々良川がないと人々が困るためにつくった。この人たちは地域の人々のためにやって成功した。みんなとてもえらい人だ。		

付いていった。

Aは、「休泊はなぜ逆川をつくったのか」という学習課題をもって話を聞き、資料1のように解決していった。二人の話や質疑を聞く中で、先人の営みへの関心が次第に高まり、休泊と福田さんたちの行動を比べていた。

そして、休泊に重きを置きながら、地域社会づくりへの努力に共通点を見いだした。その後の話合いで、友達の意見を受けて、「休泊は人々のために働いたからすごい」と発言し、休泊の熱意に感心していた。さらに、友達の考えを取り入れ、それぞれの先人の業績について考えをまとめた。この活動から、Aは休泊や村人や多々良沼土地改良区の関係者の行いが地域社会づくりに役立っていることをつかむことができ、先人の生き方に地域社会とのつながりを感じることができたと考える。

3 (略)

4 多々良沼や松林一帯の在り方の提案について地域の人々の意見や感想を聞き、地域の人々の共感に出会うことで、地域社会へ参画しようとする気持ちをもつことができたか

多々良沼や松林一帯の在り方についての考えが近い友達とグループをつくり、自分たちの提案をパンフレットにまとめた。パンフレットは学習でかかわった地域の人々と市役所公園緑地課へ配布した。地域の人々から多くの意見や励ましが寄せられ、中には、子供たちに協力したいという声もあった（資料2）。パンフレットに対

資料2 Aのグループへの意見や感想

地域の人々から	<Aのグループ>
・自分のごみは自分で持ち帰るという立て看板はよい	
・えさやりはよい。他の公園に鯉のえさやり場があり楽しい	
・もっと多くの人に楽しんでもらえるだろう	
・近くに住む私も川の水を汚さないようにしようと思う	
公園緑地課から	
・ごみは持ち帰りが基本と考えている	
・水をきれいにするには一人一人の心がけが大切だ	
・人が来れば駅も大きくなりタクシーも増えるだろう	
・売店やえさやり場を望む声が多くなればつくられるだろう	
そのままの方がいいという考え方もある	
友達の発言	
・えさやり場はない方がいい	
・白鳥と親しめるので必要だ	
福田さんから	
・きれいな沼をという気持ちに感心した。がんばってほしい	

する返事を読み合い、そして、公園緑地課の方と福田さんから直接意見を伺った。最後に「地域の人々の期待は何か」を問いかけ、地域の人々の意見や感想に対する考えをまとめた。

Aのグループは、多々良沼の観光地としての活用をテーマに、自分たちでできることとして「白鳥のえさやり・ごみ拾い・町の人と一斉清掃」を、お願いとして「多々良駅とタクシー乗り場の改修・えさやり場設置・公園の出入り口や売店づくり・多々良沼の水質改善・ごみ捨て防止の立て札設置」を提案した。そして、多くの賛成意見とともに実現の難しさについての意見も寄せられた。Aは自分たちに対する意見だけでなく、他のグループに対する意見や友達の発言にも着目していた。最後に、地域の人々や市から寄せられた意見から、資料3のように考えをまとめた。

この活動によって、Aは多くの困難を感じながらも、地域社会づくりに貢献した人々の後継者としての立場を意識し、地域社会づくりへの参画に期待感を高めたと考える。

資料3 Aのまとめ

ほくは今まで、「多々良の大地をひらく」というんなことき
学習したけど大谷休泊村の家・福田さんたちのつぎはほく
たちだと思いいパントレットにいろんなことを書き家の人間に
返事をかりてもらた。よんでもみると、はけましがあった
り注意があたり、まうかはよし書いてあつたりしてあり
うけつけができるな気がうえてきました。
ほくはこの学習をしてそういうことはむりかなと
思っていたけどだんだん人にひひようをこえそう
になり今まで一度もけりけんしたここのない
ことがいろいろなのがしそうだと思いました。

VII 研究のまとめと今後の課題

- 出会いの活動によって、児童は、地域の多くの人々と交流でき、興味・関心をもちながら触れ合いのある学習活動を展開することができた。特に、人との出会いにおいては、その人の表情や動作などから、直接、気持ちや考え方などを感じ取ることができた。このような活動を通して、地域社会の発展に貢献してきた人や地域社会で生活している人の営みを、より一層共感的に理解し、同時に、自分もその地域社会で生活する一人であることに気付いていった。このことは、児童が地域社会を自分の生活の基盤としてとらえたことであり、地域社会の形成者としての自覚を促すことができたと考える。

- 出会いの活動は、学んだことを自分たちの生活に生かし、さらに、地域

の人々と一緒によりよい地域社会の在り方を考えていくところに重点を置く。児童は、地域の問題には自分たち自身の生活に起因するものがあることを知り、自分たちの生活の仕方を変えようという意欲をもつことができた。また、地域社会への児童の提案から、地域の人々は、子供たちの新鮮な発想に喜びや驚きを感じ、子供たちの存在を改めて見直していた。このことは、地域社会に共に生きる仲間であるという意識をもち、進んで地域にかかわろうとする態度を育てる上で有効であり、これからも一層推進すべきであると考える。

- 出会いの活動は、地域の一員としての自覚に迫る四つの要素の育成をねらうものであるが、出会いの順序や組合せは取り上げる学習単元によって異なると考える。それぞれの単元における出会いの活動の組立て方について、今後も検討を重ねていく必要がある。

II 体験的な学習を取り入れた指導

◆ 実践例 2（授業研究）一小4国語一

本実践例は、経験したことを書く学習に「まんがシート」という体験的な活動を取り入れ、喜んで表現しようとする意欲を育てる「書くことの指導」の工夫をしたものである。具体的には、取材の過程において、材料を集める活動を通して中心点を明らかにし、構想の過程において、場面を組み立てる活動を通して伝えたいことがよく表せるような文章構成を工夫することで、子供一人一人が、自分の力で文章を書き上げる楽しさを実感できるよう指導を行った実践例である。

授業研究を進める際に大切なことは、目指す子供を明確にし、どのような手立てを設定するかである。

本実践例は、「喜んで表現する」という気持ちを、表現している様子や、完成させたことで得る成就感としてとらえ、自発的にしかも工夫を積み重ねることでうまく書けるようになるという実感の得られる学習活動を設定した。また、子供の発達段階から考え、文章構成を「まんがシート」に順序を付けたり仲間分けしたりできるようにしたことに意義がある。

喜んで書く子を育てる書くことの指導 —取材、構想過程に「まんがシート」を取り入れて—

I 主題設定の理由

(前略)

子供たちは、話すことに比べて書く活動をあまり好まず、その内容は事柄のつながりや時間の流れに飛躍や乱れのあるものがみられ、せっかくの貴重な楽しい体験や発見などの経験が適切な方法によって十分に表現されないことも見受けられる。それは、従来の指導において「何を書いたらよいのか」「どのように書けばよいのか」という点における指導が十分ではなかったからではないかと考える。

書くことの指導においては、子供自身が書くことを見付け出し、相手に伝達する喜びを感じて意欲的に表現活動に取り組めるようにすることが大切ではないかと考えた。そのためには、子供たちが、たくさんの楽しい体験の中から自分の最も伝えたいことを見付け出し、焦点化し、事柄の順序を整理して相手に伝えられれば、表現したいという欲求が文章という形になってまとまりをもって伝達され、書くことの喜びを感じることができるのでないかと考える。(後略)

II 研究のねらい (p.37参照)

III 研究の見通し

- 1 取材の過程で、印象に残った場面を「まんがシート」に書き留める活動を取り入れれば、材料を集める楽しさを感じながら伝えたいことの中心を焦点化することができるであろう。
- 2 構想の過程で、書き留めた「まんがシート」の順序を入れ替えて文を組

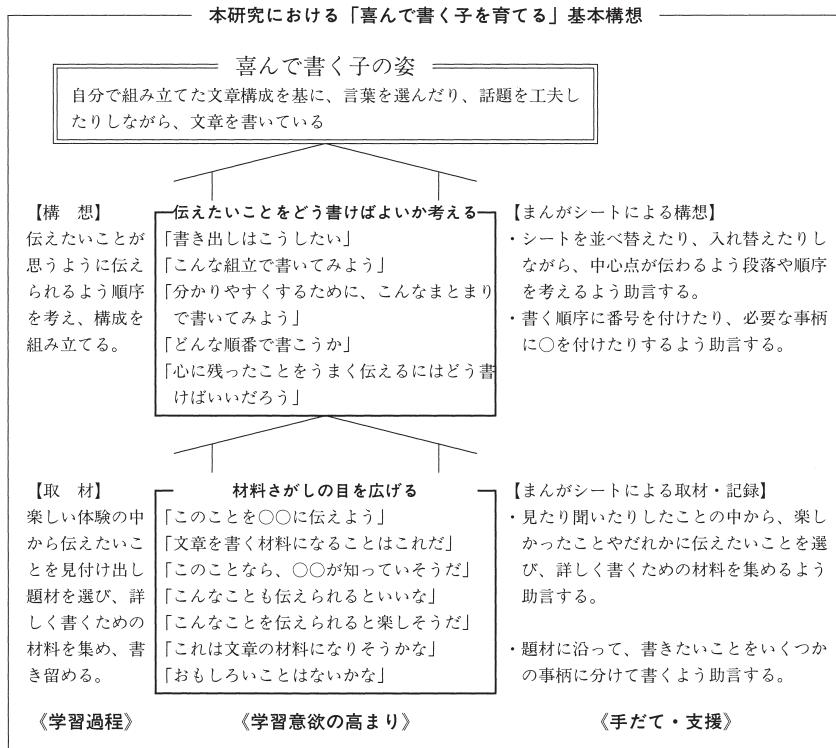
み立てる活動を取り入れれば、場面を組み立てて構成する面白さを感じながら、段落と段落の続き方を工夫した文章構成を考えられるであろう。

IV 研究の内容と方法

1 研究の内容

(1) 喜んで書く子とは

「喜んで書く子」とは、書くことが楽しいと感じたり、自分の思いや気持ちを相手に伝えようとするとき、自分の考えや経験したことを振り返ってみようとしたときに書くことは役に立つと感じたりするというように、表現の過程や完成に成就感を得、伝えたいという思いを言葉や文章で表現することを楽しんでいる姿ととらえたい。



(2) 「まんがシート」を取り入れた意義

喜んで書く子を育てるには、表現活動に親しみをもって自発的に書こうとする意欲を育てることが大切である。そのためには、子供自身が「書く材料はどこにでもある」、「書く機会はいつでもよい」、「自分の思っていることを表現するのは楽しいことだ」、「書くことを積み重ねていけば、自分もうまく書けるようになる」、という実感を味わえる学習活動を工夫する必要がある。それとともに、「何のために、何を材料として、どういう計画で書くのか」という目的や方法を明確にしておく必要がある。そこで、日常生活で慣れ親しんだまんがの手法を用いた構成表を使って文章を書く活動を考えた。

「まんがシート」とは、1枚のシートに、「したことや見たこと、人の動きを絵や符号や記号、話したことや思ったこと」を吹き出しや文で表し焦点化していくものである。これは、子供たちが親しんでいる、1コマのまんがに当たる。1枚1枚を取材メモに用い、これを組み合わせることで構想メモとして使うことができるのである。

体験したことを思い起こすときには、まず、一瞬の場面を頭に思い浮かべ、その時の行動や気持ちを言葉でなぞっていく。この経験を文章に表すときに、「まんがシート」に描いた絵や吹き出しを手がかりにすれば、書くことが容易になる。多くの子供が「これならきっと書ける」という意欲や、「どう書けばよいか」という表現の仕方について見通しをもつことができるのである。子供たちは、学習の筋道が見えることで主体的に表現活動に取り組もうとするであろうし、シートを並べ替えたり、組み替えたりしながら、文章全体の構成や構造を視覚的にとらえることで、全体を見通した文章を組み立てる力を養うことができる。しかも、1コマごとに書く事柄を整理することができるので、中心点をはっきりさせ、段落と段落の続き方をとらえて表現するのに有効である。そのうえ、このような一連の書く活動を、子供が自分の力でやり上げるよさを実感できる。

以上のことから、「まんがシート」を組み合わせて文章構成を工夫することは、喜んで書く子を育てる書くことの指導を行うために価値あることと考

える。

2 研究の方法 (略)

V 研究の展開 (略)

VI 研究の結果と考察

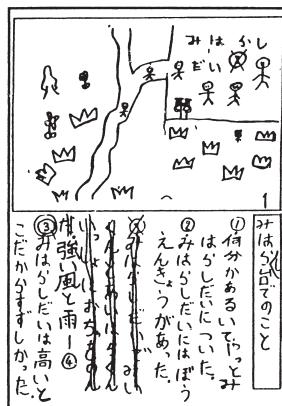
1 取材の過程で、経験したことから印象に残った場面を選び、「まんがシート」に書き留める活動を取り入れたことで、書く材料を集める楽しさを感じながら伝えたいことの中心を焦点化することができたか

(前略)

生活の中で心に残ったことや文章に書きたいと思ったことを、題材集めのための「まんがシート」に記録し、その中から一番伝えたいことを選んで、詳しく書くための材料を集める学習を行った。まず、1枚のシートに、したことや見たことや思ったことを絵や文や吹き出しや符号などで書き表すよう助言した。Aは「遠足」という題材で、見晴らし台でのこと、散策コースの小さなあな、展望台が見えてきた、バスの中でのこと、と経験したことを4枚のカードに絵や吹き出しや文で書き留めた。これを基に詳しく作文を書いていくには何を中心にして書いていけばよいか考えられるよう、シートにメモした事柄の中で最も言いたいことに◎を付けるよう助言した。Aは、資料1のように見晴らし台のことの中の「・みはらしだいは高いところだからすずしかった」を中心点に選び◎を付けることができた。

これらのことから、まんがシートを取材に使うことで、経験したことの中から書きたいことを選び出すことが容易になり、また、絵や吹き出しなどで表すことで、これを手がか

資料1 Aのシート1



りにして事柄を思い出してメモすることができ、さらに、楽しみながら材料を集めることで一番言いたいことを明らかにすることができたと考える。

2 構想の過程で、「まんがシート」に表した材料を順序を入れ替えて文を組み立てる活動を取り入れることで、場面を組み立てて構成する面白さを感じながら事柄の順序や段落と段落の続き方を工夫した文章構成が考えられたか

(前略)

一番言いたいことが読む人によく伝わるような文の組み立てを考える学習を行った。まず、取材のための「まんがシート」に書かれているものの中で不要なものは省き、どんな順序に書いていくか番号を付けた。Aは、4枚のシートを読み直して3枚にし、資料1のように必要な事柄とそうでない事柄を区別するために文頭に○×を付けたり、――で消したりした。また、資料2のように、吹き出し

によってその時の気持ちを書き出した。そして1枚のシートに書いた事柄に順序を付けた。次に、それぞれのシートを並べ替えて文のまとまりと書く順序を決め、「1 みはらし台のこと、2 さんさくコースの小さいあな、3 てんぼう台がみえてきた」というように、場所と時間の流れに沿って順に番号を付けた。このように、最も伝えたいことをどの部分に位置させればよいかを考え、全体の組立てを工夫することができた。

これらのことから、構想の過程で、「まんがシート」に表した材料を順序を入れ替えて文を組み立てる活動を取り入れることで、場面を組み立てて構成する面白さを感じながら、事柄の順序や段落と段落の続き方を工夫した文章構成を考えることができたといえる。

資料2 Aのシート2



VII 研究のまとめと今後の課題 (略)

◆ 実践例 3（授業研究）一小5図画工作一

本実践例は、小学校高学年における鑑賞指導において、美術作品の特徴をまねて描く活動を通して、一人一人が自分なりの見方に基づいて美術作品に親しめるようにしたものである。具体的には、美術作品の特徴をまねて描いたりすることにより、美術作品の特徴に気付いたり、その特徴を体験的に感じ取ったりしながら、美術作品に対する見方や感じ方を深めようとした実践例である。

授業研究を進める際に大切なことは、研究仮説の有効性を質的な変容から検証していくことである。

本実践例は、基本構想図で具体的な子供の姿を明確に示している。検証においては、手だてとして具体化した活動において、子供が作品にどのように取り組んだのかを表に整理したり、観察に基づいて子供の考え方を記述したりしながら、子供の変容をとらえていることに意義がある。

美術作品に親しむ指導の工夫

—作品の特徴をまねて描く活動を通して—

I 主題設定の理由 (略)

II 研究のねらい (p.37参照)

III 研究の見通し

- 1 美術作品を、色・形・モチーフなどの観点で比較し仲間分けを行えば、それぞれの作品の特徴に気付き、興味・関心をもつことができるであろう。
- 2 気に入った美術作品の特徴をまねて自分なりに工夫した作品を製作すれば、基にした作品の特徴を体験的に感じ取り、見方や感じ方を深めることができるであろう。

IV 研究の内容と方法

1 研究の内容

(1) 美術作品に親しむとは

美術作品に親しむとは、美術作品の特徴などに気付いていくことにより、美術作品に興味・関心をもち、自分なりの見方や感じ方を深めていくことである。子供たちは、様々な美術作品に触れたり美術作品を比較しながら見たりすることで、それぞれの作品の特徴に気付き、興味・関心をもつことができるであろう。また、友達の多様な見方や感じ方に触れたり表し方をまねたりすることによって、初めに自分が美術作品に対して抱いていたイメージや初めて美術作品と出会い、受けた印象などとは違ったよさなどを発見し、美術作品に対する自分なりの見方や感じ方を深めることができるであろう。本研究における「美術作品に親しむ」とは、生涯学習における鑑賞活動の基盤を作ることであり、子供たちが、生涯にわたって美術を愛好し、気軽に画集を広げたり、美術館に自ら進んで足を運んだりできるようになることへ発展していくための基盤であると考えている。

(2) 美術作品の特徴をまねて描く活動の基本的な考え方

ア 美術作品の仲間分け

美術作品の仲間分けとは、様々な美術作品の共通点や違いを比較することにより、それぞれの作品の特徴に気付いていく活動のことである。最初に、作風の異なる印象の作品から共通点を探し、次に、共通点のある作品から違いを探し、一つ一つの作品独自の特徴について考える活動を設定する。このような活動により、子供たちは、初めの見方とは異なる観点から作品を見るようになり、多様な観点から美術作品の特徴に深く迫ることができると考える。子供たちは、この仲間分けの活動に友達と一緒に取り組むことにより、自分だけでは気付けなかった美術作品の特徴に多く触れることができ、作品に対する興味・関心を高めることができると考える。

仲間分けの対象となる美術作品は、子供たちに知名度の高い作家の作品を中心に、表現の特徴が顕著なものを取り上げる。本研究では、子供たちが、

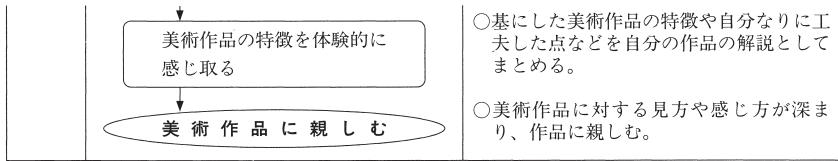
色・形・モチーフなどの観点を基にして、特徴が比較できることに配慮しながら、子供たちへのアンケート結果を基に、8点の美術作品を選定した。

イ 美術作品の特徴をまねて描く活動

美術作品の特徴をまねて描く活動とは、気に入った美術作品の特徴をとらえて自分なりに工夫した作品を製作することにより、見方や感じ方を深めていくものである。いわゆる「○○風」(例 ピカソ風)に描くことで、基にする美術作品の一部を変えたり、気に入った部分をまねたりしながら製作し、作品の特徴を体験的に感じ取ることによって、特徴をとらえた見方や感じ方を深めていくことを目指している。美術作品の特徴をまねて描く活動自体は、表現の活動であるが、活動そのものの中に作品の特徴をとらえ生かす要素を含んでいる。従って、美術作品の特徴を体験的に感じ取る能動的な鑑賞活動が可能になると考える。本研究では、模写のように画面を忠実に再現する高度な技術を求めるのではなく、小学生でも楽しめるように配慮して、作品の特徴をまねて自分なりに工夫した作品を製作するようにした。最後に、活動を振り返り、基にした美術作品の特徴や自分なりに工夫した点などを作品の解説としてまとめる。

(3) 研究の基本構想図

見通し	活動内容	子供の姿
1	<p>美術作品との出会い</p> <p>↓</p> <p>美術作品の仲間分け</p> <p>↓</p> <p>色・形・モチーフなどを観点として、美術作品を比較する。</p> <p>↓</p> <p>美術作品の特徴に気付く</p> <p>↓</p> <p>美術作品の特徴をまねて描く</p> <p>↓</p> <p>気に入った美術作品を選び、その作品の特徴をまねて自分なりに工夫した作品を製作する。</p>	<ul style="list-style-type: none">○それぞれの美術作品に対して、様々な印象をもつ。○美術作品の仲間分けによる比較を通して作品の特徴に気付いていく。<ul style="list-style-type: none">・似ているところを探し仲間に分ける。・似ている仲間の中から違いを探す。・一つ一つの作品の特徴を考える。○美術作品に対して興味・関心をもつ。○気に入った美術作品を選び、その作品を基にして、巨匠になったつもりで○○風の絵を描く。
		<ul style="list-style-type: none">○基にする美術作品の一部を変えたり気に入った部分をまねたりしながら、自分なりに工夫した作品の製作に取り組む。



2 研究の方法（略）

V 研究の展開

1 題材名「ピカソなわたし」（5年）

2 題材の考察

本題材は、美術作品の仲間分けによる比較を通して、それぞれの作品の特徴に気付き、その中から、気に入った美術作品の特徴をまねて作品を製作することにより、作品に対する見方や感じ方を深めていくものである。鑑賞する美術作品は、ピカソやムンクなどの作品で、特徴の違いが顕著なものを対象として取り上げる。それぞれの美術作品の特徴に気付くことにより美術作品に対する興味・関心が高まり、さらに友達の見方や感じ方に触れたり、体験的に作品の特徴に気付いたりすることで、見方や感じ方が深まっていくと考える。

3 目標及び評価規準

（1）目標

美術作品の仲間分けや美術作品の特徴をまねて描く活動を通して、それぞれの作品の特徴に気付いたり体験的に感じ取ったりすることにより、美術作品に対する興味・関心を高め、見方や感じ方を深めることができる。

（2）評価規準

- 美術作品の仲間分けや特徴をまねて描く活動に、興味・関心をもち、進んで取り組もうとする。〈関心・意欲・態度〉
- それぞれの美術作品の特徴に気付いたり体験的に感じ取ったりして、作品の特徴を自分なりに説明できる。〈鑑賞の能力〉

4 指導計画（全4時間）

時間	学習活動	学習への支援及び配慮事項	見通し	評価項目
1 ・ 2	<ul style="list-style-type: none"> ○美術作品に関するクイズに取り組む。 ○美術作品に出会う。 ○美術作品の仲間分けを通して、それぞれの作品の特徴に気付く。 	<ul style="list-style-type: none"> ○身近な美術作品を使い、仲間分けに関連したクイズを提示することにより、作品を見ていく観点を意識できるようにする。 ○それぞれの美術作品から受ける印象を大切するために、作品を1点ずつ展示するようする。 ○美術作品の特徴に深く迫れるよう、活動の流れを次のように設定する。作風の異なる作品から共通点を探す。→共通点のある作品から違いを探す。→一つ一つの作品独自の特徴を考える。 ○仲間分けの活動が深まるように、必要に応じて、画家や表現意図などについて、補足説明をする。 	見通し1	<ul style="list-style-type: none"> ○美術作品の仲間分けの活動に意欲的に取り組んでいる。【関心・意欲・態度】 ○美術作品の仲間分けにおいて、自分なりにそれぞれの作品の特徴に気付いている。【鑑賞の能力】
3 ・ 4	<ul style="list-style-type: none"> ○気に入った美術作品を選び、その作品の特徴をまねて自分なりに工夫した作品を製作する。 ○自分の作品の解説書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ○見通しをもって製作に取り組めるように、美術作品の特徴を振り返るようにしたり、作品の特徴をまねて描いた参考作品を提示したりする。 ○どの子も美術作品の特徴をまねて描けるように、個に応じて表現の仕方や見方などを助言していく。また、塗り方などを演示したり友達との交流を促したりする。 ○多様な見方や感じ方、あるいは表現の特徴などに気付けるように、基にした美術作品の特徴や自分なりに工夫した点などを作品の解説としてまとめ、まねて描いた作品と共に展示する。 	見通し2	<ul style="list-style-type: none"> ○基にした美術作品の特徴を自分なりに説明できる。【鑑賞の能力】 ○美術作品の特徴をまねて描く活動を楽しんでいる。【関心・意欲・態度】

VI 研究の結果と考察

1 美術作品の仲間分けによる比較を行ったことは、それぞれの作品の特徴に気付き、興味・関心をもつことに有効であったか

8点の美術作品を見た子供たちは、それぞれの美術作品に対して、全く異なった印象を受けたようであった。そこで、「全く違うように見える美術作品でも、実は似ているところがあります。どこでしょうか」という投げ掛け

資料1 仲間分けにより子供たちが見付けた美術作品の特徴

①ピカソ 『ドラ・マールの肖像』	②ゴッホ 『自画像』	③マグリット 『大家族』	④東洲斎写楽 『三世大谷鬼次 奴江戸兵衛』
何かしている感じ 顔の色がちがう 室内 だれかを見ている 人物画 服の色と形がいろいろ 髪の毛の色がいろいろ 色が派手 手が大きい カクカクしている	筆づかいが細かい 何かをにらみつけている 顔の色がいろいろ バックがぼやけている だれかを見ている 室内、人物画 メラメラしている においがしてきそう 棒の形の線でぬっている 肌の色がいろいろ	暗い（黒） 空（明るい色） 動物（鳥）が描かれている 空は晴れているのに、 バックは曇っている 切り取った形（鳥） 時間を表している	何かしている感じ 何かをにらみつけている 大きい顔 色（混ぜていない） だれかを見ている 肌の色がいろいろ 室内、人物画 黒い色が多い 手が大きい 髪の毛の色がちがう
⑤シャガール 『私と村』	⑥ダリ 『記憶の固執』	⑦ムンク 『叫び』	⑧マティス 『切り絵「ジャズ」よりサーカス』
人(大と小)が描かれている 逆さまの人がいる 色(派手) 大きい顔 バックの色(夜) 動物が描かれている 暗い	形がはっきりしている 暗い（黒） 動物みたいなもの 空（明るい色） 時計（つぶれていて、 とけている） アリやハエが描かれて いる	筆づかいが細かい バックがぼやけている だれかを見ている 人（まがっている） 暗い（黒） 色が薄い 夕焼け（明るい色） 棒の形の線でぬっている 表情	形がはっきりしている 直線 色（混ぜていない） 室内 人を小さく描いている 明るい色 人が黒色である 色が濃く、派手 細かくかいていない

から、仲間分けの活動を始めた。子供たちは、それぞれのもつ観点などを基に、各美術作品の似ているところ（共通点）について考え、美術作品に対する自分なりの見方や感じ方を発表した。「作品⑥と⑧は形がはっきりしている」「作品②と⑦は筆づかいが細かい」というように、2作品の共通点を指摘するものが多かった。それらの子供たちなりの見方や感じ方を、それぞれの美術作品の特徴として書き留めていった。

その後、「もっとたくさんの作品に共通する特徴はありますか」という投げ掛けにより、「作品③と⑤と⑥と⑦は明るい色が使われている」などの意見が出された。次に、「分けた仲間の中で考えましょう」と投げ掛け、同じグループの中で、それらの違いを見付けることに目を向いた。人がモチーフになっている作品（①、②、④、⑤、⑦、⑧）とその他の作品（③、⑥）に分けて、それぞれのグループの中から、色の感じや塗り方の特徴、人物の大きさ、画面への入れ方などについて違いを見付けていった。

最後に、美術作品の特徴に、資料2 仲間分けの活動における子供たちの主な意見

より深く迫るために、それぞれの作品独自の特徴について話し合った。「それぞれの美術作品には、他にどんな特徴がありますか」という投げ掛けから、子供たちは資料2のような意見を発表した。

H男は、美術作品と出会う

段階で、それぞれの作品から強い印象を受けた。特に、作品②と⑦の人物が心に残ったようで、この二つの作品を特によく見ていくこうと思ったそうである。「もっとたくさんの作品に共通する特徴はありますか」という投げ掛けに、資料3のような意見を発表していった。日ごろの授業あまり挙手することはないH男であるが、この授業では、色の使われ方や人物画の構図などに着目しながら作品の特徴を

とらえ、積極的に発言していく。特に、自分の仲間分けの活動の中では、必ず作品⑦を選んでいたことから、作品⑦

に対する興味・関心をもち続けていたことがうかがえる。

このように、美術作品の仲間分けによる比較を行うことで、それぞれの作品の特徴に気付き、興味・関心をもつことができたと思われる。

2 気に入った美術作品の特徴をまねて自分なりに工夫した作品を製作したこととは、基にした作品の特徴を体験的に感じ取ることができ、見方や感じ方を深めることに有効であったか

美術作品の仲間分けの後、「巨匠になったつもりで、○○風の絵をかいてみよう」という投げ掛けから、子供たちは、基にする美術作品を選び、どんな絵を描くか考え始めた。まず、教師が提示した参考作品〈ピカソ風クラス

作品	意見	意見の根拠となる表現
②	メラメラしている	何かをにらみつけているような視線 服からバックにかけての力強い筆跡
③	時間（の経過）を表している	曇った空（現在）は鳥の形に切り取られて晴れた空（過去）がのぞいている
⑦	棒の形の線でぬっている	太い筆跡がわかるように描かれた線が塗り重ねられている
⑧	色が濃く、派手 人が黒色である	純色を使った色彩、補色による配色 人物を黒一色で表現（シルエット）

資料3 H男が発表した美術作品の特徴

特徴	特徴の共通する美術作品
明るい色	作品③の鳥の形をした晴れた空 作品⑥の背景の晴れた空 作品⑦の赤く焼けた空
だれかを見ている	作品①、②、④、⑦

の友達〉を基に、作品の特徴をとらえてまねて描く活動のイメージをつかんだ。そして、選んだ美術作品ごとにグループに分かれ、基にする美術作品の一部を変えたり、気に入った部分をまねたりしながら製作に取り組んでいった。最後に、○○風の絵を描く活動を振り返り、基にした美術作品の特徴や自分なりに工夫した点などを、自分の作品の解説としてまとめた。

H男は、基にする美術作品として、仲間分けの活動で、興味・関心をもち続けることができた作品⑦を選んだ。作品⑦を見ていると、人が牧場で牛に追われてびっくりしている様子が思い浮かんだ。そこで、テーマを「牧場」にしてムンク風の絵を描くことにした。作品⑦の特徴を「体などが曲がっている」「棒の形の線でぬっている」「薄くぬっている」ととらえ、その特徴をまねするように心掛けた。画面には、作品⑦のような象徴的な人物と牛を大きく描いた。バックの牧草地を、仲間分けの活動の時に、自分なりにとらえた作品⑦の赤く焼けた空の「明るい色」になるように淡い緑色で塗った。人物や川や小屋などは、棒の線（太い筆で描く線）を使って塗り重ね、色の感じや曲がった形を表すことができた。

しかし、基にした作品⑦の全体をつらぬくようなゆがんだ線の感じはうまく表現できなかった。そこで、「もっと作品を近くでよく見てみよう」と助言した。H男は、画面を食い入るように見つめ、絵の具の上にクレパスで引かれたような曲がった線がところどころに描かれていて、それらが流れるように長くつながっていることを見付けた。そこで、塗り重ねた絵の具の上に、白や黒の色鉛筆で、川や人物などの輪郭と輪郭をつなげるよう何本も線を描いていった。すると、全体をつらぬくようなゆがんだ線の感じがようやく表れてきた（図1）。また、薄い色を何度も塗り重ねたり、濃く塗られた色を薄くしたり、にじませたりしながら、作品⑦特有の深みのある、にぶく暗い色に近付けるよう



図1 H男の作品「ムンク風の牧場」

取組がみられた。このように、近くで作品⑦を観察したり実際に色を塗り重ねたりした体験から、暗い色でも明るい色でも、ただ暗い色を塗ったり明るい色を塗ったりしてあるのではなく、様々な色を塗り重ねて暗い感じ（画面の霧囲気など）を出していることに気付いた。

以上のことから、H男は、基にした作品⑦の特徴を体験的に感じ取り、色を表す技法に関する見方や感じ方を深めることができたと思われる。

VII 研究のまとめと今後の課題（略）

* * *

◆ 実践例 4（教材開発研究）一中 1 理科一

本実践例は、生徒自身の観察から、惑星の公転軌道を求め、太陽系の空間的な奥行きや広がりを推察するための教材を開発したものである。具体的には、惑星の形と太陽からの離角を用いて、地球からその惑星までの距離を計算し、公転軌道を作図で求めるという活動を取り入れている。そのために必要な条件を検討し、惑星までの距離を求めるためのコンピュータソフトを制作し、活用した実践例である。

教材開発研究において大切なことは、コンピュータを活用した教材を開発する場合、子供が簡単な操作で学習を行えるようにすることである。

本実践例は、シンボル操作による経験を促す教材を開発したものであり、観察を基に、地球と惑星との距離をマウスとテンキーだけの簡単な操作でとらえることができるコンピュータソフトを開発したところに意義がある。授業実践においては、生徒の観察、計算、作図という一連の活動から、惑星の公転軌道を求められるようにした。

観察から惑星の公転軌道を求める学習指導の工夫

I はじめに

中学校理科第2分野「地球と太陽系」では、惑星の動きを観察し、その觀

察記録及び資料などに基づいて、惑星と太陽との見かけの位置関係を、太陽系の構造や惑星の公転と関連付けて、相対的にみる見方や考え方を養うとともに、太陽系の広がりを認識することが求められている。

そのためには、日常生活において一般的なメートル単位の距離や広さなどを基準にする地球上レベルでの空間概念から、太陽地球間の距離を基準にする太陽系レベルでの広大な空間概念に尺度を変えて考えることが必要である。

しかし、生徒は、太陽系を含む広大な三次元的空間として、夜空を正しく認識しているとはいはず、惑星と恒星の間や惑星同士の間の距離を、実際よりも小さくとらえてしまう傾向がある。そのため、惑星の公転軌道の広さや、公転による惑星間の距離の大きな変化を正しく理解できていない。

これらの原因としては、年間を通した惑星観察などの実体験に乏しい上に、探査機によって至近距離から撮影された大きく鮮明な惑星の写真や教科書の図、コンピュータによる仮想体験などによって、惑星そのものに関する詳しい情報は提供されているものの、かえって惑星は近くにあるといった誤った認識をもちやすいことが考えられる。また、今までの太陽系の構造や惑星の公転についての学習指導では、観察結果から各惑星までの距離の違いや公転の様子など、太陽系の空間的な奥行きや広がりについて推察することが難しいため、距離を極端に圧縮した図や模型を使用して、惑星の見かけの形が変化する原理を理解できるようにしていた。

そこで、生徒自身の観察を基に、地球から惑星までの距離や惑星の公転軌道を求め、太陽系の空間的な奥行きや広がりを推察する学習指導の工夫が必要であると考え、そのための方法及び必要な教材を制作した。

II 研究の内容と方法

1 基本的な考え方

惑星は太陽や地球との位置関係によって見かけの形が変化する。これを利用し、生徒自身による観察から惑星の公転軌道や太陽系の空間的な奥行きや広がりを推察する学習手順を考案する。

体験重視の立場から生徒自身の観察結果を用いた手順とし、惑星と太陽からの離角を用いて、地球から惑星までの距離を求める。その際、難解な式による計算はコンピュータに行わせることとし、マウスとテンキーだけの簡単な入力だけから答えが表示されるコンピュータソフトを制作する。次に、求めた距離と太陽からの離角を用いて惑星の位置を作図する。このような観察と作図を期間をおいて繰り返ししていくことで、惑星の公転軌道が作図されることになる。

これらの観察、計算、作図に、生徒一人一人が取り組むこととする。

2 惑星の位置を求め、公転軌道を推察する原理・方法

(1) 観察の対象となる惑星と時期

観察対象としては、大きく明るく見えることで観察しやすく、しかも公転速度が速い金星と火星が適している。その見かけの形の観察を基に地球からの距離の違いやその運動の様子(公転軌道)を見いだす学習を行うことにした。なお、惑星までの距離を求める活動では、内惑星と外惑星について、夜空のほぼ同じ位置に違った形として見える時期に観察することが効果的と考える。

(2) 惑星の輝面比と太陽離角から距離を求める原理

図1で $\alpha =$ 太陽からの離角

$i =$ 位相角

(各惑星から見た太陽と地球の離角)

なお、位相角は次の式で求める。

$$i = 180 - (\alpha + \beta) \quad \dots\dots(1)$$

$k =$ 輝面比 (惑星像の、輝いて見える部分の、直径に対する比の値)

図2で輝面比は $k = \frac{n}{m}$

惑星面は、 $k = 1$ のとき全面が輝き、 $k = 0.5$ のとき半月状、 $k = 0$ のとき暗黒となる。

惑星の半径を 1 とすると $n = 1 - \cos(\alpha + \beta)$ だから、図1で輝面比と各角度は次式のような関係にある。

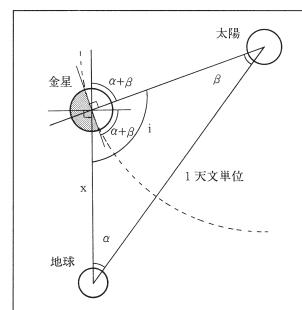


図1 角度と距離

$$k = \frac{1 - \cos(\alpha + \beta)}{2} \quad \dots\dots(2)$$

位相角 i は(1)と(2)から

$$i = 180 - \cos^{-1}(1 - 2k)$$

地心距離 x は

$$x = \frac{\sin \alpha}{\tan i} + \cos \alpha \quad \text{であるから}$$

$$x = \cos \alpha - \frac{\sin \alpha}{\tan(\cos^{-1}(1 - 2k))} \quad \dots\dots(3)$$

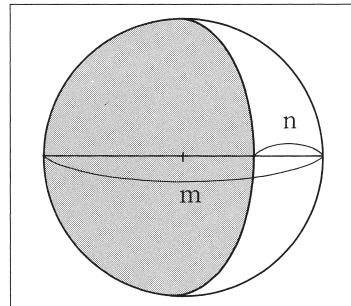


図2 輝面比

そこで、次の手順で、観察から惑星までの距離を知る。

- ① 太陽からの離角 α を観察により求める。
- ② 輝面比 k を観察により求める。
- ③ 地心距離 x を(3)の式で α と k から求める。

(3) 惑星位置の作図までの手順

西の空のほぼ同じ位置に接近して見える金星と火星の形の違いは、地球からの距離の違いによることに気付くよう、次のような学習の手順を考えた。

- ① 昼間、望遠鏡で金星を観察し、太陽からの離角を測定する。
- ② 日没後、西の空で互いに接近して見える金星と火星の見かけの形を観察する。
このとき、火星も金星とほぼ同じ位置に見えることから、太陽からの離角もほぼ等しいことになる。

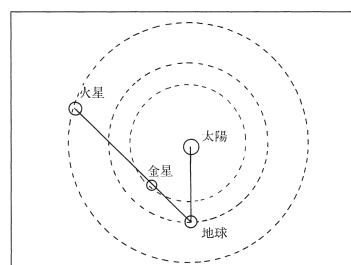


図3 各惑星の位置(1997.10.29)

- ③ 大型望遠鏡を使い、ビデオで撮影した金星と火星をそれぞれモニターに提示する。気流が安定しているときは、①や②の観察で見かけの形も確認できるため、この③は不要になる。
- ④ 惑星の見かけの形と、昼間測定しておいた太陽からの離角とから、コンピュータを使用して惑星までの距離を求める。

- ⑤ 太陽、地球の位置を基準に、惑星の位置を作図する。

3 教材の制作

(1) コンピュータソフトの制作

惑星の形と太陽からの離角を用いて、地球からその惑星までの距離を求めるために、生徒一人一人がコンピュータを使って計算する。そのためのソフトを、Visual Basic Ver.2 (Microsoft) で制作した。ここでのコンピュータの位置付けは、自然を調べる活動を支援し、強化することを助ける道具とする。実際の操作はマウスとテンキーだけで行えるようにした。

コンピュータの画面には、輝面比 k を 0.05 から 1.00 までの 20 段階に分けた図が 20 枚表示される。それらの図には、 $i = 180 - \cos^{-1}(1 - 2k)$ で求めた位相角 i の値がそれぞれ対応している（図 4）。そのため、観察した惑星に一番近い形をマウスで選択することにより、そのときの位相角 i を入力したことになる。次に太陽からの離角 α をテンキーを使って入力することで、地心距離 x や 1 天文単位を 10cm としたときの作図上の長さが表示される（図 5）。

(2) ビデオ教材の制作

授業時に観察できない過去の資料については、金星や火星の見かけの形がモニターで判別できるよう、群馬県総合教育センターの 40cm 反射望遠鏡に 25mm の接眼レンズを取り付け、拡大した画像をカラービデオカメラで撮影し、ビデオテープに記録し

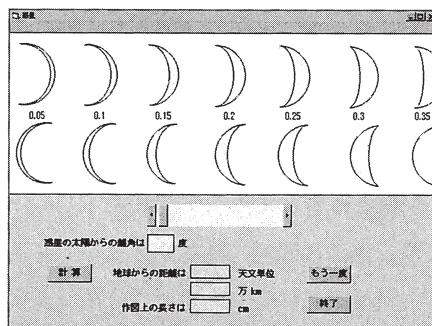


図 4 起動画面

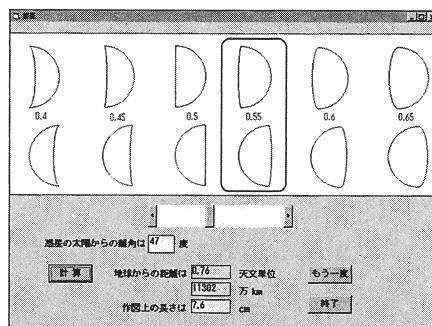


図 5 結果の画面

た。このビデオ教材を生徒に提示し、計算することで、惑星の位置や公転軌道の一部を作図によって求めるようにした。（後略）

4 精度の検討

本方法の精度に影響を与えると思われる要因についてそれぞれ検討した。

(1) 昼夜の観察条件による見え方の違い

金星の形を観察する場合、昼間は欠け際が見にくく、夜は背景が暗くなることで見やすい。これが輝面比の選択に影響を与えることが考えられる。具体的には背景が青空のときには、背景が夜空のときよりも欠け方が1段階程度大きく記録される場合がある。しかし、作図結果からみると多少円軌道がゆがむ程度の差であり、昼夜の観察条件による見え方の違いは大きな問題とはならない。

(2) コンピュータで図を選択する際の差

観察した惑星の形に近いものを、輝面比を20段階に表した図から選択する際に、実際の惑星の形と、選択する図の形との間に差が生じる可能性がある。これについて、以下のように検証した。

中学2年生の生徒に、惑星に似た1枚の図を見せ、輝面比によって20段階に分けた20通りの図（図6）から同じ形だと思うものを選ばせたところ、8割以上の生徒は正しい輝面比の図を選択できた。残りの2割の生徒も1段階隣の図から選んだ。1段階隣の図とは、輝面比にして0.05の違いになるが、その結果としての距離の差は公転軌道を大きく変えるほどではない。これは誤答率の低さとともに、観察した惑星の形に近いものを図の中から選ぶ際に、生徒は十分正確に目測できることを示している。また、二つ隣の図を選ぶ生徒はいなかったことからも、ここでは20段階の図を使用することにした。

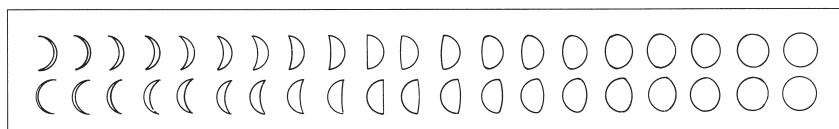


図6 20段階の図（左端が0.05 右端が1.00）

(3) コンピュータソフトでの計算上の精度

輝面比が0から1.00まで大きく変化する金星に比べ、火星の場合にはもともと変化の幅が0.88から1.00までと少ないため、コンピュータソフト上では0.85から1.00までの4段階程度の中から輝面比を選ぶことになる。そのため、金星に比べて火星の場合は距離についての誤差が大きくなる傾向がある。

図7は金星と火星について、1997年の輝面比と太陽離角の資料を基に本コンピュータソフトで計算し、その結果を基に作図したものである。図では、金星は内惑星、火星は外惑星ということを十分判断できる範囲に作図されている。

以上のような精度の検討結果から、金星と火星の公転軌道を求め、そこから太陽系の空間的な奥行きや広がりを推察できることが確かめられた。

なお、本コンピュータソフトは、観察から距離を求めるために使用することを前提とし、対象となる惑星の太陽離角が10度以下になるような、実際には観察が難しい状態や、実際の輝面比が0.99を超える時期の使用は想定していない。また、火星以遠の外惑星については輝面比の変化が極めて小さいため、本方法は適さない。

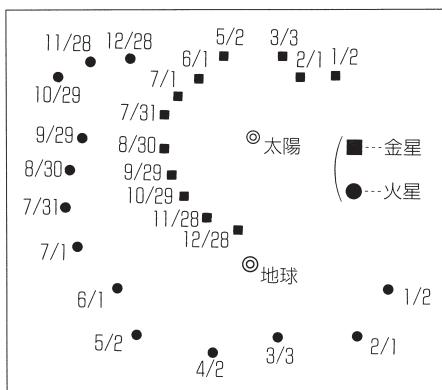


図7 資料を基に計算し作図した位置

III 授業における活用

1 活用の視点 (p.100参照)

2 授業実践

(1) 授業のねらい

金星や火星の観察を行い、見かけの形の違いから、金星や火星の空間的な位置関係や公転の様子に気付き、太陽系の空間的な広がりを知る。

(2) 授業経過 (略)

(3) 学習活動の概要

ア 昼間の観察により、金星の見かけの形と位置(太陽からの離角)を知る場面

望遠鏡で金星を観察したときには、「月みたい」「白い」「欠けている」「三日月のように見える」などの発言があった。なぜ金星は欠けて見えるのかという問い合わせに対しては、多くが「金星は月のように太陽の光に照らされいる部分が白く見え、影になっている部分では見えない」と考えた。「地球の影になっている」と答えた数人の生徒には、球は光に照らされる方向により、違う形に見えることを模型で示し、惑星を空間に浮かんでいる立体としてとらえられるようにした。

輝面比については、授業当日の理論値は約0.5のところ、空が白っぽかったため欠け際が細く見える傾向にあり、0.4と0.45の2段階に分散していた。

太陽からの離角については、大型分度器とコンパスを使い測ってみせたことで、理解を容易にした。

イ 夜間の観察により、金星と火星の見え方の違いを観察する場面

金星については、「昼間見たものと同じだ」という発言とともに、「欠ける位置が違う」「昼間見たものより大きい」「昼間見たときは0.4だと思ったけど、夜は0.45に見えた」という発言があった。実際、半数近くの生徒は昼間よりも欠け方が少ない輝面比のものを選択し直しており、0.45から0.55の3段階に分散していた。

火星については「小さい」「金星より暗い」「丸い」「でも少し欠けて見える」などの発言から、形の判別には苦労していた様子がうかがえるが、当日の輝面比0.93のところ、実際に多くの生徒が選択したものは輝面比0.9から1.00までに分散していた。

ウ 観察結果から、金星と火星の位置を求める場面

金星と火星は、ほとんど同じ位置に見えるのに、なぜ違う形に見えるのかという問い合わせに対しては、「太陽の当たる角度」「惑星と太陽の位置」「距離の違い」といった3種類の答えがみられたが、この中でも距離の違いを意識して答えていた生徒は約35%と少なかった。

コンピュータで金星や火星の地球からの距離を求め、作図した結果、「金星と火星は大きく離れていたんだ」「火星が小さく見えたのは、金星よりも遠いからなんだ」といったつぶやきが聞こえた。

エ 観察結果から公転軌道を推察し、太陽系の空間的な広がりを知る場面
以前の位置についてもビデオ資料を基にコンピュータで計算し作図した結果、「金星は地球の内側を太陽を中心に回っている」「火星は地球の外側を回っている」「惑星はみんな太陽を中心に回っているらしい」などの発言がみられた。

3 結果と考察 (p.101参照)

IV おわりに (略)

III 個に応じた指導

◆ 実践例 5 (授業研究) 一中 3 数学一

本実践例は、アイディアカードを活用して数学的な見方や考え方のよさを個に応じて感得できるようにしようとしたものである。具体的には、問題を解決するための方法と、それらを支える数学的な見方や考え方をアイディアカード化することにより、数学的な見方や考え方を認識できるようにした。さらに、アイディアカードを手がかりにして、それらを問題の解決に適用できるようにすることによって、数学的な見方や考え方のよさを感得できるようにした実践例である。

授業研究を進める際に大切なことは、目的と場面や方法とを関連付けて研究内容を具体化し、構想することである。

本実践例は、子供の実態に基づき数学的 5 W 1 H の観点を構想し、問題解決的な学習過程に数学的な見方や考え方方がとらえられるようにしたことに意義がある。

数学的な見方や考え方のよさを感得できるようにする指導の工夫
—アイディアカードの活用を通して—

I 主題設定の理由

数学科では、数学を進んで活用する態度を育てるため、数学的な見方や考え方のよさを感じできるようにしていくことが重視されている。

今までにも、数学的な見方や考え方を育てるため、既習事項との関連を重視した学習を進めたり、多様な解き方のできる問題を提示して解法を比較検討したりする場面を設けてきた。これらの学習を通して、以前の学習を想起して似たような考え方で問題を解こうとしたり、一つの解法が得られても他の解法を考えようとする姿が見られるようになった。しかし、そのような姿は、教師の具体的なヒントによって導かれることがほとんどであった。

そこで、このような状態を一步進め、新しい問題に直面したときに、以前に学んだ数学的な見方や考え方を進んで活用して、自分の力で問題を解決しようとする態度を育てたいと考えた。

そのためには、問題の解決で用いられる数学的な見方や考え方を認識できるようにするとともに、それらを他の問題の解決に適用できるようにすることが大切なのではないかと考えた。このことは、数学的な見方や考え方方が問題を解決する上で有用であることを実感して、よさを感じし、数学的な見方や考え方を進んで活用する態度を育てることができるのでないかと考えたからである。そのための手立てとして、問題を解決するための具体的な方法とそれらを支える数学的な見方や考え方をアイディアカードにまとめることと、アイディアカードを手がかりにして問題を解決することを考えた。

以上のことから、アイディアカードの活用を通して、数学的な見方や考え方のよさの感得を図ろうと考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

問題解決の場において、数学的な見方や考え方を認識するためのアイディアカードを活用していくば、自分の発想のよさに気付き、それを基に問題を自力解決していくようになるとともに、数学的な見方や考え方のよさを感じできるようになることを実践を通して明らかにする。

III 研究の見通し

- 問題を解決していくときの手立てを考える場面で、数学的 5W1H の観点に基づいてアイディアカードを作成していけば、異なる考えに触れたり、考えを深めたりすることができ、問題を解決するときに用いられる数学的な見方や考え方を認識することができるであろう。
- 認識した数学的な見方や考え方を基に、問題を解決していく場面で作成したアイディアカードを手がかりにしていけば、どのようなときにどのような数学的な見方や考え方が用いられるのかということに目を向けることができ、数学的な見方や考え方を問題の解決に適用することができるであろう。

IV 研究の内容と方法

1 研究の内容

(1) 問題の解決における数学的な見方や考え方

本研究で取り上げる数学的な見方や考え方は、大別すると、問題を数理化するとき多く用いられる見方や考え方と、論理を構成する時に多く用いられる見方や考え方である。

問題の解決においては、様々な数学的な見方や考え方を用いる。問題を解決することを目標とすれば、数学的な見方や考え方を用いることは行動としてとらえることができ、その背景には動機となる事柄があると考える(図1)。

本研究では、この行動と動機を一体的にとらえられたとき、すなわち、数学的な見方や考え方とはどういうものか、それはどのようなときに用いられるのかということをとらえられたとき、数学的な見方や考え方を認識できたと考える。

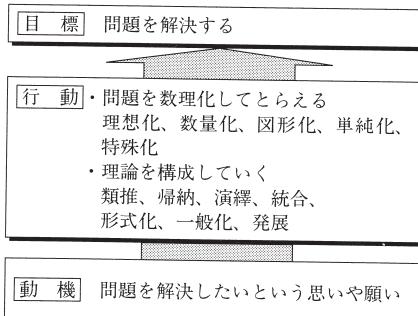
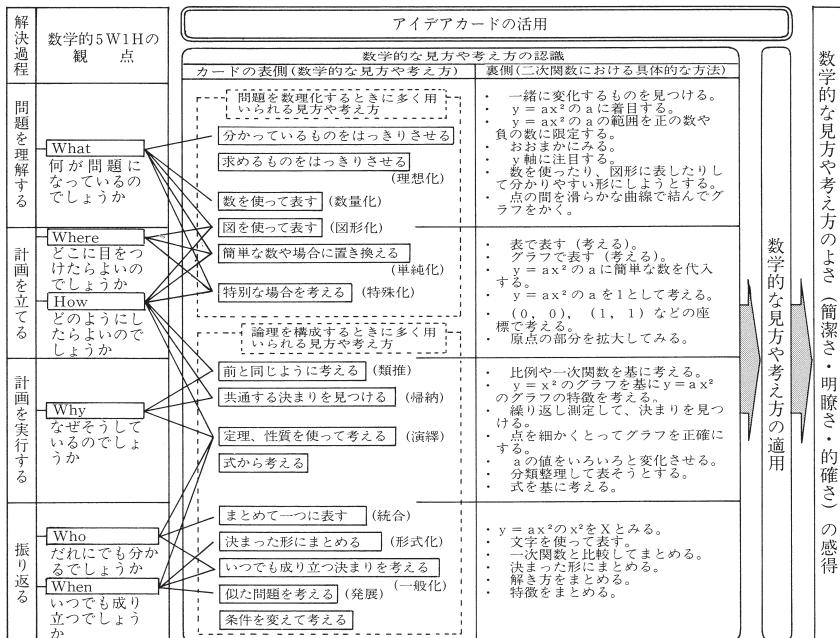


図1 問題解決における数学的な見方や考え方

(2) アイディアカードの活用と数学的な見方や考え方のよさの感得

アイディアカードとは、表側に問題を解決する時に用いた数学的な見方や考え方を短い言葉で書き、裏側に問題を解決するための具体的な方法を書くカードである。視点が明確になるように文章表現はなるべく短い表現にする。単純化、図形化などの分かりやすい言葉は、話合いの中で提示していきたいと考えるが、カードに記入する言葉や文章は、生徒が考え、選んでいくようしたいと考える。

表1 数学的5W1Hの観点と問題の解決の過程で現れる数学的な見方や考え方との関連



アイディアカードを活用するとは、アイディアカードを作成することを通して、問題を解決するときに用いられる数学的な見方や考え方を認識できるようにするとともに、アイディアカードを手がかりにしてそれらを問題の解決に適用できるようにすることである。

生徒は普段、あまり意識しないで用いている数学的な見方や考え方をとら

えるとともに、なぜ、そのような見方や考え方が問題の解決に適用できるようになるかを考える。そのようにすることで、それらの見方や考え方が問題を解決する上で有用であることを実感し、進んで活用しようとする態度となって現れるのではないかと考える（図2）。

したがって、本研究では、数学的な見方や考え方のよさを得た生徒像を、「数学的な見方や考え方を認識し、進んで活用しようとする生徒」ととらえる。具体的には、問題を解決するときに、表1に掲げた数学的な見方や考え方をしようとする態度が見られる生徒を、よさを得た生徒と考える。

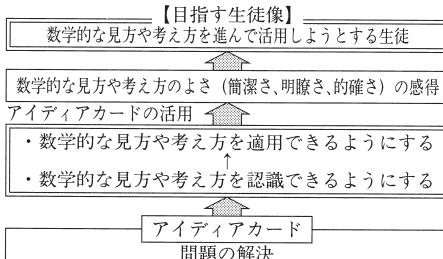


図2 研究の基本構想図

（3）数学的5W1Hの観点と問題の解決の過程で現れる数学的な見方や考え方との関連

本研究では、数学的な見方や考え方を問題の解決の過程との関連でとらえる。問題の解決のそれぞれの過程で多く用いられる数学的な見方や考え方と、問題を解決するための具体的な方法を二次関数の題材を例にして示すと、表1（前ページ）のようになると考える。数学的5W1Hの観点は、数学的な見方や考え方や、それらに基づいた問題を解決するための具体的な方法に目を向けることができるようにするための発問である。それぞれの発問と数学的な見方や考え方との関連は、実線で結んだとおりである。

V 研究の展開（略）

VI 研究の結果と考察

1 学習問題を解決するときに、数学的5W1Hの観点に基づいてアイディアカードを作成することを通して、数学的な見方や考え方を認識することができたか

(前略)

第1時には、カーテンレールの上を転がり落ちるビー玉の動きから二次関数を見いだす学習を設定し、数学的 5 W 1 H の観点に添って、生徒の考えを引き出す授業を行った。「何が問題になっているのか (What)」「どこに目をつけたらよいのか (Where)」からは、「距離と時間に注目する」という考え方を引き出し、「どのようにしたらよいのか (How)」の観点からは、「1秒間に進む距離を知る」「10秒間転がす」「決まりを見つける」「表に表す」「式に表す」等の考え方を引き出すことができた。

表2は、A男のアイディアカードを、作成した順序にまとめたものである。最初は、友人と同じ表現を用いているが、次第に異なる表現を用い始め、最終的にはアイディアカードの内容、数とも異なったものとなっている。これは、最初は話合いを基に教師が板書した表現をそのまま書き写していたものが、次第に自分で考えて、数学的な見方や考え方をカード化するようになっていったためと考える。また、A男のアイディアカードは、似通った内容ごとに並べ替えられていた。これらのこととは、アイディアカードの作成を通して、生徒の見方や考え方に対する認識が高まっていったことの現れであると考える。（後略）

表2 抽出児 A男が作成したアイディアカードの内容

A	男
表側（考え方）	裏側（方法）
実際にやってみる	10秒間転がす
問題のポイントをみつける	距離と時間に注目する
決まりをみつける	
応用する	式に表す
見やすく、分かりやすく、応用する	表に表す
比例をもとにして考えた	1秒間に進む距離を知る
比例として考えた	x が増えるときの y の増え方
比例の表と対比して考える	比例の表と対比して考える
条件をはっきりさせる	a を決める
$a = 1$ だから分かりやすくなる	$a = 1$ にする
細かく計算する	線は点の集まりだから
座標のとり方を工夫する	下半分は使わない
一次関数と比べる	y の増加量が一定でない
式で計算する	負の数を2乗すると正の数
式に当てはめてみる	$y = x^2$ の x を0にすると y も0

2 作成したアイディアカードを手がかりにして問題を解決していくことにより、数学的な見方や考え方を問題の解決に適用することができたか（前略）

A男は、アイディアカードを導入した次の時間から、教師が発問をするたびに、アイディアカードをめくって考えていた。 $y = ax^2$ のグラフの性質

を個人で考える時間では、 a が負になるとグラフが x 軸よりも下になる理由を尋ねると、アイディアカードを見ながら「式に当てはめて計算する」と答えた。式に当てはめて計算するとはどういうことか尋ねると、「 x が -1 のとき、 y が -1 になって……」と答えた。

ここでA男は、式に当てはめて計算するという数学的な見方や考え方を先に述べ、後から $x = -1$ として、具体的な数値で説明を行っている。これは今までのA男には見られなかった発言の仕方である。以前のA男の発言は、「 x の部分が -3 のときに 9 になるので、……」というように数値を用いた具体的な説明が中心であり、A男の思考の進め方に変化が現れたことが分かる。A男は、この後の授業でも、「校舎の距離を測って、速さは、式で、距離÷時間で求める」と発言している。また、似通った内容のアイディアカードを、自発的に並べ替えていた。これらのことから、A男はアイディアカードを手がかりにすることにより、式に目を向けることができるようになり、演繹的に考えるという数学的な見方や考え方を問題の解決に適用することができるようになっていたと考える。（後略）

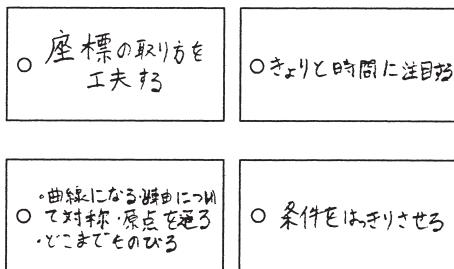


図3 A男のアイディアカード

VII まとめと今後の課題

- 研究の結果、次のような成果と課題が明らかになった。
- 数学的5W1Hの観点は、問題の解決の過程に位置付けられていたため、問題を解決するための指針となり、生徒の考えを引き出し、異なる考えに触れるができるようにする上で、有効であった。
 - アイディアカードを作成することは、問題を解決するための具体的な方法とそれらを支える数学的な見方や考え方を一体的にとらえる上で有効で

あった。また、アイディアカードに書き込むために、数学的な見方や考え方を短い表現にまとめることを通して生徒の考えが整理され、深まることが分かった。

- アイディアカードを手がかりにすることにより、普段、あまり意識しないで用いている数学的な見方や考え方を進んで問題の解決に適用することができた。そのことにより、数学的な見方や考え方方が問題を解決する上で有用であることを実感し、よさを感じできたと考える。
- 生徒がアイディアカードに記入する表現は、生徒の言葉を生かすようになしたため、具体的で適用範囲の狭いものになりがちであった。他の単元での学習にも生かしていくようにするためにには、カードの枚数を増やしながら、「前と同じように考える」というような適用範囲の広い表現にまとめていけるような手立てを工夫する必要があると考える。

* * *

◆ 実践例 6（教材開発研究）一中 1 外国語—

本実践例は、生徒一人一人の英語による主体的な表現活動を促すために、「話す・書く」を中心としたプレゼンテーション支援教材を開発したものである。具体的には、生徒一人一人が自己紹介や身近な話題等について、マルチメディア機能を利用し、自分自身の声や写真等を取り込んで、既習英語で発表することができる教材を制作し、活用した実践例である。

教材開発研究を進める際に大切なことは、教材開発の構想である。

本実践例は、シンボル操作による経験を促す教材を開発したものであり、これは既習英語を用いて、繰り返し操作しながら、発表内容の構想を練ることができるように教材をパッケージ化しているところに意義がある。

授業実践では、この教材を活用することで、生徒が英語で伝えたいことを自ら見つけたり、分かりやすく表現しようと工夫したりするようにした。

英語による主体的な表現活動を促す指導の工夫 —プレゼンテーション支援教材の開発とその活用を通して—

I 主題設定の理由

(前略)

英語を話せるようになりたいという気持ちとは逆に、実際の授業では「分からない、難しい、恥ずかしい、つまらない」という消極的な声が聞かれ、その工夫は容易ではない。生徒一人一人が自分なりの思いや考えを英語で表現することに興味をもち、主体的に取り組むような手立てが必要である。そして、「分かった、できた、おもしろい、もっとやりたい」という声が数多く聞かれるような表現活動の工夫をしなければならない。

この点で、学習への興味・関心や個別学習に有効な道具であるコンピュータの活用を考えた。つまり、コンピュータを使ったプレゼンテーションの手法を取り入れた自己表現活動を行うのである。文字・音声・画像等のマルチメディアを一人一人の生徒が簡単な操作で活用できるようにすれば、生徒は自分なりの思いや考えを英語で表現することに興味・関心をもつであろう。そして、分かりやすく伝えようとする主体的な表現活動も引き出すことができるのではないかと考えた。

また、国際化とともに情報化がさらに進展するにつれて、こうしたマルチメディアの活用によるプレゼンテーション能力の育成も必要になることが予想される。その点からもこの手立ては意義があると考えた。

そこで、本研究では、コンピュータによる文字・音声・画像等のマルチメディア機能を使ったプレゼンテーション支援教材を開発し活用する。この実践によって、生徒は英語による表現活動に興味をもつとともに、主体的な表現活動に取り組むようになるのではないかと考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい (p.97参照)

III 研究の見通し (p.100参照)

IV 研究の内容及び方法

1 コンピュータを使った主体的な表現活動について

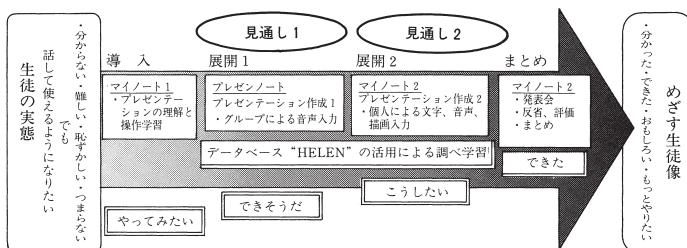
(前略)

本研究主題の英語による表現活動を、コミュニケーション能力の育成のために必要な「自分なりの思いや考え、伝えたいことを自ら見つけ、それを分かりやすく英語で表現しようとする生徒の主体的なプレゼンテーション」ととらえた。そのプレゼンテーション (presentation: 発表、提示、表現) とは、多様なメディアを活用し、言いたいことを相手に分かりやすく伝えたり、説明したりする発表活動である。その発表活動の手法を英語の自己表現活動として取り入れるために、プレゼンテーション支援教材を開発した。これを生徒が活用することで、自分自身の声と簡単な描画や写真による数画面のスクリプトを簡単に作成することができ、発表も行える。

このような表現活動を通して、生徒の「まちがえても安心、繰り返し何度もできる、操作がおもしろい、もっとやってみたい」という意欲を高めるとともに、英語で伝えたいことを自ら見つけたり、分かりやすく表現しようとする工夫などの主体性を引き出したい。

2 プrezentation支援教材の開発と活用について (p.97参照)

3 研究の構想図



4 授業実践

- (1) 実践計画 (略)
- (2) 検証計画 (略)
- (3) 抽出生徒 (p.200参照)
- (4) 生徒の実態 (37名)

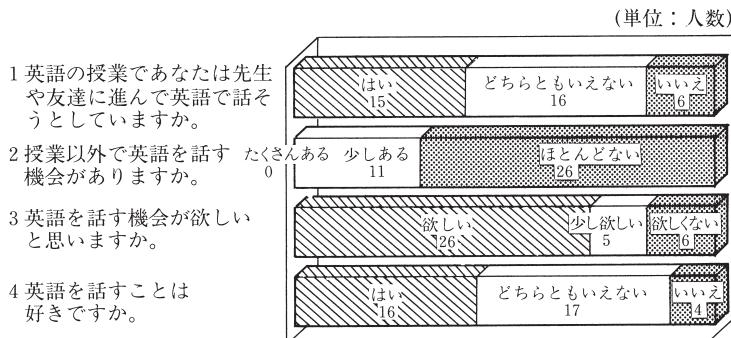
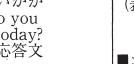
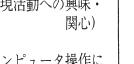
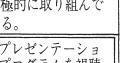
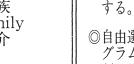
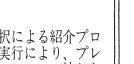
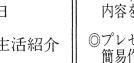
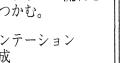
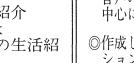
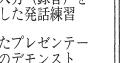
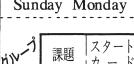
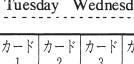
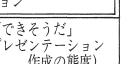


図1 英語を話すことについてのアンケート調査結果

「英語の授業では、進んで英語で話そうとしていますか (図1の1)」というアンケート調査をしたところ「はい (15人)」という意欲的な回答とともに、「どちらともいえない (16人)」というあいまいな回答も多かった。また、「英語を話すことは好きですか (図1の4)」という質問に対する回答もほぼ同じ結果だった。そして、どちらともいえない (17人) という回答の理由をまとめてみると、英語を話すことに対して「分からない、難しい、恥ずかしい、自信がない」であった。その反面で、7割近くの生徒は「英語を話す機会が欲しい (図1の3)」と答えている。これは、英語を話すことに対する自信のなさや苦手意識があるものの、話せるようになりたいという生徒の願いを表している。この点で、本研究の「英語による主体的な表現活動を促す指導の工夫」に取り組み、改善すべき生徒の実態が本学級にはあると考えた。

(5) 指導計画

7時間予定

◇教材 ○作業の流れ		時間	●学習の内容 ◇生徒の主な学習活動	★求める生徒の声 ■評価項目																																										
導入	◇マイノート1 ○音声入力の操作練習	1	     SAD ANGRY COLD HAPPY HOT      ADDRESS HOBBY BLOOD FAMILY FOOD      FATHER MOTHER Gfather Gmother SISTER      GET UP BREAKFAST SCHOOL CLUB GO TO BED      Sunday Monday Tuesday Wednesday Saturday	<ul style="list-style-type: none"> ●ご機嫌いかが How do you feel today? とその応答文 ●私はだれ Who am I? と人物紹介 ●私の家族 My family 家族紹介 ●私の1日 A day 1日の生活紹介 ●曜日の紹介 A week 1週間の生活紹介 <p>◎五つのプレゼンテーション紹介プログラムを視聴する。 ◎自由選択による紹介プログラム実行により、プレゼンテーションの流れと内容をつかむ。 ◎プレゼンテーション簡単作成 音声の入力(録音)を中心とした発話練習 ◎作成したプレゼンテーションのデモンストレーション</p>																																										
展開1	◇ブレゼンノート1 ○音声入力	2	     A B C D E <table border="1"> <thead> <tr> <th>課題</th> <th>スタートカード</th> <th>カード1</th> <th>カード2</th> <th>カード3</th> <th>カード4</th> <th>カード5</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>あいさつ</td> <td>あいさつスタート</td> <td>あいさつ1</td> <td>あいさつ2</td> <td>あいさつ3</td> <td>あいさつ4</td> <td>あいさつ5</td> </tr> <tr> <td>名前</td> <td>名前スタート</td> <td>名前1</td> <td>名前2</td> <td>名前3</td> <td>名前4</td> <td>名前5</td> </tr> <tr> <td>家族、持ち物</td> <td>Haveスタート</td> <td>Have1</td> <td>Have2</td> <td>Have3</td> <td>Have4</td> <td>Have5</td> </tr> <tr> <td>好き、趣味</td> <td>趣味スタート</td> <td>趣味1</td> <td>趣味2</td> <td>趣味3</td> <td>趣味4</td> <td>趣味5</td> </tr> <tr> <td>夢</td> <td>夢スタート</td> <td>夢1</td> <td>夢2</td> <td>夢3</td> <td>夢4</td> <td>夢5</td> </tr> </tbody> </table>	課題	スタートカード	カード1	カード2	カード3	カード4	カード5	あいさつ	あいさつスタート	あいさつ1	あいさつ2	あいさつ3	あいさつ4	あいさつ5	名前	名前スタート	名前1	名前2	名前3	名前4	名前5	家族、持ち物	Haveスタート	Have1	Have2	Have3	Have4	Have5	好き、趣味	趣味スタート	趣味1	趣味2	趣味3	趣味4	趣味5	夢	夢スタート	夢1	夢2	夢3	夢4	夢5	<ul style="list-style-type: none"> ●あいさつ Greeting 様々なあいさつの仕方 ●名前 My name 自分の名前と愛称の言い方 ●持ち物 I have 家族や、自分の持ち物の紹介の仕方 ●趣味 I like 自分の趣味の紹介 ●夢 My dream 将来の夢について <p>◎五つのグループを作り、一つのグループが一つの課題についてのプレゼンテーションカードを作成する。 ◎選択した課題についてのプレゼンテーションの内容や構成をグループで相談する。そして、6枚のカード(スタートカード、カード1~カード5)を分担して仕上げる。</p>
課題	スタートカード	カード1	カード2	カード3	カード4	カード5																																								
あいさつ	あいさつスタート	あいさつ1	あいさつ2	あいさつ3	あいさつ4	あいさつ5																																								
名前	名前スタート	名前1	名前2	名前3	名前4	名前5																																								
家族、持ち物	Haveスタート	Have1	Have2	Have3	Have4	Have5																																								
好き、趣味	趣味スタート	趣味1	趣味2	趣味3	趣味4	趣味5																																								
夢	夢スタート	夢1	夢2	夢3	夢4	夢5																																								
展開2	◇マイノート2 ○プレゼンテーション作成	3	<p>◎マイノート1にあるプレゼンテーションの例を参考に自分のプレゼンテーションを作成する。(個人又は2人1組程度で作成する。)</p> <p>手順</p> <ol style="list-style-type: none"> ①構想図を作成する。 英文、画像、スライドの流れを考える。 ②文字・音声・画像データの作成及び編集 ③各データの貼り付け ④実行(デモンストレーション)・再編集 	<ul style="list-style-type: none"> ★「こうしたい」 <p>■自分自身の身近な話題を探し、分かりやすいプレゼンテーションを作ろうと工夫している。</p>																																										
まとめ	◇マイノート2 ○発表	1	<p>◎完成した作品を、生徒がそれぞれのコンピュータに移動しながら、互いに見合い、発表する。</p> <p>◎気付いたこと、参考になったこと等を相互評価と自己評価カードに記入して本題材のまとめをする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ★「できた」「もっとやったみたい」 <p>■友達の作品のよいところを積極的に探し、理解しようとしている。</p>																																										

V 結果と考察

1 活動の概要

(1) 展開 1について

プレゼンノート（紹介プログラム2）を使い、6～7人のグループに分かれてプレゼンテーションを視聴し、音声入力によるプレゼンテーション作成に取り組んだ。セリフの録音操作に苦労する姿も見られたが、多くの生徒は録音した自分の声が聞こえてくると、「こんな言い方してた？」など、今まで気付かなかった点を見発したり、驚きの声をあげ、音声入力によるプレゼンテーションに興味を示すとともに、互いに聞き合い、工夫して自分なりのセリフを録音していた。そして、何回も録音したり、分からぬ単語の発音や意味を調べる姿が見られた。

(2) 展開 2について

基本フォーマット（p.98参照）を使って、マイノート1を参考にした生徒一人一人のプレゼンテーションをするためのマイノート2の作成に取り組んだ。ここまで のプレゼンテーション視聴と音声入力による学習で操作に慣れただせいか、「おもしろかった」や「もっとやってみたい」という声が多く聞かれた。

(3) まとめについて

完成したマイノート2のデータをフロッピーディスク1枚にコピーし、それを交換し合いながら自由に友達のプレゼンテーションを視聴する発表会を行った。内容的には簡単な自己紹介や家族、友達紹介が多かったが、できるだけ多くの作品を見ようとデータを交換するために動き回る中で、言い方や工夫した内容についての生徒同士のやりとりが多く聞かれた。

2 学級全体の生徒について（略）

3 抽出生徒について

抽出生徒Aは友達3人と組んで、マイノート2（図2）の作成をした。主に2番目と5番目の描画とセリフを担当していた。「単語の発音や意味が分からぬので難しい」と答えていたAだったが、“2 I like dog and cat.”と

いう単文の音声入力の場面では、発音やイントネーションなど、言い方や声の大きさを工夫しながら25回も録音・再生を繰り返し、それだけで20分間も取り組む姿が見られた。導入後の「難しいけど、おもしろい」や、まとめ後の「もっとやって



図2 Aの作品（スタート画面）

みたい、自分のプレゼンテーションを作つてみたい」というAの答えから、本研究のプレゼンテーション作成は、生徒の主体的な表現活動を引き出す効果があったといえる。

表1 各学習段階における抽出生徒の意識の変容

	導入	展開1	展開2	まとめ（発表）
抽出生徒A 英語の単語や発音が難しいと感じている	<ul style="list-style-type: none"> ・おもしろかった ・難しかった 	<ul style="list-style-type: none"> ・おもしろかった ・もっとやってみたい 	<ul style="list-style-type: none"> ・もっとやってみたい ・自分のプレゼンテーションを作つてみたい 	<ul style="list-style-type: none"> ・もっとやってみたい ・自分のプレゼンテーションを作つてみたい
抽出生徒B 言いたいことがあっても恥ずかしくて話せない	<ul style="list-style-type: none"> ・おもしろかった ・自分のプレゼンテーションを作つてみたい 	<ul style="list-style-type: none"> ・おもしろかった ・もっとやってみたい 	<ul style="list-style-type: none"> ・もっとやってみたい ・自分には作れそうにない 	<ul style="list-style-type: none"> ・おもしろかった ・もっとやってみたい
抽出生徒C 英語への苦手意識が強い	<ul style="list-style-type: none"> ・難しかった ・わからなかった 	<ul style="list-style-type: none"> ・つまらなかった ・もうやりたくない 	<ul style="list-style-type: none"> ・難しかった ・自分には作れそうにない 	<ul style="list-style-type: none"> ・おもしろかった ・自分のプレゼンテーションを作つてみたい

「言いたいことがあっても恥ずかしくて話せない」という抽出生徒Bは、家族紹介のプレゼンテーションを一人で作成した。Bは描画の作成は早かつたが、セリフの音声入力では大きな声が出なくて録音に苦労していた。しかし、Aと同様に繰り返し録音・再生し、英語のセリフに慣れるとともに、はっきりとした声で話せるようになっていった。その結果、「みんなの前で言うのと違って何回も言い直しや工夫ができるので話しやすい」や「直接、人の前で話すのと比べて言いやすかった」というBの声が聞かれるようになった。

この点で、本研究で作成した教材は、進んで英語で話そうとする意欲の喚起に効果があったといえる。

抽出生徒Cは、Aと同様に3人で人気キャラクターの紹介プレゼンテーションを作成した。Cが担当したのは、2番目と4番目の描画とセリフであった。自分の分担の構想図がなかなかうまくできなかつたので、Cが作業に専念できるように、コンピュータ1台を用意したところ、作品発表の当日まで努力し、ようやく完成させることができた。この最後の感想では、「おもしろかった」や「自分のプレゼンテーションを作ってみたい」(表1)という学習への興味・関心を示す答えが返ってきた。

このような抽出生徒の学習の様子から、本研究で作成したプレゼンテーション支援教材による指導の工夫は、表現活動に対する興味・関心や主体的な学習を引き出すことに効果があったと考える。

VI まとめと今後の課題について (略)

* * *

◆ 実践例 7 (授業研究・事例研究) 一中2作業学習 (特殊学級) 一

特殊教育において実践的研究を進める場合、授業実践を中心として研究を進める「授業研究」の側面と、ある特定個人の課題に応じて、その解決を目指した実践を中心として研究を進める「事例研究」の側面を併せもっているといえる。本実践例は、その前者である。それは、目指す資質や手立てが明確であるとともに、指導方法の工夫に視点を当てているからである。

本実践例は、生活経験や社会性に乏しく活動への意欲を長期的に持続させていくことが難しい知的障害のある生徒に対する指導である。作業学習の授業の中で、手順を踏んで木工製品を製作するなどの段階的・継続的な支援を取り入れたり、製品の販売先である地域の方との交流を深めたりする指導方法の工夫により、就労への意欲の芽生えをねらったものである。

授業研究を進める際に大切なことは、実態把握の段階で教師が生徒の思いや願いをくみ取ろうとする姿勢をもつことである。

本実践例は、今生徒が自信をもって取り組めることに着目したり、今苦手であ

ることにも授業の中でどのように支援すれば積極的に取り組めるようになるのかを十分に考えたりしながら、授業を展開しようと構想している点に意義がある。

知的障害のある生徒が自ら就労への意欲をもてるようとする指導の工夫 —作業学習における指導方法の工夫に視点をあてて—

I 対象生徒 中学校2年生 男子

1 生育歴及び家庭状況 (略)

2 学校での様子

学習面では、小学校3年生程度の漢字の読みや計算が、ほぼ確実にできる。作品作りなどの作業を主とした学習には、かなりの負担を要する作品でも粘り強く丁寧に仕上げる。

生活面では、当番活動に取りかかるとき、具体的な指示を受けたり、やり方を復唱、確認したりして安心感が得られると、自ら着手できことが多い。生活する範囲が限られていて、初対面の人物や初めて体験する事に対しては、極度な興奮や緊張が見られ、会話（特に構音）や動作がぎこちなくなってしまう。

進路に関する調査の回答では、自分の長所の3番目に作業学習で木工が得意なことを、短所の2番目に木工での取組が不十分な点を、身に付けたい力の2番目に、木工製品を売ることを挙げている。また、中学校卒業後の進路については、進学してやりたい勉強（絵や版画、木工、漢字）を続けたいことと、新聞配達所に就職したいことの両方の希望があり、どちらとも決めかねている。

3 諸検査の結果

- (1) 全訂版田中ビネー知能検査 精神年齢 9歳程度 (詳細略)
- (2) 新版S-M社会生活能力検査 社会生活年齢 8歳程度

身辺自立はほぼ十分であるが、移動や集団参加など生活行動面における体験が不足していると思われる。

(3) 企業就労を目指す生徒用自立度チェック表によるプロフィール分析

就労するのに必要と思われる能力、すなわち「身辺処理、作業能力、家事能力、学校での基本的課題」の評価が高い。「基礎学力、人間関係、生活・職業意識」などは、就労後も成長が期待できたり、環境さえ整っていれば他の能力で補ったりすることが可能である。

本生徒の場合、基礎学力の不足は本人の努力や周囲の指導及び援助で、生活や職業への意識は、給料を手にして実生活を営む中で自ら高めていくことが十分可能であると考える。

しかし、人間関係、金銭の扱いや経済観念、公共施設の利用などは、適切な生活経験の積み重ねが極端に不足しているためか落ち込みが大きい。したがって、良識や節度ある交流活動を重ねて交友関係や社会的信用を築いていく能力や、お金を計画的に運用・管理していく能力、公共機関や施設、官庁等の働きを理解し、設備や制度を利用できる能力を伸長させていくことが課題であることが分かる（図1）。

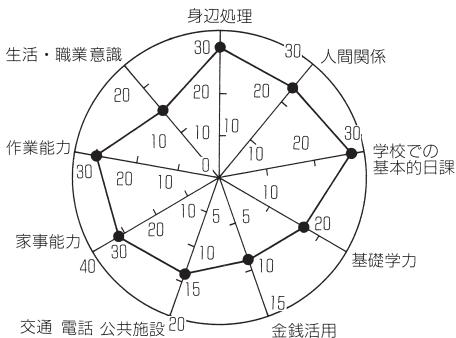


図1 プロフィールダイヤグラム

II 研究のねらい

知的障害があり、生活経験や社会性に乏しく、活動への意欲を長期的に持続させていくことが難しい生徒に、「自分でも製品を作れる」という自信をもつことができ、就労に向けての意欲をもてるようになるには、作業学習においてどのように指導方法を工夫したらよいのか実践を通して明らかにする。

III 指導仮説

本生徒は、入学当初より絵画制作や木工品製作に段階を踏みながら慣れ親しんできた。絵画展で入賞したり、合同文化祭で実演即売をしたりした経緯もあり、それらに好んで取り組むようになった。

本生徒が、やる気をもって自ら行動を起こす時は、過去に何回も取り組んだ作業などに限られる。すなわち、明らかな見通しがもてたり、「失敗しないでやり遂げられる」という自信がもてたりする場合である。見通しがもてたとしても、より複雑な課題に対しては、失敗して意気消沈してしまうことが多く、課題解決まで長期的に意欲を持続させることができなかった。

この問題を解決するために、作業学習を出来ばえのよい「作品」作りから、消費者の要望に合わせた「製品」を生み出す学習へと発展させたい。それには、まず習作品を教師とともに作り、材料を自分で判断して購入する。次に販売を取り次いでもらうための交渉をし、消費者の要望や意見を製品に反映させて改良することができるよう指導方法を工夫していく。それにより、やる気をもって製作活動や販売活動に取り組むことができ、目的や場面に応じた自己の表現方法や人とのかかわり方を知ることができるであろう。同時に、本生徒の活躍が周囲から認められるものとなる。その結果、自分でも製作し販売することができるという自信をもつことができ、就労することへの意欲をもてるようになるであろう。

1 指導方針

本実践では、具体的な指導の手立てとして、以下のことを重点化して行い、本生徒の変容を期待したいと考えた。

- ① 同じ人と繰り返しかかわることができる場面設定を工夫して、適応性を高める
- ② 作業習慣や手順、方法を効率化するための自己評価の工夫を図り、計画性を高める
- ③ 消費者から改良点が直接伝わる機会を増やし、よい品を作ろうとする向上心を養う
- ④ 自分の体調や防護具の状態を確認し、「安全第一」が励行できる作業習慣を養う
- ⑤ 材料を無駄なく大切に使うなど、作業の手順や方法を改善する経済感覚を養う
- ⑥ 工程を分担し、当番に交替で当たるなど、作業形態を工夫して、協調性を高める

- ⑦ 簡単に正確な仕事ができる治具や補助具等の教材を工夫して、確実性を高める

2 指導上の留意点

- (1) 動力機具を積極的に利用するが、生徒の安全確保を最優先し、試運転音のチェックや可動部分から目を離さない等の作業習慣の育成に努める。特に生徒の心情を的確に把握し、学習を心から楽しめるようにする。
- (2) 仕事量や態度などを日誌に記録する自己評価だけでなく、作業方法や製品の改善に役立つ助言など、第三者からの評価を効果的に生かし、本生徒の成長を支える人々の存在に気付けるようにする。
- (3) 販路開拓先は、親近感をもてるよう交流経験のある商店や授産施設を中心とし、将来様々な相談等もできるようにする。

3 指導の内容と方法

学習過程	作業内容	指導の方法
習う (4~6月)	習作品を作る	・習作しながら、材料、方法、費用の概要をつかむ ・自分の担当製品を試作し、作業手順や工程を知る
作る (6~9月)	材料を購入する 先行品を作る	・販売店や材料の規格の下調べと購入準備をする ・型板で材料取りなどをして適切な板材を購入する ・治具や補助具等を適切に使用し製品精度を上げる
売る (9~10月)	販路を開拓する 改善、改良する 集金、納品する 伝票処理する	・値段や売り込みの言葉を考え、交渉の準備をする ・売り込み訪問の作法、伝票の切り方の練習をする ・訪問先へ電話し、都合を聞くなどして訪問する ・製品としての出来具合を尋ね、改善改良を加える ・取組の結果を反省し、正確で能率的な方法に直す ・納品書や領収書の記入などの業務を、適正に行う
役立てる (10~3月)	量産する 奉仕、貢献する 応用する	・売筋の製品や効率のよい方法をつかみ、生産する ・福祉団体等に製品を贈呈し、交流の輪を広げる ・木工教室を開いて、実演する

IV 指導の経過

●「習う」段階において、習作品を作るために糸のこ盤を操作する指導の流れ

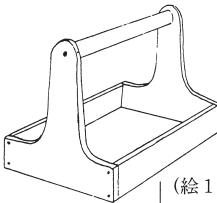
教師の働きかけ	本生徒の様子
<ul style="list-style-type: none"> ・20mmの厚板での組み木作りを知らせ、まず、軟らかいカツラ材を切るように伝える。 ・カツラ材の厚板の切り口が垂直になるように、板材を送る速度を遅くするように促す。 ・軟らかいカツラ材30mmの厚板でサイコロを作れたら、硬いケヤキ材30mmの厚板で動物型を切り抜くことを促す。 ・過熱した糸のこ刃にろうそくを当て、冷却しながら切るように指示する。 ・厚板を切る作業が上手になったことをほめ、感想や楽しかった活動を尋ねる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・スピードが速く切断角がひずみ、途中で糸のこ盤が停止してしまい教師に助けを求める。 ・スピードを遅くして負荷をかけなければ垂直に切れることが分かると、厚板切りに興味を示し、曲線やジグザグ直線を切る練習に進んで取り組む。 ・「板材が硬い、硬い」と言いながらも、時間をかけて少しづつゆっくり切り進むが、材から煙が出て、黒く焦げることを気にする。 ・ろうが溶けて、煙やにおいが出ることを訴えるが、切断面が摩擦熱で焦げなくなったことに驚く。 ・集中時間が長いため「疲れる」と訴えるが、「また型抜きをやりたい」と作業日誌に書く。

〈考察〉糸のこ盤の操作については、材の硬さや厚さなどに対応して、次第に難しい技能の習得へとステップアップしてきた。これらは単なる習熟練習ドリルとしてではなく、習得した技能を活用して型切り抜きやパズル作り等を楽しめる活動として行った。そうすることによって、本生徒が「次に、何ができるよいか」という見通しをもつことができ、切削面の品質向上や作業能率の改善に効果が上がった。

●「売る」段階において、製品を販売するために客と対応する指導の流れ

【T商店にて】教師の働きかけ	本生徒の様子
<ul style="list-style-type: none"> ・(店主が)持ってきた製品を出すように促す。 ・(店の客が)「木の質感がとてもよい」とほめながら製品を手に取る。そして表面にざらつきがあることや側端が鋭角であることを指摘する。 ・「どうする?」と再質問する。 ・(別の客が)「手さげ盆(次ページ絵1)がもう少し小さめだと、調味料の瓶ケースに使える」と言い、「どんなふうに使うのか」と尋ねる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「こわれないように、包んである」と言いながらふろしきをていねいにほどく。 ・ほめられて深くうなずくが、問題点を言われると、体全体を緊張させ、不安な顔をして教師の方を見る。 ・「磨くときに、がんばります」と答える。 ・お茶を入れた茶わんを運ぶのに便利なことなどを身振りを交えて説明する。そして「(やはり)ちっちゃいのが、いいですか」と尋ね返し、印

- ・(同じ客が)「その印入れを見せて」と頼み、穴の大きさを直した製品かどうかを質問する。
- ・(同じ客が)印入れを手にとってながめていたが気に入ったので買いたいと申し出る。

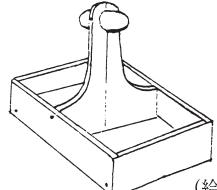


(絵1)

- 入れのように改良していきたいと答える。
- ・「今日、直したばかりです」と答え、印入れを取り出して客に渡す。
 - ・びっくり顔で相手の方を向くが、すぐに「毎度ありがとうございます」と答える。

〈考察〉 製品を販売する場面で、「ぼくらの作品をどう思っているのだろう」「どんな製品を求めているのだろう」という意識をしっかりともって、活動に取り組めるようになってきた。特に「売りたい」という気持ちから、客の質問には全力を傾けて答えることができたと考える。そして、製品を自らの手で販売できたことは、本生徒にとって満足感を得ることにつながり、客の求めに応じる製品作りに努めていこうとする意欲に結び付いていくことが分かった。

● 「役立てる」段階において、身に付けた知識や技能を表現する指導の流れ

教師の働きかけ	本生徒の様子
<ul style="list-style-type: none"> ・端材をつぎ合わせて、集成しているところを見せながら「この板の値段は無料だぞ」と投げかける。 ・「材料費が無料だし、見栄えや強度等に問題があるので、練習用に使いたい」と話す。 ・「これで(本生徒の主張する)小盆(絵2)を作ってみよう」と言って、次回から試作に入ることを伝える。(小盆の試作品が完成した段階で) ・「これをお客様に見せたら、なんと言うかな」と質問する。 	 <p>(絵2)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「これで、何を作るのか」と質問し、「小さいから(前にT商店で話の出了)小盆を作るといい」と主張する。 ・(この集成端材で、製品が売れるよう教えてくれた人たちに)「何か作ってあげてもいいか」と言い出す。 ・自分のアイディアが受け入れられたことをとても喜び、はやく型板を作るようになる。 ・「また直すところを教えてくれるよ」と、にこにこしながら答える。

〈考察〉 本実践を通してお世話になった人に「お礼をしたい、そして今後も交流を続けたい」という気持ちが端材活用の場面で現れ、端材を使った製作活動についても製品製作と同様に熱心に取り組むことができた。これは本生

徒が自分で身に付けた知識や技能を使って、製品を販売することを通して達成感を味わうことができ、自信をもてたからであると考える。その自信をもった姿は、これからも助言を素直に受け取り、より付加価値の高い製品を作っていくこうとする態度に現れてきたと考えられる。

V まとめ

本生徒が自ら就労への意欲をもてるよう、製作過程のみならず、実際に地域の商店等で販売することまでを視野に入れた作業学習に取り組んできた結果、次のような変容が見られた。

手順を踏んで木工製品を製作することで、墨線ぎりぎりまで加工精度をあげて、後で研磨する部分を少なく仕上げたり、切断面が直角になるように切削方向や順序を考えたりするなど、品質や効率をあげることを楽しみながら、作業に取り組めるようになった。また、消費者の要望や意見を製品作りに積極的に取り入れようとする姿勢をもつことができた。

これらの変容が見られたのは、まず「上手に製品を作るには、どうしたらよいか」という意識をもって知識や技能の習熟練習に励むなど、製作活動への見通しが明確にもてたことによるところが大きい。次に「得意先や消費者の求めに応じて、喜んでもらうには、どうしたらよいか」という意識をもち、自分が何をすれば、その要望にこたえられるのかが分かり、その実現へ向けて手間や時間を惜しまず取り組むようになったからであると考える。そして、自分で生産し販売できたという自信が、最終的に「お礼をしたい」という形で現れたものと考える。さらに、このように様々な角度から、本生徒の能力を引き出し「自分にもできる」という自信をもてるようにすることが、「他の仕事やレベルの高い作業ができるようになりたい」という意欲を引き出すことになる。このことが、身に付いた能力を働かせて社会の中で役立ちたい、すなわち、就労へ向けた意欲へとつながっていくと考える。

VI 今後の課題（略）

第2節 心の教育に関する研究

I 道徳

◆ 実践例 8（授業研究）一小6道徳一

本実践例は、主題「郷土の人々に学んで」において、花いっぱい運動を推進している人たちの思いや願いに触れるを通して、郷土を大切にしようとする心情を育てようとしたものである。具体的には、資料「徳べえざくら」を基に郷土を支える意味について追求したあと、花を育て続ける理由を考える活動、推進している人たちの思いや願いに触れ、調べたことを整理する活動、村のPRコピー「ほっと白沢花の村」にこめる願いを考える活動を通してねらいに迫ろうとした実践例である。

授業研究で大切なことは、手だてによって得られた子供の変容を、質的な面と量的な面とでとらえていくことである。

本実践例は、ねらいとする道徳的価値「郷土愛」に対する価値観の変容を、グラフと表に基づいて量的変容と質的変容という観点からとらえている。具体的には、学級全体では、グラフに表し量的変容として考察したり、児童の考え方を分類して表に示し、質的変容として考察したりしていることに意義がある。

郷土を大切にしようとする心情を育てる道徳指導の工夫

—花いっぱい運動を推進している人たちの思いや願いに触れて—

I 主題設定の理由

社会の変化に伴って、人間関係が希薄化し、地域社会とのかかわりを軽視する状況が生みだされてきている。このような中、ともすれば児童は自分自身だけの力で生きていると考えてしまい、自分たちの生活が地域の人々の営みや支え合いの上に成り立っていることに気付かないでいる。そこで、地域の人々の営みや支え合いのよきやすばらしさに触れることによって、郷土を

大切にしようとする心情を育てることは意味があると考える。

(後略)

II 研究のねらい

主題「郷土の人々に学んで」において、①推進している人たちが白沢村のために花を育て続けることができる理由を考える活動、②調べた結果を構造化した図を基に、自分たちが追求してきたことを整理する活動、③「ほっと白沢花の村」にこめたい意味を考える活動を通して、郷土を大切にしようとする心情が育つことを実践を通して明らかにする。

III 研究の見通し

- 1 道徳の時間1において、資料「徳べえざくら」を基に、主人公が桜を植え続けた理由を構造化したあと、花いっぱい運動を推進している人たちの活動理由を考えることを通して、推進している人たちの思いや願いを追求しようとする意欲をもつことができるであろう。
- 2 道徳の時間2において、調べた結果を構造化した図を基に、自分たちが追求してきた事実を整理することを通して、推進している人たちの郷土に寄せる思いや願いが多様であることに気付くことができるであろう。
- 3 道徳の時間2において、「ほっと白沢花の村」にこめたい意味を考えることを通して、郷土に対する自分の願いをもつことができるであろう。

IV 研究の内容

1 基本的な考え方

(1) 郷土を大切にしようとする心情をもっている児童とは

郷土を大切にしようとする心情をもっている児童とは、①推進している人たちの思いや願いを追求しようとする意欲をもっている、②推進している人たちの郷土に寄せる思いや願いが多様であることに気付いている、③郷土に対する自分の願いをもっている、の三つの姿であるととらえた。 (後略)

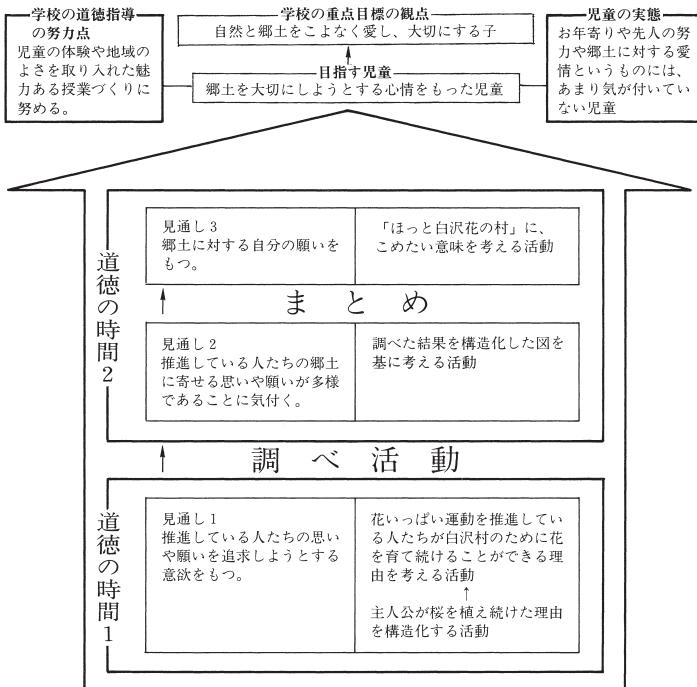


図1 研究の全体構想

(2) 花いっぱい運動を推進している人たちの思いや願いに触れてについて

(略)

(3) 指導計画 (略)

2 研究の方法 (略)

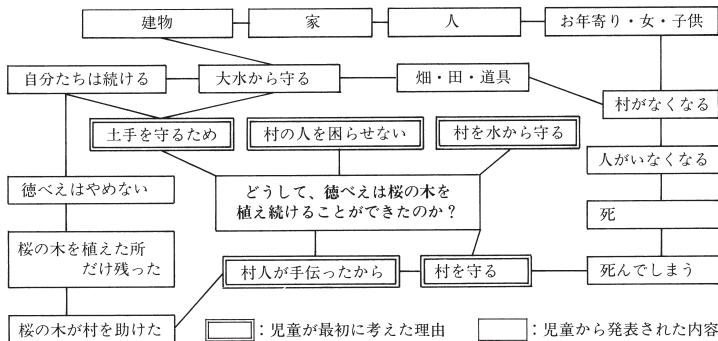
V 研究の結果と考察

1 思いや願いを追求するための意欲をもてたか

ア 活動の概要

資料「徳べえざくら」において、主人公が桜の木を植え続けることができた理由について各自が考えたことを整理した（資料1）。それを基に、花いっぱい運動を推進している人たちの活動理由を考える活動を行った。

資料1 桜を植え続ける理由を構造化した図



次に、六つの班に分かれ、個人で考えたものをそれぞれ出し合い、考え方の傾向の似ているものごとにまとめた。その後、各班から出されたものをまとめていった。

イ 結果と考察

花を育て続ける理由の予想を、事前アンケートと徳べえざくらの価値を追求したあとの記述との関連で分類してみると、図2のようになった。記述された理由の個数を比べると、事前は10個で、事後は17個となり、理由の数が増えた。また、理由の内容で比べると、事前アンケートでは環境美化に関する観点で考えている

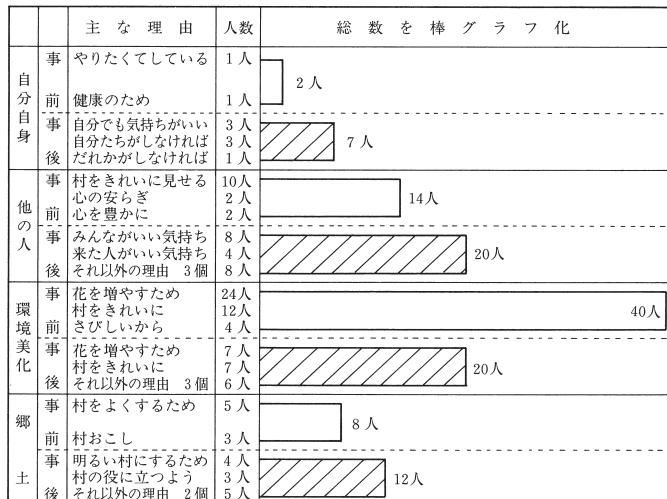
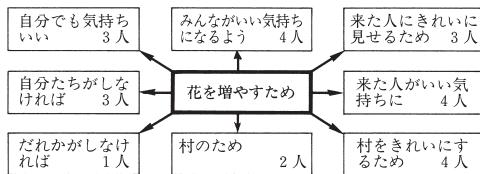


図2 花を育て続ける理由を分類した図（複数回答）

児童が多かった。追求後では、資料2 つながりを考えての記述（複数回答）

自分自身に関する観点、他の人とのかかわりに関する観点、郷土のためにに関する観点からの記述が多くなり、価値を一步深く考えるようになっているといえる。



さらに、資料2のように、つながりを考えての記述も見られ、推進している人たちの思いや願いを関連付けて分かろうとする気持ちを高めている児童もいる。

これらのことから、徳べえざくらで追求した構造図を基に、自分なりの観点を増やし、価値を一步深く考えようとしていること、事実のつながりを考えて関連付けて分かろうとしていることから、推進している人たちの思いや願いの関係を追求するための意欲をもつことができたといえる。

2 郷土に対する思いや願いが多様であることに気付いたか

ア 活動の概要 (略)

イ 結果と考察

学級全体で調べた結果、94個の思いや願いが集まり、結果を観点ごとの数で比べると、図3の

ようになる。図2と比べて、自分自身に関する観点で3観点、他の人とのかかわりに関する観点で1観点、環境美化に関する観点で2観点、郷土のためにに関する観点で2観点、合計で新たに8観点を見い

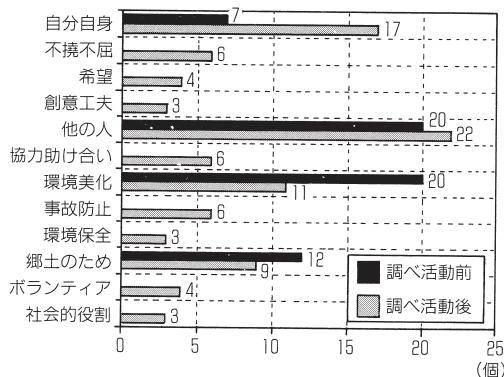


図3 観点ごとに数を比べた図（複数回答）

でした。

例えば、郷土に関する観点で詳しく見していくと資料3のようになる。調べ活動前は4個であったものが、調べ活動後は11個に分かれた。

そのため、班の発表後に各自がまとめた記述において、

資料3 郷土のために関する観点の理由

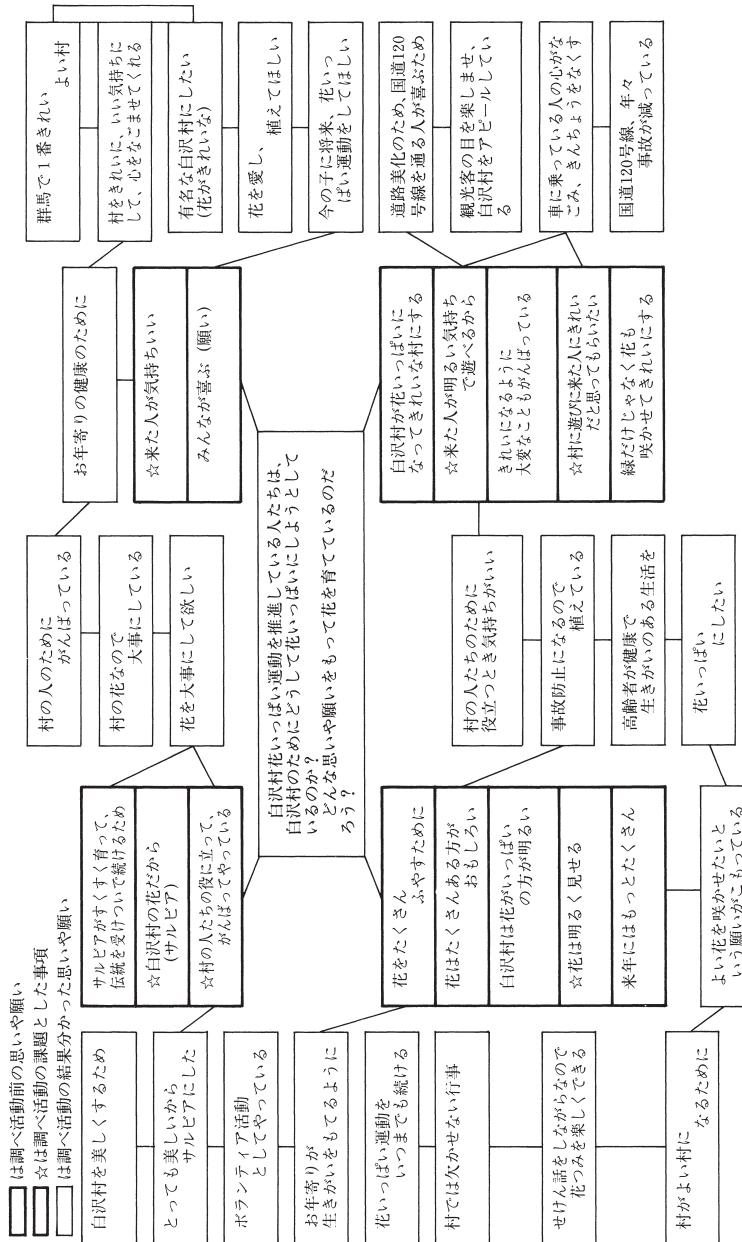
調べ活動前	⇒	調べ活動後
<ul style="list-style-type: none">・村のため・明るい村にする・住みやすい村にする・村の役に立つよう		<ul style="list-style-type: none">・村のため・明るい村にする・住みやすい村にする・村の役に立つよう・よい村にする・村の人が喜ぶ・ボランティア・村で選んだサルビアを増やす・村では欠かせない行事・村の伝統・村のPR

「自分の生きがいや事故防止、道路美化になるなど、白沢村にとってすばらしいことだ」「よい村にするためにボランティアでしている。また、みんなが気持ちよくなるようにしていると思う」などが見られた。このことから、花いっぱい運動はいろいろな価値と結び付いていて、「郷土のため」から、「自分自身、他の人のため、環境美化、事故防止、ボランティア」など、様々な種類の違った思いや願いがあることに気付き、それぞれが関連あることを結び付けて考えようとしている。

A子の班では、3人の方々から話を伺い、次ページ資料4のようにまとめた。そして、「村の人たちの役に立つと気持ちがいい」ということから、花を育てることに喜びがあるという自分自身に関する観点、「ボランティア活動としてやっている」「村の人のためにがんばっている」ということから、ボランティア、社会的役割という観点に気付くことができた。また、「花をたくさんふやすため」を詳しく見ていくと、花を植えることで事故防止になり、村の人たちの役に立つと気持ちがいい、健康で生きがいのある生活、村がよい村になる、いつまでも続けたい、につながった。また、ボランティア活動、白沢村を美しくするため、にもつながった。このことから、種類の違う思いや願いがあり、それぞれに関連のあることが分かった。

これらのことから、調べた結果を構造化した図を基に、自分たちが追求してきたことを整理することを通して、推進している人たちは種類の違った思いや願いをもっていること、それぞれが関連があることを結び付けて考える

資料4 A子の班でまとめた思いや願い



ことができるようになり、推進している人たちの思いや願いが多様であることに気付くことができたといえる。

3 郷土に対する自分の願いをもてたか

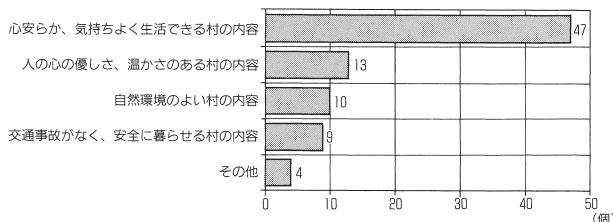
ア 活動の概要

学級全体で「ほっと白沢花の村」について、各自が「どんな、ほっとな白沢村にしたいか」三つ以上考えて花の中心に記述した。また、中心に記述した根拠となる事項を考えてカードに書き、周りに花として咲かせた。そして、その考えたことを基に、白沢村に対する自分の願いを書いた。

イ 結果と考察

学級全体で

「ほっと白沢花の村」の中心に記述された83個の内容を分類すると図4のよう



になる。(中略)

A子のシート

図4 学級全体でPRコピーにこめた意味の分類(複数回答)

(次ページ資料5上段) の中に記述した事項と周りに飾った花との関連を分析してみると次ページ資料6のようになる。

花の中心に記述した事項は、花は人の心を和ませ、そして、事故防止にもつながること、除草剤は少ししか使わないこと、昭和49年から続いていることから、「あんしん」できる村になってほしいと考えている。また、サルビアは開花期間が長く、赤くてきれいであること、4種類の花を育てて楽しむ工夫をしていることから、「明るい(きれいな)」村になってほしいと考えている。そして、村の人や訪れた人の心を和ませ、いい気持ちになってもらいたいという願い、事故防止やみんなの喜びにつながるということから、「やさしい村」になってほしいと考えている。さらに、花の白沢と他の県ですぐ分かること、花の種が北海道から九州、遠くインドまで行っているとい

資料5 A子の「ほっと白沢花の村」



資料6 A子のシートの分析表

あんしん	悲しいときのなぐさめの花
明るい (きれい)	村もぱッと明るくなる 交通事故を防ぐ (心が安らかになること)
やさしい	いつでもみられる明るさ 心のこもった世界一の花
世界一 の花	花を見て安心できる やさしい心が伝わってくる

う事実から、「世界一の花」のある村になってほしいと考えている。また、「こんな村にしたい」の記述からでは、調べ活動や授業を通して、郷土のために20年以上にわたり花を育て続けているがんばりや、みんなに喜んでもらいたい、みんなの心を和ませたい、事故が減ってほしいなど推進している人たちの思いや願いのすばらしさに気付き、自分も地域の一員として伝えていきたいという願いをもった。

(後略)

VI 研究のまとめと今後の課題 (略)

II 生徒指導

◆ 実践例 9（事例研究）一小6生徒指導一

本実践例は、心の教育に関する問題を取り上げ、不登校児に対して指導・援助を行ったものである。具体的には、指導者が家庭訪問を行い、対象児と母親への指導・援助を行った。対象児には、指導者との信頼関係を築き、段階を踏んで友達とかかわっていけるようにした。母親には、気持ちを受容しながら、自分で解決できるように援助した実践例である。

事例研究を進める際に大切なことは、対象児に関する多様な資料から多角的に問題を検討することである。

本実践例は、保護者や対象児を取り囲む環境にかかわりながら、不登校の問題の原因にかかわることを検討し、指導・援助していることに意義がある。

不登校児童への指導・援助

一家庭訪問での本人への指導と母親への面接による援助を通して—

I 対象

小学校6年女子 B子（指導者の立場：担任）

II 問題の概要

B子は、6年生になってからは、朝、「気分がすぐれない」という理由で、断続的に欠席するようになった。担任が迎えに行くと登校でき、4月下旬に行われた修学旅行に参加した。それ以降、担任が迎えに行っても登校できず、欠席が続いている。

III 問題の理解に必要な資料

1 生育歴（母親との面接から）

両親は、B子が生まれると祖父母と同居するようになった。そのころから

母親は、祖父母に気をつかうようになり、B子にも祖父母の前で行儀よくさせたり、勉強でよい成績をとらせようと、細かいことにまで指示をしたり注意をしたりした。B子が幼稚園に上がるまでは、母親は出かける時はいつも、B子を連れていくようにした。

父親は、子供がB子一人であるということから、甘やかさないようにと考えており、養育態度が厳しく、強くしかることもある。このような態度に、母親はもっと愛情をもったしかり方をしてほしいと、父親に言ったこともある。

幼稚園入園時には母親の後追いをすることが多く、幼稚園に慣れるまでに時間がかかった。

2 家庭での様子

登校時刻が過ぎた後起床し、朝食を食べる。母親が欠席の連絡をした後は、本を読んだり、テレビを見たりしている。

社会体育のミニバレーボールに入っているが、5月からは練習に行っていない。

3 学校での様子（前担任から）

4年生の3学期ごろから、時々登校を渋って欠席することがあった。

5年生では、欠席が40日以上であった。授業では、漢字練習、図画に真剣に取り組んでいた。黒板の図や文字を丁寧に写すことができる。宿題や自由学習など、自分で目標を決めてやり始めるが、最後までやらないと気が済まず、夜遅くまでかかってやることもある。授業中も学習への取組の中で、自分が思ったようにできないと気が済まない様子が見られた。

授業中、人前で発表することが苦手で、友達から何か言われると黙ってしまう。休み時間等、自分から友達に声をかけることは少ないが、声をかけられれば応じられる。

4 諸検査等

- 学力検査 平均程度
- 文章完成法テスト（下線部はB子が記入した部分）

- ・私が努力していることは、学校へいくこと。
- ・自分でできないところは、学校へいけないこと。
- ・時々気になることは、学校のみんなのこと。
- ・私の母は、やさしい。
- ・私の父は、すぐ怒るので、やさしかったらいいと思う。

○ 内科医から、身体的な異常はないと診断される。

IV 問題の理解

母親は、祖父母に細かなところまで気をつかっていた。B子にも祖父母の前での行儀をはじめ、勉強面でもしっかりとできるように、細かいところまで指示したり注意したりしてきた。父親も、子供がB子が一人であるということから、甘やかさないようにと厳しい態度で接してきた。B子もそういう両親に従い、何でもしっかりとやろうと努力していたと考えられる。また、そのために、自分に対する父母の評価を絶えず気にするようになったと思われる。

学校生活でもB子は、常にきちんとできるように意識し、そのように取り組んできたと思われる。その結果、精神的に疲れるとともに、きちんとできないことや、間違うことに対して、不安が強くなったのではないかと思われる。さらに、小さいときに母親と一緒にいることが多かったことや、小学校で自分から進んで友達とかかわる経験が少ないとから、友達に対して関心がありながら、どのように自己表現したり、かかわったりしたらよいか分からず、緊張を感じていたと思われる。

以上のことから、B子は、母親の期待にこたえようとする気持ちや、母親の干渉、父親の厳しさから完全欲求や固執性が強まり、学校でも周りからの評価が気になり、間違うことやできることに対する不安が強まっていったと考える。さらに、友達に関心があるにもかかわらず、自己表現することが苦手であることや、かかわり方が分からずにいることから緊張が高まり、不登校になったと考える。

V 指導方針

家庭訪問をし、B子には「訪問指導」、母親には「面接」を通して指導・援助する。

1 B子に対して

- (1) 訪問指導をし、一緒に遊んだり、B子の興味や関心のある話をしたりして、指導者との信頼関係を築く。
- (2) 自分のことは自分で考えて決定し、行動する機会を多く設け、自分の考えで行動できることへの自信をもてるようにする。
- (3) 友達がB子の家を訪問するようにし、B子が友達とのかかわりを体験することを通して、友達とのかかわり方や自己表現の方法を学んだり、緊張を和らげたりできるようにする。

2 母親に対して

母親の不安を受けとめ、B子へのかかわり方や父親への対応について、母親自身の気付きや考えを支持し、B子を見守ることができるよう援助する。

VI 指導経過

5月〇日 母親との面接

母親は、「B子は学校のことが気になるらしく、落ち着かずにいるようなので、B子が猫の世話などをしたり、絵をかいたりするのを黙って見守るようしている」と話す。

指導者が「お母さんがそのように、B子のそのままを受け入れてやることも大切ですよね」と伝えると、母親は「これからは、B子のよいところを見るべく見つけて声をかけようと思っています」と話す。

6月〇日 訪問指導

放課後、家庭訪問をし、B子に「もしよかつたら、学校で先生のお手伝いをしてくれないか」と誘うと、「いいよ」と答え、ついて来た。学習プリントの枚数を点検するなどの仕事を一緒にしたあと、教室へ誘うと入ることができた。自分の席に座ったあと、後ろの修学旅行の絵をみていた。やがて、

指導者に話しかけてきた（逐語記録1）。

逐語記録1（Tは指導者）

B子：先生、このクラスは何人だったっけ。

T：○○人だよ。どうして？

B子：まだ、○人の人ができていないんだね。

T：気になるの？

B子：わたしも仕上がりっていないから。

T：そうか、絵が仕上がりっていないのが気になっているんだね。

他のお友達と同じように、仕上がったときに出してくれればいいよ。

B子：はい。

6月○日 訪問指導（友達との交流）

放課後、B子の仲のよい友達に指導者が、「B子の家に遊びに行かないか」と声をかけ、一緒にB子の家に行く。B子は友達と遊ぶのが楽しいらしく、自分の部屋で絵をかいたり、庭でみんなと輪になってバレー・ポールのパスをしたりして楽しんでいた。

7月○日 母親との面接

母親は、「先日友達が来てくれたときに、B子は学校に行きたいのだけれど、朝になると行けなくなってしまう、と友達に話していました」と話す。また、「無理に学校に行かなくてもいいとはB子に話しているんですが、父親は『それは、子供を甘やかすことになる』と考えています。わたしは、時間をかけて父親にB子のことを理解してもらえるよう、努力を続けたいと思っているんです」と話した。指導者は、「お父さんと意見が違い、そのことでどのようにお父さんと話し合ったらよいか考えているんですね。無理をしないで、機会を見つければ、ゆっくりと話し合ってみてはいかがですか」と返した。

9月○日 訪問指導

B子の家に行き、遊びに誘ったところ、「バレーボールのパスをしたい」というので、一緒にやる。相手がボールを落とすたびに、1点ずつ得点を得られることにした。B子はバスが上手で、指導者よりも得点が多く、喜んでいた。「先生、また今度やろうね」と声をかけてくれた。

その後訪問したときに、「今度、学校の相談室で絵を書きたい」と話したので、学校に行く日を約束した。

10月○日 放課後の登校・友達との交流

放課後、友達と一緒に学校の相談室にやってきて、棚から自分で色画用紙やクレパスを取り出し、楽しそうに友達と絵をかいていた。家に帰ってから母親に、「また行きたい」と話していたそうである。

最近ミニバレーボールの練習にも行けるようになったそうである。

11月○日 母親との面接

父親がB子に対して、優しく接するようになってきたことをうれしそうに話す（逐語記録2）。

逐語記録2

母：父親がB子に対して優しくなったような気がします。

T：ああ、今は優しくなってきた気がする。

母：それに、ミニバレーの練習にB子を送って行ってくれるようになつたんです。

T：それはうれしいですね。

母：はい、スーッと気持ちが楽になったような。

11月○日 訪問指導

B子と一緒に絵をかいた。B子は「また相談室で絵を書きたいな」と言い出したので、学校の相談室に行く日を約束した。

母親は、「最近B子が学校の話ををするようになった」とうれしそうに話した。

12月○日 友達との交流

約束した日の放課後、友達と一緒に相談室に来る。友達と一緒に絵の具やクレパスなどいろいろな材料で絵をかいて遊んでいた。帰りがけに、「先生、もうすぐ冬休みだね。3学期には教室に行ってみたいな」と話した。

VII まとめと今後の課題

6年生になって不登校になったB子と母親に対して、家庭訪問でのB子への指導や母親への面接を通して援助を行ってきた。その結果、B子は自分の考えで行動したり、友達と遊んだりすることができるようになってきた。また、父母が細かな指導や注意を控え、B子を見守るように努力を重ねるにつれ、B子の緊張もほぐれてきたようである。また、少しずつ指導者や友達とかかわる機会を設けてきたことにより、学校への関心も出てきて、放課後、相談室や教室に来られるようになった。

このような変容の主な要因として、次の3点が考えられる。

- ① 指導者がB子に添いながら、一緒に遊んだり話したりすることによってB子の緊張が和らぎ、自主性が發揮できるようになり、気持ちが安定した。
- ② 友達と遊ぶ場を設けたことにより、友達とのかかわり方を学び、緊張せずに友達とかかわれるようになった。
- ③ 母親との面接を通して、母親が楽な気持ちでB子にかかわれるようになるとともに、B子の自主性を尊重するかかわりを両親がするよう努力してきた。

今後、さらにB子の自主性を発揮する場面を増やすと同時に、緊張感が和らげられるように、指導・援助していきたい。

第3節 生き方についての指導に関する研究

I 進路指導

◆ 実践例10（授業研究）一中1学級活動一

本実践例は、ジェンダー（文化的、社会的に形成された性差）を視点にして、職業に対するとらえ方から性別の枠を取り除くことで、今まで目を向けることのなかった職業について興味・関心を広げ、仕事内容や、それにふさわしい能力や適性をとらえなおし、進路選択への意欲を高めることを目指したものである。具体的には、働いている人（例　保育士や看護士）へのインタビューやVTR資料の視聴を通して、職業に対する多様な考え方や生徒自らのよさを生かした進路選択への意欲付けを図った実践例である。

授業研究を進める際に大切なことは、目指す子供を育成するために、手だてをどの場でどのように投入するかを構想することである。

本実践例は、男性（女性）中心の職業で数少ない女性（男性）へのインタビューを行い、子供たちが主体的にかかわり、自己の生き方を考える活動へとつなげているところに意義がある。

自分にあった進路選択をしようとする

意欲を高める指導の工夫

—職業とジェンダーとのかかわりを通して—

I 主題設定の理由

本校の進路指導はどの職業も平等であるという視点で進めてきた。

（中略）

そこで、進路指導でジェンダーの視点を取り入れた学級活動を行う。職業の内容、職業にふさわしい能力・適性を挙げ、男性だけが可能か、女性だけ

が可能か、男女ともに可能か一つずつ考えていくことを通して、職業選択、仕事内容、能力・適性は性別で決まるのではなくこと、風習やしきたりとしてのジェンダーが職業選択の自由とかかわってきたこと、男女ともにどの職業を選択してもよいことに気付くようになる。次にジェンダーにとらわれないで、自分にあった生き方をしている人を教材として取り上げる。サッカー監督を目指す日本人女性、男性が多く働く職業の中の女性、女性が多く働く職業の中の男性にインタビューしたVTR資料を活用する。性別、国境を越えてサッカー監督という夢を実現させるために努力している姿勢や、身近な所で自分にあった職業で働く人の体験は生徒の心を揺さぶると考えられる。この資料から夢や可能性を広げ、自分の夢を追い続け前向きに生きる姿を学ぶようになる。生徒は自分にあった職業、生き方があることに気付き、自分のよさを生かし、自分にあった進路選択をしようとする意欲を喚起できるであろう。なお、この実践を「身近で働く人々」の前に位置付ける。職業から性別の枠を取り除くことで、今まで目を向けることのなかった職業について興味・関心を広げると考える。

男女ともにどの職業でも選択する自由があることを理解し、自己実現を図る場として職業の理解を深め、自分にふさわしい、自分にあった進路選択を意欲的にしようとする生徒を育成したい。以上のことから本研究主題を設定した。

II 研究のねらい

学級活動において、生徒が興味・関心をもつ職業が男女ともにふさわしいかを考えることを基に、男性が多く働く職業の中の女性と、女性が多く働く職業の中の男性の体験に着目し、今後の自己の生き方を考える活動を行うことによって、自分に合った進路を選択しようとする意欲が高まることを実践を通して明らかにする。

III 研究の見通し

- 1 学級活動1で、生徒が興味・関心をもつ職業について、「男性にふさわしい職業か」「女性にふさわしい職業か」「男女ともにふさわしい職業か」を考える活動、「仕事内容」や「それにふさわしい能力・適性」について「男性だけが可能か」「女性だけが可能か」「男女ともに可能か」の性別に着目した三つの観点で検討した後、全体で話し合うことにより、ジェンダーに気付き、男女ともにどの職業を選択してもよいことを理解できるであろう。
- 2 学級活動2で、生徒が今後の自己の生き方を考える活動において、男性が多く働く職業の中の女性、女性が多く働く職業の中の男性に着目し、それらの人たちへインタビューしたVTR資料から体験を聞き、教材「私の進む道」を活用することにより、自分にあった進路選択をしようとする意欲が高まるであろう。

IV 研究の内容

1 基本的な考え方 (略)

2 実践の展開

実践の流れ	主な活動内容
事前活動1	(略)
学級活動1	<ul style="list-style-type: none">○職業の「仕事内容」、ふさわしい「能力・適性」について「男女ともに可能か」検討する。○自分が興味・関心をもつ職業は「男性にふさわしい職業か」「女性にふさわしい職業か」「男女ともにふさわしい職業か」を考える。○風習やしきたりとしての職業とジェンダーとのかかわりを考える。
事前活動2	<ul style="list-style-type: none">○学級活動係が保育士、看護士、警察官へのインタビュー内容を考える。○インタビュー場面のVTR資料を作る。○学級活動係が進路に関する意識調査のまとめをする。
学級活動2	<ul style="list-style-type: none">○学級活動係が教材「私の進む道」を活用して、進路に関する学級の実態を発表する。○サッカー監督を目指す女性のVTR資料を見て、感じたことを発表する。○VTR資料から男性保育士、男性看護士、女性警察官の体験を聞く。○ワークシート「私の進む道」を活用して、今後の自己の生き方を考える。
事後活動	(略)

V 研究の結果と考察

1 ジェンダーに気付き、男女ともにどの職業を選択してもよいことを理解できたか

(1) 実践の概要 (略)

(2) 結果と考察

看護婦にふさわしい能力・適性として出された「面倒見がよい」を検討する場面で、他の生徒から出された「男性にはできない」や「女性しかできない」という意見を聞いてA子は考え始めた。しばらくしてA子は「面倒見がよいのは、男女ともできる」と発言した。次に、自分が興味・関心をもつ職業について個々に検討する場面で、A子は幼稚園の先生について調べた仕事内容、能力・適性で資料1のように「めんどうみがよい人」を含め、すべての項目を男女とも可能(◎)とした。そして、幼稚園の先生は「男女ともどもできる仕事だと分かった」と記述している。ここで授業前の「幼稚園の先生は女性に合っている」という考えを改めたことが分かる。

個々に検討した結果を全体で

資料1 A子の職業についての検討

学習プリント		
◎自分の興味のある（自分のなりたい、身近な人の）職業について 仕事の内容と仕事をするにふさわしい能力、適性を調べましょう。		
職業名	ようち園の先生	
<input checked="" type="checkbox"/> ◎男女とも可能、男・男だけ可能、女・女だけ可能 仕事内容（仕事の内容を1つ書きましょう。）		
ピアノを弾く 歌を教える 子供の性格を知る 子供をつける、遊ぶ 行事の計画立て（会議、プリント作り） おどりを教える 教室のうじをする 行事をすまわる 部屋にラインをひく 食事の世話を トドレッシュマット		
親 親 に 子 供 の 様 子 い を 伝 え る ◎	能力・適性（どんな人がこの職業にふさわしいか） <input checked="" type="checkbox"/> ◎男女	
	めんどうみがよい人	
	めんどうみがよい人	
	子供の好きやうなことを考へる	
	遊びひらくさん知っていること	
	かどりの知識をたくさん知ること	
	子供の中ではやっていることを知る	

ほんの感想
 男がする仕事だと思ってた仕事や女がする仕事など思っていたけど授業で職業をえらぶところが自由できらめかなかった

◎男女について検討した後の自分の職業に対する意見を書きましょう。
 男女ともどもできる
 仕事だと分かった。

資料2 授業記録

E男	保母は女のところじゃないのか。
S1	男でも女でも子供が好きならできる。
S2	男の人でもできる。
T	保母の仕事内容、能力・適性を分析した結果はどうかな。
S3	大部分男女可能となった。
A子	男女可能となった（強くうなづく）。
E男	ふうん（うなづく）。

話し合う場面で、E男の「保母は女性にふさわしい職業」の発言に対して、A子は資料2のように答え、強くうなづいた。これらのことから、A子は幼稚園の先生の仕事内容、能力・適性は男女とも可能であること、幼稚園の先生は男女ともにふさわしい職業であることを理解できたと考えられる。本時のまとめの場面で、A子は「ジェンダーの意味が分からなかったが、今日の授業で分かってよかったです」と発言している。資料1の授業の感想を見ると、「男ができる仕事、女ができる仕事だと思っていた」と仕事を性別で区別していたこと、すなわち自分がジェンダーの視点をもっていたことに気付いた。また「職業を選ぶことが自由にできることが分かりよかったです」と記述していることから、男女ともにどの職業を選択してもよいことを理解したと考える。

(中略)

また、資料3にあるように、学級活動1の前後で学級全体の意識を比較してみると、男性にふさわしい職業、女性にふさわしい職業について「ある」が42%から0%に、

資料3 「男性（女性）にふさわしい職業があるか」
調査結果

	学級活動1の前	学級活動1の後
ある	42 %	0 %
どちらかといえばある	39 %	6 %
どちらかといえばない	16 %	49 %
ない	0 %	45 %
考えたこともない	3 %	0 %
	100 %	100 %

これは、学級活動1前に職業とかかわりのあるジェンダーの視点をもっていた生徒が、学級活動1後にジェンダーに気付いたことを意味する。このことからも今回の実践で生徒はジェンダーに気付き、どの職業でも男女ともに可能であることを理解したと考える。 (以下略)

VI 研究のまとめと今後の課題 (略)

II 学年・学級づくり

◆ 実践例11（授業研究）一小3学級活動一

本実践例は、自分や友達のよさを発見していく「3の1探検宝島」の活動を通して、互いのよさに気付き合おうとする児童を育成し、学級づくりに生かそうとしたものである。具体的には、自分たちのよさに気付く探検への意欲をもつ事前活動、1週間の生活を通して様々な友達のよさに気付く探検活動、気付いたよさを伝え合う喜びを味わう事後活動を行うことにより、互いのよさに気付き合うことができるようとした実践例である。

授業研究で大切なことは、投入した手立てを具体化し、実践することである。

本実践例は、互いのよさに気付くための「探検の旗作り」「宝島巨大マップ作り」「宝の花束作り」などの手立てが、児童の学習を動機付け、主体的活動を促していることに意義がある。

互いのよさに気付き合う学級活動

—「3の1探検宝島」を通して—

I 主題設定の理由

社会の急激な変化による子供たちの人間関係や生活体験の希薄さを背景として、子供たち自らが、自他の存在をかけがえのないものとして受け止め、一人一人のよさや可能性を生かしながら生きる力を育成することが望まれている。それには、子供たち自らが、進んで互いのよさに気付き合いながら、かかわりをもつ活動を体験し、そこで味わった喜びや自らのよさに対する自信を生かして身の回りの対象と進んでかかわり、よりよく生きていこうとする姿勢を丹念に育てることが大切であると考える。

本学級の子供たち（3年生 男子13名、女子17名）は、元気で、自分の思いを表すことはできる。しかし、自分や友達のよさに気付いたり、それを伝え合ったりするところまでは至っていない。その原因としては、今まで、自

分や友達のよさに気付く体験や、新しい見方の大切さを考えたり、自信につながる喜びを味わったりすることが少なかったからであると考える。

そのため、子供たちが、様々なよさに気付くための日常的な体験活動を行い、それを基に、学級活動を中心とした「互いのよさに気付き合う」活動を計画し、自分や友達のよさに気付くことに意欲をもち、友達の様々なよさに気付き、気付いたよさを伝え合う喜びを味わえる、「ワクワクした、よさ発見」の体験をしていくことが大切であると考えた。

そこで本研究では、子供たちが今までの「よささがし」を振り返り、新たに、よさに気付く活動として「3の1探検宝島」を計画した。それは、今までの「よささがし」を新たに見直した上での学級を「3の1宝島」と名付け、よさを「宝」、よさに気付くための活動を「探検」とし、探検へのめあてを表す活動、宝を発見する活動、発見した宝を伝え合う活動からなる一連の活動に取り組むようにしたものである。 (後略)

II 研究のねらい

「3の1探検宝島」の学習において、①自分や友達のよさに気付くためのめあてを表す活動、②友達の様々なよさを発見する活動、③気付いたよさを伝え合う活動を行うことにより、友達相互の新たなよさに気付き合うことができることを実践を通して明らかにする。

III 研究の見通し

- 1 学級活動①において、「よささがし」を基に、自分たちの探検のめあてを表すための「探検の旗作り」を行えば、探検活動に対する意欲をもつことができるであろう。
- 2 探検活動において、友達のよさ「宝」を観点を設けて分類し、「宝島巨大マップ作り」を行えば、友達の様々なよさに気付くことができるであろう。
- 3 学級活動②において、気付いた友達のよさ「宝」の交換を基に、「宝の

花束作り」を行えば、気付いたよさを伝えたり、伝えられたりすることの喜びを味わうことができるであろう。

IV 研究の内容 (略)

V 研究の結果と考察

1 自分のよさや友達のよさに気付いていくことに意欲をもつことができたか

(1) 実践の概要

学級活動①「探検の旗を作ろう」で、自分たちの探検のめあての旗を作り、探検のシンボルとして「宝島巨大マップ」に張る活動を行った。 (後略)

(2) 結果と考察

A男は、探検の旗に「楽しく、おもしろい探検にしたい。ちゃんとしたいから。こうしなきゃ楽しくないから」と書いた。探検日記には「よかった。楽しい。来週の探検でちゃんとやりたい。またこういうのをやりたい。3年1組のみんなで、先生も合わせて」と感想を書いた。また、アンケート結果の発表を聞いて、「みんなやる気があると感じ、ぼくもがんばろうと思った」と話した。これらのことから、探検隊の一人としてめあてを考え、旗が作れたことで、3の1みんなでの探検活動への期待感をもてたことが分かる。

また、アンケートで「友達のよさを発見していく活動〔3の1探検宝島〕は楽しみですか」の問いに、30名全員が「はい」と答えた。

この活動で、めあてをもち、全員で旗を作ったときの気持ちや活動への期待が充実感となり、よさ発見活動への意欲が高まったと考えられる。以上のことから、探検のめあてを表す探検の旗作りの活動を行うことにより、探検宝島に対する意欲をもつことができたといえる。

2 友達の様々なよさに気付くことができたか

(1) 実践の概要

1週間、友達のよさ発見のための探検活動を行った。友達に伝えるために、見つけた宝を「発見！宝カード」(宝発見の場面、その宝にあった名前、そ

の友達に送るメッセージ)に記入し、友達の宝に気付くため、宝につけた名前を基に、探検カード(資料1)〔やさしさ森、がんばり山、しっかり町、アイデア湖、新種〕に、宝の種類を分類し「宝島巨大マップ」に張った。

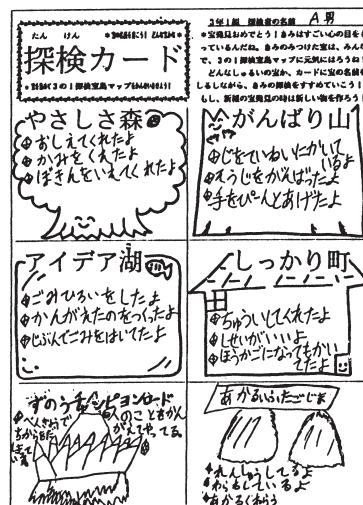
新種の宝(資料2)の時は、宝島に合う楽しいもの〔例　なかよし木〕を作って張った。

(2) 結果と考察

A男は、探検日記に「カードが5枚目になった。みんなに配れるからよかった。ぼくは、こういうのが一番得意で一番好きだ」と書いた。このことから、探検への自信を抱いていることが分かる。また、「宝島巨大マップ」を見て、「はじめ、やさしさ森がふえた。がんばり山やしっかり町を作りたかったので前のことを思い出したり、発見したりした。すごくよかった」と書き、宝の四つの観点や全員の宝に目を向いたことが分かる。

全体では、〔やさしさ森39個、がんばり山35個、しっかり町39個、アイデア湖26個、新種36個〕の発見があった。「宝の名前を○○にしたよ。これはやさしさ森だね。次は新種だ!」と話し、四つの観点を手がかりに、新たな宝に目を向け合い、日に日にぎやかになる「宝島巨大マップ」作りに取り組んだ。新種の宝(資料2)は、仲間の観

資料1 A男の探検カード



資料2 新種の宝

新種の宝につけられた名前	
* なかよし木	* ともだちいせき
・おしえて橋	・くふうどうくつ
・宝島の海	・やくそくの家
・お話の森	* なかよししづく
・しかけの森	・がんばり工場
・心の花束	・がんばれいせき
* なかよし星	・さっぽりりーグ
・元気宇宙	* なかよしがね
・元気草原	・そうじの花畠
・ひざおき花	・プラス1はいいね
・そうじ星	・そうじ星(2回目)
・ふしぎ公園	・恐竜と勉強
* なかま川	* みんななかま
* なかよし川	・本はいいね
・話し花	・しんぱい島
・星を大切に	* なかよし玉
・ずのうチャンピオンロード	〔A男作〕の新種
・明るいふたご島	
※ <* なかまの観点が多いもの>	

点が多かった。

「発見！宝カード」を基に、よさに名前を付け、探検カードで種類をチェックし、「宝島巨大マップ」に張る活動は、様々なよさに目を向けることができたと考えられる。

以上のことから「発見！宝カード」を基に、宝の種類を探検カードの観点で分類し、「宝島巨大マップ」を作ることにより、友達の様々なよさに気付くことができたといえる。

3 気付いたよさを伝えたり、伝えられたりすることの喜びを味わうことができたか

(1) 実践の概要

学級活動②「発見した宝を伝え合おう」で発見した宝を交換し合い、自分に届いた「発見！宝カード」を台紙に張り、宝の花束を作り、その時の思いを宝の花束日記にまとめた。また、525個の宝が張られた「宝島巨大マップ」を見て、みんなの発見を振り返った。

(2) 結果と考察

B子は、140個の宝を発見できた。「B子さんすごいね」と、友達にも認められ、伝える喜びを味わった。花束日記（資料3）には「みんな、ちゃんとしていたので、いっぱい書けました」と、集団の宝にも目を向け、自分については「自分は、こんなによいことを、はっけんできる人なんだとわかりました。（中略）いえでやりたいほど、はっけんすることがすきなんだなとおもった」としている。

資料3 B子の花束日記

宝の花束にします自分の思いとお金として、書き表します。
始めは、少しあげなかつたのに3日、みんなちゃんと
してましたので、いっぱい書けました。みんな力をあわ
せてながよく人のきもちを、かんがえながうやって
いました。
これからもはっけんを、いっぱいしていつまでもつづ
けていきたいとおもいます。もうおわてしま、たけ
えどやつたとき自分はこんなによいことをはっけんでき
る人なんだ」とわかりました。
どうも自分がよさをかがしました。
3つのことだけではなく3の2、3の3もをかがしました。
心の中でおもて、かみにはかけないがふござ、
家でやつてきましたことを、思ひだすと、いえでやりたい
ほどは、けんすることがすきなんだな」とおもった。
これががいもみんなのよさを、はっけんを、つづけ
ていきたいと思います。

また、「自分にも宝がきてうれしい。これからも続けたい」と話し、よさを発見し、伝え合う喜びを味わっている。

全体では、探検日記に「すばらしいけっさく品」「よさをきがせた気持ちでいっぱい」「3の1はすごい仲間」などの記述があり、満足感や喜びが分かる。アンケートでは、全員が、よさを伝え合うことは楽しく大切だと答え、喜びを表した。

以上のことから、「発見！宝カード」の交換を基に、集まったカードで宝の花束を作ることにより、よさを伝え合う喜びを味わうことができたといえる。

VI 研究のまとめと今後の課題 (略)

III 健康教育に関するもの

◆ 実践例12（授業研究）一中1特別活動一

本実践例は、健康な生活を送ろうとする意欲を育てるために、歯周疾患を取り上げたものである。具体的には、口腔内写真、位相差顕微鏡、情報カードソフトを活用して、学級活動（学級担任と養護教諭によるチームティーチング）と個別指導及び臨時歯科検診を関連させた保健指導を行った実践例である。

授業研究において「結果と考察」を行う際に大切なことは、子供の変容を質的、量的にとらえ、それを的確に表現することである。

本実践例は、全体の変容の中に個の変容の位置を示すなど、とらえた変容の姿を図表などを用いて的確に表現していることに価値がある。

健康な生活を送ろうとする意欲を育てる保健指導

—歯肉に関する教材を取り入れた歯周疾患の指導を通して—

I 主題設定の理由

本校における定期健康診断の結果では、アレルギー性疾患やう歯・歯周疾患の診断を受けた生徒が非常に多い。特に歯周疾患の診断を受けている生徒は、全体の50%を超えている。 (中略)

歯周疾患は、適切な歯磨きを励行して歯垢を取り除くと、短期間で健康な歯肉に回復することができるという特性がある。その特性を生かした指導を行うことで、実践の成果を生徒自身の目で確かめられ、健康な歯肉に自分で取り戻せたという喜びを味わうことができる。このような保健指導を試みることで、健康の状態や健康を改善・維持する方法に気付き、自分にあった行動を積み重ね、成果を確かめることを通して行動を続けようとする気持ちが現れ、健康な生活を送ろうとする意欲に結び付くと考える。

そこで、本研究において、養護教諭が学級担任と学校歯科医と連携し、1年生を対象に歯肉に関する教材を活用して、学級活動と個別指導及び臨時歯科検診をかかわらせた継続的な保健指導を考えた。学級活動では、口腔内写真や位相差顕微鏡の教材を取り入れ、自分の歯肉の状態や歯肉の改善・維持の方法を知る。個別指導では、情報カードソフトを活用し、歯肉の変化していく様子を提示しながら目標を考え、行動を促す。このような活動のまとめとして、11月に臨時歯科検診を受け、歯肉の変化と自分の行動との関連を考える。

以上のような歯周疾患に着目した保健指導を通して、健康な生活を送ろうとする意欲が育てられると考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい (略)

III 研究の見通し

- 1 学級活動「歯肉から健康を考えよう～今そしてこれから～」(学級担任と養護教諭によるチームティーチング)において、歯周疾患が多い事實を基に、口腔内写真や位相差顕微鏡を活用することにより、歯肉の状態や

歯肉の改善・維持の方法に気付くであろう。

- 2 個別指導において、情報カードソフトを使い、歯肉が変化していく様子を見ながら、自分の習慣を振り返ることにより、これからの行動目標をつかむことができるであろう。
- 3 臨時歯科検診において、9月からの口腔内写真を基に学校歯科医による診断・指導を受け、歯肉の変化と自分の行動とをかかわらせて考えることにより、健康を改善・維持するための行動を続けようとする気持ちをもつことができるであろう。

IV 研究の内容

1 基本的な考え方

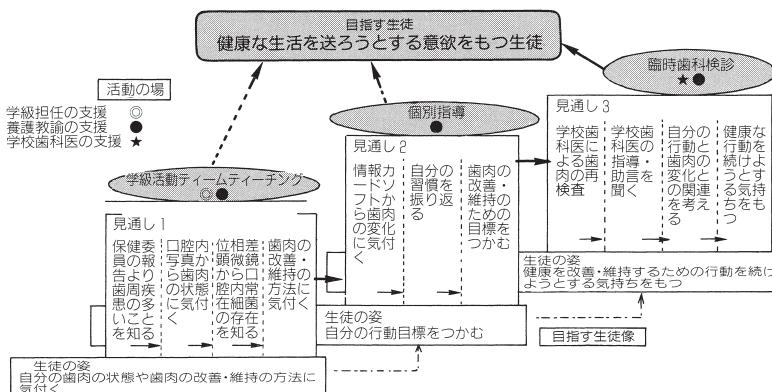
(1) 健康な生活を送ろうとする意欲をもつ生徒 (略)

(2) 情報カードソフトとは

データベースや表計算での面倒な入力作業が簡単にでき、画像データを入力できるソフトである。本研究においては、個別指導から臨時歯科検診にかけて、口腔内写真を画像データとして取り込み、経過を追いながら歯肉の変化を自分で確認する手段として活用する。

(3) 歯周疾患とは (略)

(4) 全体構想



2 研究の方法 (略)

V 研究の結果と考察

1 齒肉の状態や歯肉の改善・維持の方法に気付くことができたか

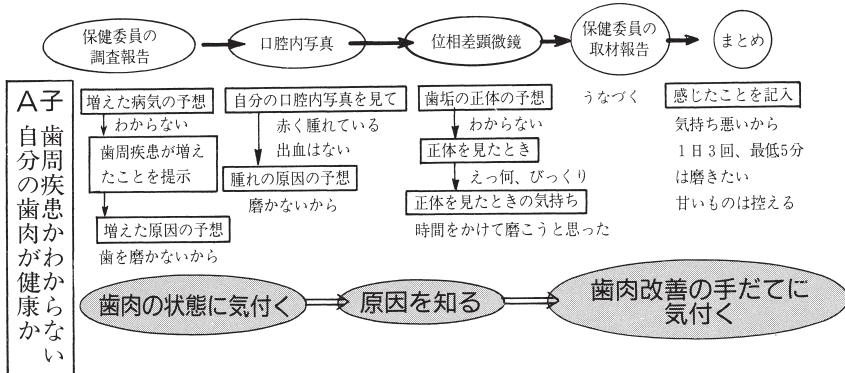
(1) 活動の概要

保健委員が「小6から中1にかけて増えた病気調べ」について報告した。歯周疾患が多くなった事実から、口腔内写真を示し、生徒が歯周疾患の症状を理解し、自己の歯肉の状態に目を向けた。続いて、位相差顕微鏡による歯垢の観察により、歯肉の改善・維持の方法について考えを進めた。さらに、保健委員が学校歯科医に取材した報告から、その方法を確認し、まとめの活動として感想を発表し合った。

(2) 結果と考察 (p.89参照)

A子の学級活動における反応は、資料1の通りである。口腔内写真を提示したことにより、腫れと出血の視点からワークシートに「赤く腫れているところがある、出血はない」と記入した。腫れの部位についても「腫れているところはどこ?」と問いかけると、その部位をきちんと指すことができ、自分の歯肉が歯周疾患であるということに気付くことができた。腫れの原因の予想場面では、「磨かないから」という発言をしている。位相差顕微鏡で歯

資料1 学習活動の流れとA子の反応



垢を観察すると友達に「えっ何、びっくり！」と話しかけた。この段階で腫れの原因を確認したと考える。歯垢の中に口腔内常在細菌が存在するという事実から、A子は「時間をかけて歯を磨く」とワークシートに歯垢を取り除くための方法を記述し、最後のまとめでは、「気持ち悪いから1日3回、最低5分は磨きたい。甘いものも控える」と記した。口腔内写真から自分の歯肉が歯周疾患であることが分かり、位相差顕微鏡から歯垢の観察したことにより、歯周疾患を改善するために、歯磨きは時間をかけなければならないということに気付くことができた。さらに学校歯科医の取材内容から、5分間という具体的な時間や歯垢をつくらないような食生活に目を向けることができた。（後略）

2 行動目標をつかむことができたか

（1）活動の概要

第1回個別指導では、9月の口腔内写真をコンピュータから提示し、「健康な歯肉か不健康な歯肉か」と問い合わせながら、歯肉の腫れ・色・出血について観察し、次に自分の習慣が正しい行動であるかどうか整理し、不足している行動から、歯肉の改善・維持につながるという行動目標を考えた。

第2回個別指導では、デジタルカメラで歯肉を撮影してコンピュータに取り込み、情報カードソフトから口腔内写真を見た。歯肉の状態を9月の口腔内写真と比べながら変化をチェックし、「なぜ歯肉が変化したのか」または「なぜ歯肉が変化しなかったのか」という問い合わせから、自分の行動とのかかわりを考えた。そして臨時歯科検診までにどのような活動をしたらよいかという行動目標を考えた。

（2）結果と考察

情報カードソフトから口腔内写真を提示した際の生徒の反応は、大別すると「腫れがよくなっている」「きれいになってる」「やったのにあまり変わっていない」の三つであった。歯肉の観察ポイントが生かされ、9月の状態から歯肉がどのように変化しているか自分で比較し観察できるようになっている。

次に生徒の習慣を整理すると、第1回個別指導（図1）では、「小刻みに動かす」「シャープペンで字を書く程度の力」「歯磨き剤の量は少し」の項目が高い。これを基に自己の行動目標を立てたところ、「1日3回磨く」「意識して磨く」「5分ぐらい磨く」の3項目を行動目標とした生徒が多かった。行動を整理することにより、不足している行動が明確になり、不足している部分から行動目標を考えたことが分かる。第2回個別指導では、1回目から2回目にかけての約3週間の様子をチェックした。その結果、図2に示すように正しい行動をしている人数は、第1回個別指導（図1）時に比べ全体的に多くなっている。特に「意識して磨いている」「鉛筆を持つような持ち方」の項目が高くなっている。生徒の日ごろの習慣を整理したことにより、自分の不足している行動に気付き、歯肉の改善・維持のための行動目標をつかむことができた。（後略）

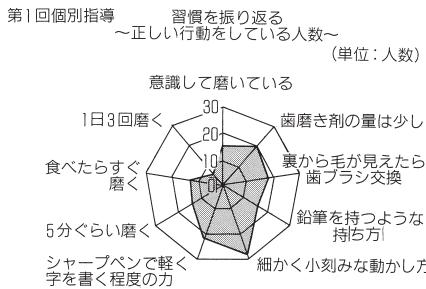


図1 習慣を振り返る（第1回）

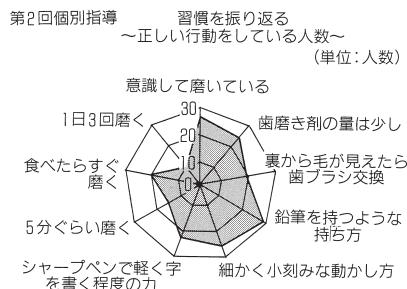


図2 習慣を振り返る（第2回）

3 健康を改善・維持するための行動を続けようとする気持ちがもてたか

(1) 活動の概要

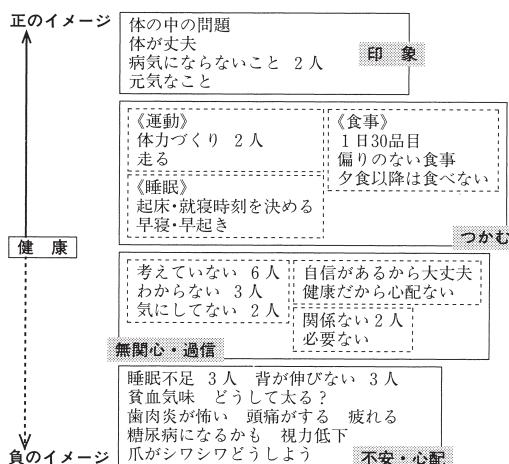
9月から臨時歯科検診までの3枚の口腔内写真（9月・個別指導・臨時歯科検診直前）を参考に検診を受け、歯肉の状態をチェックした。学校歯科医の診断・指導を基に、自分の行動と歯肉の変化とのかかわりを考え、学級活動から臨時歯科検診までの約2か月間の取組を通して、体や健康について感じたことをワークシートに記入し、健康ファイルにとじ込む活動をした。

(2) 結果と考察

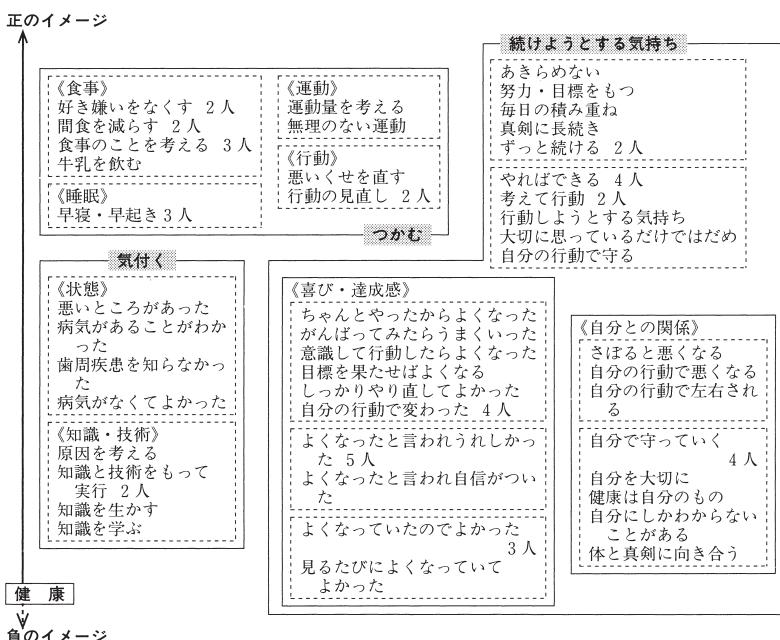
臨時歯科検診結果では、9月の時点で健康者（18人）は、全員が健康な歯肉と診断され、歯周疾患のある生徒は、17名中16名が改善したと診断された。

約2か月間にわたる保健指導の取組から、生徒の健康に対するイメージは、資料2から資料3のように変容している。学級活動前の

資料2 健康のイメージ（授業前）



資料3 健康のイメージ（臨時歯科検診後）



健康についての考え方（資料2）では食事・睡眠・体力に関する行動目標をつかんでいる生徒はいるものの、健康に対して過信・無関心な生徒や不安・心配のある生徒が目立ち、「気付く」「続けようとする気持ち」の部分は現れていない。全体的に健康に対して負のイメージを抱いている生徒が多い。このような生徒に対し継続的な保健指導を展開することにより、資料3のように健康に対するイメージが変化した。健康を維持するためには「状態の理解」「知識と技術」が必要なことに気付き、健康を維持するための具体的な方法（運動・食事・睡眠）をつかみ、「自分の行動で変わった」「うまくいった」「やりなおしてよかった」という達成感を体験した。このようなことから、「自分の行動で悪くなる」「自分で守っていく」というように、健康を自らのこととしてとらえ、「毎日の積み重ね」「ずっと続ける」「やればできる」など、続けようとする気持ちが現れてきた。（後略）

VI 研究のまとめと今後の課題（略）

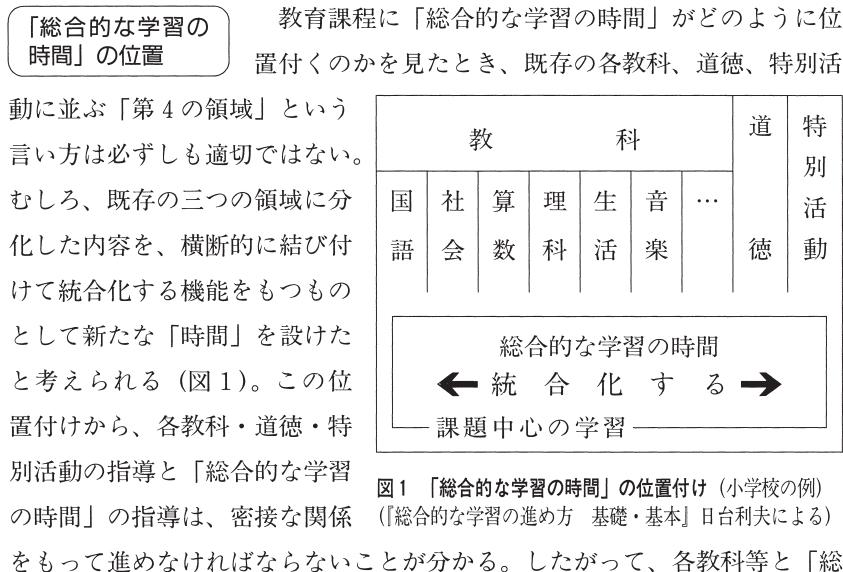
第4節 総合的な学習の時間を推進するための研究の在り方

I 「総合的な学習の時間」のねらい

これからの中学校教育において強調されていることは〔ゆとり〕の中で「特色ある教育」を展開し、子供たちに〔生きる力〕をはぐくんでいくことである。この〔生きる力〕の中核は「自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」である。この〔生きる力〕をはぐくむために、各学校が創意工夫を生かした特色ある教育課程の編成、特色ある教育活動の展開、特色ある学校づくりが求められている。その核となる教育活動が「総合的な学習の時間」である。

1 特色ある教育課程の編成

(1) 教育課程における位置



合的な学習の時間」は互いに支え合う関係、補い合う関係にあるといえる。

(2) 「総合的な学習の時間」の特徴

特色ある教育課程
のかぎ

「総合的な学習の時間」には、以下のような特徴がある。

- ねらい、教育課程上必置すること、授業時数などを示すにとどめ、各教科等と異なり、目標、内容等が示されていない
- 各教科等にまたがる学習活動である
- 教育課程上の具体的な名称については各学校において定める
- 各学校における創意工夫を生かした学習活動である
 - ・学習内容や学習活動の弾力化
 - ・年間の授業時数の運用における弾力化

このような特徴を踏まえ、子供たちの実態、目指す子供像、地域の実態や特色、学校で重点的に取り組んできた実践や研究の経過、学校や地域社会で活用できる諸施設の状態等、その学校の諸条件を生かし、そのよさを生かすことが特色ある教育課程のかぎとなる。

児島邦宏は『教育課程経営の考え方』において、特色ある教育課程について次のようなことを挙げている。

- ① 個性を生かす教育という面から、ティームティーチングをはじめとする指導体制、指導組織の弾力化、グループ学習や異年齢集団による学習形態、学習集団の弾力化をどう図るか。
- ② 日課表、時間割、1単位時間と、「ゆとり」という視点からの時間の弾力化をどう図るか。

時間の枠に内容や活動を合わせるのでなく、内容や活動が時間の枠を決めるという逆転の発想が求められている。

- ③ 学習の場、学習環境を、体験的・実践的な学習、問題解決的学習という方法的原理に立って、どのように拡大、深化、再編を図っていくか。さらに、情報環境としての学校内外の学習環境の再編・整備をどう図るか。
- ④ 「開かれた学校」をどう実現していくか。地域の人々との交流、学校間

交流、地域の人々の学校支援・協力、地域環境の活用等を通して、「共に生きる」ことの意義を体験的にどうつかみ、自己の確立を図っていくか。

このことを「総合的な学習の時間」に当てはめて考えたときに、例えば、学校における創意工夫を生かした学習活動を展開するに当たって、学習内容や学習活動の弾力化については①や③や④を、年間の授業時数の運用における弾力化については②を考えておくことが大切である。

2 特色ある教育活動の展開

特色ある教育活動
の要となる

子供の実態、子供の興味・関心、学校や地域の特色を踏まえた教育活動を創り出すとき、その活動は、特色をもったものになっていく。その特色ある教育活動の要となるのが、「総合的な学習の時間」である。学習指導要領（平成10年告示）においては、次のようなねらいをもって指導を行うものとしている。

- (1) 自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。
- (2) 学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、*自己の生き方を考えることができるようすること。
*高等学校は自己の在り方生き方

このねらいは、いずれも「～を理解する」というような到達目標的なものではなく、自らをより高めていく方向目標的なものであるところに特色がある。そして、「総合的な学習の時間」が各学校において創意工夫を生かした学習活動を行うものであること、この時間の学習活動が各教科等にまたがるものであることから、各学校の主体性、創意が極めて重要となってくる。各学校では、「総合的な学習の時間」の趣旨やねらいに即して適切な活動を行えるように、自校の実態に応じた学習内容や活動の選択についての話し合いや学校としての合意の形成が大切となる。

また、学習の展開に当たっては、次のような点に留意しながら学習を進めることが大切である。

① 体験的な学習、問題解決的な学習の重視

子供たちの課題意識を育てるために自然体験や社会体験などを学習に取り入れることや、子供自身が課題を見いだし追究していくようにすることが大切である。

② 各教科等との関連を図った指導

これからの中学校に必要とされていることは、それぞれ別々に獲得した知識や技能を結び付けて、課題解決に当たる機会や場を提供することにあるともいえる。個々の事柄を関連付けたり、様々な事象を全体的にとらえたりするなど広い視野をもって総合的に把握して判断を下し、自らの生き方に反映させるものの見方や考え方を身に付けるようにしていくことが大切である。そこで、各教科等で身に付いた知識や技能などが子供の中で相互に関連付けられ、総合的に働くように、各教科等との関連を図った指導を行う必要がある。

II 「総合的な学習の時間」の研究の視点と方法

自校の総合的な学習を「ねらい」や子供の実態から見直す

学校では、創意工夫し、編成した教育課程の中に「総合的な学習の時間」（以降、総合的な学習という）がどのように位置付いているかを見直し、よりよいものに修正していく必要がある。その際、「ねらい」や子供の実態から総合的な学習を見直していくことが大切である。

総合的な学習は、各学校の創意工夫を生かして、全職員の合意の下で構想され実施される。総合的な学習にかかわる課題は、実践の中で見付けられることが多いが、構想段階から課題を見いだし、学校全体で共同研究として取り組む必要がある。

構想上の課題は、例えば、子供がじっくりと学習に取り組めるゆとりをも

った計画であるかなどの吟味から見いだすことができる。実践上の課題は、学習内容・方法を子供自身がつくっていくというゆとりのある学習になっているかなどの吟味から見いだすことができる。その課題に研究として取り組んでいく場合には、第2章に挙げた研究方法を活用して解決していくのである。

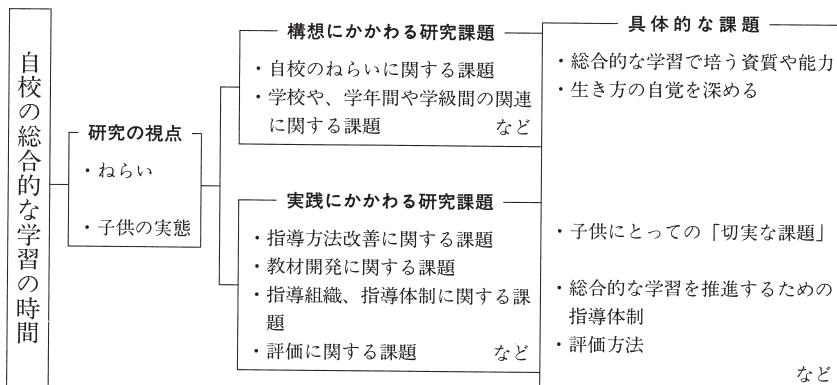


図2 総合的な学習の課題の例

1 構想上の課題

(1) 自校のねらいに関する課題

子供が何を身に付けたか調査し明らかにする

これまでの総合的な学習において、各学校でどのようなねらいを設定し、そのねらいを達成するためにどのような学習活動を展開してきたか、結果として個々の子供たちにどのような資質や能力が身に付いたかをとらえていくことが大切である。その際、総合的な学習のねらいと子供の実態から、自校のねらいを見直す視点を設定し、調査研究や授業研究などを通して、課題を明らかにしたり、解決したりすることが大切である。

例えば、調査研究において、次に示すように問題解決の能力から視点を設定し、個々の子供が何を身に付けたか調査し明らかにすることは、自校のねらいに関する課題をつかむ上で極めて重要である。

- 課題に興味・関心をもち、自分から進んで追究しようとしたか
- 自己課題についてグループで話し合い、課題追究の計画が立てられたか
- 課題追究では進んで情報収集を行い、記録に残すことができたか
- 課題追究の成果から必要なものを取捨選択し、まとめを行い、発表に生かせたか

(2) 教育課程に関する課題

位置付けや意味付けをとらえ直す

目指す子供を育成するために、総合的な学習のねらいを基に、教育課程の中での自校の総合的な学習の位置付けや意味付けをとらえ直すことが大切である。例えば、以下のような視点で教育課程を見直し、課題をとらえることができる。

- 総合的な学習の経験を積み重ねることにより、子供たちがどのような学習課題を求めるようになるか、系統性などを含めて学びの発達をどのように把握するか
 - 総合的な学習は、各教科、道徳、特別活動との関連をどのように図っているか
 - 子供や学校の実態、地域の実態などがよく反映された学習活動になっているか
 - 國際理解、情報、環境、福祉・健康など、選んだ課題は必然性のあるものになっているか
 - 構想した学習活動は、子供一人一人の興味・関心を基にした体験や学びの過程で補われ、修正していくことができるかなど柔軟性があるか
- 教育課程に関して見いだした課題を解決する方法として、調査研究などが考えられる。

2 実践上の課題

指導方法改善に関する課題

総合的な学習の実践を通して、教師が子供の学び方や問題を解決する力や態度が育っていないと感じたとき、そこに指導方法等にかかわる課題が生まれる。その際、教材開発や指導

の工夫によって、子供の変容が見られるのかという視点からの研究が始まる。

総合的な学習は、体験的な学習や問題解決的な学習を重視していることから、例えば、ねらいを達成するために問題解決の過程における指導方法を見直し、実践を通して課題を解決していくことが考えられる。

以下は、問題解決的な過程における指導方法を見直す視点の例である。

① 問題をつかむ過程

- ・出会いの場など、問題意識を形成する学習環境はふさわしかったか
- ・一人一人が自己の問題を見いだすことができたか

② 問題を追究する過程

- ・個人あるいはグループでの情報収集など、多彩な展開が行われたか
- ・多様な活動が行えるように情報の所在、情報収集の仕方などの支援が行えたか

③ まとめる過程

- ・収集した情報をどのようにまとめ、表現しようとしたか
- ・多様な表現ができるような支援ができたか

こうして見いだした課題を解決していくための方法として、授業研究が考えられる。

III 先進校の取組

1 資質や能力をどうとらえたか

総合的な学習を通して、培いたい資質や能力を神戸大学発達科学部附属明石小学校では、以下のようにとらえている。

事例 神戸大学発達科学部附属明石小学校

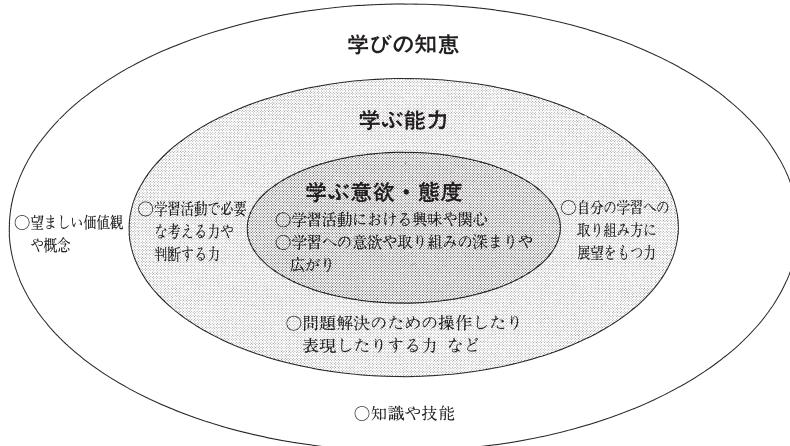
明石小学校では、総合的な学習で培う「自己形能力」を以下の三つの観点で層構造をなすものとしてとらえている。

「学ぶ意欲・態度」…学習全体を通じて持続されるべき興味や関心の総体で

あり、学習の取り組みの深まりや広がりを示す。

「学ぶ能力」…考える力や判断する力、表現する力など学習の展開過程で発揮される様々な能力の総体を示す。

「学びの知恵」…学習を通して得られた知識や技能を含め、望ましい価値観や概念の総体を示す。



(『生きる力を育む総合学習の展開』神戸大学発達科学部附属明石小学校研究会より)

2 子供にとって「切実な課題」となるようにするために

追究する価値があるかどうかの判断は、子供にゆだねられているといえる。

総合的な学習においては、必然性や切実感を伴った子供にとって「切実な課題」の設定ということが、重要な意味をもっている。この「切実な課題」は、すべての子供がもっているわけではなく、「切実な課題」がもてるような「活動」を設定することが必要となる。「～は、どうなっているんだろう」「～なのは、なぜだろう」「～について、調べてみたい」といった疑問や思いは、何もないところから生じるのではなく、具体的な事物に触れたり、事柄を体験したりする中から生まれてくるものである。

事例 上越教育大学学校教育学部附属小学校

5年生では、牛の飼育活動を行う。大型動物の飼育では、飼い続けるために様々な問題が生まれてくる。成長に伴い増えていく餌の確保、飼育環境の改善、さらには去勢といった問題。特に、「牛を売りに出すかどうか」といった問題は切実な問題となって子供にふりかかる。子供は、餌や飼育環境だけではなく、それまでの飼育を通して培ってきた牛に対する心情を基に話し合う。子供は悩みながら考え続ける。どうにかして結論を見いだそうとして様々な視点からアプローチしていく。牛乳や乳製品について調べたり、屠殺場の様子を見学したりしていく。

教師の思い（抜粋）

…秋になり、2頭をどうするかが現実の問題となってきた。購入費用の10万円を返すことや冬場の飼育の難しさを理由に売り出さなければいけないと主張する子供と、売りに出したくないという子供の考えが対立した。牛肉のことを調べ、食肉公社（屠殺場）のビデオを見るにつけ、肉として売りたくはないという子供の思いは強くなっていた。ここでは、子供が葛藤する場面を意図的に設定した。そうすることで、「いのち」に対する子供の考えが揺れることを期待した。日ごろ何気なく食べている肉にも「いのち」があることを実感し、それを食べている自分に気付いてほしかった。

子供の思い（作文から）

冬を迎える、子供の考えは、質的に変化してきた。

陽子さんは、「いのちあるものは輪になっているようです。いのちあるものはいのちあるものを食べているのです。つまり大きな輪になっているのです。私たちの心の中に生き続けるのです。私も少しだけ考えが変わってきました。売ってもいいと思えるようになってきました。」と作文に書いた。

また、詠一君は、次のように書いた。「人間と動物のいのちは比べられないです。生きているものすべてのいのちは大切で、順番はつけられないのです。昔から人間は牛を家畜として飼っていました。しかし、牛は利用されるためにいのちを与えられたのではなく、牛として精一杯生きるために生まれてきたのです。牛のいのちを大切にすることは^{*1}マックと^{*2}バシルの立場で考えなければいけません。」(*^{1,2}牛の名前)

琢郎君はこう書いている。「生きているものが死ぬと、表面的には消えたように思えるいのちも、人の心の中ではいつまでも生き続けるのです。また、牛

肉や豚肉は牛や豚から、牛乳やバターは牛から、という具合に、生きるために必要な物は、すべて生き物からとれるのです。これからは、お互いが助け合える社会をつくっていけばいいと考えます。」

子供の問題意識を刺激するような事実との出会いや場面設定がある。その中で、子供は追究せざるを得ないような問題に出会うのである。

(『Wan Cha』 上越教育大学学校教育学部附属小学校より)

3 生き方を考えることができるよう

総合的な学習のねらいの一つに「自己の生き方を考えることができるようすること」とある。直接、生き方を考える学習を設定することも考えられるが、どのような課題に取り組もうとも「一連の学習を通して、自分はその問題について今後どのようにかかわっていくのか」を一人一人が考えることが大切である。

事例 群馬大学教育学部附属中学校

自己の生き方について自覚し、生きる力を主体的に身に付けようとする生徒の育成のために、次の(1)～(5)を研究のねらいとして取り組んでいる。

- (1) 生き方の自覚を深めるための生徒像を明らかにする。
- (2) 「情報に接しテーマを設定する」段階における社会の今日的問題のとらえ方を明らかにする。
- (3) 生き方の自覚を深めるための討論の在り方を明らかにする。
- (4) 各学年の学習活動過程を「生き方の自覚を深める」視点から見直す。
- (5) 生徒が自らの活動を振り返り、学習を継続していくための評価の在り方を探る。

以下、(3)生き方の自覚を深めるための討論の在り方について述べる。

討論を行う有効性の一つとして、討論を通して、自己の活動を振り返り、自分の生活を見直したり、よりよい社会をつくるために自分にできることを見いだしたりして、自己の生き方にかかわる見方を広げ考え方を深めていくことが挙げられる。そこで活発な討論を行うためには、テーマに対する自分の考えをしっかりとまとめておき、討論に臨むことが大切である。そこで、互いの追究結果を基に、自分の生き方の自覚を深めるための討論を行うに当たっては、それまでの自分の追究結果をまとめ、自分なりの考えを明らかにしたり、提言として他に働きかける内容を明確にしたりしておくことが必要となる。(『群馬大学教育学部附属中学校研究紀要第47集別冊 生き方総合』より)

次に、生き方交流III—卒業研究—『友好都市・前橋の在り方とその交流のために必要な私たちの心』のまとめ部分（抜粋）を示す。

…実際にイタリア人やイギリス人との交流を通して、相手の日本に対する興味・関心点は様々だったが、それを一つ一つ聞くことにより今まで自分では気付くことができなかった日本のよさや特徴に気付かされた。よって、お互いを理解し合うというのは相手を知ることだけでなく、自分や自国を理解することだと感じた。だから、これからいろいろな人とのかかわりをもっていく私たちは、外国人との交流を通して、もっと自分というものを考えるべきなのだ。そして何よりも大切なのは『心』である。…国際交流とはいっても、それは人ととの交流に変わりはない。確かに難しいことだけれど、それ以上に自分と違った文化を学ぶというのは楽しいことなのだ。21世紀を迎えるとしている今、国際交流においても普段の生活においても、日本人が今まで大切にしてきた『独特の文化』や言葉では言い表すことのできない『真心』を大事にする心が、私たちにとって必要であると考える。そして私は、外国人だけでなくすべてのまわりの『人』と高め合っていけるように、この国際交流に対する興味・関心を大切にしながら生きていきたいと考えている。

…………… * “真”の心の交流のために必要なこと七か条 * ………………

一、自分とは違うという先入観をとりはらうこと！

一、チャレンジ精神を大切にすること！

一、コミュニケーションは言語でなく「心」でとること！

- 一、誠心誠意相手に接すること！
- 一、自国の文化を理解し大事にすること！
- 一、相手との共通点だけでなく相違点から学ぶこと！
- 一、とにかく楽しんで交流すること！

4 子供を伸ばす評価の工夫について

子供の評価は、子供たちの学習を直接促進させることを目的としている。そのため、学習のそれぞれの過程や終末段階において、子供のよい点や進歩の状況等を自己評価や相互評価、教師の評価等を行い、子供の学習意欲の向上につながるようにすることが重要である。

事例 群馬大学教育学部附属小学校

子供たち自らが期待感や充実感を高められるような自己評価を促すとともに、子供たちの期待感や充実感のみとりをより充実させる手だてとして、ポートフォリオを用いた評価の工夫を行っている。ポートフォリオを用いた評価の特徴として、それぞれの子供の学習の歩みや現在の学習状況、さらには次に取り組むべき課題が時系列的に明らかにされるとともに、自己の学習の過程や結果を絶えず自己評価しながら、自己成長を遂げていくことができるということが挙げられる。

本校においては、問題解決的な学習において、学習カードや作品などからポートフォリオを作成し、それを集積する中で行われるポートフォリオ的評価を取り入れた。これは、授業内から授業外にわたって行われる評価である。

○ 授業内におけるポートフォリオ的評価

- ・子供たちは、作成した学習カードや作品などを規準に照らして、重要なものがあるかどうかを判断したり、選択したりする自己評価を行い、期待感や充実感を高める。そして、自己評価したすべての学習成果を集積し、ポートフォリオを作成する。
- ・教師は、子供たちの自己評価の様子から期待感や充実感の高まりをみと

り、支援する。

○ 授業外におけるポートフォリオ的評価

- 教師は、作成されたポートフォリオから子供たちの期待感や充実感の高まりをみとり、次時や次単元に向けての支援の計画を立てる。

表1 学習過程におけるポートフォリオ的評価

過程	心	学習活動	ポートフォリオ的評価		
			規準	自己評価	みとり
つかむ 期待感	①課題と出会う ②共通体験をする ③めあてをつかむ ④計画を立てる	自分に とつての 価値ある 発見	○学習プリントに記述した内容を振り返って付箋紙を貼つたり、線を引いたりする	○体験したことを発表したりめてを立てたりする際の活用 ○調べたり、準備したりする際の活用 ○次の体験や中間交流、まとめをする際の活用	<授業外> ○本時の子供の姿を予測する資料 ○支援計画を立てる ○ポートフォリオにコメントを記述する
			○活動を振り返って、学習プリントに記述する		<授業内> ○予測と実際の姿とを比較する
	⑤調査的、交流的な体験をしながら追究する ・調べる ・準備する ・中間交流する				
広げて 実感する	など ⑥まとめの活動をする ・発表会 ・交流会	など			

(『群馬大学教育学部附属小学校研究紀要 平成12年度紀要50』より)

参考文献

- 『小学校学習指導要領解説 総則編』 文部省 (1999)
 『実践をふり返り改善するポイント』指導と評価2000年7月号 高階玲治 図書文化 (2000)
 『新しい教育課程と学習活動の実際 総合的な学習』 天笠 茂 東洋館出版社 (1999)
 『総合的な学習の実践事例と解説』 「総合的な学習」実践研究会編集 第一法規 (1999)
 『生きる力を育む総合学習の展開』 神戸大学発達科学部附属明石小学校研究会 東洋館出版社 (1997)

- 『総合的な学習の多様な計画&実践』 新井郁夫編 東洋館出版社 (1999)
- 『総合的な学習の進め方 基礎・基本』 日台利夫 東洋館出版社 (1999)
- 『総合的な学習の時間の計画・実践・評価Q & A』 加藤幸次監修 九州個性化教育研究会編 黎明書房 (2000)
- 『実践 特色ある学校づくり—新しい教育課程経営をめざして—』 小学校編・中学校編 高階玲治・村川雅弘編 図書文化 (2000)
- 『みんなで総合しよう COUNT DOWN 2002』 上越教育大学学校教育学部附属小学校 (1998)
- 『研究紀要第47集別冊 生き方総合』 群馬大学教育学部附属中学校 (2000)
- 『学びを楽しむ子供の育成（第3年次）一期待感・充実感を高めるポートフォリオ的評価の工夫一』 群馬大学教育学部附属小学校 (2000)
- 平成9年度 研究紀要 第5号『横断的・総合的な学習の時間に関する調査研究』 群馬県総合教育センター (1998)
- 平成11年度 研究紀要 第7号『総合的な学習の時間に関する調査研究』 群馬県総合教育センター (2000)

あとがき

[ゆとり]の中で「特色ある教育」を展開し、児童生徒に〔生きる力〕を育成することを基本的なねらいとし、学習指導要領が改訂されました。各学校では、創意工夫を生かした特色ある教育、特色ある学校づくりを一層進めることや、教師一人一人のより主体的で創造的な教育への取組が求められるようになりました。

新しい時代の教育に対応する教師の資質・能力の向上には、教育研究に役立つ理論と実践を結び付けた手引書が必要であると考えます。

群馬県教育研究所連盟の「実践的研究のすすめ方—新しい教育の創造—」は、平成6年11月初版発行以来多くの方々に利用されてきました。この書によって多くの先生方が教育研究を推進したことと思いますが、時代の変化に対応した分かりやすい手引書作成への要請を基に改訂することとなり、改訂委員会を中心として検討を重ねてまいりました。この間、先輩諸氏から種々ご指導をいただきました。

本書の刊行に当たっては、「実践的研究のすすめ方—新しい教育の創造—」の基本的理念を尊重しつつ新しい要素をできる限り取り入れ、要望にこたえるよう努めてまいりました。意を尽くせなかった点もありますが、皆様のご批正をお願いするとともに、本書を教育実践と教育研究の向上に少しでも役立てていただけたなら望外の喜びであります。

本書の刊行に当たり、直接執筆を担当された諸氏、資料の提供でご協力をいただいた方々、さらにご指導をいただいた先生方並びに東洋館出版社の編集部長西村嘉之氏をはじめとする皆さんに、心からお礼申し上げます。

平成13年2月

群馬県教育研究所連盟副委員長 青木 忠

〈執筆者〉

群馬県総合教育センター指導主事

矢島 宣弘 天田比呂志 萩野 佳子 萩原 典子 大谷 稔
浅見 一秋 富田 正男 関口 満 大谷 龍二 天田 智晴
大澤 源 石川 誠

〈作成協力者〉

上村 哲也 島 千恵子 本田 伸一 小林 一弘 阿部 泰博
飯島 健二 岡田 和之 角田 明大 津布子寿夫 島倉 雄一
河添 和子 尾内 雅子

〈改訂委員〉

委員長 池田 真澄 (群馬県教育研究所連盟委員長・群馬県総合教育センター所長)

副委員長 青木 忠 (群馬県教育研究所連盟副委員長)

〃 黒 黙一 (群馬県総合教育センター研修部長)

〃 若林 宏宗 (群馬県総合教育センター情報相談部長)

事務局長 小林 裕司 (群馬県総合教育センター教科教育課長)

事務局 矢島 宣弘 天田比呂志 萩野 佳子 萩原 典子
大谷 稔 浅見 一秋

委員 富田 正男 関口 満 大谷 龍二 天田 智晴
大澤 源 石川 誠

〔平成11年度〕

副委員長 米山 貴博 (群馬県総合教育センター情報相談部長)

事務局長 松尾 明朗 (群馬県総合教育センター教科教育課長)

委員 内山 彰 生形 努 飯島実三男 木村 裕一

かいていしんばん じつせんてきけんきゅう かた
改訂新版 実践的研究のすすめ方
——創意工夫を生かした教育を求めて——

2001年2月20日 改訂新版第1刷発行

2014年1月18日 改訂新版第5刷発行

編著者 群馬県教育研究所連盟

発行者 錦織 圭之介

発行所 株式会社東洋館出版社

〒113-0021 東京都文京区本駒込5丁目16番7号

営業部 電話03-3823-9206 FAX03-3823-9208

編集部 電話03-3823-9207 FAX03-3823-9209

振替 00180-7-96823

URL <http://www.toyokan.co.jp>

印刷製本 藤原印刷株式会社

授業における

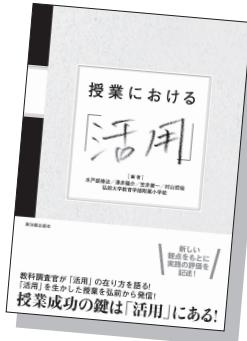
活用

教科調査官が
授業成功の鍵となる「活用」の
在り方を解説

■水戸部修治・澤井陽介・笠井健一・村山哲哉 編著

■弘前大学教育学部附属小学校 編著

本書は、「理論編」として、教科調査官が「教科における活用の在り方」「新学習指導要領改訂のポイント」をわかりやすく解説。[実践編]では、弘前大学教育学部附属小学校が研究を進めてきた、「意図的に授業の中に『活用の場面』を設定した取組」を紹介。



本体価格 2,600 円 + 税

授業における 「思考力・ 判断力・ 表現力」

学力を
伸ばす
言語活動

教科調査官が
「思考力・判断力・表現力」と
言語活動の充実を目指した
授業を具現化

■笠井健一・水戸部修治・津田正之・白旗和也 編著

■弘前大学教育学部附属小学校 編著

本書は、「理論編」として、教科調査官が「教科における思考力・判断力・表現力と言語活動の充実」「思考力・判断力・表現力の評価」をわかりやすく解説。[実践編]では、弘前大学教育学部附属小学校が研究を進めてきた、「意図的に思考を表現する活動」を取り入れた事例を紹介。



本体価格 2,000 円 + 税

がんばる先生を
応援します！



東洋館出版社

〒113-0021 東京都文京区本駒込5丁目16番7号
TEL: 03-3823-9206 FAX: 03-3823-9208
URL: http://www.toyokan.co.jp

小学校・中学校

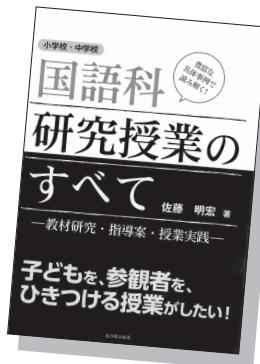
国語科 研究授業の すべて

■佐藤明宏 著

-教材研究・指導案・授業実践-

小学校・中学校の国語科研究授業について教材研究、指導案、授業実践まで、すべてを網羅。今さら聞けない国語科授業の基礎・基本から魅力的な単元開発方法、研究論文の書き方まで、具体的な事例をもとに解説。

子どもや、参観者をひきつける
授業の具体事例が満載!



本体価格 2,600 円 + 税

校内研修の進め方

算数科の授業力向上を目指して

■赤井利行・荒田優子 著

多くの学校で算数の校内研修に
協力してきた著者が作成した
「校内研修の指南書」

本書では、「研究テーマの立て方」「授業改善の取り組み」「研究協議会の立ち方」「公開研究会への取り組み」の4つに集約し、研究主任が実際に直面するような悩みを具体的に提示。また校内研修に関するQ&Aも掲載。



本体価格 1,800 円 + 税

がんばる先生を
応援します！



東洋館出版社

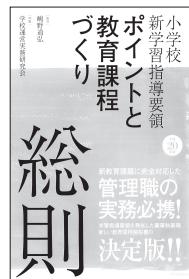
〒113-0021 東京都文京区本駒込5丁目16番7号
TEL: 03-3823-9206 FAX: 03-3823-9207
URL: <http://www.toyokan.co.jp>

平成20年版

小学校

新学習指導要領 ポイントと授業づくり

全14巻+2巻



〈本シリーズの特色〉

- 執筆者は新学習指導要領解説の作成に協力した専門家!
- 新学習指導要領に即応した授業プランを提案!
- 基礎的・基本的な知識・技能の習得と活用を図る学習活動を提案!
- 教科・領域を横断する課題にも対応!
- 教科書と同じB5判! 図表が大きく、分かりやすい!

本体価格 各1,900円+税

2008年3月に公示された学習指導要領に則った、これからの中等教育のあるべき姿を豊かに示唆するとともに、各教科等における改定点やこれまでの授業づくりのポイントを懇切に解説。今までと「何が、どのように変わらるのか」「どう実践すればいいのか」を、具体的に明らかにした。授業実践例に合わせて板書例やワークシートも掲載。

【ポイントと教育課程づくり】

○総則…嶋野道弘 監修・学校運営実務研究会 編著 ISBN978-4-491-02401-1 C3337

【ポイントと授業づくり】

○国語…国語力向上モデル研究会 編著 ISBN978-4-491-02402-8 C3337

○社会…廣嶋憲一郎・新社会科研究会 編著 ISBN978-4-491-02403-5 C3337

○算数…金本良通・赤井利行・滝井章 編著 ISBN978-4-491-02404-2 C3337

○理科…新世紀型理科教育研究会 編著 ISBN978-4-491-02405-9 C3337

○生活…鹿毛雅治・清水一豊 編著 ISBN978-4-491-02406-6 C3337

○音楽…金本正武・坪能由紀子 編著 ISBN978-4-491-02407-3 C3337

○図画工作…藤江充・辻政博 編著 ISBN978-4-491-02408-0 C3337

○家庭…金子佳代子・藤原孝子 編著 ISBN978-4-491-02409-7 C3337

○体育…渡邊彰・今関豊一 編著 ISBN978-4-491-02410-3 C3337

○道德…道德教育改善研究会 編著 ISBN978-4-491-02411-0 C3337

○総合的な学習の時間…総合的な学習実践向上研究会 編著 ISBN978-4-491-02413-4 C3337

【ポイントと学習活動の展開】

○外国語活動…菅正隆 協力・「英語ノート」実践研究会 編著 ISBN978-4-491-02412-7 C3337

○特別活動…宮川八岐 編著 ISBN978-4-491-02414-1 C3337

【幼稚園教育要領ポイントと教育活動】

□幼稚園教育…無藤隆 編著 ISBN978-4-491-02415-8 C3337

【特別支援教育要領新学習指導要領ポイントと授業づくり】

□特別支援教育(知的障害・発達障害)…太田俊己・木村宣孝 編著 ISBN978-4-491-02416-5 C3337

がんばる先生を
応援します!



東洋館出版社

〒113-0021 東京都文京区本駒込5丁目16番7号
TEL: 03-3823-9206 FAX: 03-3823-9208
URL: <http://www.toyokan.co.jp>

ISBN4-491-01686-0

C3037 ¥2800E



9784491016863

定価 本体2,800円+税

東洋館出版社



1923037028009

